三重県埋蔵文化財調査報告３２３－５

北山Ａ遺跡（第２・３・５・６次）
発掘調査報告

―四日市市北山町―

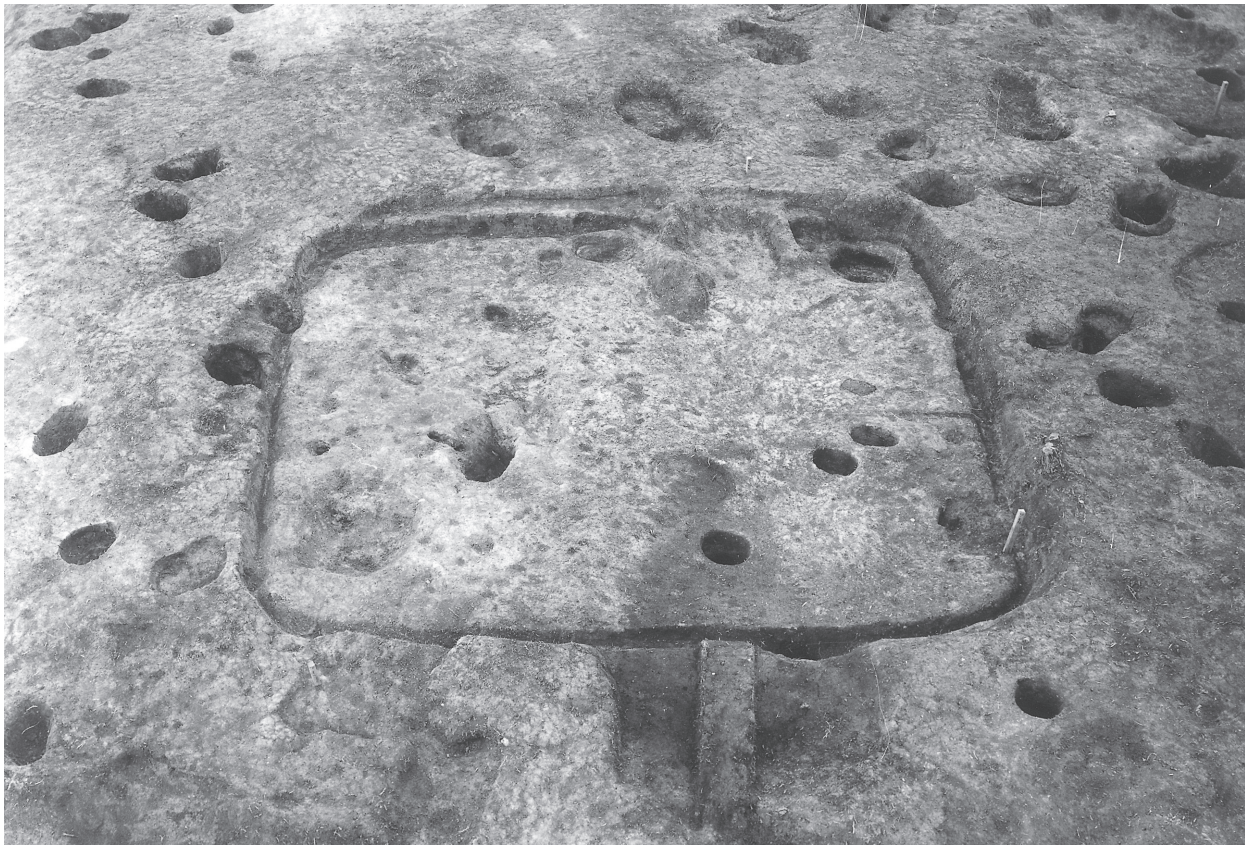
２０１７（平成29）年

三 重 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

写真図版８

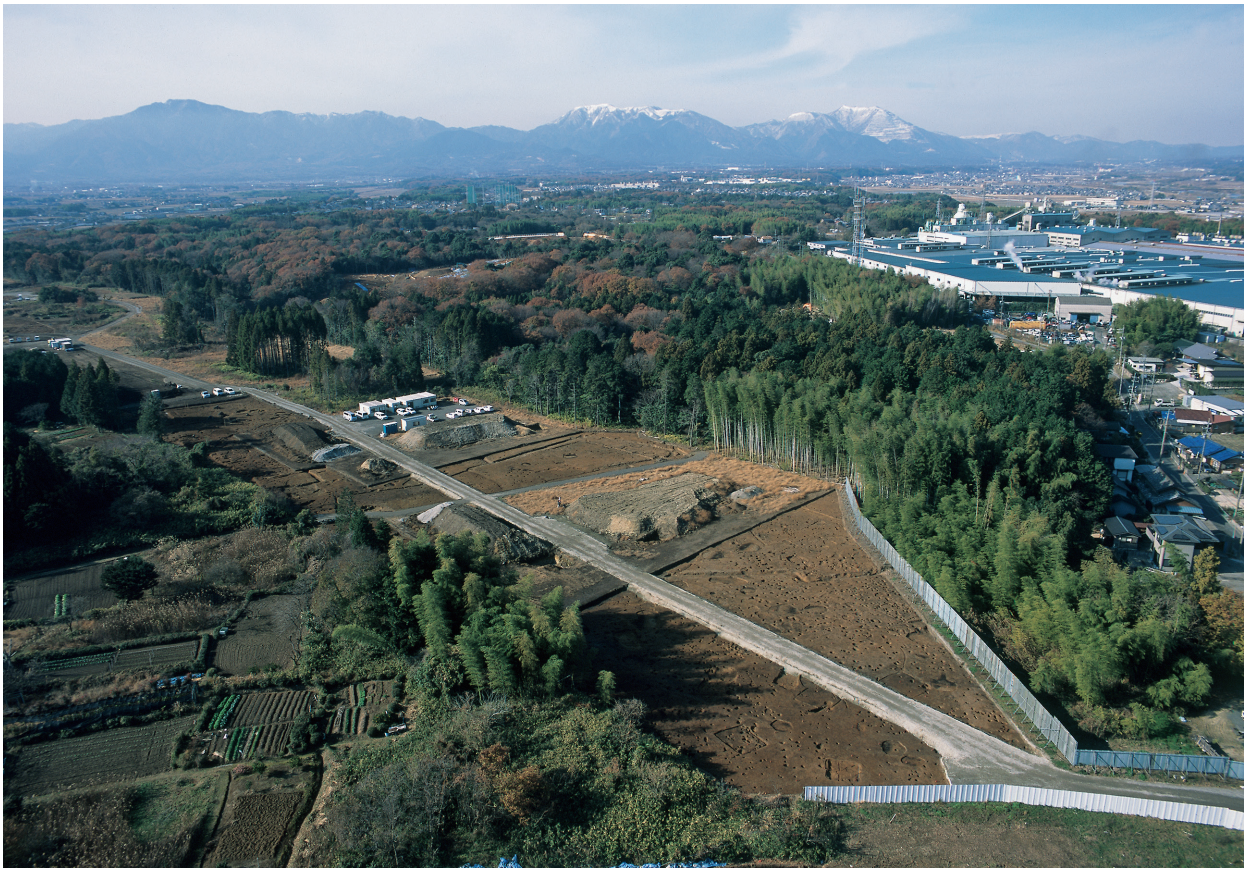
ＳＨ６・10・11（南西から）

ＳＨ６（南から）



ＳＨ 10（南から）

ＳＨ 11（西から）



北山Ａ遺跡上空から鈴鹿山脈を望む

ＳＫ 241（東から）

序

日本物流の大動脈として建設された名神・東名の両高速道路は、全線開通以来半世紀が経過しようとしています。わが国の産業等の発展に多大な貢献をしてきましたが、交通量の増加により渋滞等が頻繁に発生するようになりました。これを解消し、名神・東名両高速道路と相互に機能を補完し、国土軸をダブルネットワーク化するために、新名神・新東名の両高速道路が計画され、新名神高速道路が三重県の北勢地方を横断することになりました。

古来より、三重県の北勢地方は東西交通の要衝であります。周知のとおり、近世５街道の筆頭としても過言でない東海道が横断し、さらに奈良時代以前にまでさかのぼる古代東海道の存在も研究されています。したがって、新名神高速道路がこの地方を横断することは、むしろ必然と言えます。このような歴史地理的環境もあって、この建設予定地には、多くの埋蔵文化財包蔵地が知られています。ここに報告します北山Ａ遺跡もこのうちのひとつです。埋蔵文化財は、私たちの先祖が、その時代を生きた証であり、先人の文化や教訓等を今に伝えてくれる貴重な財産ともいえ、高速道路の早期開通と埋蔵文化財の保護との両立が課題となりました。

三重県埋蔵文化財センターでは、この様な埋蔵文化財を開発行為から守り、後世に伝える努力を続けているところであります。中日本高速道路株式会社においては、こうした趣旨を十分理解していただき、その保護に努めていただいたところではありますが、どうしても現状保存困難な部分については、発掘調査を行い、記録として保存することになりました。本書が消滅した遺跡に代わり、先人の文化や教訓を後世に伝える一助となることを願うものであります。

なお、文化財保護法の精神を尊重され、協議から発掘調査に至るまで多大のご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする各関係機関の方々、地元北山町自治会をはじめ発掘調査区近隣に居住の方々に心からのお礼を申し上げます。

平成 29 年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　野　原　宏　司

例　言

１．　本書は、三重県四日市市北山町に所在する北山Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

２．　本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う緊急発掘調査である。

３．　発掘調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が全額負担した。

４．　発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市ＪＣＴ～亀山西ＪＣＴ）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ～Ⅴ』の４冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

５．　調査は下記の体制で実施した。

- 委託者　　中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
- 受託者　　三重県教育委員会
- 調査主体　　三重県教育委員会
- 調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

なお、詳細については『Ⅰ．前言』に記載したとおりである。

６．　本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員が行い、文責については目次及び文末に記載した。写真撮影は調査担当者が行い、編集は森川常厚が行った。

７．　本書で示す方位は、世界測地系第Ⅵ座標による座標北である。

８．　本書で表記する土色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967 初版）に拠った。

９．　発掘調査に際しては、四日市市教育委員会、北山町自治会、三重県企業庁のご協力をいただいた（順不同、敬称略）。

10.　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

目　次

Ⅰ．前言 ……（服部芳人）… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の経過 …… 1

Ⅱ．位置と環境 ……（宮﨑久美）… 4
1．地理的環境 …… 4
2．歴史的環境 …… 4

Ⅲ．層序 ……（櫻井拓馬・森川常厚）… 9

Ⅳ．遺構 ……（櫻井拓馬・宮﨑久美・森川常厚）… 11
1．土器棺墓 …… 11
2．竪穴住居 …… 11
3．掘立柱建物 …… 60
4．土坑 …… 70
5．溝 …… 86

Ⅴ．遺物 ……（森川常厚）… 88
1．ＳＸ１３６出土遺物 …… 88
2．ＳＨ２４７出土遺物 …… 90
3．ＳＨ３２２出土遺物 …… 90
4．ＳＨ２２１出土遺物 …… 90
5．ＳＨ３３２出土遺物 …… 90
6．ＳＨ３０７出土遺物 …… 91
7．ＳＨ２０８出土遺物 …… 91
8．ＳＨ３０２出土遺物 …… 91
9．ＳＨ３４７出土遺物 …… 91
10．ＳＨ３３６出土遺物 …… 91
11．ＳＨ１９・２５・２３８出土遺物 …… 91
12．ＳＨ３２４出土遺物 …… 91
13．ＳＨ５８出土遺物 …… 91
14．ＳＫ３０９出土遺物 …… 91
15．ＳＫ６３出土遺物 …… 91
16．ＳＫ４０２出土遺物 …… 93
17．ＳＫ２１１・２１２出土遺物 …… 93
18．ＳＫ２０１出土遺物 …… 93
19．ＳＫ２０２出土遺物 …… 93

20. ＳＫ３０１出土遺物 …… 93
21. ＳＫ８８出土遺物 …… 93
22. ＳＫ２２９出土遺物 …… 95
23. ＳＫ３０４出土遺物 …… 95
24. ＳＫ１５出土遺物 …… 95
25. ＳＨ４８出土遺物 …… 95
26. ＳＨ３２１出土遺物 …… 95
27. ＳＨ２４５出土遺物 …… 95
28. ＳＨ７３出土遺物 …… 95
29. ＳＨ６４出土遺物 …… 95
30. ＳＨ７６出土遺物 …… 95
31. ＳＨ３３９出土遺物 …… 98
32. ＳＨ３４１出土遺物 …… 98
33. ＳＨ３４５出土遺物 …… 98
34. ＳＨ２３０出土遺物 …… 99
35. ＳＨ１０出土遺物 …… 99
36. ＳＨ２４０出土遺物 …… 99
37. ＳＨ６出土遺物 …… 99
38. ＳＨ３１９出土遺物 …… 101
39. ＳＨ８４出土遺物 …… 101
40. ＳＦ３８出土遺物 …… 101
41. ＳＫ３６出土遺物 …… 101
42. ＳＫ５４出土遺物 …… 101
43. ＳＫ８６出土遺物 …… 101
44. ＳＫ４２出土遺物 …… 103
45. ＳＫ３２７出土遺物 …… 103
46. ＳＫ９１出土遺物 …… 103
47. ＳＫ２３６出土遺物 …… 103
48. ＳＫ５出土遺物 …… 103
49. ＳＫ６２出土遺物 …… 103
50. ＳＫ４３出土遺物 …… 103
51. ＳＫ７出土遺物 …… 103
52. ＳＫ６８出土遺物 …… 103
53. その他遺構出土遺物 …… 105
54. 包含層他出土遺物 …… 107

Ⅵ. 自然科学分析 …… 120
１. 須恵器内面付着物の赤外分光分析 ……（株式会社パレオ・ラボ）… 120
２. 放射性炭素年代測定 ……（株式会社パレオ・ラボ）… 121
３. 鉄滓の分析調査 ……（日鉄住金テクノロジー株式会社八幡事業所）… 122

Ⅶ．結語 ……（森川常厚）… 125
1．遺構の時期 …… 125
2．集落変遷 …… 126
3．大型土坑 …… 127
4．集落の性格 …… 128

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 6
第２図　遺跡地形図 …… 7
第３図　調査区位置図 …… 7
第４図　調査区南壁土層実測図 …… 9
第５図　調査区南北・北壁土層実測図 …… 10
第６図　調査区全体平面図 …… 12
第７図　調査区平面図① …… 13
第８図　調査区平面図② …… 14
第９図　調査区平面図③ …… 15
第10図　調査区平面図④ …… 16
第11図　調査区平面図⑤ …… 17
第12図　調査区平面図⑥ …… 18
第13図　調査区平面図⑦ …… 19
第14図　調査区平面図⑧ …… 20
第15図　調査区平面図⑨ …… 21
第16図　調査区平面図⑩ …… 22
第17図　調査区平面図⑪ …… 23
第18図　調査区平面図⑫ …… 24
第19図　調査区平面図⑬ …… 25
第20図　調査区平面図⑭ …… 26
第21図　調査区平面図⑮ …… 27
第22図　調査区平面図⑯ …… 28
第23図　調査区平面図⑰ …… 29
第24図　調査区平面図⑱ …… 30
第25図　調査区平面図⑲ …… 31
第26図　調査区平面図⑳ …… 32
第27図　SH1、SK4・5・12・14・16、SF17・131 実測図 … 33
第28図　SH6、SF50、SK33・34・55・56 実測図 … 34
第29図　SH10、SF28、SK22 ～ 24・52・53 実測図 … 36
第30図　SH10 カマド遺物出土状況図実測図 … 37
第31図　SH11・48、SF47、SK45・46、SD26 実測図 … 38
第32図　SH58・69、SF82、SK98 ～ 104 実測図 … 39
第33図　SH64・75、SF67、SK109・111 ～ 116 実測図 … 40
第34図　SH73、SF124、SK125 ～ 127・130 実測図 … 41
第35図　SH76、SK133、SF95 実測図、SF95 遺物出土状況図 … 42
第36図　SH84 実測図、SK122 遺物出土状況図 … 43
第37図　SH204、SK209・210 実測図 …… 44
第38図　SH79・208、SF108、SK106・107・216 実測図、SK106 遺物出土状況図、SH208 カマド実測図 … 45
第39図　SH221・227 実測図 …… 46
第40図　SH19・25・238・245・247、SK30・35 実測図、SH245・247 カマド、SF38 遺物出土状況図 … 47
第41図　SH230・302・316、SK406・407 実測図、SH302 カマド、SH316 遺物出土状況図 … 48
第42図　SH303・307・308・312 実測図、SH307 遺物出土状況図 … 50
第43図　SH318・319・324・325、SK320 実測図 … 51
第44図　SH321・322 実測図、SH321・322 カマド遺物出土状況図 … 52
第45図　SH331・328、SK327 実測図、SH331P1 遺物出土状況図 … 54
第46図　SH332、SK333・334・335 実測図 … 56
第47図　SH336・338・339 実測図、SH338 カマド遺物出土状況図 … 58
第48図　SH341・347 実測図、SH341 カマド・SH347 遺物出土状況図 … 59
第49図　SH401、SK402・403・404 実測図 … 60
第50図　SB110・139、SK96・134 実測図…… 62
第51図　SB215・224、SF217、SK225 実測図… 63
第52図　SB222 実測図 …… 64

第 53 図　SB223・226 実測図 …… 65
第 54 図　SB237・242 実測図 …… 66
第 55 図　SB246 実測図 …… 67
第 56 図　SB244・310・323・340 実測図 …… 68
第 57 図　SB343・344・348・349、SK346 実測図… 69
第 58 図　SK2 実測図 …… 70
第 59 図　SK15・32・35・36・51 実測図、SK36 遺物出土状況図… 71
第 60 図　SK42 ～ 44・54・59・60・62・63・65・70・71・81、SF78 実測図… 72
第 61 図　SK68・85・88・94 実測図 …… 73
第 62 図　SK86・89・91・92 実測図、SK137、SX136 遺物出土状況図… 75
第 63 図　SK201・202 実測図 …… 77
第 64 図　SK203・205 ～ 207・211 ～ 213・216・214 実測図 … 78
第 65 図　SK7・220・229・239・240・249・309 実測図 … 80
第 66 図　SF232・233・235・243、SK231 実測図… 81
第 67 図　SK301・306・314・315 実測図 …… 82
第 68 図　SK304・305・311・317 実測図 …… 84
第 69 図　SK330・337 実測図 …… 85
第 70 図　SX136 出土遺物実測図 …… 88
第 71 図　SH208・221・247・302・307・322・332・347 出土遺物実測図 … 89
第 72 図　SH19・25・238・58・324・336 出土遺物実測図 … 90
第 73 図　SK63・201・202・211・212・309・402 出土遺物実測図 … 92
第 74 図　SK15・88・229・301・304 出土遺物実測図 … 94
第 75 図　SH48・64・73・76・245・321・339 出土遺物実測図 … 96
第 76 図　SH10・204・230・341・345 出土遺物実測図 … 97
第 77 図　SH6・84・319 出土遺物実測図 …… 98
第 78 図　SK36、SF38 出土遺物実測図 …… 99
第 79 図　SK5・7・42・43・54・62・86・91・236・237 出土遺物実測図 … 100
第 80 図　SK68 出土遺物実測図① …… 102
第 81 図　SK68 出土遺物実測図② …… 104
第 82 図　その他遺構出土遺物実測図①…… 105
第 83 図　その他遺構出土遺物実測図②…… 106
第 84 図　包含層他出土遺物実測図 …… 107
第 85 図　赤外吸収スペクトル図 …… 120
第 86 図　年代測定結果 …… 121
第 87 図　竪穴住居規模比較図 …… 125
第 88 図　集落変遷模式図 …… 126

写　真　図　版

巻頭図版 ……北山Ａ遺跡上空から鈴鹿山脈を望む
…… ＳＫ 241
写真図版１ …… 調査前風景
…… 第２次調査区全景
…… 第３次調査区全景
写真図版２ …… 第５次調査区全景
…… 第６次調査区全景
…… 第３次調査区南西部
写真図版３ …… 第３次調査区北西部
…… 第３次調査区南東部
写真図版４ …… 第５次調査区北西部
…… 第５次調査区東南部
写真図版５ …… 第２次・３次・６次合成全景
写真図版６ …… ＳＸ 136
…… ＳＨ 58・69
…… ＳＨ 79
写真図版７ …… ＳＨ 76
…… ＳＨ 76 カマド遺物出土状況
写真図版８ …… ＳＨ６・10・11
…… ＳＨ６
写真図版９ …… ＳＨ 10
…… ＳＨ 11
写真図版 10 …… ＳＨ 84
…… ＳＨ 84 遺物出土状況
…… ＳＨ 64 屋内土坑検出状況
写真図版 11 …… ＳＨ 64
…… ＳＨ 73
写真図版 12 …… ＳＨ 48
…… ＳＨ 221
写真図版 13 …… ＳＨ 204
…… ＳＨ 204 カマド遺物出土状況
写真図版 14 …… ＳＨ 245
…… ＳＨ 245 カマド土層
写真図版 15 …… ＳＨ 230
…… ＳＨ 247
写真図版 16 …… ＳＨ 303
…… ＳＨ 308
写真図版 17 …… ＳＨ 318
…… ＳＨ 319
写真図版 18 …… ＳＨ 321
…… ＳＨ 321 カマド遺物出土状況
写真図版 19 …… ＳＨ 322
…… ＳＨ 322 カマド付近遺物出土状況
写真図版 20 …… ＳＨ 324
…… ＳＨ 331
写真図版 21 …… ＳＨ 332
…… ＳＨ 336
写真図版 22 …… ＳＨ 338
…… ＳＨ 339
写真図版 23 …… ＳＨ 341・347
…… ＳＢ 349
…… ＳＨ 312、ＳＢ 348・349
写真図版 24 …… ＳＨ 75、ＳＢ 110
…… ＳＢ 215、ＳＦ 217
写真図版 25 …… ＳＢ 222、ＳＫ 220
…… ＳＢ 223
写真図版 26 …… ＳＢ 226
…… ＳＢ 237
写真図版 27 …… ＳＢ 242
…… ＳＢ 244
写真図版 28 …… ＳＢ 246
…… ＳＢ 310
写真図版 29 …… ＳＢ 323
…… ＳＢ 340
写真図版 30 …… ＳＫ４・12・14
…… ＳＫ 36 遺物出土状況
写真図版 31 …… ＳＫ 62・63・70・71
…… ＳＫ 81
写真図版 32 …… ＳＫ 54
…… ＳＫ 60・138
写真図版 33 …… ＳＫ 68
…… ＳＫ 68 断面
写真図版 34 …… ＳＫ 86
…… ＳＫ 88
写真図版 35 …… ＳＫ 89
…… ＳＨ 76、ＳＫ 91
写真図版 36 …… ＳＫ 201
…… ＳＫ 201 遺物出土状況

写真図版 37 …… ＳＫ 201・202
…… ＳＫ 211・212
写真図版 38 …… ＳＫ 92
…… ＳＦ 78、ＳＫ 94
写真図版 39 …… ＳＫ 106 遺物出土状況
…… ＳＫ 315
写真図版 40 …… ＳＫ 330
…… ＳＫ 401・402・403・405・407
写真図版 41 …縄文土器・製塩土器・埴輪・土製品
写真図版 42 …… 土師器（椀・杯・皿・甕）
写真図版 43 …… 須恵器（蓋・杯・椀）
写真図版 44 …… 須恵器（壺・甕・高杯）
写真図版 45 …… 石器・鉄器・分析試料
写真図版 46 ……
…… 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

表　目　次

第 1 表　周辺主要遺跡一覧 …… 6
第 2 表　掘立柱建物一覧表 …… 61
第 3 表　遺物観察表① …… 108
第 4 表　遺物観察表② …… 109
第 5 表　遺物観察表③ …… 110
第 6 表　遺物観察表④ …… 111
第 7 表　遺物観察表⑤ …… 112
第 8 表　遺物観察表⑥ …… 113
第 9 表　遺物観察表⑦ …… 114
第 10 表　遺物観察表⑧ …… 115
第 11 表　遺物観察表⑨ …… 116
第 12 表　遺物観察表⑩ …… 117
第 13 表　遺物観察表⑪ …… 118
第 14 表　遺物観察表⑫ …… 119
第 15 表　生漆の赤外吸収位置とその強度 … 120
第 16 表　赤外分光分析を行った付着物と
その詳細 … 120
第 17 表　測定試料および処理 …… 121
第 18 表　放射性炭素年代測定および
暦年較正の結果 … 121
第 19 表　供試料の履歴と調査項目 …… 123
第 20 表　供試料の化学組成 …… 123
第 21 表　出土遺物の調査結果のまとめ …… 124

Ⅰ．前言

1　調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。

昭和40年に全線開通した名神高速道路は、昨今の急激な経済発展に伴う自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、本来の機能である高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。

そこで、抱えるこの課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

従前の東名阪自動車道においては、四日市JCTで伊勢湾岸道路が接続し、また、新名神高速道路が亀山JCTから亀山西JCTへと繋がり京都方面への通行が可能になった。そのため、下り方面では、名古屋方面からと豊田方面からの２方向、また、上り方向では、伊勢方面・大阪方面に加えて京都方面からの交通量が増加した。特に、四日市JCT～亀山JCT間は休日ともなると、30km以上渋滞するなど、全国的にも有名となっている。道路幅はそのままの状態で、一部区間を２車線から３車線にするなども行ってはいるが、慢性的な交通渋滞の緩和には至っておらず、新名神高速道路の早期建設が望まれている。

さて、三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年(2009)年２月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書[①]には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

2　調査の経過

(1) 調査経過の概要

新名神高速道路の四日市JCT（伊坂町）～新四日市JCT（北山町。発掘調査中は、四日市北JCTと仮称していたが、平成27年５月20日に名称を変更した）間、及び、東海環状自動車道の東員IC間は、平成27年度末に供用開始が計画されていた（なお、新四日市JCT～亀山西JCT間は、平成30年度末供用開始の予定である）。そのため、北山Ａ遺跡を含む、四日市JCT～新四日市JCT間の発掘調査が優先的に計画され、三重県埋蔵文化財センターとしては、特に、平成24年度から26年度にかけては、年間の発掘調査面積、約５万㎡を職員全体の約３分の１を四日市整理所（伊坂町）に駐在させて対応してきた。

この四日市JCT～新四日市JCT間は、周辺に住宅団地や貯水池、高等学校などを始め、宅地も多いため、それらを避けるために、丘陵地を貫くような線形の道路計画となっている。

北山Ａ遺跡内では、遺跡範囲の概ね中央より北側部分で、ほぼ東西方向に縦断する形で道路が計画されていた。特に、当遺跡の周辺には宅地が近接しており、路線内での用地買収後の家屋解体や基礎撤去、県道迂回路の取り付け工事、工事用道路建設などと、各種調整を図りながらの発掘調査となった。平成22年度から26年度にかけて行われた年度ごとの概要は、以下のとおりである。

平成22年度

当遺跡は、県道９号四日市員弁線（以下、県道とする）を挟んで東西両側に広がるが、概ね県道の東側は、家屋が多く立ち並び、西側は、畑地・茶畑・雑木林などとなっていた。

年度当初の計画を行う時点での、買収状況を踏まえた調整協議では、県道の西側に面積320㎡の一次調査を５月頃に実施する予定であった。しかし、前年度の平成21年度末の３月に、集団調印が行われ、また、平成22年度が始まると、徐々に用地買収が進み始める中、数回調整の協議を重ねた。その結果、最終的には、県道の西側に13か所の調査トレンチを設定し、合計面積950㎡の一次調査を11月末から行うこととなった。

この調査の結果、全ての調査トレンチから飛鳥か

ら奈良時代の竪穴住居・溝・土坑などを確認し、弥生土器・土師器・須恵器・石製品などの遺物の出土があったため、県道より西側は、全面にわたり二次調査が必要であると判断した。

また、年度当初の計画には無かったが、道路の建設工事の都合上、県道から路線予定地内の南側に仮設の工事用道路を建設する必要性が生じてきた。路面全面に砕石の盛土を行うように調整したが、県道からの乗り入れ部分については、簡易アスファルト舗装の必要があるため、該当範囲の100㎡を、翌年の平成23年1月に工事立会い調査を行った。調査の結果、少量のピットを確認したが、遺物の出土はなかった。

平成23年度

前年度の調査の結果、県道より西側が二次調査の対象となったが、その内で、遺跡範囲内の西側、中野山遺跡の東に隣接する部分について、当初、3,500㎡を5月から第2次として発掘調査が計画された。この調査区の内、南西部分が未買収であったが、調査中に契約が整ったため、面積を260㎡追加し、合計3,760㎡の調査を行った。

調査の結果、飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居15基、掘立柱建物1棟を確認した。特に、竪穴住居については、調査区の南側に集中している傾向が見られた。

また、当初の計画には無かった、県道より東側の宅地部分について、大半が買収済となったため、面積500㎡の一次調査を実施した。この調査の結果、地形が北側へ緩やかに低く落ち込んでおり、遺構・遺物ともに確認できなかったため、県道より東側については、二次調査の必要が無いと判断した。

なお、普及啓発活動の一環として、中野山遺跡第4次と合同の現地説明会を10月2日（日）に行い、320名の参加があった。

平成24年度

年度当初は、昨年度の調査区に隣接する東側で、仮設の工事用道路を含む、4,200㎡が第3次調査として計画された。

工事用道路を通年使用するために、まず発掘調査は、工事用道路以外の北側範囲を優先的に行った。この調査が終了後、範囲内で計画路線のほぼ中央に、工事用道路を新規に敷設（振り替え）し、その後、路線内南側にある、旧の工事用道路部分の調査を実施した。結果的に調査面積は、4,130㎡となった。

調査の結果、飛鳥時代から奈良時代にかけての掘立柱建物9棟、竪穴住居8棟、大型土坑10基を確認した。特に、これらの遺構は、調査区の東側に集中する傾向が見られた。

なお、普及啓発活動の一環として、中野山遺跡第8次・第9次、北山城跡第2次と合同で現地説明会を10月13日（土）に行い、250名の参加があった。

また、この年度には、路線内に所在した家屋の移転に伴う個人住宅の建設として、四日市市教育委員会が第4次調査を、路線外の南側に隣接した場所で発掘調査を実施した。

平成25年度

県道の西側に隣接する家屋が未買収という発掘調査の条件が整わなかったため、この家屋地周辺以外で、5,000㎡が計画された。

調査に際しては、ほぼ中央にある工事用道路を通年使用する必要があるため、調査区を2つに分断（西区・東区）して行わなければならなかった。しかも、年度後半には、県道部分に本線の橋脚工事を優先させる必要があり、その工事の前に県道を迂回させるための取り付け道路と工事用道路部分が重なる範囲の調査も行った。この調査に関しては、ネクスコの労務提供によって行った。その結果、合計面積は4,920㎡となった。

調査の結果、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居21棟、掘立柱建物8棟、大型土坑8基を確認した。調査区南側に隣接して四日市市教育委員会が発掘調査を行った第4次調査区でも、同時期の竪穴住居、掘立柱建物、土坑が確認されており、集落の広がりが想定された。

なお、普及啓発活動として、中野山遺跡第10次・第11次・第12次、北山城跡第3次と合同の現地説明会を10月5日（土）に行い、272名の参加があった。

また、前年度に引き続き、この年度にも、路線内に所在した家屋の移転に伴う個人住宅の建設として、四日市市教育委員会が、第4次調査の続きを実施した。

平成 26 年度

当初の計画では、県道と迂回路に挟まれた形となっていた家屋部分（北区）と、前年度に迂回路と工事用道路の重なる範囲の調査を行うために調査ができず、翌年度送りとなっていた部分（南区）が調査対象となった。調査に関しては、南区から始め、先行引渡しを行い、北区の調査に移行した。北区の調査の途中では、迂回路に電柱を設置するための立会い調査も行った。また、迂回路は、通常の通行が行われているため、非常に神経を遣う調査でもあった。

調査の結果、家屋の建物基礎などの撹乱があったが、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟を確認した。過年度の一次調査の結果から判断して、今回の調査区が集落の北端に当たるものと思われる。

（2）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成 22 年度

・一次調査

担当：川部浩司・岩脇成人・山田猛（調査研究Ⅱ課）

業者：株式会社アート（土工委託）

期間：平成 22 年 11 月 26 日～平成 23 年３月 10 日

面積：950㎡

・工事立会調査

担当：穂積裕昌・石井智大（調査研究Ⅱ課）

業者：ネクスコ中日本（労務提供）

期間：平成 23 年１月 18 日

面積：100㎡

平成 23 年度

・一次調査

担当：穂積裕昌・岩脇成人（調査研究Ⅱ課）

業者：橋本技術株式会社（土工委託）

期間：平成 23 年 11 月７日～平成 24 年１月 10 日

面積：500㎡

・第２次調査

担当：岩脇成人・櫻井拓馬（調査研究Ⅱ課）

業者：株式会社島田組（調査補助委託）

期間：平成 23 年４月 25 日～平成 23 年 12 月 22 日

面積：3,760㎡

平成 24 年度

・第３次調査

担当：松永公喜・東谷洋平（調査研究Ⅲ課）

業者：大成エンジニアリング（調査補助委託）

期間：平成 24 年５月 18 日～平成 25 年２月 25 日

面積：4,130㎡

平成 25 年度

・第５次調査

担当：中村法道・東谷洋平・山田猛（調査研究３課）

業者：株式会社アート（調査補助委託）

期間：平成 25 年５月 10 日～平成 26 年２月 24 日

面積：4,920㎡

平成 26 年度

・第６次調査

担当：中村法道・宮﨑久美・山田猛（調査研究３課）

業者：株式会社アーキジオ（調査補助委託）

期間：平成 26 年６月 23 日～平成 26 年８月６日

面積：756㎡

なお、前述のように、第４次調査は、四日市市教育委員会が、平成 24 年度と平成 25 年度の２か年に分けて、発掘調査を実施している。

（3）文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第 94 条に基づく三重県文化財保護条例第 48 条第１項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）

・平成 22 年８月６日付け、中高名支四工第 760 号（中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

◎文化財保護法第 99 条第１項（発掘調査の着手報告）

・平成 23 年５月２日付け、教埋第 399 号（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

【平成 23 年度・第２次】

・平成 24 年６月１日付け、教埋第 76 号（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

【平成 24 年度・第３次】

・平成 25 年 5 月 17 日付け、教埋第 73 号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

【平成 25 年度・第 5 次】

・平成 26 年 4 月 30 日付け、教埋第 32 号
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

【平成 26 年度・第 6 次】

◎文化財保護法第 100 条第 2 項（文化財の発見・認定通知）

・平成 24 年 2 月 3 日付け、教委第 12-4423 号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）

【平成 23 年度・第 2 次】

・平成 25 年 2 月 22 日付け、教委第 12-4436 号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）

【平成 24 年度・第 3 次】

・平成 26 年 3 月 7 日付け、教委第 12-4422 号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）

【平成 25 年度・第 5 次】

・平成 26 年 12 月 10 日付け、教委第 12-4425 号
（三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて）

【平成 26 年度・第 6 次】

（服部）

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第 5 次）発掘調査報告』2011
三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第 3 次）発掘調査報告』2012

Ⅱ．位置と環境

1　地理的環境

北山Ａ遺跡（34）は、三重県四日市市北山町にある。四日市市は三重県の北、いわゆる北勢地域にあたる。

低き丘西につづきて
その上を亘る山脈（やまなみ）
目を凝らしつぶさに見れば
重畳と山はよろしも

歌人山口誓子が伊勢平野から鈴鹿山脈を臨んで詠んだ歌は四日市の地形を如実に表している。

西には急峻な鈴鹿山脈が南北に連なり、その鈴鹿山系を水源とする員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・内部川など複数の河川が東流し、伊勢平野を経て伊勢湾に注ぐ。その間に、丘陵と扇状地・河岸段丘が連なっている。鈴鹿山系を水源とする河川の作用により丘陵と扇状地・河岸段丘、平野が形成されているのである。

これらの河川のなかで朝明川は鈴鹿山脈の釈迦岳を水源とし、四日市市の北部を流れる全長約 27km の四日市市最長の河川である。下流の沖積地に流れ出ようとするところの北部に朝日丘陵、南部に垂坂丘陵を有し、中流域に河岸段丘を有する。北山町は朝明川中流域の河岸段丘に位置する。朝明川流域では丘陵の先端や低平な段丘面に遺跡が集中しており、前述の朝日丘陵の南縁、垂坂丘陵の東縁、朝明川中流域の段丘面に分布の核がある。これらの遺跡では複数の時代の遺構・遺物が発見されていることから、朝明川の氾濫を避けられる安定した土地を選んで断続的に人々の生活が営まれていた様子がうかがえる。

2　歴史的環境

朝明川の流域は、律令下で朝明郡と称されていた東西に長い地域である。ここでは、旧朝明郡域の歴史的な変遷を、前述の地理的な区分を念頭におき、概観したい。

（1）縄文時代以前

旧石器時代の遺跡は、野呂田遺跡（1）で削器、または剥片と思われる石器が発見されたのみである。縄文時代については、これまでは朝日丘陵の南縁にある西ヶ広遺跡（45）が知られていたものの、他には良好な遺構が発見されていなかった。しかし、近年の発掘によりいくつかの遺跡が確認されるようになった。朝明川左岸に位置する中野山遺跡（33）

では早期の煙道付炉穴が多数確認されているほか、中期の竪穴住居、晩期の土器棺墓が確認されている。また、右岸では小牧南遺跡（16）で縄文時代中期の竪穴住居や掘立柱建物が発見されている。朝明川の中流域で縄文遺構が多く見つかったことから、今後、縄文時代の遺物が多く見つかっている菰野町域との関連を含めて当該地域の縄文時代が、さらに明らかになるだろう。

（２）弥生時代

この時代の遺跡は、市域内各所に分布する。当該地域の遺構としては、朝日丘陵の南縁にある西ヶ広遺跡・菟上遺跡（53）・伊坂遺跡（51）、垂坂丘陵東縁にある山奥遺跡（85）・久留倍遺跡（75）で住居跡を確認している。また、近年の調査で、北山Ａ遺跡と同じ河岸段丘にある中野山遺跡や居林遺跡（30）、居林遺跡と谷を挟んで西にあたる小牧南遺跡からも当該時期の遺構、遺物が発見されている。特に終末期まで含めると、居林遺跡では100棟以上、小牧南遺跡では50棟以上の竪穴住居が発見され、朝明川中流域の河岸段丘に大規模集落が存在したことが確認された。

（２）古墳時代

四日市市内の前期古墳は、垂坂丘陵南の低位段丘に位置する志氐神社古墳が知られるのみである。本古墳は前方後円墳で車輪石・玉類・内行花文鏡が出土している。おそらく、朝明川から三滝川にわたる一帯で勢力を持っていた首長墓であると思われるが、その後大型の前方後円墳は確認されていないことから、その勢力は継続しなかったものと思われる。代わりに５世紀前半ごろには、朝明川流域で、方墳を中心とした広古墳群（42）・浄ヶ坊古墳群（43）などの古墳群が形成される。その後、古墳後期から末期までに多くの群集墳が朝明川流域に築造されることになる。５世紀末葉から６世紀には木棺直葬墳が、６世紀以降は横穴式石室を持った古墳が広く分布している。

北山Ａ遺跡の北東の員弁川流域に位置する北山Ｃ遺跡（38）では６世紀初頭前後の群集墳が確認されている。20基以上の方墳と円墳が混在する群集墳で、木棺直葬が行われていたものと思われる。また、北山Ａ遺跡の北西に近接する筆ヶ崎古墳群では６世紀～７世紀の横穴式石室を持つ古墳が確認されている。

集落跡についても、後期の住居跡が西ヶ広遺跡、山奥遺跡、筆ヶ崎西遺跡（28）で確認されており、古墳時代からその後に続く飛鳥･奈良時代にかけて、当該地域に新しい時代の生活基盤が整い始めたことが推測される。

（３）飛鳥・奈良時代

前時代から出現し始めた大規模な遺跡群が、この時代に隆盛を迎える。『和名類聚抄』に記された郷名はそれぞれの遺跡群と呼応して名づけられたようにも感じられる。中野山遺跡・北山Ａ遺跡・北山Ｃ遺跡・筆ヶ崎西遺跡を含む遺跡群は大金郷、西ヶ広遺跡・菟上遺跡を含む遺跡群は額田郷、久留倍遺跡を中心とした訓覇（くるべ）郷が想定される。なお、この時期、鉄滓や羽口といった製鉄関係の遺物が朝明川の中流域左岸に位置する大鐘町、北山町、伊坂町と隣接する員弁郡東員町の新野遺跡や西山遺跡で数点発見されており、以前から『和名類聚抄』にある大金郷が製鉄に関わる集団が在したことによるものであるといわれている[①]が、この点も念頭におきながら、当該地域の調査を進めるべきであろう。

この時代の特筆すべき遺跡として、前述の菟上遺跡・西ヶ広遺跡・久留倍遺跡が挙げられる。

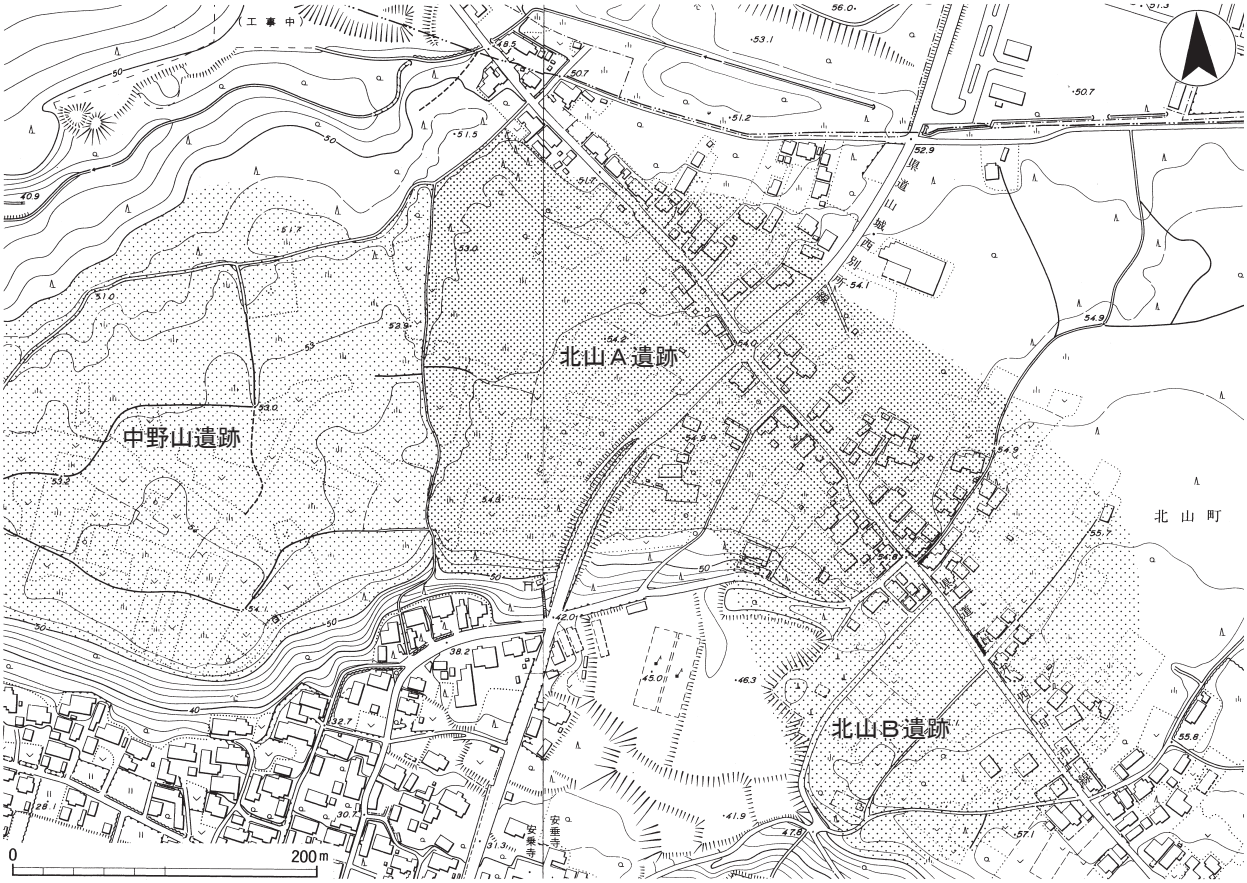
菟上遺跡と西ヶ広遺跡は有力者の居宅遺跡と考えられている。いずれも７世紀から８世紀後半にかけての大型建物や倉庫群が確認された集落跡である。菟上遺跡では、７世紀前半から半ばに一般住宅ではみられない四面庇の掘立柱建物が確認されるなど、豪族居宅としては、西ヶ広遺跡に先行して７世紀半ばから後半にかけて隆盛を迎える。当初から主屋と倉庫を組み合わせた配置が見られたが、８世紀前半以降、律令制度の整備により、桁行４間程度の主屋＋倉庫建物を正方位にそろえるなど秩序だった配置が行われるようになる[②]。この時期、菟上遺跡の南の同じ丘陵上にある西ヶ広遺跡が有力者の居宅遺跡として隆盛を迎え、正方位にそろえた大規模な住居が見られるようになる。なお、柱間については後述の西ヶ広遺跡と異なり、完数尺をとらないものも多くみられる[③]。

その西ヶ広遺跡では、７世紀前半から竪穴住居を中心とする古代の集落が初現し、８世紀前半に棟方

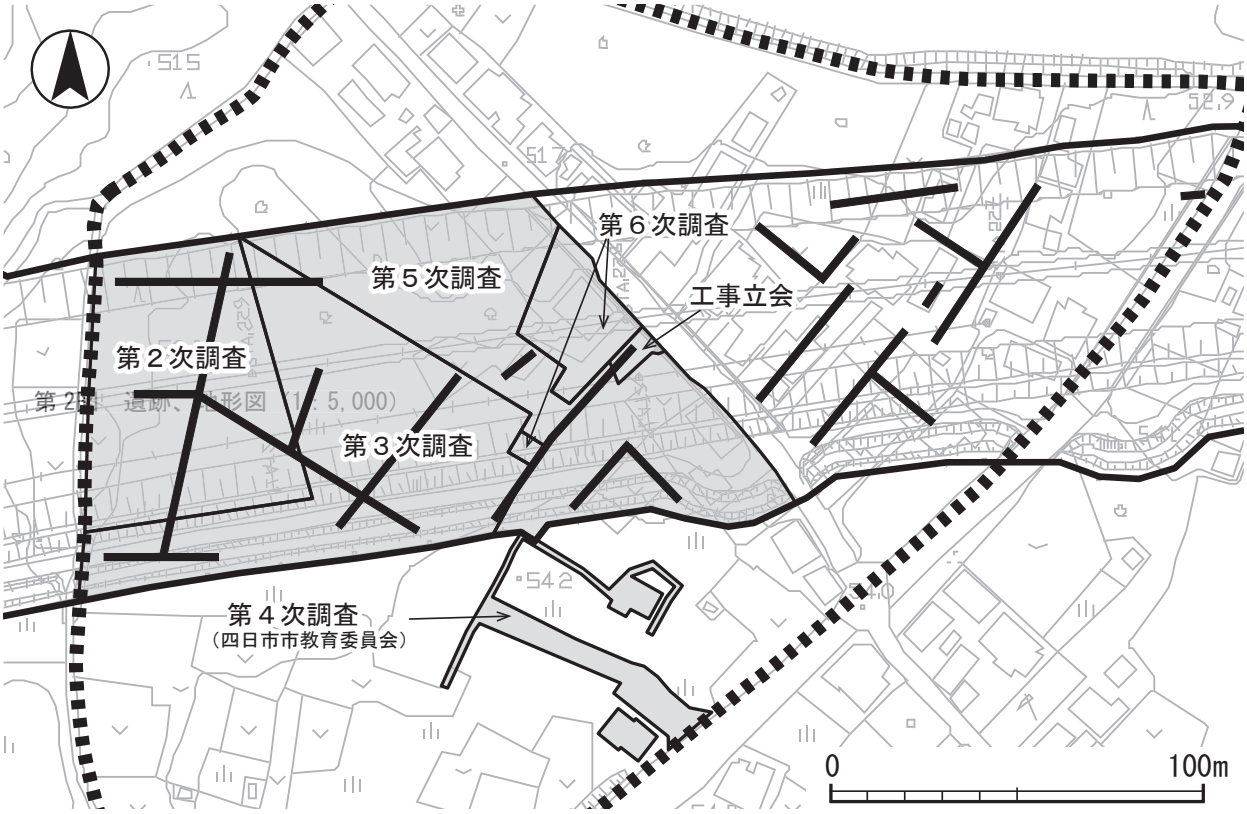
第１図　遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院『菰野』『桑名』『四日市西部』『四日市東部』(1:2,500）に加筆作成〕

1 野呂田遺跡	2 的場遺跡	3 市場城跡	4 大丸遺跡	5 小牧西遺跡	6 小牧大谷遺跡	7 大樹寺東遺跡	8 瀬戸山遺跡	9 若宮古墳群
10 門ノ上遺跡	11 門ノ上古墳群	12 中野城跡	13 中野野畑遺跡	14 上之山遺跡	15 中野平古遺跡	16 小牧南遺跡	17 高山古墳群	18 道具林古墳群
19 真造寺遺跡	20 持光寺山古墳群	21 鶯谷古墳群	22 源治山遺跡	23 源治山城跡	24 東山遺跡	25 城山遺跡	26 萱生城跡	27 小牧北遺跡
28 筆ヶ崎西遺跡	29 筆ヶ崎古墳群	30 居林遺跡	31 北山城跡	32 居林古墳群	33 中野山遺跡	34 北山A遺跡	35 北山B遺跡	36 黒土遺跡
37 野中遺跡	38 北山C遺跡	39 北ノ山古窯跡	40 西辻遺跡	41 鐘撞遺跡	42 広古墳群	43 浄ヶ坊古墳群	44 西ノ広城跡	45 西ヶ広遺跡
46 松山古墳	47 廟ヶ下遺跡	48 古屋敷遺跡	49 伊坂城跡	50 丸内遺跡	51 伊坂遺跡	52 重地遺跡	53 菟上遺跡	54 石塚古墳
55 山村遺跡	56 上高田遺跡	57 岡山古墳群	58 仁王堂遺跡	59 金塚遺跡	60 東平古遺跡	61 城ノ谷遺跡	62 内ノ坪遺跡	63 広永城跡
64 間ノ田遺跡	65 辻子遺跡	66 大矢知城跡	67 大城遺跡	68 雲天遺跡	69 八反縄遺跡	70 三石塚遺跡	71 四反田遺跡	72 四方天遺跡
73 下之宮遺跡	74 下之宮南遺跡	75 久留倍遺跡	76 大矢知山畑遺跡	77 青木谷遺跡	78 富士谷遺跡	79 斎宮山古墳	80 北之脇遺跡	81 斎宮谷遺跡
82 小宮遺跡	83 鳩浦古窯跡	84 羽津広遺跡	85 山奥遺跡	86 死人谷横穴墓群	87 糠塚古墳	88 斑鳩A遺跡	89 垂坂遺跡	90 中村遺跡

第１表　周辺主要遺跡一覧



第２図　遺跡地形図（1:5,000）



第３図　調査区位置図（1:2,000）　＝調査区　＝一次調査区

向を正方位にそろえた大規模な建物群が出現する。３面庇を持つ建物は、有力者の居宅遺跡としての性格を表すものと考えてよい。基本的に竪穴住居から掘立柱建物に移行していくが完全な移行は行われなかったようである。莵上遺跡のように主屋と倉庫を組み合わせた様子は明瞭でない。柱間についてはいずれも完数尺をとる[④]。

久留倍遺跡では、正殿・脇殿・八脚門が方位をそろえコの字型に並ぶ企画的な配置であることが判明した。朝明駅家政庁とする説もあるが、一時期に朝明群衙政庁であった蓋然性が高いとされている[⑤]。

また近年の発掘調査により、北山Ａ遺跡に隣接する中野山遺跡でも古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の集落跡が確認されており、その数は竪穴住居、掘立柱建物のいずれも 100 棟以上にのぼる。これらの住居跡はいくつかの集落群を形成しており、それぞれの間に若干の時期差が存在する。詳細な時期や集落の性格については、今後の整理作業を待つ必要があるが、北山Ａ遺跡と中野山遺跡を一連の遺跡とする視点で検討することも有意義であろう。

加えて、北山Ａ遺跡と谷を挟んだ北西に位置する筆ヶ崎西遺跡では 100 棟を超える竪穴住居と 50 棟近い掘立柱建物が確認されている。掘立柱建物の約半数が倉庫建物と推測され、これは集落での生産活動が行われていた可能性を示唆する。加えて、２基の鍛冶炉が確認されたことや、複数の遺構で鉄滓が出土していることから考えて、組織的に製鉄に関わる生産活動を行っていた集団が存在した可能性も考えられる。当遺跡や中野山遺跡でも鉄滓・フイゴ羽口など鍛冶関係遺物が出土しており、これらの遺跡を総合的に考えていくことが、この地域の生産活動の解明に大きく寄与すると思われる。（宮﨑）

［註］

① 四日市市「四日市市史」第３巻 考古Ⅱ 1993
② 三重県埋蔵文化財センター『莵上遺跡発掘調査報告』2005
③ 三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第３･４次）発掘調査報告』2006
④ 前掲③に同じ
⑤ 四日市市教育委員会『久留倍遺跡 5』2013

【参考文献】

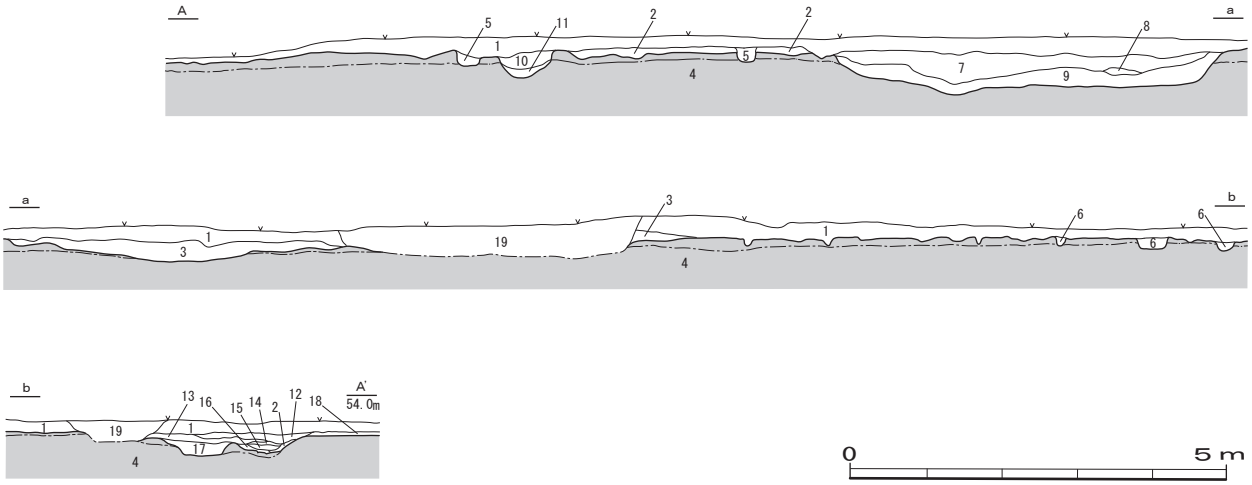
・ 四日市市『四日市市史』第１巻 史料 自然 1990
・ 四日市市『四日市市史』第２巻 考古Ⅰ 1988
・ 四日市市『四日市市史』第３巻 考古Ⅱ 1993
・ 四日市市『四日市市史』第７巻 資料編 古代・中世 1991
・ 三重県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財発掘調査概要報告Ⅰ～Ⅴ』2011 ～ 2015
・ 三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第３次・４次）発掘調査報告』2006
・ 三重県埋蔵文化財センター『莵上遺跡発掘調査報告』2005
・ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』2004
・ 四日市市教育委員会『四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 山奥遺跡Ⅱ』2004

Ⅲ．層序

調査区は、南側から北側へ若干傾斜しているが、比高差は0.5ｍ程度である。また、調査区南側は東から西へ緩やかに傾斜し、その比高差は1.5ｍである。結局、調査区南東側が最も高く、標高53.5ｍ程度、対して調査区北側は傾斜が無く、標高51.5ｍ程度である。最大比高差は２ｍを測るが、現地で傾斜を意識することはなく、感覚的には概ね平坦である。

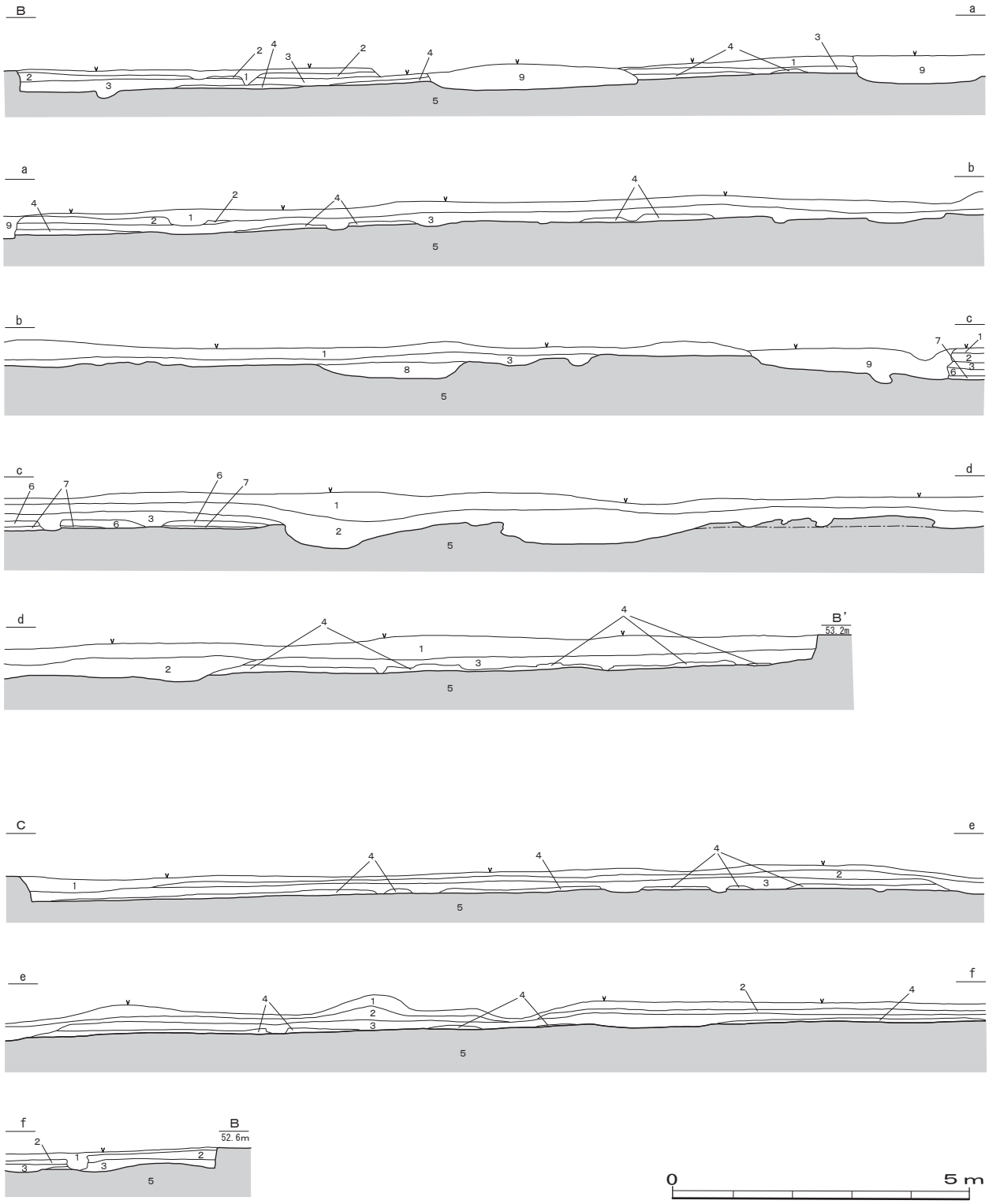
調査区西部では、腐葉土である表土（第５図１）や褐色粘質土の旧表土（第５図２）の下に黒ボク土起源の黒褐色粘質土（第５図３）や、局所的ににぶい黄褐色粘土（第５図４）がみられる。土層断面観察では、にぶい黄褐色粘土上で遺構が確認できたが、当地は竹林および樹林であり、根の撹乱の影響が非常に大きかったため、当地の地山である褐色粘土（第５図５）の上面で遺構検出を実施している。それでも表土の腐葉土から検出面までは35㎝前後しかなく、既述したように竹林や木の根、耕作等による撹乱が激しい。

一方、調査区の南東側では、遅くまで畑であったことが幸いし、竹林等による撹乱は少ない。暗褐色粘質土の表土（第４図１）の下に黒褐色粘質土（第４図２）や褐灰色粘質土（第４図３）を挟み、深さ40㎝で黄褐色粘質土の検出面（第４図４）に至る。ただし、段丘上で最も高所にあたるためか覆土の流失が進み、場所によっては表土直下20㎝足らずで検出面に至る部分も多い。加えて、宅地に利用されていた範囲では、それによる多くの撹乱が検出面に及んでいる。（櫻井・森川）



1. 10YR3/3　粗砂粒混入暗褐色粘質土（表土）
2. 10YR3/2　炭化物・焼土粒　微量混入黒褐色粘質土
3. 10YR4/1　黄渇色土塊混入褐灰色粘質土
4. 10YR5/8　黄褐色粘質土（地山）
5. 10YR4/1　褐灰色粘質土
6. 10YR5/1　黄渇色土塊混入褐灰色粘質土
7. 10YR3/1　黒褐色粘質土（SK330埋土）
8. 10YR3/1　黄褐色土塊多量混入黒褐色粘質土（SK330埋土）
9. 10YR4/2　黄褐色土塊混入灰黄褐色粘質土（SK330埋土）
10. 10YR3/1　炭化物・焼土粒微量混入黒褐色粘質土（335埋土）
11. 10YR3/1　黄褐色土・炭化物・焼土粒混入黒褐色粘質土（SK335埋土）
12. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
13. 10YR4/2　焼土粒・炭化物微量混入灰黄褐色粘質土
14. 10YR3/2　黒褐色粘質土
15. 10YR3/2　黄褐色土微量混入黒褐色粘質土
16. 10YR3/2　黄褐色土多量混入黒褐色粘質土
17. 10YR3/3　黄褐色土・焼土粒・炭化物少量混入暗褐色粘質土
18. 10YR3/2　黄褐色土多量・焼土粒微量混入黒褐色粘質土（SH331埋土）
19. 撹乱土

第４図　調査区南壁土層実測図（1:100）



1．腐葉土・竹根等
2．10YR4/1　褐色粘質土（旧表土）
3．10YR3/1　黒色粘質土（包含層）
4．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土（包含層）
5．7.5YR4/3　褐色粘質土
6．10YR3/1　焼土・炭混入黒褐色粘質土(SH25埋土)
7．10YR4/3　黒褐色粘質土塊混入褐色粘質土（SH25貼床）
8．10YR2/1　黒色粘質土（SK7埋土）
9．一次調査杭埋土

第５図　調査区南北・北壁土層実測図（1:100）

Ⅳ．遺構

１．土器棺墓

ＳＸ１３６（第62図）　調査区南西で検出した縄文晩期の土器棺墓である。径40cm、深さ約10cmの掘形内に２個体分の深鉢が対向して置かれていた（１・２）。撹乱溝により上部が削平されているため詳細は不明だが、晩期最終末の深鉢を横位・合口に据えたものであろう。（櫻井）

２．竪穴住居

可能性に止まるものを含め49棟を確認した。時期差は小さく、全て古墳時代末から奈良時代前半までのものである。その分布にはやや濃淡があり、２～３棟ごとのまとまりをもつようにもみえる。平面形は方形もしくは長方形を呈するが、掘立柱建物と方向を揃えるものはない。主柱穴が不明瞭なものも多く、床面に貼床をもつものも稀である。屋内に浅い土坑を複数もつものがあるが､出土遺物に乏しく、性格は不明とせざるを得ない。屋内土坑は、住居のほぼ中央にあるものと、やや壁側に位置するもの、カマド周辺にある土師器廃棄土坑の三種がある。

（櫻井）

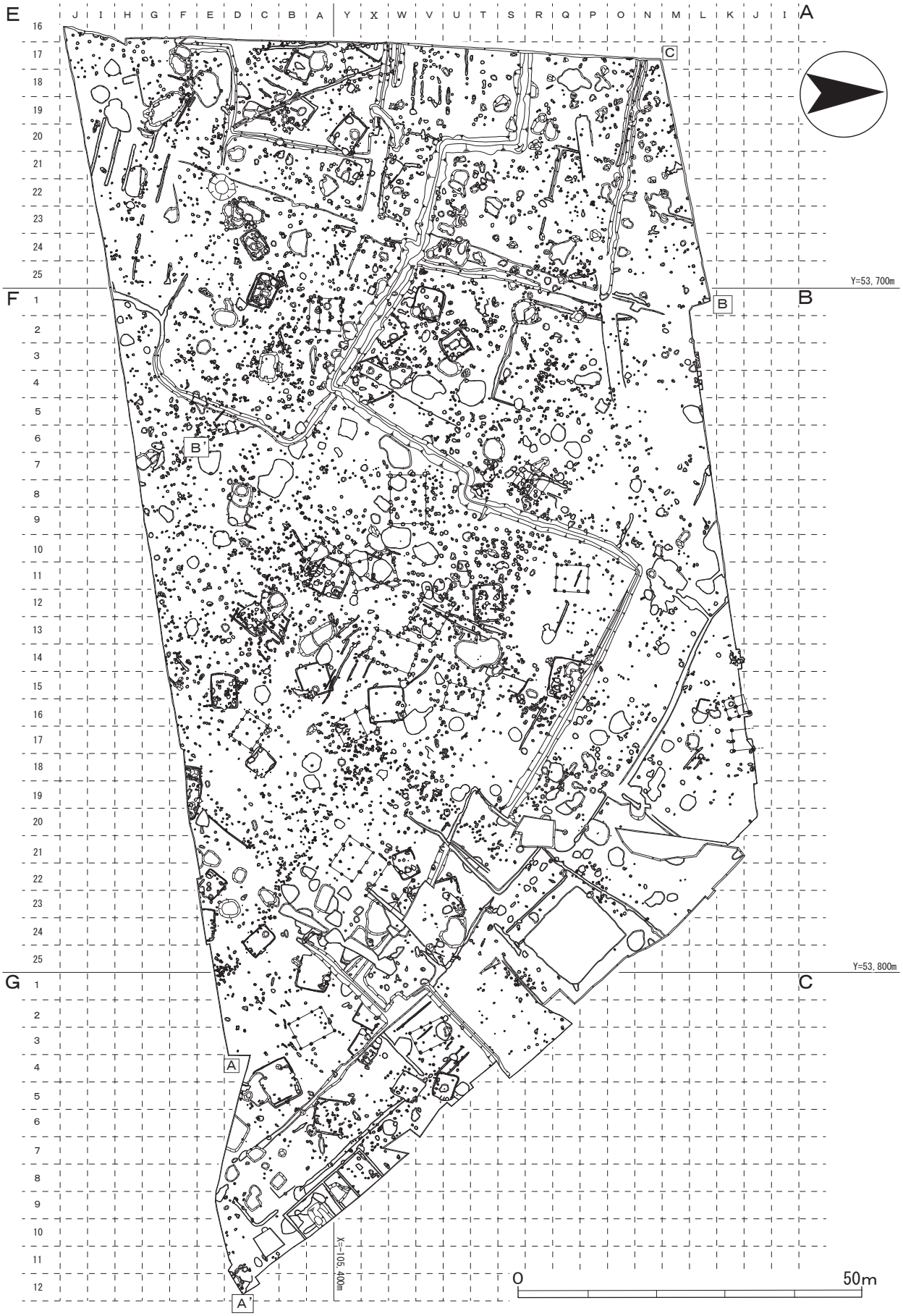
ＳＨ１（第27図）　調査区北部で壁周溝のみを確認した。残存が劣悪で、検出時点では埋土と思われる部分も一部あったが、掘削の結果、遺構としては前述したように周溝のみとなった。周溝は屈曲する様子を見せ、住居の北東角を表しているものと考えられる。幅10cm足らず、深さは検出面から４cm程度の浅いものである。60cmほど南下し途絶えるが、その延長上にも住居の痕跡を示すかのような不定形な溝がある。そこで直径20cmほどの小土坑に充満する焼土（ＳＦ131）を検出し、土師器長胴甕が出土している。これが東辺中央に設置されたカマドに関連するものと仮定すれば、ＳＨ１は一辺４ｍの東辺にカマドをもつ竪穴住居としてよいであろう。（櫻井）

ＳＫ５（第27図）　調査区西部で褐色粘質土の広がりを検出した。一辺１ｍほどの不整方形状に広がっていたが、検出中に消滅してしまった。内部には２ヶ所に分かれた焼土（ＳＦ17）があり、固く締まった厚さ５cmほどの被熱層である。その下には焼土や炭を僅かに含む褐色粘土層がある。ＳＫ５を竪穴住居の痕跡とすれば、ＳＦ17は補修が繰り返えされたカマドの痕跡ということになるが、確証を得られない。（森川）

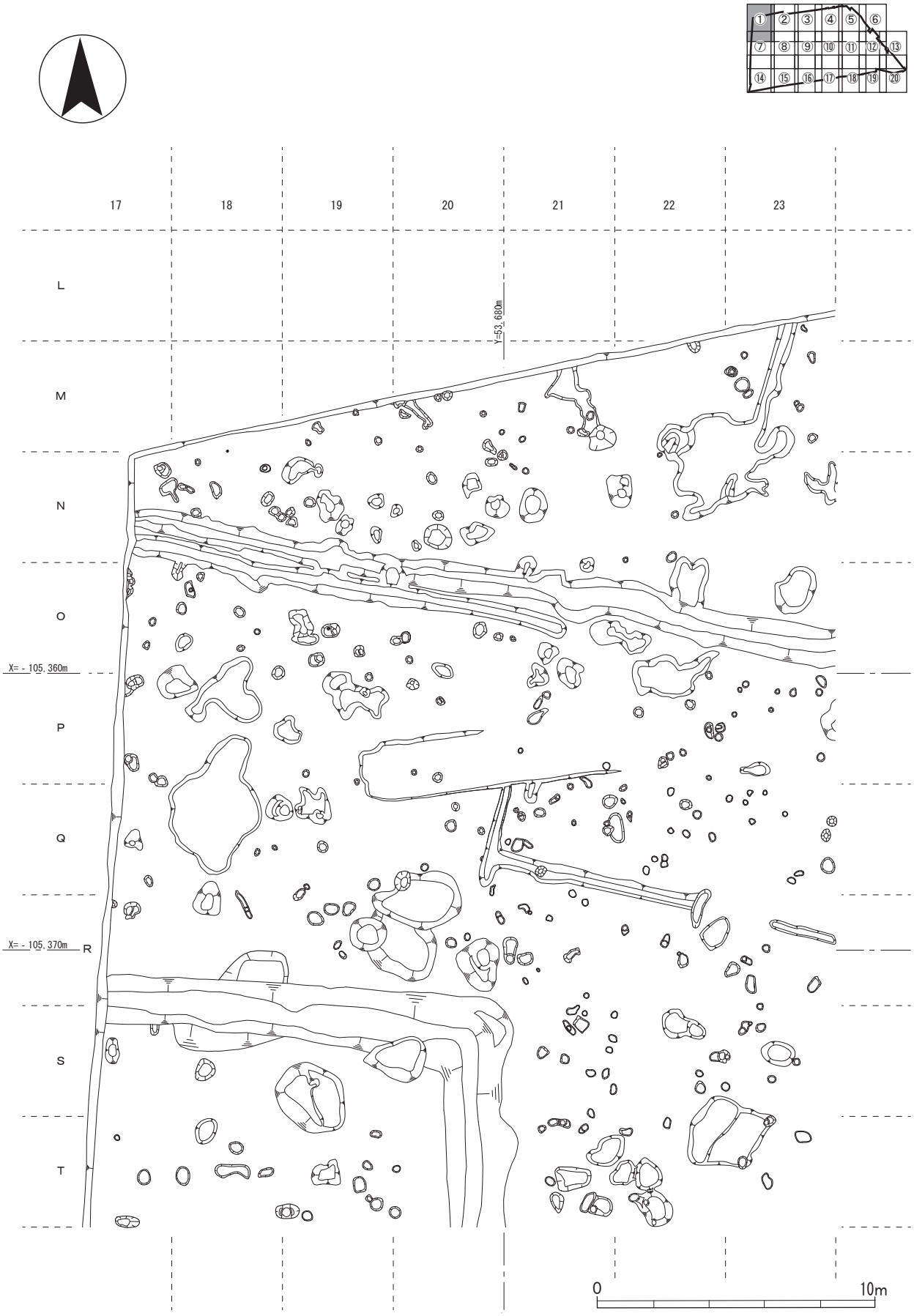
ＳＨ６（第28図）　調査区中央部で検出した4.0ｍ×3.6ｍの方形を呈し、深さは検出面から10cm程度である。東隅にカマド（ＳＦ50）を配置するが、一部を後出するＳＫ７に切られる。なお、カマドは崩壊しており、残りは悪い。カマドの手前で検出した不定型な土坑（ＳＫ56）は、カマドの廃棄土坑であろう。貼床なく、主柱穴も明確でない。壁周溝（ＳＤ29）内に壁柱穴が認められることから、壁立建物の可能性もあろう。

屋内に土坑ＳＫ33・ＳＫ34・ＳＫ55を配置する。屋内土坑は、いずれも上面が踏み固められており、住居廃絶時には床面として機能していた。ＳＫ33・ＳＫ34は楕円形の浅い土坑で、ＳＫ34から土師器甕のほか、鉄鎌が２枚重なって出土した（195･196）。ＳＫ34底面には地山の礫が多数みられたことから、床面に表出していた礫を除去した天地返しの痕跡かもしれない。カマドちかくの周溝から須恵器高杯の脚（194）が出土した。（櫻井）

ＳＨ10（第29･30図）　ＳＨ６の南西で検出した。長4.7ｍ×4.4ｍの方形を呈し、検出面からの深さは10cmである。北東辺にカマドを設けるが、その位置は東に偏る。カマドは崩壊しており、袖の盛土痕跡と燃焼部が残る程度であった。カマド両側には廃棄土坑（ＳＫ22・23・24）があり、土師器片が多くみられた。カマドの設置される北東辺には地山削出の棚状施設がある。主柱穴は明確でなく、貼床はない。屋内土坑は浅いもの（ＳＫ52・53）と上面が被熱する小土坑（ＳＦ28）がある。しかし、ＳＫ53はＳＨ10の壁周溝に切られており、直下は風倒木となっている。隣接する同様な土坑ＳＫ52とともに、この住居とは直接関係がないものであろう。住居内から須恵器杯（176）などが出土した。（櫻井）



第６図　調査区全体平面図（1:800）



第７図　調査区平面図①　(1:200)

第８図　調査区平面図②　(1:200)

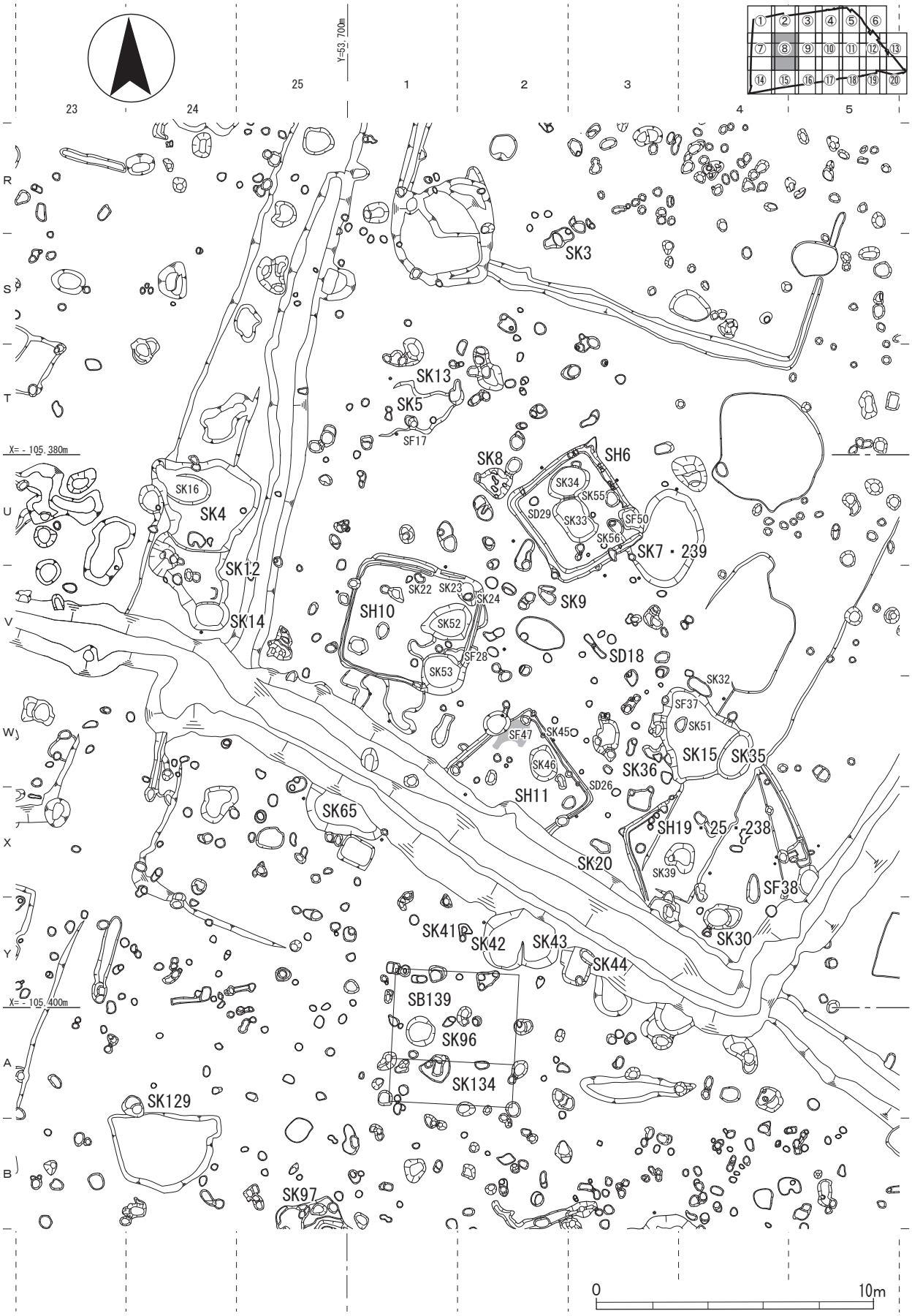
第９図　調査区平面図③　(1:200)

第 10 図　調査区平面図④　(1:200)

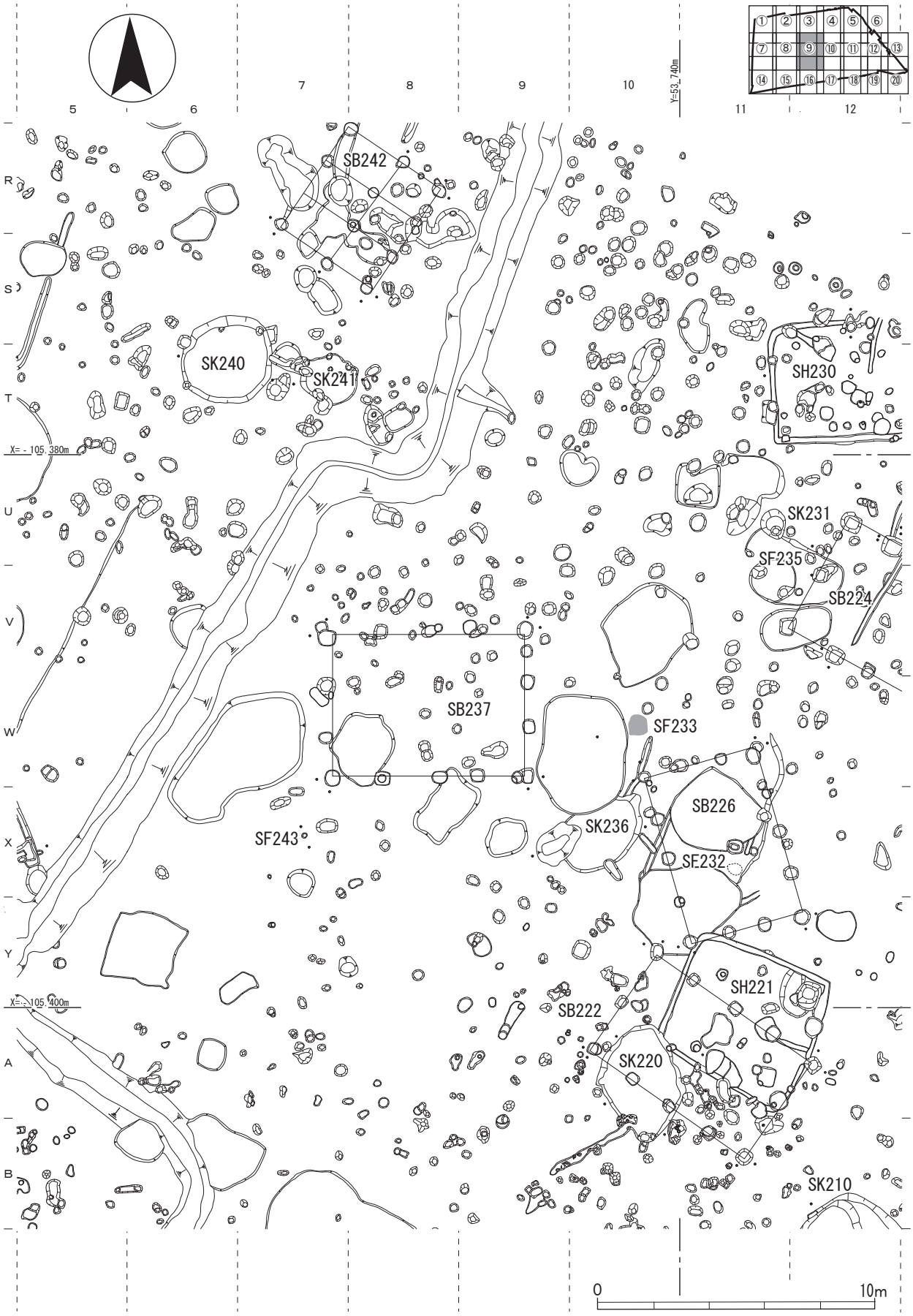
第 11 図　調査区平面図⑤　(1:200)

第 12 図　調査区平面図⑥　(1:200)

第 13 図　調査区平面図⑦　(1:200)



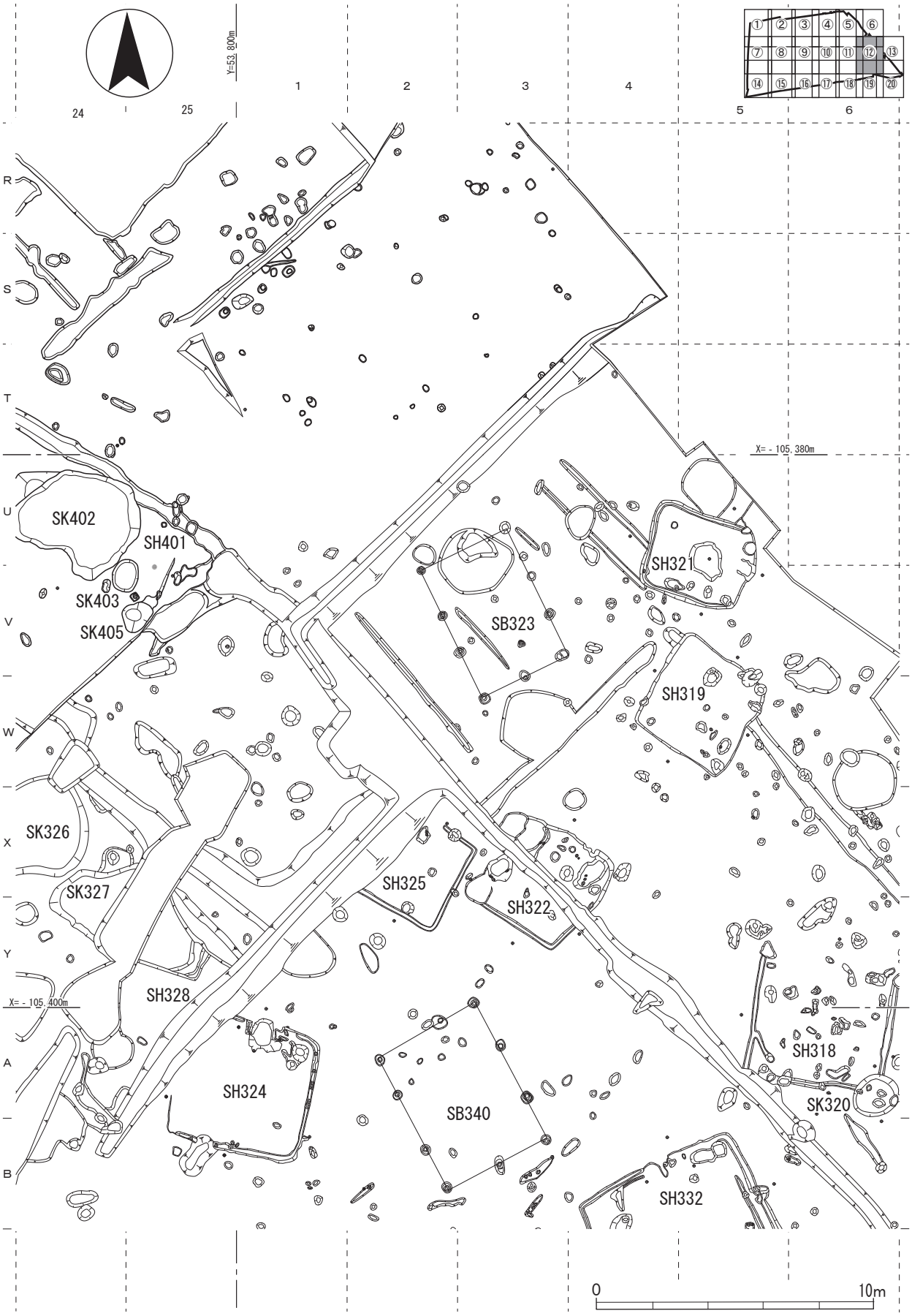
第 14 図　調査区平面図⑧　(1:200)



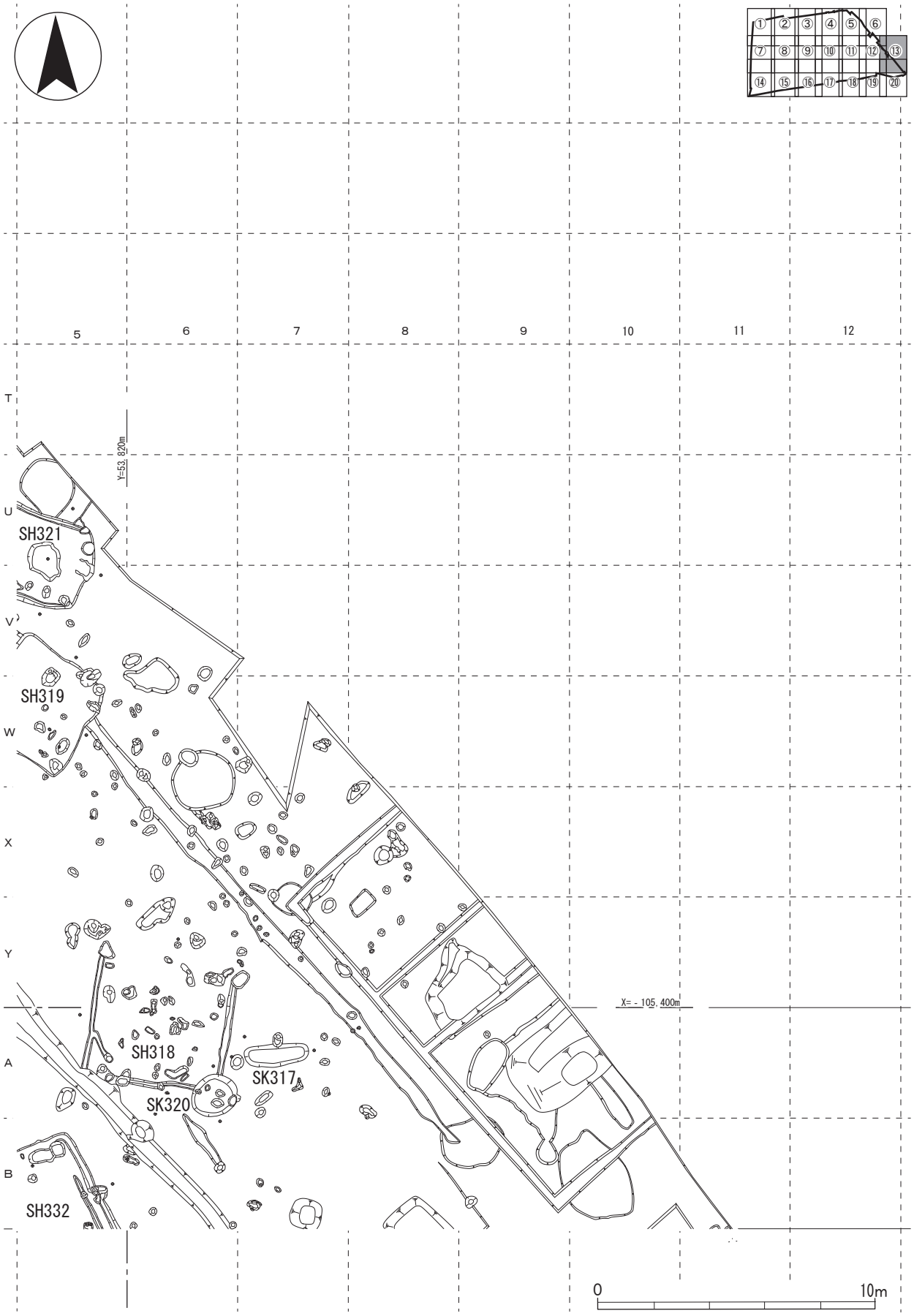
第 15 図　調査区平面図⑨　(1:200)

第 16 図　調査区平面図⑩　(1:200)

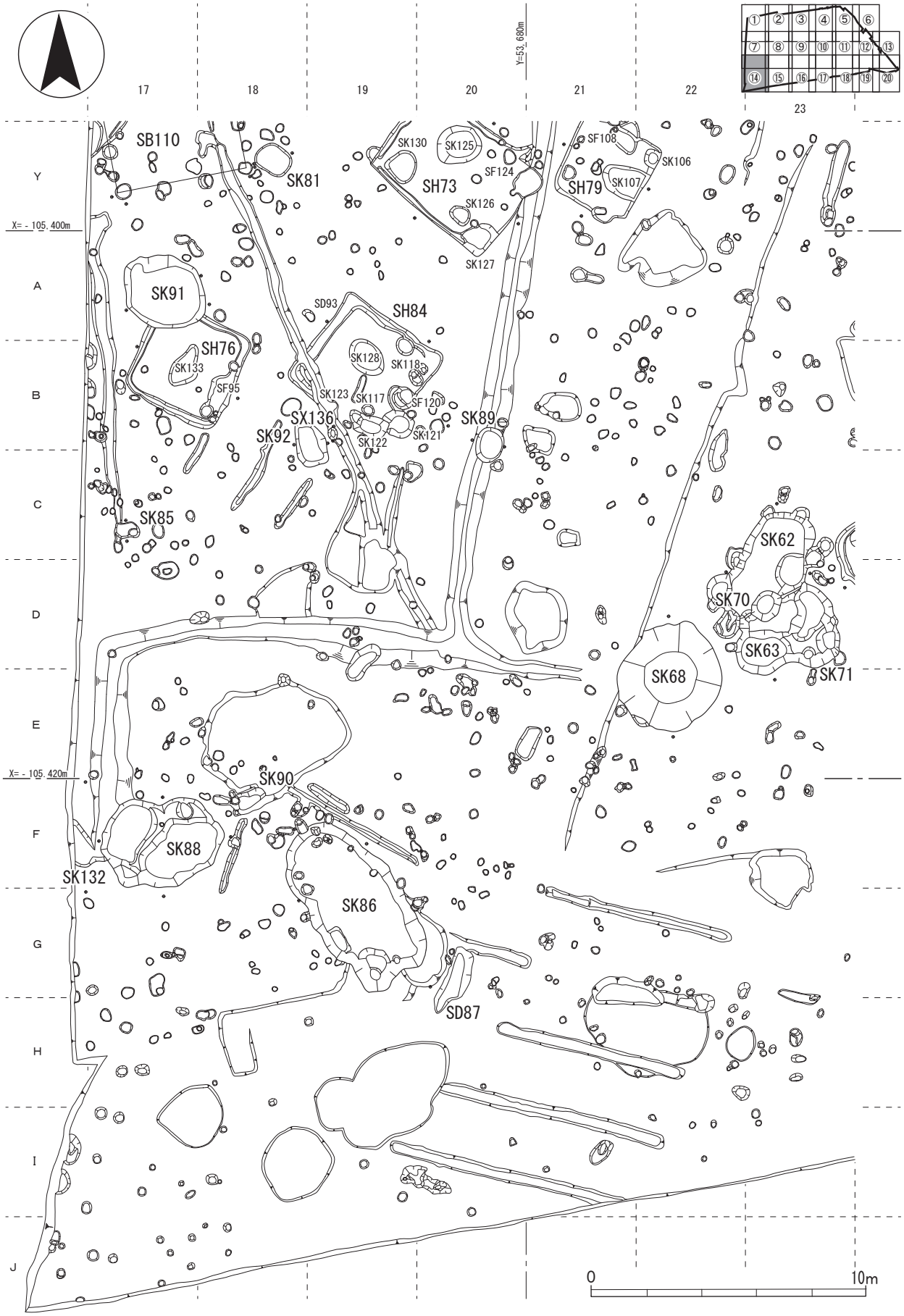
第 17 図　調査区平面図⑪　(1:200)



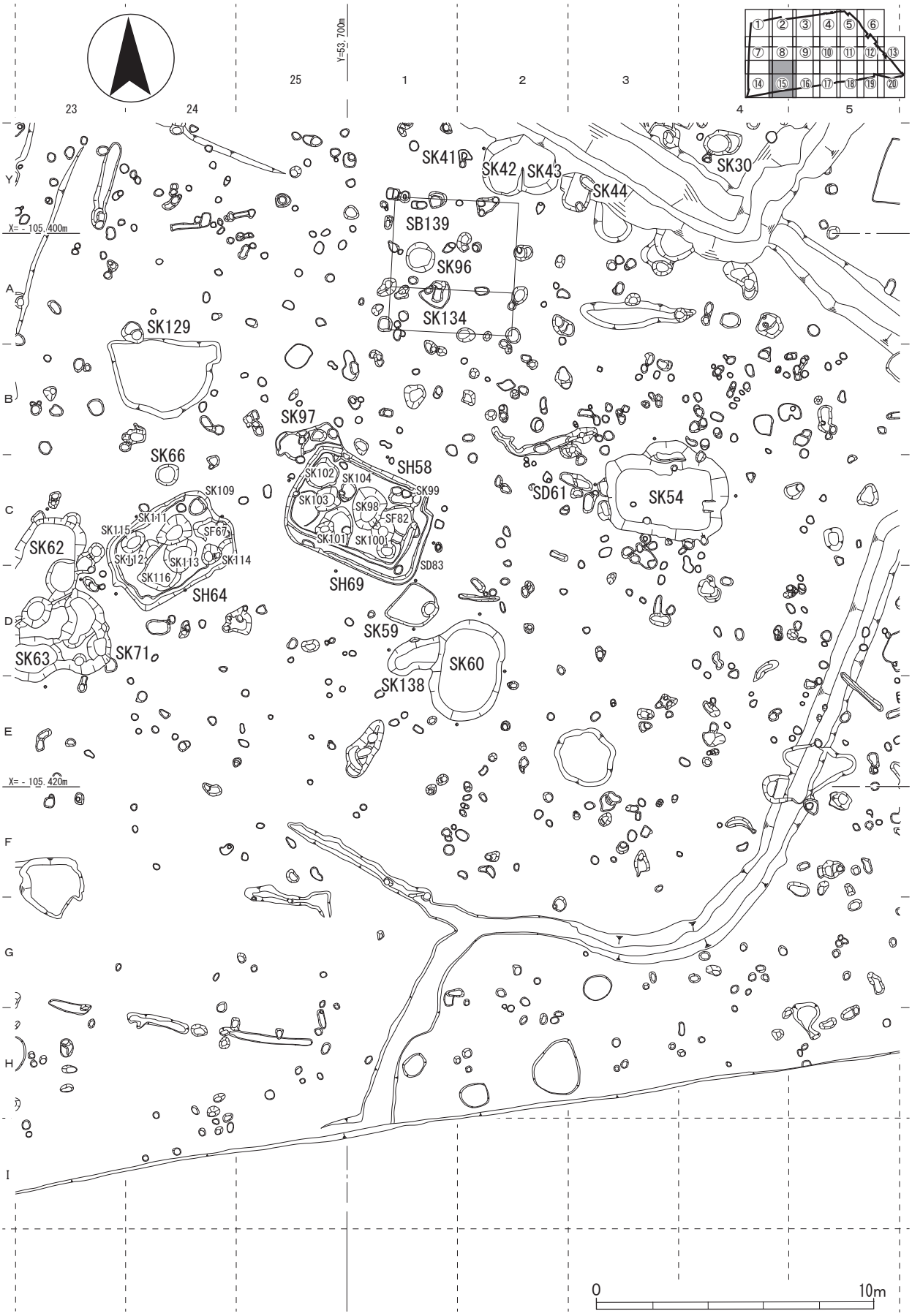
第 18 図　調査区平面図⑫　(1:200)



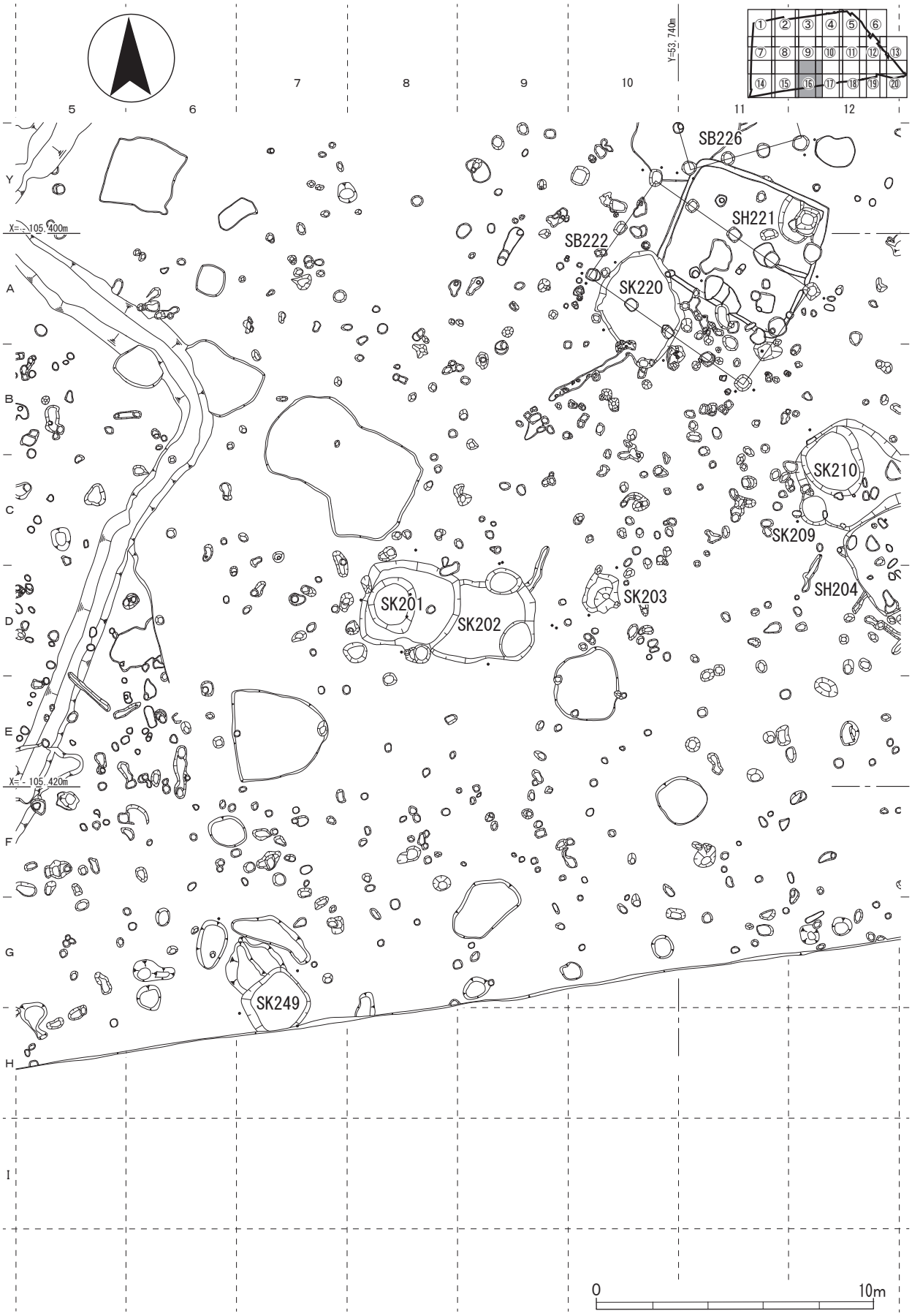
第 19 図　調査区平面図⑬　(1:200)



第 20 図　調査区平面図⑭　(1:200)



第 21 図　調査区平面図⑮　(1:200)



第 22 図　調査区平面図⑯　(1:200)

第 23 図　調査区平面図⑰　(1:200)

第 24 図　調査区平面図⑱　(1:200)

第 25 図　調査区平面図⑲　(1:200)

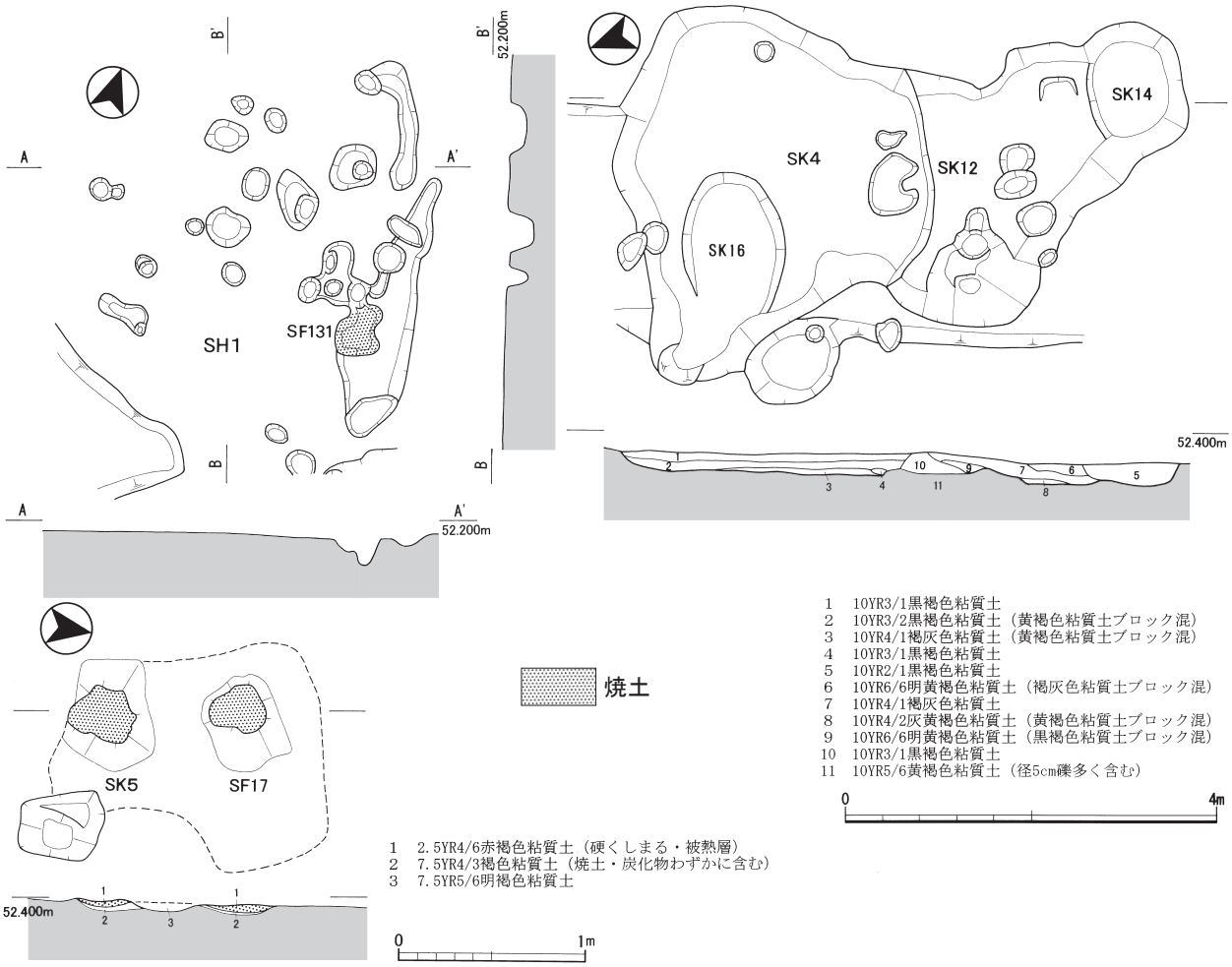
第 26 図　調査区平面図⑳　(1:200)

ＳＨ１１（第31図）　ＳＨ10の南東で検出した。南半は後世の溝により削平されているが、一辺長4.3ｍ、検出面からの深さ５cmを測り、壁周溝（**ＳＤ26**）が巡る。北隅にカマド（**ＳＦ47**）、屋内土坑**ＳＫ45・ＳＫ46**があり、貼床はない。カマドは崩壊し、焼土・炭の溜まりとなっていた。ＳＫ46は深さ10cmの浅い土坑である。ＳＫ46の上面付近から鍛冶滓が出土している。（櫻井）

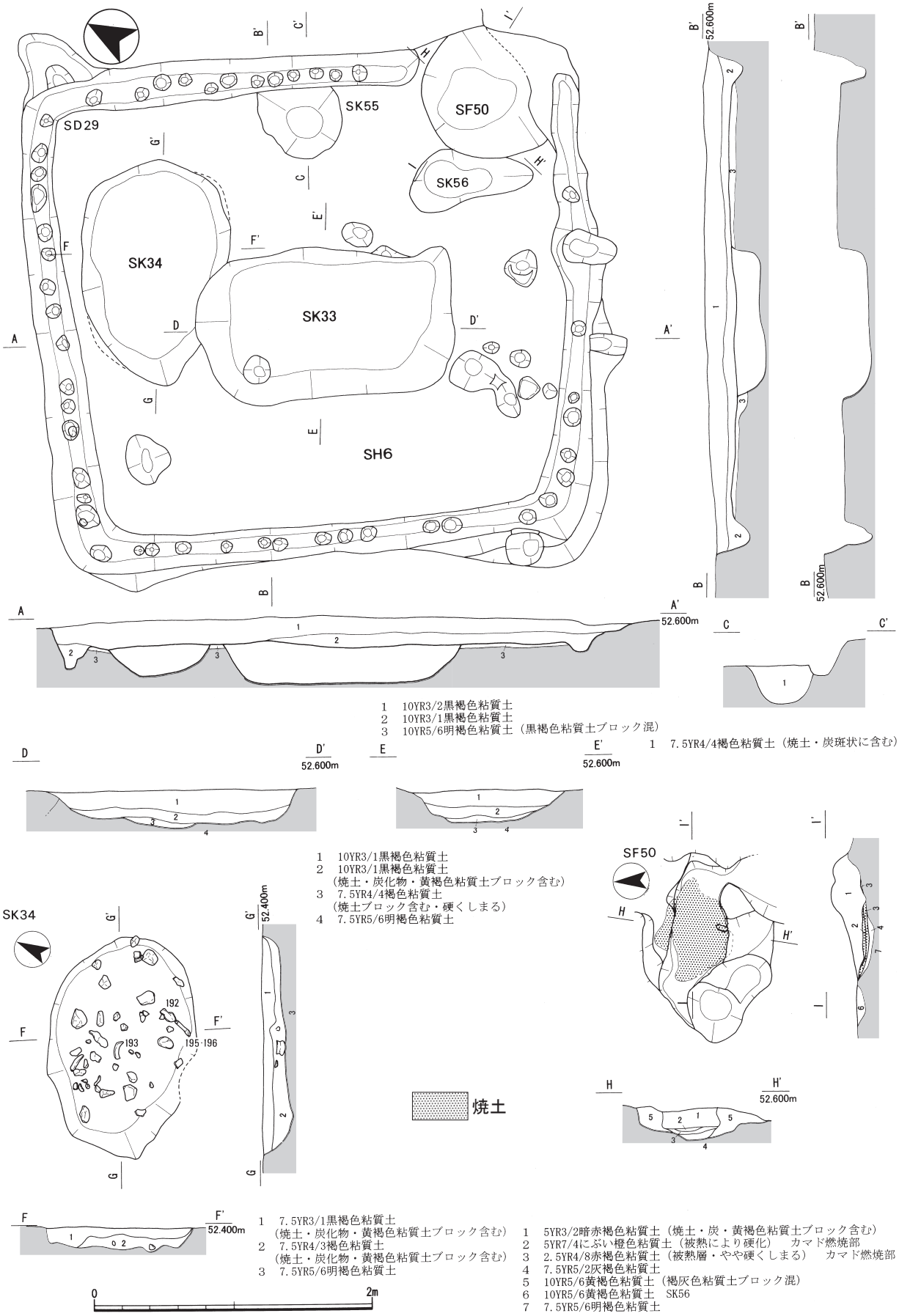
ＳＨ19・２５・２３８（第40図）　第２次調査区と第３次調査区にまたがって検出された。撹乱が激しく、また、一次調査区が住居中央を縦断し、その際の撹乱もあり、全体の形状を把握し難い。北東側のＬ字に曲がる幅20cm程度の溝を竪穴住居の周溝と判断してＳＨ19、一次調査区の対岸で固く踏み固められた土の広がりをＳＨ25、カマドを伴う南北に延びる溝をＳＨ238としたが、３者の位置関係から同一の竪穴住居である可能性が高い。その場合、一辺６ｍを測る方形を呈し、東辺にカマドを伴う。

カマドは残存が悪く、焼土の広がりを確認したに止まる。しかし、燃焼室床に想定できる位置では焼土の厚さが６cmに達している。付近には土師器甕（38）が散乱していた。すぐ横には径約80cmの円形土坑があるが、床面からの深さが10cm足らずであり、貯蔵穴とするには疑問である。住居内は固く踏み固められており、当初、貼床と考えたが、土層観察の結果、貼床ではなく地山が踏み固められた結果と判断した。埋土からは須恵器杯（42）などが出土している。住居内には３基の土坑（ＳＫ30・ＳＫ39、ＳＦ38）があるが、ＳＫ30及びＳＦ38は出土遺物に明確な時期差があり、住居に伴うものではない。**ＳＫ39**は出土遺物としては住居との時期差を確認できないが、これに伴う証拠もない。（森川）

ＳＦ３８（第40図）　ＳＨ19・25・238の床面で検出したが、既述したように出土遺物に時期差があ



第27図　ＳＨ1、ＳＫ4・12・14・16、ＳＦ131（1:80）、**ＳＫ5・ＳＦ17**（1:40）**実測図**



第28図　ＳＨ６、ＳＦ50、ＳＫ33・34・55・56実測図（1:40）

り、住居より後出のものである。長径１ｍ、短径40cmの長円形を呈し、深さは検出面から20cm足らずである。埋土は３層に分かれ、上層には焼土や炭を多く含み、中層には含まない。最下層では再び焼土や炭が疎らに現れる。土師器甕･鍋の廃棄土坑で、北側にカマドの燃焼部痕跡があり、付近にカマドが存在したと考えられる。とすれば、ＳＨ19・25・238と重複する竪穴住居が存在したことになる。土師器皿（214・215）・鍋（218）・甕（216・217）などが出土した。（森川・櫻井）

ＳＨ４８（第31図）　調査区西側で検出した。南半を現代の地境溝に削平されており詳細は不明であるが、一辺4.4ｍの方形を呈し、検出面からの深さは10cm程度である。一部に壁周溝が残存するが、貼床はなく、カマドも確認できない。埋土から須恵器杯（124）が出土した。（櫻井）

ＳＨ５８（第32図）　調査区南部で検出した。長辺4.7ｍ、短辺3.2ｍの長方形を呈し、検出面からの深さは８cmである。東辺にカマド（**ＳＦ82**）、四周に壁周溝を巡らし、貼床はない。カマドは崩落しており、燃焼部のみ残存していた。床面に多数の屋内土坑（**ＳＫ98～104**）が認められる。中央にあるＳＫ98を除き、壁周溝ぎわに土坑を配しているようである。いずれの土坑も深さ10cm弱で、遺物は少ない。（櫻井）

ＳＨ６９（第32図）　ＳＨ58と重複して検出され、大半がＳＨ58に切られているため詳細は不明である。長辺5.2ｍ、短辺3.0ｍの長方形を呈し、ＳＨ58よりやや大きい。深さは検出面から10cm程度で、ＳＨ58と同様に壁周溝（**ＳＤ83**）が巡る。（櫻井）

ＳＨ６４（第33図）　調査区南部で検出した長辺4.4ｍ、短辺3.1ｍの長方形を呈し、検出面からの深さは５cm程度である。貼床はなく、東辺にカマド（**ＳＦ67**）、屋内土坑（**ＳＫ109・111～116**）を配置する。屋内土坑は、中央のＳＫ113をはじめ、多数が重複しており、近在のＳＨ58と様相が似ている。土坑の上面は踏み固められており、ごく短期的に掘削された土坑であろう。カマドは完全に崩落していた。ＳＫ114内のピットからほぼ完形の須恵器蓋（335）が出土しているが、住居出土のものよりやや先行する。（櫻井）

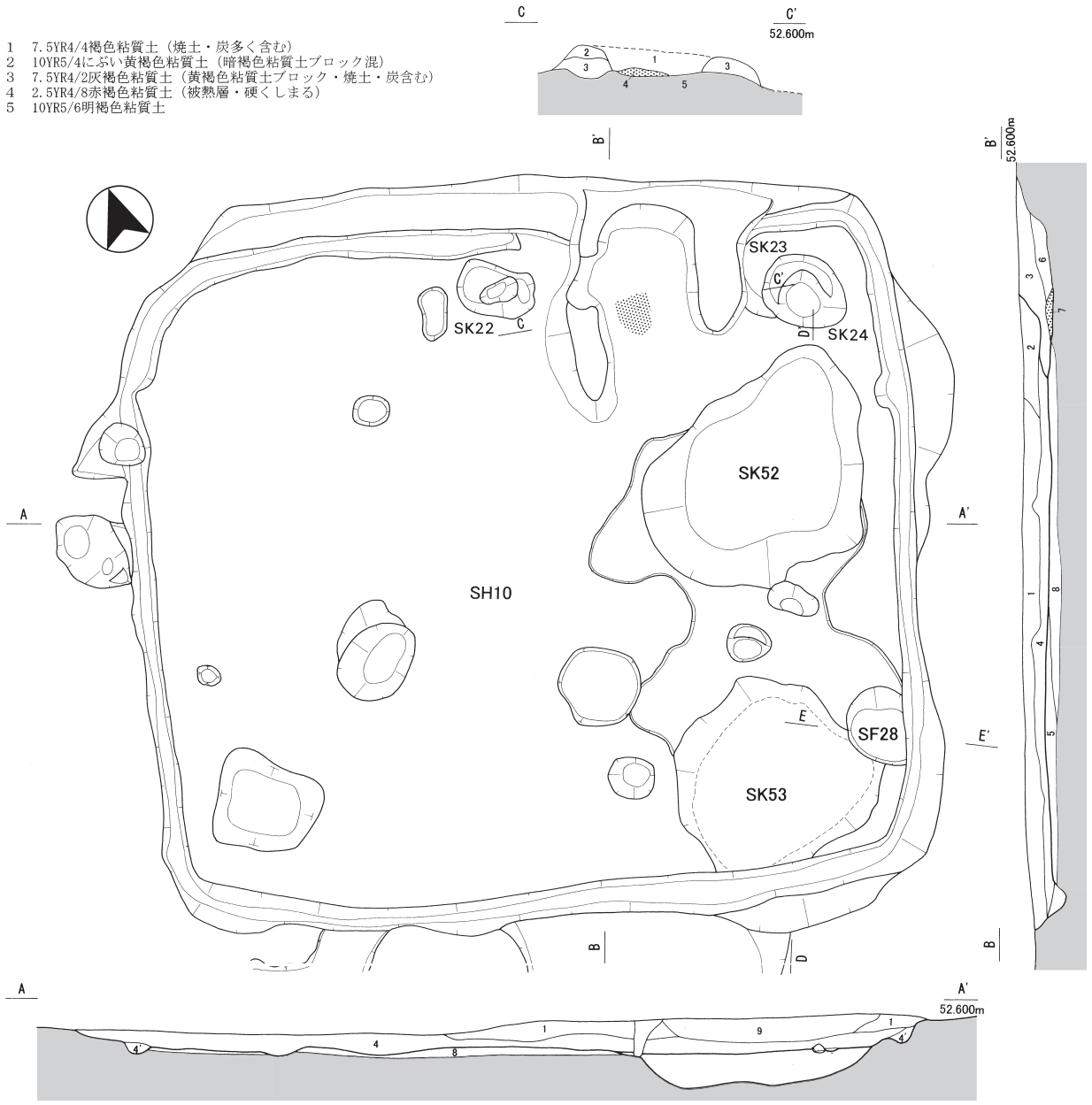
ＳＨ７３（第34図）　調査区西部で検出した長辺5.4ｍ、短辺3.9ｍの長方形を呈し、深さは検出面から10cm程度である。東隅にカマド（**ＳＦ124**）、屋内土坑（**ＳＫ125～127・130**）がある。当住居は貼床が認められ、東側ほど加工面は深く、貼床は厚くなる。屋内土坑は最も大きいＳＫ125が中央よりにあり、その他は壁に近接している。住居内から土師器甕（142）が出土した。（櫻井）

ＳＨ７５（第33図）　調査区西端で検出した竪穴住居である。大半が調査区外に加え後世の溝に切られるため詳細は不明である。一部に壁周溝が確認でき、屋内土坑をもつが、貼床はない。重複するＳＢ110より後出のものである。（櫻井）

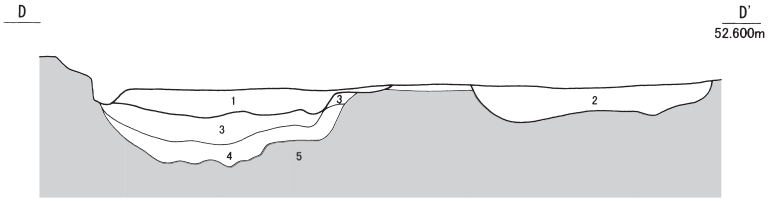
ＳＨ７６（第35図）　調査区西端で検出した。一辺3.8ｍ、検出面からの深さ６cmの方形を呈する。南東辺にカマド（**ＳＦ95**）がある。しかし、住居中央には浅い土坑（**ＳＫ133**）が掘り込まれる。カマドは崩壊し、土師器の廃棄土坑となっていた。四周に周溝が巡るが、カマド付近では途切れる。貼床が認められるが、その厚さは不均一で、周溝付近はやや厚い傾向がある。特に住居北隅が顕著であるが、先行するＳＫ91との重複部にあたり、それの影響で沈下したためかもしれない。住居内から土師器甕（149）、須恵器蓋（150）・杯（151・152）等が出土した。（櫻井）

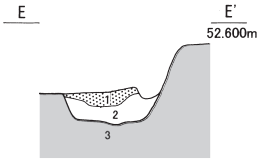
ＳＨ７９（第38図）　調査区西部で検出した。長辺3.2ｍ、短辺3.1ｍ、検出面からの深さ５cm、方形を呈する。北東辺にカマド（**ＳＦ108**）、屋内には土坑（**ＳＫ106・107**）があるが、貼床は認められない。ただし、ＳＫ106から完形で出土した須恵器杯（349）は竪穴住居出土遺物と時期差がある。住居東隅に位置するものの、それに先行する遺構と解釈する方が素直である。ＳＦ108は崩壊し、廃棄土坑となっていた。全体的に削平のため残りは悪く、壁周溝も不明瞭であった。（櫻井）

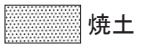
ＳＨ８４（第36図）　調査区西部で検出した。長辺4.1ｍ、短辺4.0ｍ、検出面からの深さ４cmの方形を呈するが、全体的に削平のため残りは悪い。南東辺にカマド（**ＳＦ120**）、屋内には土坑**ＳＫ118・122・123・128**を配置する。屋内土坑は中央にＳＫ128があり、その他はカマド付近に配される。ＳＫ



1 10YR3/1黒褐色粘質土
2 10YR4/2灰黄褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
3 7.5YR4/4褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
4 10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）
4' 10YR3/1黒褐色粘質土
5 10YR3/2黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）
6 10YR3/2黒褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
7 2.5YR4/8赤褐色粘質土（被熱層・硬くしまる）
8 10YR5/6明褐色粘質土（黒褐色粘質土ブロック混）
9 10YR4/2灰黄褐色粘質土



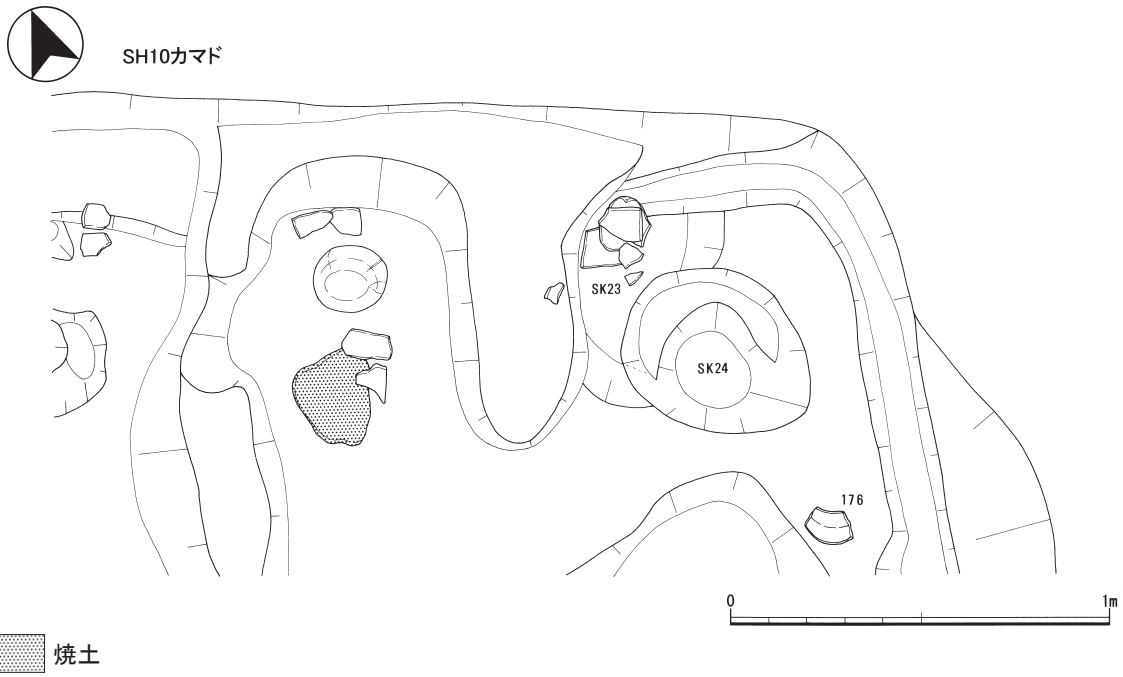




1 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土（褐灰色粘質土ブロック・焼土まばらに含む）
2 10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックまばらに含む）
3 10YR5/6黄褐色粘質土（しまりなし）　風倒木
4 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土（黒褐色粘質土ブロック含む）　風倒木
5 7.5YR5/6明褐色粘質土（黒褐色粘質土ブロック含む・硬くしまる）

1 7.5YR3/2黒褐色粘質土（赤褐色粘質土ブロック・炭化物含む）
2 10YR4/2灰黄褐色粘質土
3 10YR5/6黄褐色粘質土

第29図　ＳＨ10、ＳＦ28、ＳＫ22～24・52・53実測図（1:40）



第30図　ＳＨ10カマド遺物出土状況図（1:20）

122は他の屋内土坑に比べ比較的深く、奈良時代の須恵器杯（210･211）や土師器甕（199）等がまとまって出土した。貼床は認められないが、不定形なＳＫ123は部分的な貼床の可能性もある。住居内には他にＳＫ117がある。弱い焼土を伴っているが、カマドの痕跡とするには至らない。出土した須恵器蓋片がＳＫ122のもの（207）と接合している。

壁周溝（ＳＤ93）が幅広な点が大きな特徴で、住居北辺では幅20cmを測り、部分的に壁柱穴状のピットが確認できた。住居内からは、須恵器杯や製塩土器（203～205）が出土している。

また、住居に接するようにＳＫ121がある。出土遺物からはＳＨ84と時期差はないが、住居に関連するものかどうかは不明である。（櫻井）

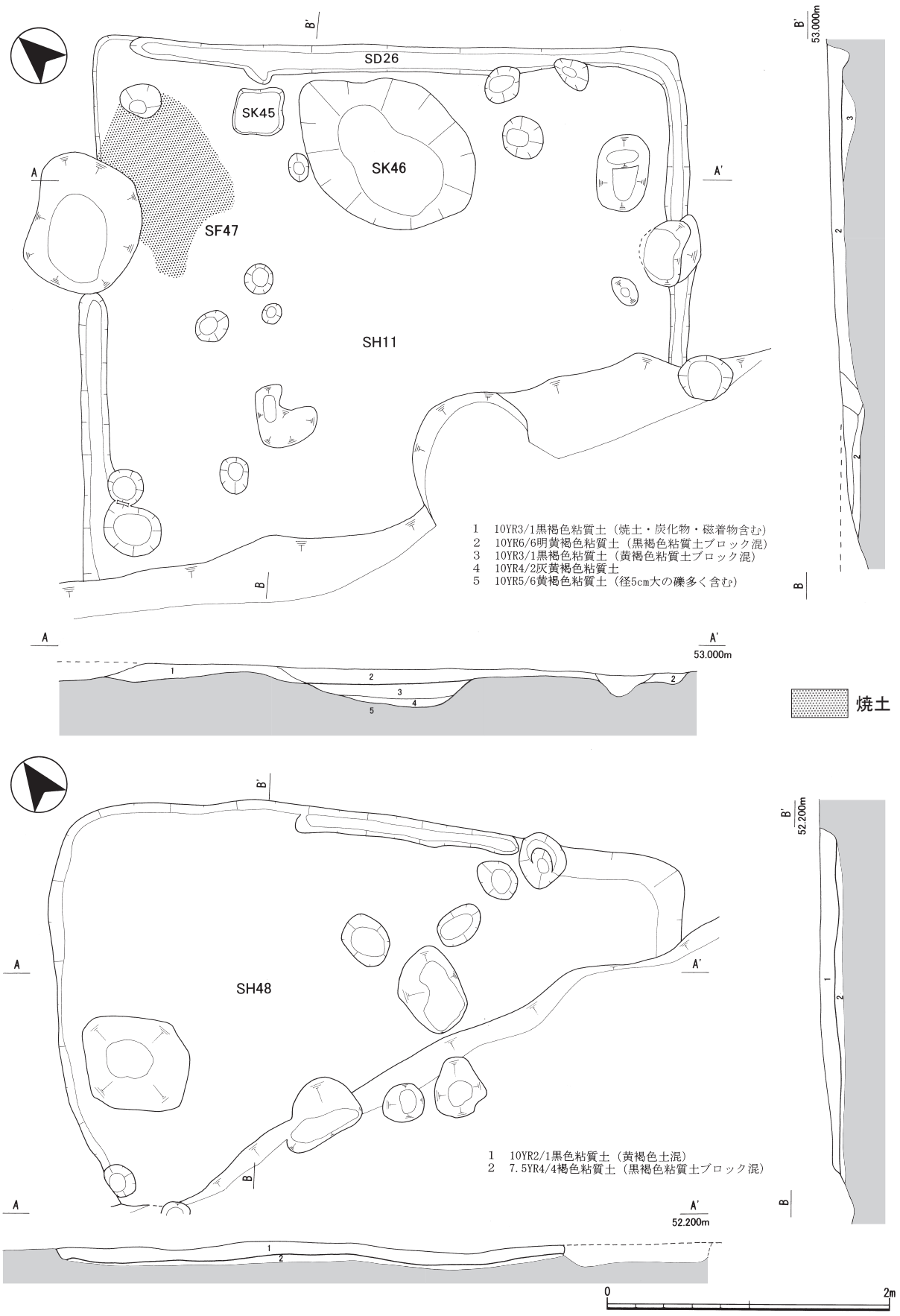
ＳＨ２０４（第37図）　第３次調査南部で検出した。一辺3.4～3.2ｍの方形を呈し、当遺跡検出の竪穴住居のなかでは小型のものである。深さは検出面から20cm程度で、埋土は木の根等による撹乱が激しいものの上下２層に分かれる。下層の灰黄褐色粘質土を貼床とする根拠に乏しいが、仮に床面とすると、厚さ４～６cmの貼床となる。炭化物や焼土粒を含むため、当初からの貼床ではなく、後に補修されたものと解釈せざるを得ない。

カマドは残存が劣悪であるが、北東辺の東寄りに設置される。北東辺中央から竪穴中央へ向かって60cmほど延びる僅かな高まりがあり、これをカマドの左側袖の痕跡とした。対応する右側は明確でなく、燃焼室はやや窪んでいる。炭化物や焼土混じりの粘質土が堆積しており、その上部に土師器皿（181）や甕（182）の小片が多数散乱した状態である。散乱範囲の端には長さ40cmほどの石があり、支柱石であったものであろう。燃焼室床や左側袖の焼土化は顕著でなく、煙道の痕跡も確認できなかった。

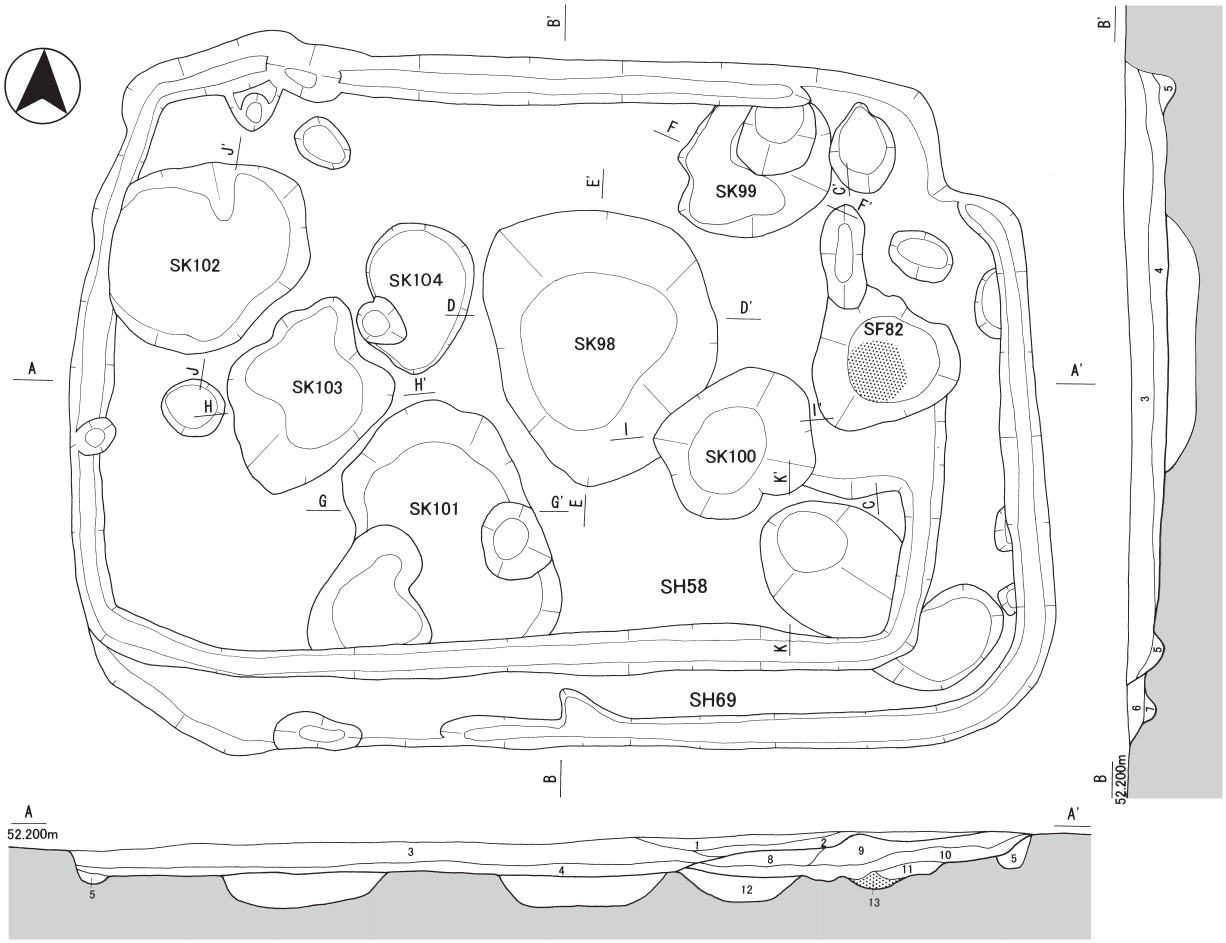
カマドの東隣に径60cmの楕円形の土坑があり、深さは40cmほどである。カマドと同様な炭化物や焼土粒を含んだ埋土で、須恵器の杯（183）や陶器の瓶（189）の小片が出土したに止まる。陶器が出土しているため時期差を考慮しなければならないが、埋土等の状況から一応貯蔵穴としておく。

土師器皿・甕、須恵器杯・壺等が出土しているがいずれも１／４以下の残存である。ただし、住居北側から倒立状態の須恵器壺（188）がほぼ完形で出土し、内部には漆が付着していた。その付近からは砥石（190）とカマド支柱石状の石（191）が出土している。なお、周溝や主柱穴は確認できない。（森川）

ＳＨ２０８（第38図）　第３次調査区南部で検出した。一辺約4.7ｍの方形を呈し、幅15cmほどの周溝が巡る。深さは検出面から10cm足らずしか残存

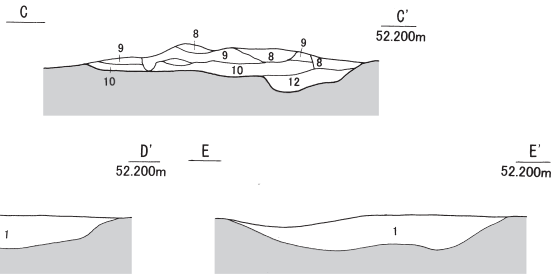


第31図　ＳＨ11・48、ＳＦ47、ＳＫ45・46、ＳＤ26実測図（1:40）

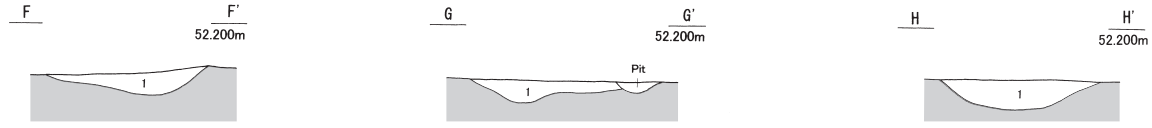


焼土

1　7.5YR3/1黒褐色粘質土（焼土・炭まばらに含む）
2　7.5YR3/1黒褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
3　10YR2/1黒色粘質土
4　10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）
5　10YR3/2黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）
6　10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックわずかに混）
7　10YR3/2黒褐色粘質土
8　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土（焼土・炭多く含む）　カマド崩落土
9　7.5YR3/1黒褐色粘質土（焼土・炭多く含む）
10　10YR4/2灰黄褐色粘質土（９層ブロック含む）
11　10YR4/1褐灰色粘質土（焼土・炭多く含む）
12　10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）　SK100
13　2.5YR4/6赤褐色粘質土　カマド燃焼部



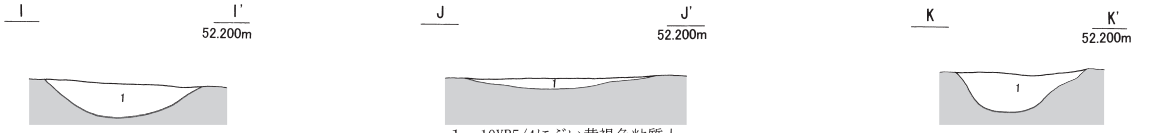
1　10YR3/1黒褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロック混）



1　10YR3/2黒褐色粘質土
（焼土・炭・黄褐色粘質土ブロック混）

1　10YR2/2黒褐色粘質土（褐色粘質土ブロック混）
Pit　10YR2/1黒褐色粘質土

1　10YR3/1黒褐色粘質土
（黄褐色粘質土ブロック混）



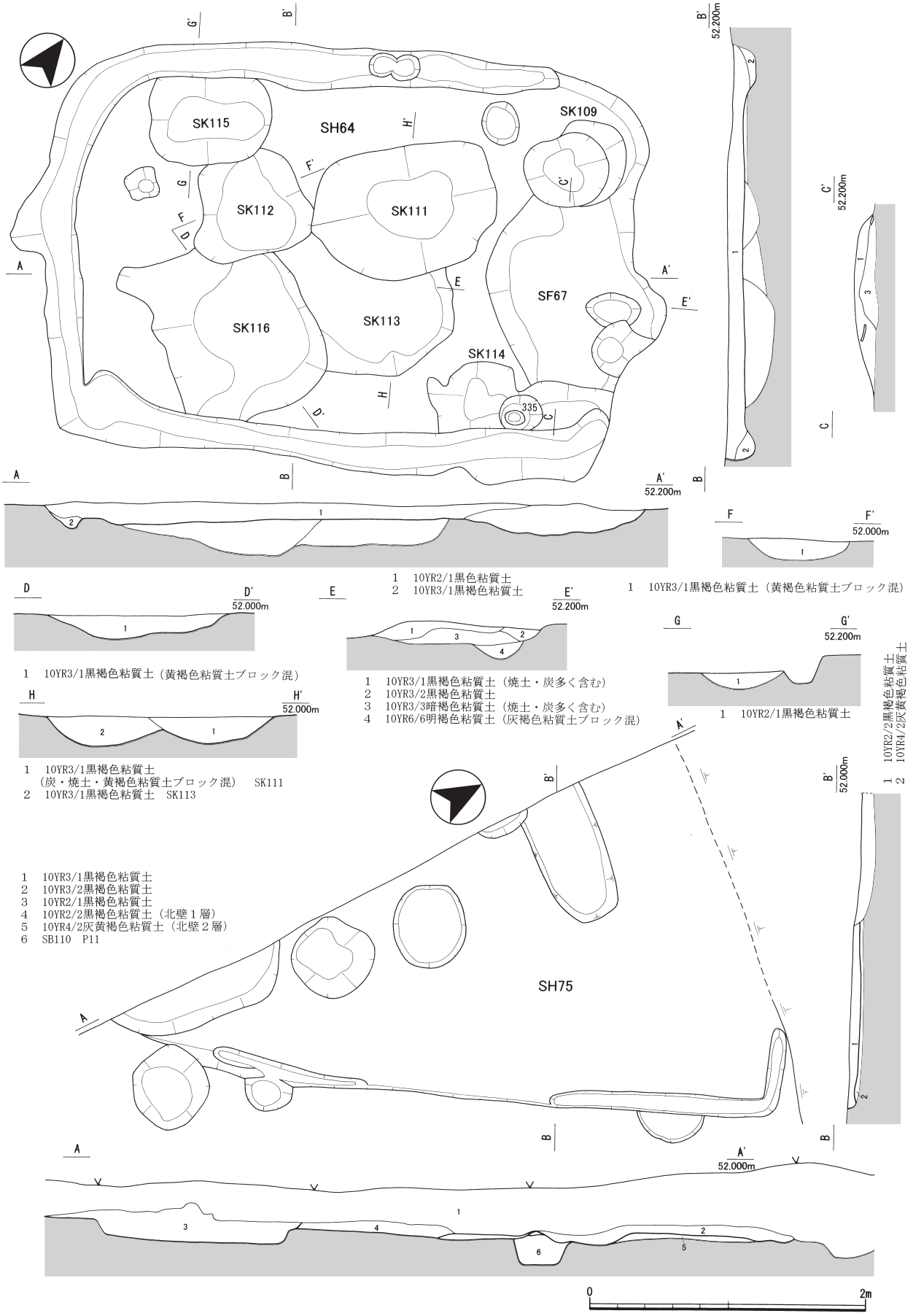
1　10YR4/2灰黄褐色粘質土
（黒褐色粘質土ブロック混）

1　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
（黒褐色粘質土ブロック混）

1　10YR3/1黒褐色粘質土

0　2m

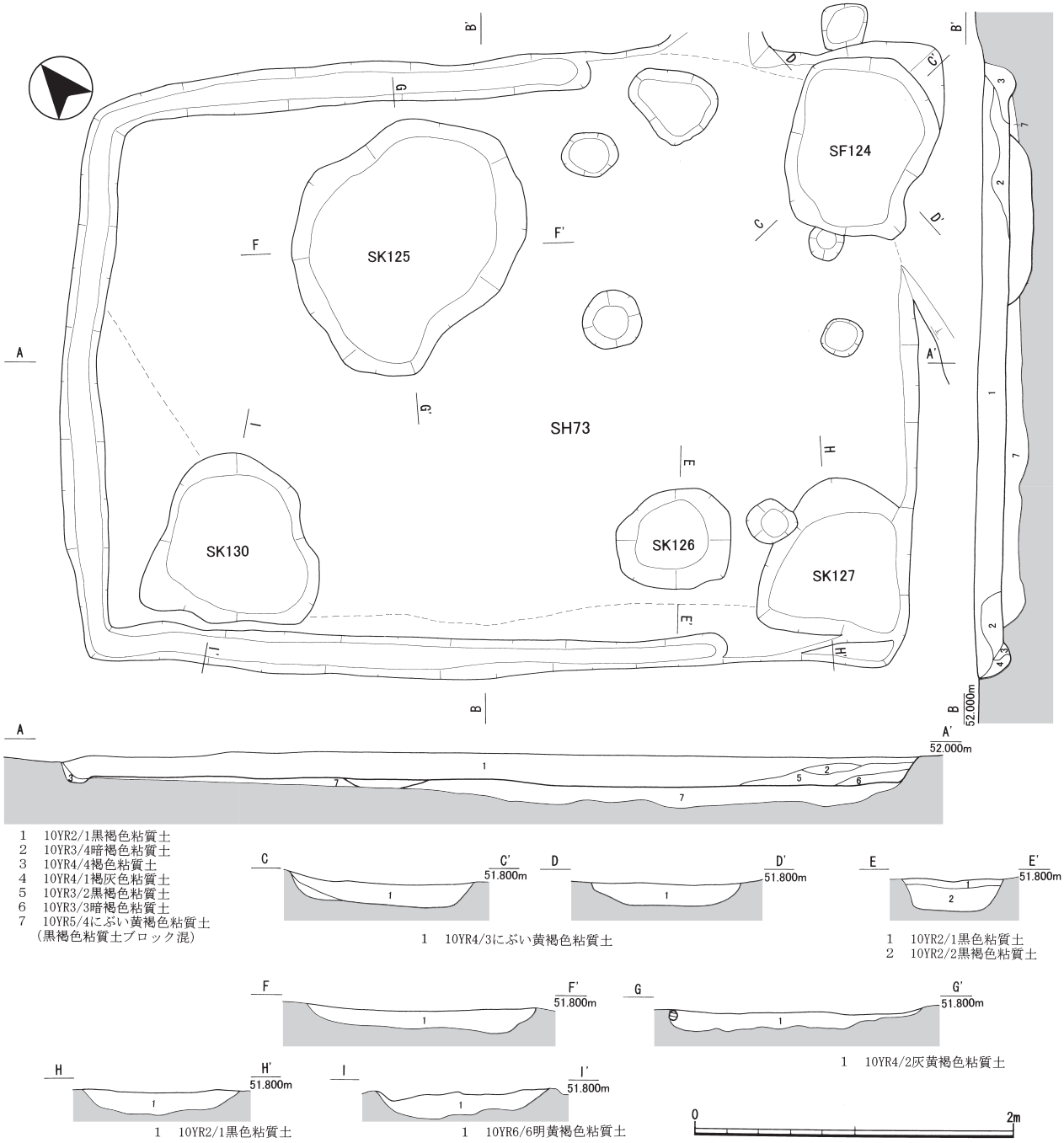
第32図　ＳＨ58・69、ＳＦ82、ＳＫ98～104実測図（1:40）



第33図　ＳＨ64・75、ＳＦ67、ＳＫ109・111～116実測図（1:40）

せず、ＳＫ 216 や風倒木等の撹乱も受けている。北東辺の東隅ちかくにカマドを設ける。カマドは両袖が残存しており、燃焼室は窪む。燃焼室床は焼土面となり、中央部は硬化する。しかし、焼土面は両袖内面には及んでいない。なお、住居の埋土全面には焼土粒を含み、中央部は床面が硬化している。床面北側で柱穴を２基検出した。主柱穴を想定させる位置であるが、南側では検出できなかった。カマド内には土師器甕片が散在し、他には須恵器高杯（25）が出土するが、残存が良好なものはない。（森川）

ＳＨ２２１（第 39 図） 第３次調査区中央で検出した。一辺 5.4 ｍの方形を呈するが、南辺は北辺に対し斜行し、結果的に西辺は４ｍ、東辺は５ｍとなる不整方形である。深さは検出面から 10㎝程度しかなく、南西隅はＳＫ 220 に、床面はＳＢ 222 柱穴を始め多数の小遺構に切られ、残存は劣悪である。四周に周溝が巡り、北辺中央部付近で焼土を検出した。この部分で北辺も北側に張り出しており、カマ

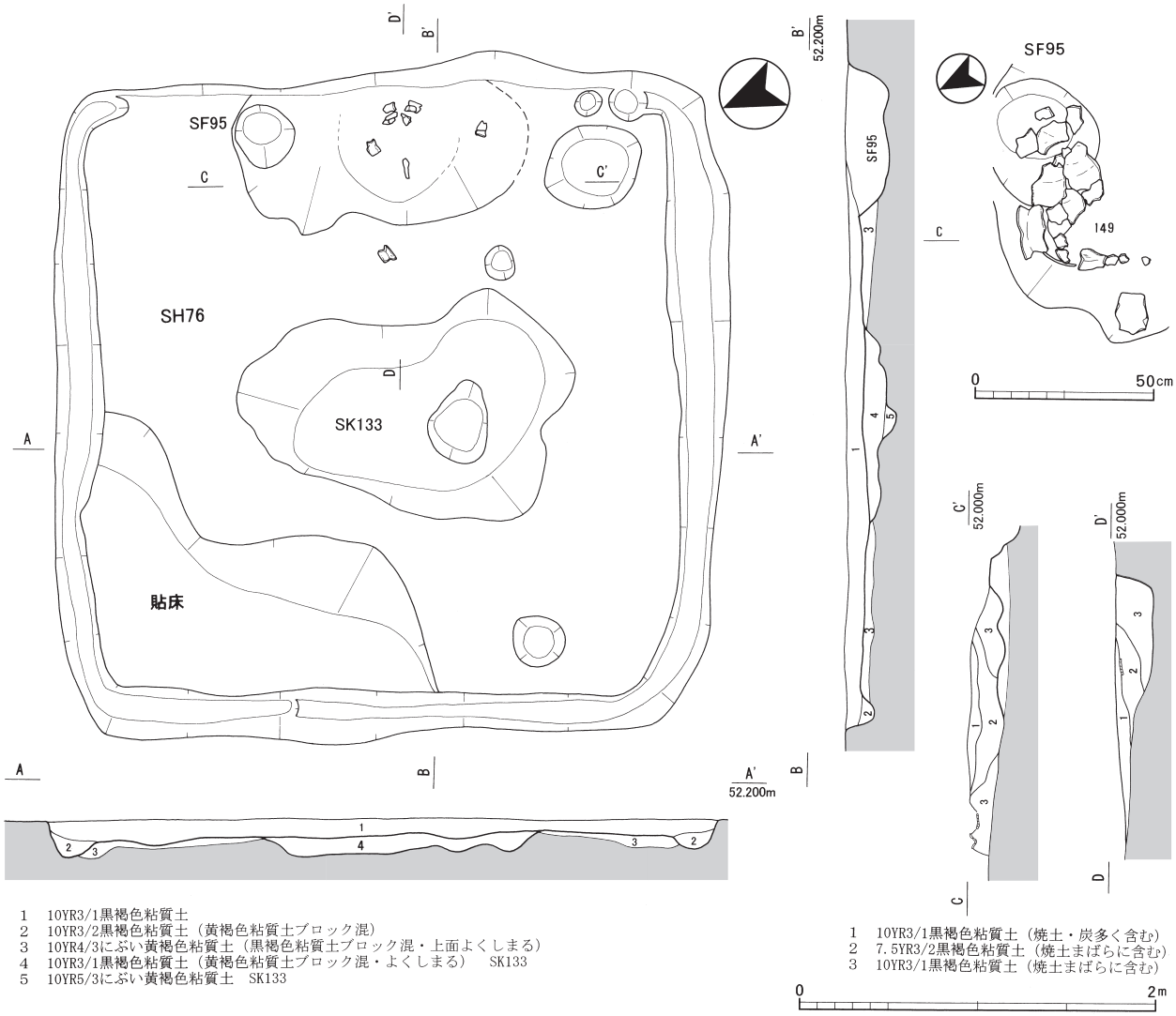


第 34 図　ＳＨ 73、ＳＦ 124、ＳＫ 125 ～ 127・130 実測図（1:40）

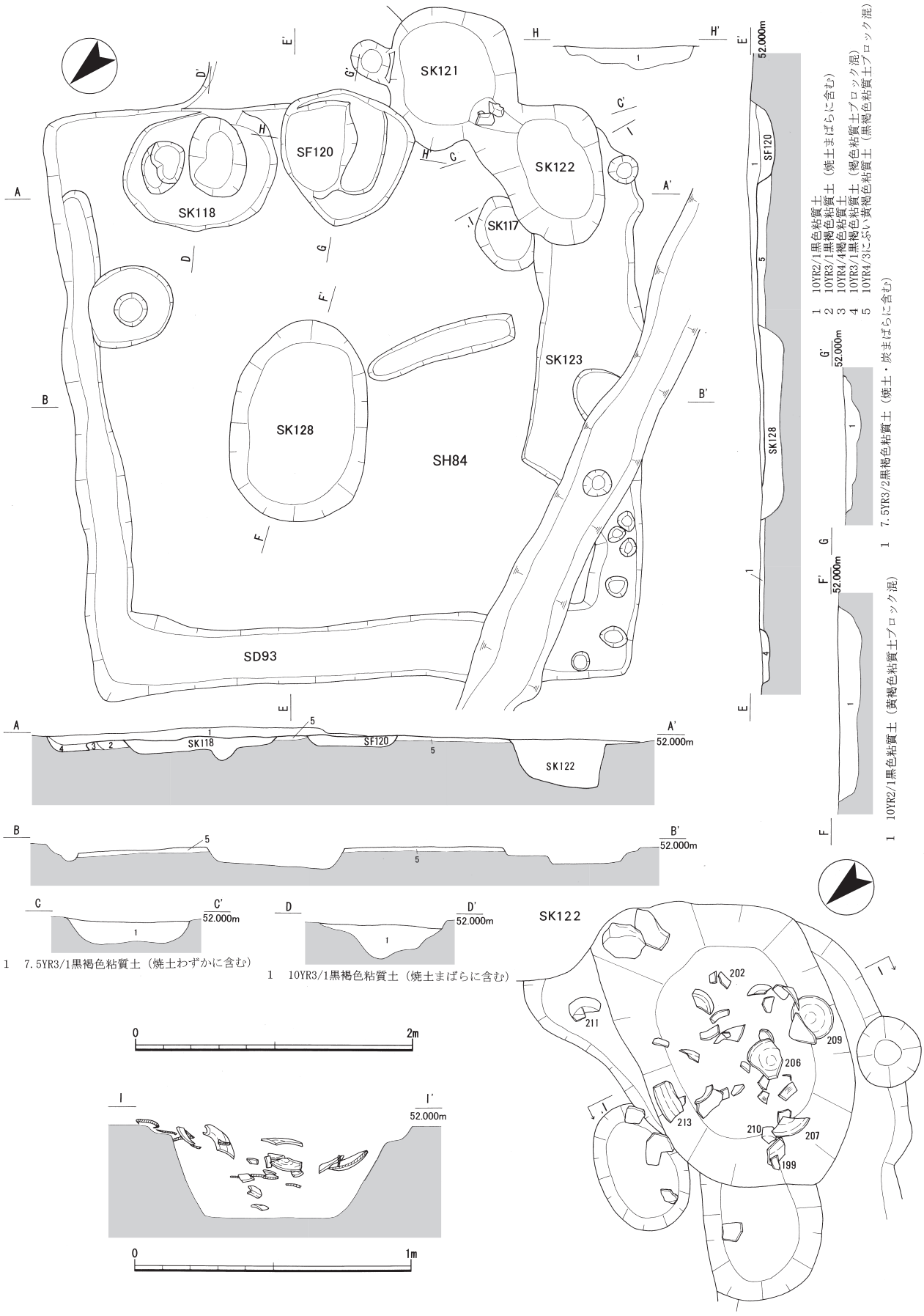
ドが想定される。ただし、焼土は東辺ちかくにもあり、この意味は不明である。主柱穴は検出できなかったが、北東隅で貯蔵穴を検出した。一辺１～0.9ｍの隅丸長方形を呈し、深さは床面から50cmを測る深いものである。貯蔵穴西側が幅60cmの帯状に床面が盛り上がる。高さは２cm程度の僅かなもので、地山を掘残して形成される。貯蔵穴の周提帯として意図したものか、偶然のものか判断材料を得ない。（森川）

ＳＨ２２７（第39図）　調査区南部で検出した。一辺5.3ｍの正方形を呈し、今回検出の竪穴住居では大型のものである。残存は劣悪で、深さは検出面から10cm程度しかなく、遺物も土師器片が出土しているが、まとまったものはない。四周に周溝が巡るが、北辺中央部は途切れる。この位置で焼土が検出され、住居壁も北側にやや張出すため、カマドの痕跡と考えられる。北東隅では貯蔵穴を検出した。直径1.2～0.9ｍの三角形にちかい楕円形を呈する。深さは床面から30cm以上ある深いもので、埋土の大半は黒色土であるが、底ちかくは褐色系の色調である。主柱穴も検出しているが、西側の２基は直径30cm程度であるが、東側の２基は直径20cm程度で、やや規模に差がある。（森川）

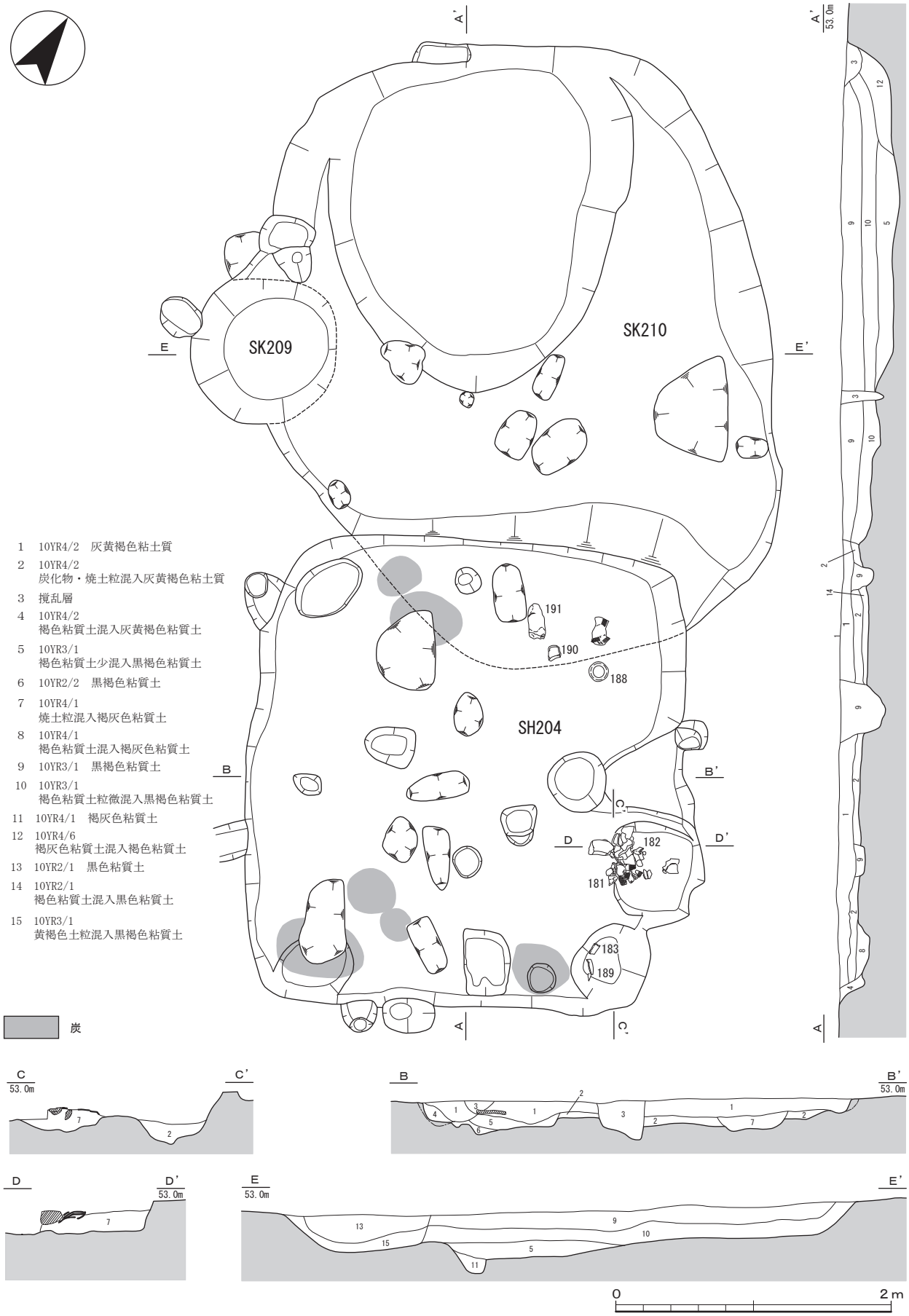
ＳＨ２３０（第41図）　第３次調査区北部で検出した。残存が悪く、周溝のみの検出である。幅20～30cm、深さ10cm未満の溝が四周に巡り、東西5.6ｍ、南北4.7ｍの長方形の竪穴住居を形成する。北辺中央部が不定形な土坑状に窪み、２ヶ所で焼土の集中が見られた。カマドの痕跡と考えられるが、住居外への突出が２ヶ所あり、２基のカマドが重複する状況である。埋土の状況から東側のカマドが後出



第35図　ＳＨ76、ＳＫ133、ＳＦ95実測図（1:40）、**ＳＦ95遺物出土状況図**（1:20）



第36図　ＳＨ84実測図（1:40）、ＳＫ122遺物出土状況図（1:20）

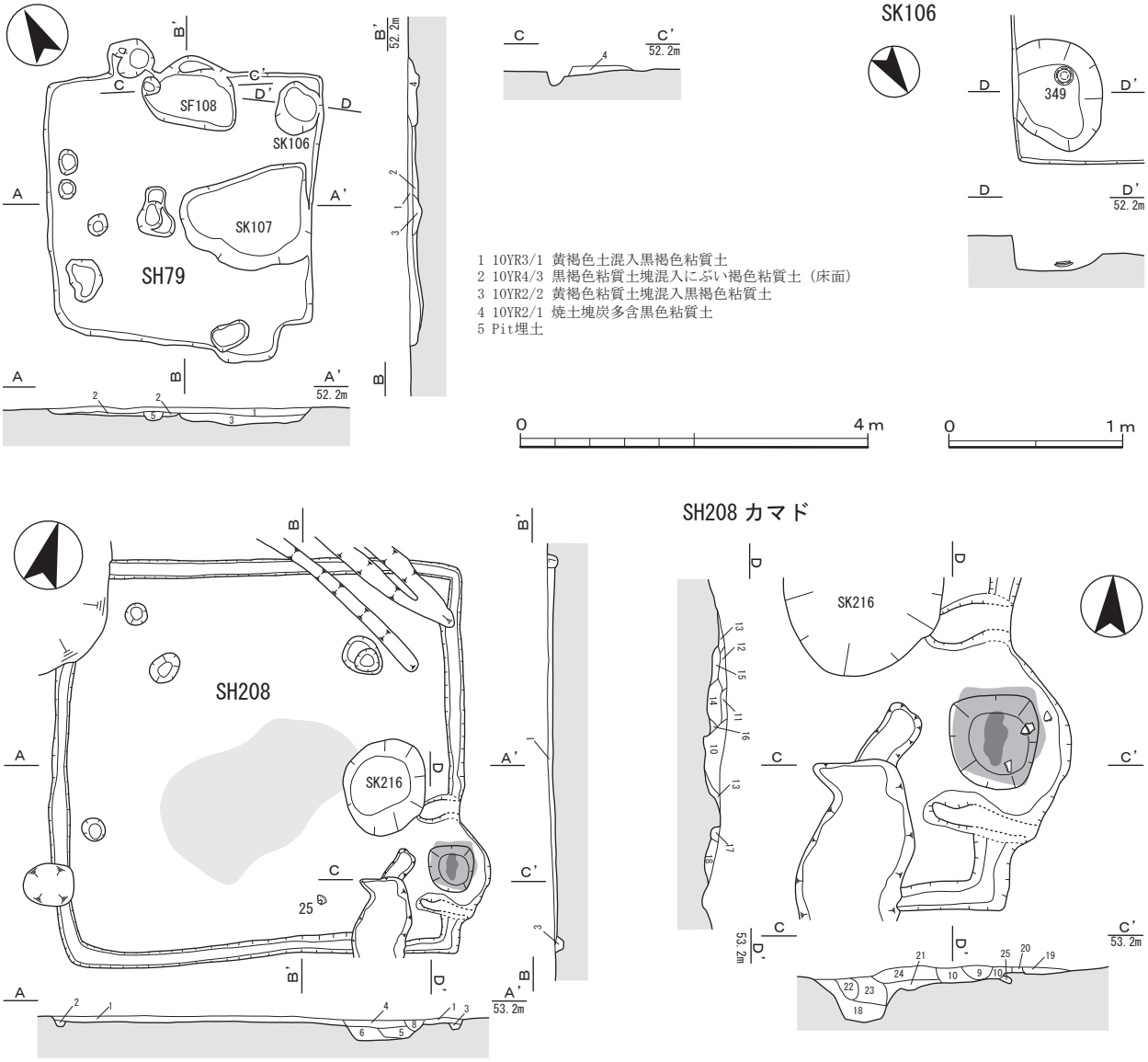


第 37 図　ＳＨ 204、ＳＫ 209・210 実測図（1:40）

と判断できる。これらの他にも２ヶ所で床面が焼土となっているが、その意味は不明である。床面には他にも多数の柱穴状の遺構があるが、主柱穴に想定できるものはない。出土遺物としては、土師器・須恵器の小片（172･173）が出土したに止まる。（森川）

ＳＦ２３２（第 66 図）　調査区中央部で検出した直径 40 ～ 50cmの楕円形に広がる焼土である。焼土西側は検出面がよく締まっており、焼土から土師器長胴甕片も出土していることから、竪穴住居のカマド跡が想定される。周囲には 10cmほどの段差や周溝と想定できそうな小溝があるが、どれも決め手に欠け、さらに周囲は風倒木痕等で大きく撹乱されていることもあり、竪穴住居と確定できなかった。（森川）

ＳＦ２３３（第 66 図）　調査区中央部で検出した。直径 60 ～ 70cmの楕円形に広がる焼土で、さらに西側に 25cm離れて 20cmほどの焼土と長胴甕片を



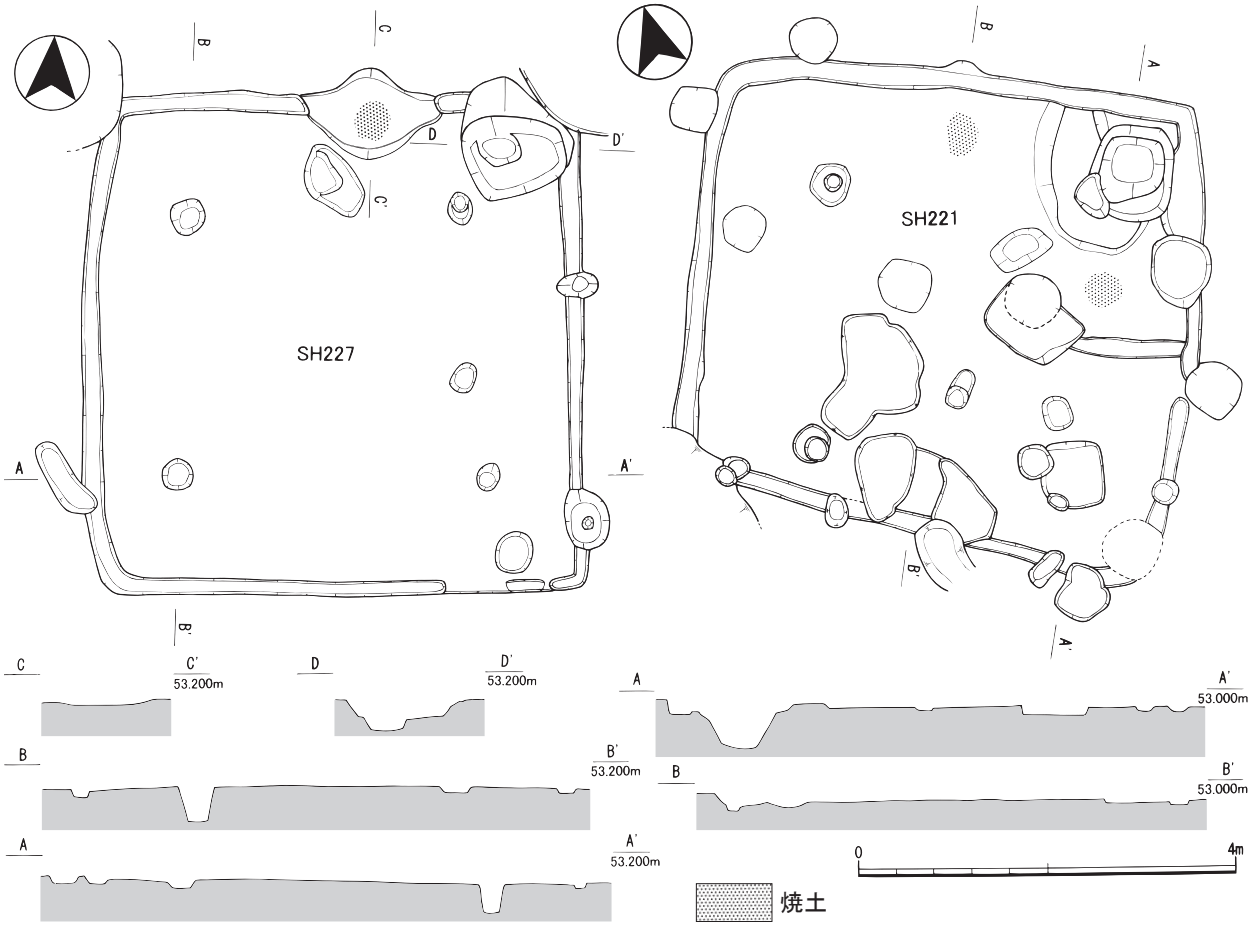
第 38 図　ＳＨ 79･208、ＳＦ 108、ＳＫ 106･107･216 実測図（1:80）**、ＳＫ 106 遺物出土状況、ＳＨ 208 カマド実測図**（1:40）

検出している。西側に離れた焼土と長胴甕片は風倒木痕上に位置し、原位置を保っていない可能性もあるが、不明確ながら風倒木痕が先行するものと考えている。カマドの痕跡と想定し、竪穴住居の検出に努めたが、風倒木痕との重複もあり明確でない。住居の北辺を検出したかに思えたが明確でなく、遺構と認定できなかった。ただし、その延長上で竪穴住居の周溝を思わせる小溝が南へ向けて2.4ｍ南下し、別遺構に切られる。しかし、ＳＦ233に対応できそうな小溝はこれのみで、竪穴住居と断定できず、ここでは焼土と報告するに止める。（森川）

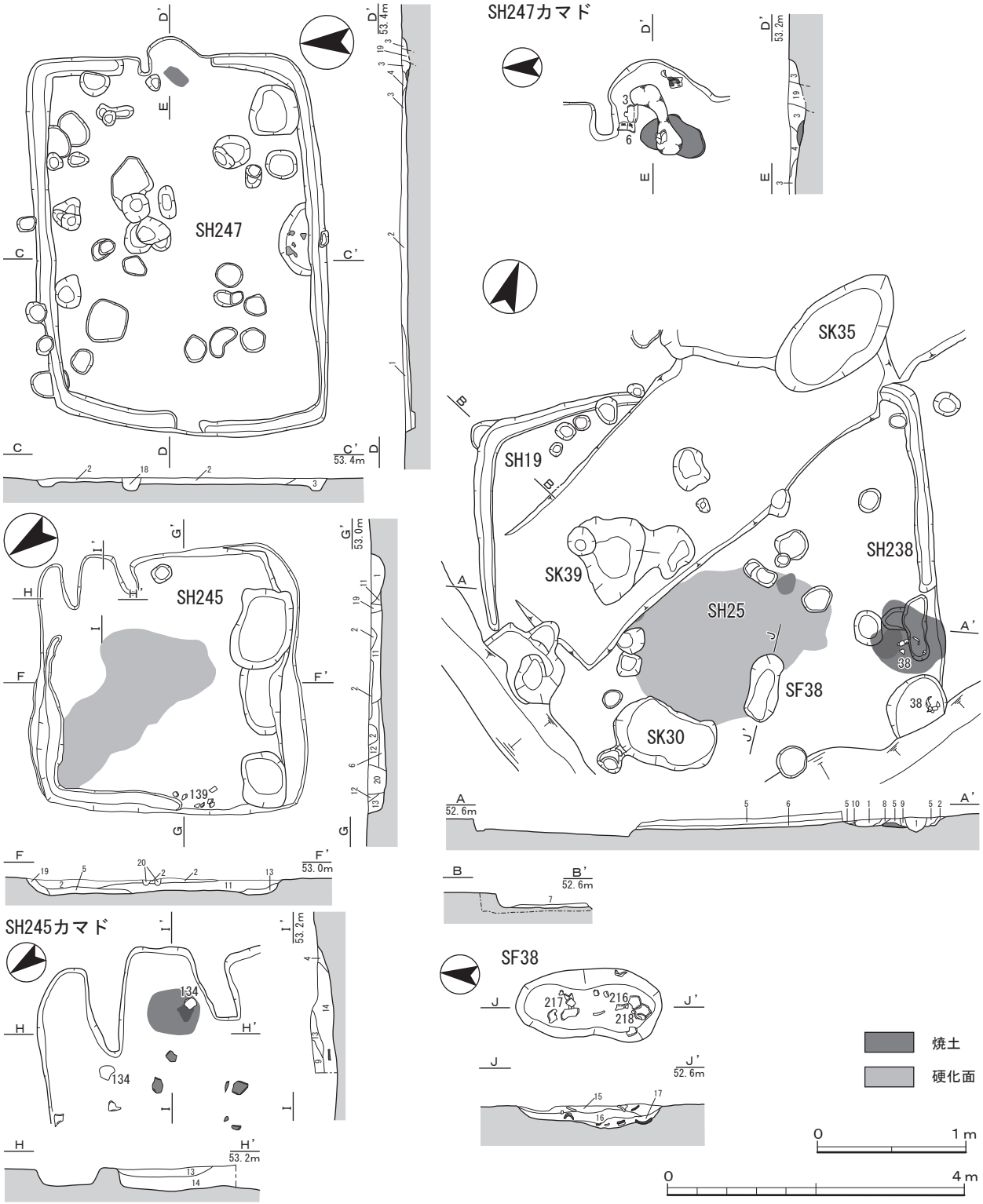
ＳＦ２３５（第66図）　調査区中央部で検出した直径50～60㎝の楕円形に広がる焼土である。焼土を北辺付近に含む形で3.6ｍ×2.8ｍの長円形の落ち込みがある。落差は10㎝未満の浅いものであるが、他の竪穴住居と同様な遺物も出土している。しかし、他の竪穴住居に普遍的にみられる周溝や主柱穴が検出できなかったことから、その可能性を示すに止める。（森川）

ＳＦ２４３（第66図）　調査区中央部で検出した直径10～20㎝の楕円形に広がる焼土である。焼土下は小穴状となり、検出面から深さ6㎝に焼土が充満している。小片ではあるが長胴甕片が出土しており、カマドの痕跡が想定されることから竪穴住居の検出に努めた。この焼土から南へ延びる竪穴住居の東辺や南西隅の周溝を検出したかに思えたが、明確でなく、遺構とすることができなかった。主柱穴に相当するものもなく、竪穴住居と断定できなかった。（森川）

ＳＨ２４５（第40図）　調査区南端付近で検出した。一辺3.5ｍ前後の方形を呈する小型の住居である。埋土に黄褐色土が多く混入し、撹乱を疑う埋土の状況で、風倒木による撹乱も多かった。しかし、掘削の結果、カマド跡が確認できたため、竪穴住居と判断できた。カマドは他のものとは逆の南側にあり、かなり隅にちかい位置に設置されている。両袖の基底部が残存するが、内面に焼土は確認できない。燃焼室床においても、弱く焼土となる程度で、カマ

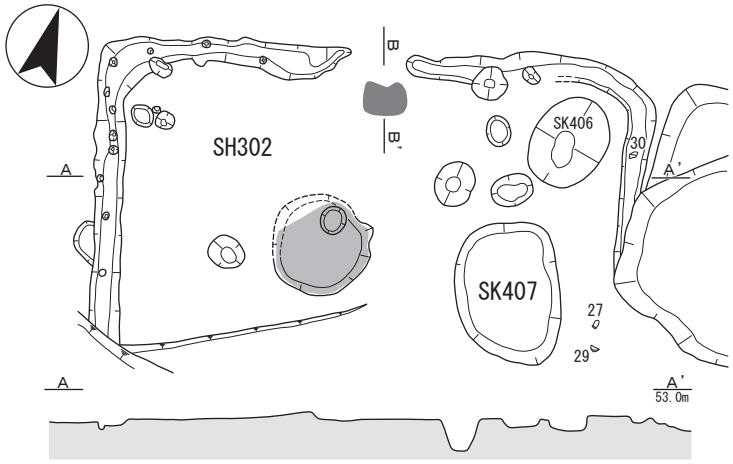


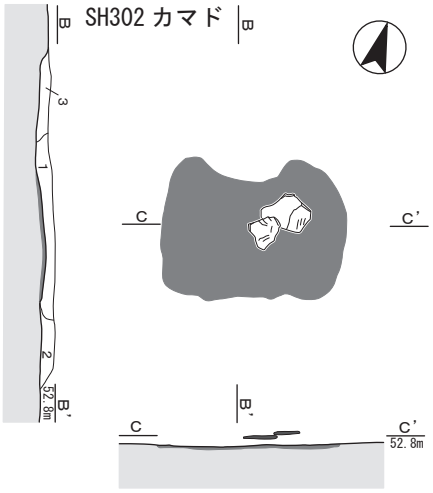
第39図　ＳＨ221・227実測図（1:80）



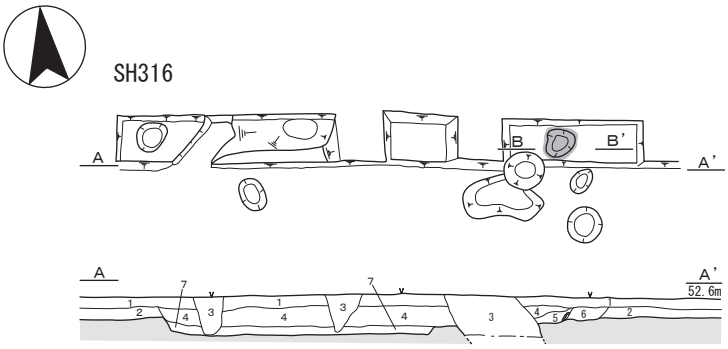
1　7.5YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊少々含）
2　7.5YR3/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊含）
3　7.5YR3/3　暗褐色粘質土（焼土塊黄褐色土塊含）
4　7.5YR3/3　暗褐色粘質土（焼土塊炭化物多含）
5　10YR3/1　黒褐色粘質土
6　7.5YR5/6　明褐色粘質土（床面・固く締まる）
7　7.5YR4/3　褐色粘質土（床面）
8　7.5YR4/4　褐色粘質土（焼土塊多含）
9　7.5YR3/1　黒褐色粘質土（焼土・黄褐色土塊多含）
10　10YR3/1　黒褐色粘質土（黄褐色土塊少量含）
11　7.5YR3/3　暗褐色粘質土（黒褐色土・黄褐色土塊多含）
12　7.5YR4/2　灰褐色粘質土（黄褐色土塊多含）
13　7.5YR3/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊多含）
14　7.5YR3/2　黒褐色粘質土（焼土・黄褐色土塊少量含）
15　7.5YR3/1　黒褐色粘質土（焼土・炭を多く含む）
16　2.5Y7/4　浅黄色粘質土
17　10YR3/2　黒褐色粘質土（焼土・炭をまばらに含む）
18　Ｐit埋土
19　根
20　撹乱

第40図　ＳＨ19・25・238・245・247、ＳＫ30・35実測図（1:80）、ＳＨ245・247カマド、ＳＦ38遺物出土状況図（1:40）

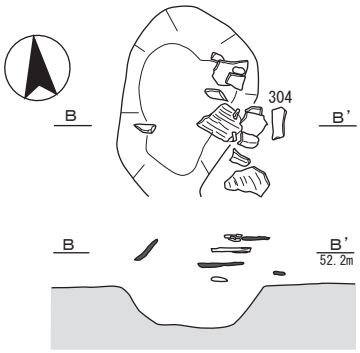




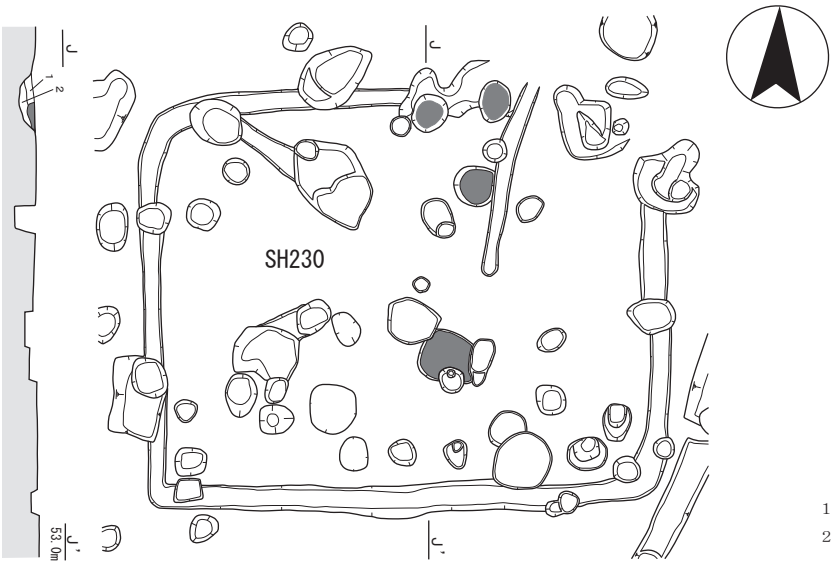
1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に焼土塊を多く含む
2　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土塊が混じる
3　10YR3/1　黒褐色粘質土に焼土粒が少量混じる



1　10YR5/1 褐灰色砂質土(表土)
2　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
3　竹根による撹乱
4　10YR4/3 焼土粒微混にぶい黄褐色粘質土(SH316埋土)
5　10YR4/3 焼土粒多含にぶい黄褐色粘質土(SH316埋土)
6　10YR3/2 黒褐色粘質土(SH316埋土)
7　10YR3/3 黄褐色土粒混入暗褐色粘質土



0　4m　　0　1m



焼土

焼土塊

1　7.5YR3/1　黒褐色粘質土（焼土・黄褐色土塊 多含）
2　7.5YR2/1　黒褐色粘質土（焼土・黄褐色土塊 含）

第 41 図　ＳＨ 230・302・316、ＳＫ 406・407 実測図(1:80)、ＳＨ 302 カマド・ＳＨ 316 遺物出土状況図（1:20）

ド付近に焼土塊が散乱する。北西壁から北東壁にかけて周溝が残存していた。南西壁に沿って径１ｍほどの土坑が２基あるが、深さが20㎝未満のため両者とも貯蔵穴とは考えられない。なお、住居中央は床面が硬化している。出土遺物は、土師器甕（134）がカマド付近から出土した他に、反対側の北西辺付近では製塩土器の小片（139）が散乱していた。接合の結果、製塩土器としては完形近くまで復元でき、本来は、完形のまま埋没した可能性もある。（森川）

ＳＨ２４７（第40図）　調査区南部で検出した。南北約４ｍ、東西約５ｍの長方形を呈する。東辺中央部にカマドを設ける。カマドは左側袖の基底部のみが残存していた。燃焼室床は焼土となっており、周辺埋土にも焼土塊を含む。土師器甕（３）と移動式カマド（６）と思われる小片が散在しているが、支柱石等は検出されなかった。四周に幅20㎝ほどの周溝が巡るが、カマド直下は明確でなく、反対側の西辺中央では幅30㎝ほど途切れる。この意味は不明であるが、入り口の位置を表すものかも知れない。南東隅に直径約50㎝、深さ約35㎝の不整円形の土坑があり、貯蔵穴と考えられる。また、南辺中央部でも同様な土坑があるが、深さは床面から20㎝足らずと浅く、底から焼土粒や炭化物が出土した。なお、床面には多数の柱穴状の遺構があるが、主柱穴に想定できるものはない。（森川）

ＳＨ３０２（第41図）　調査区北東部に位置する竪穴住居で、第５次調査区と第６次調査区にまたがって検出された。わずかに残った埋土と壁周溝により検出したが、南側は周溝さえも確認できなかった。平面形は方形ないし長方形を呈し、東西長は5.1ｍ、南北長は3.5ｍ残存した。北面中央でカマドを、北東隅で貯蔵穴（ＳＫ406）を検出した。また、主柱穴と思われる小穴を１基検出した。床面から土師器甕の口縁部（27）と砥石（30）が出土した。また、竪床面中央で焼土粒が混じる範囲を長径20㎝の楕円状に検出した。土坑と考えて掘削したが明確な段差は存在せず、焼土混じりの埋土が竪穴床面の下層にゆるやかに広がった。この点からこの土坑は人為的なものではなく自然地形の落ち込みであり、築造時に焼土粒の混じった土で整地したものと考えた。

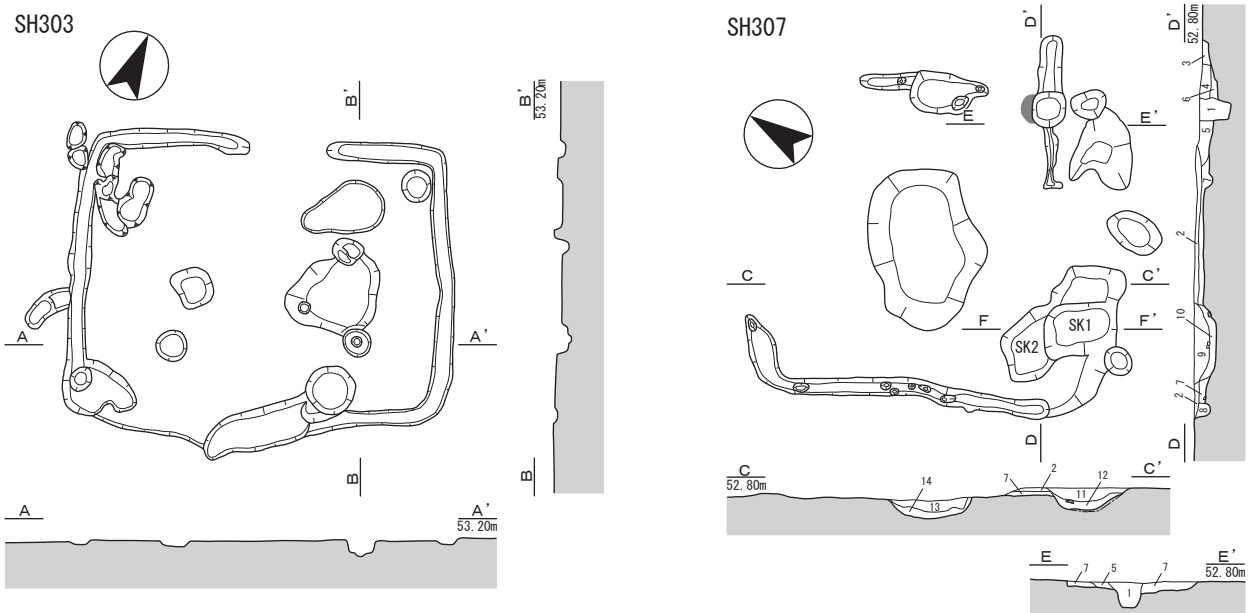
カマドは50～30㎝の楕円状に焼土を残すのみで、焼土塊を含むにぶい黄褐色粘質土に覆われていた。なお、カマドの部分で周溝は途切れている。

ＳＫ406は既述したようにＳＨ302の北東隅で検出し、貯蔵穴と判断した。径１ｍ～80㎝の楕円形を呈し、壁面は擂鉢状に傾斜し、25㎝ほどで底に至る。椀と考えられる土師器片が出土したのみである。（宮﨑）

ＳＨ３０３（第42図）　調査区東部の住居群西端に位置する竪穴住居である。削平が著しかったが、わずかに残った埋土から、平面形は東西が若干長い長方形で東西長約4.1ｍ、南北長約３ｍであることが確認できた。壁周溝の残存深は、竪穴住居北辺では床面から約10cmほどであるが、南に向かって徐々に浅くなり、南辺では約４㎝しかなく、南辺の西半は残存しなかった。竪穴内部の主柱穴想定位置で小穴が２基確認された。竪穴住居の床面から小穴の底面までの深さは、東側の小穴は約1.5㎝、西側の小穴に至っては約0.5㎝ときわめて浅く、主柱穴ではないと考えられる。北面に焼土粒混じりの埋土が確認されたことから、この位置にカマドが存在した可能性があるが、詳細は不明である。なお、この部分で周溝は途切れている。（宮﨑）

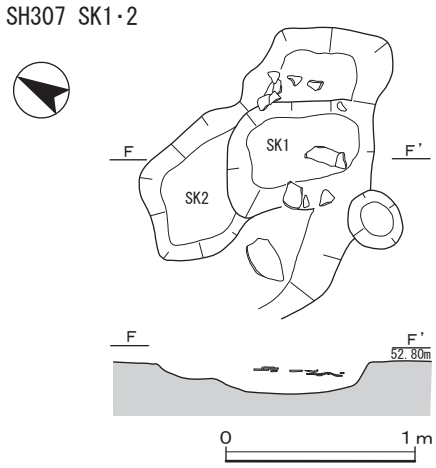
ＳＨ３０７（第42図）　調査区東部で検出した。わずかに残った埋土から東西長約4.1ｍ南北長約3.5ｍの竪穴住居であることが確認できた。壁周溝は西隅から南西辺にかけて約3.5ｍ、北東辺で約0.6ｍ確認できた。残存深は２～５㎝で、北東辺は若干浅い。東隅に貯蔵穴を確認した。また貯蔵穴との位置関係により、貯蔵穴北の埋土に焼土粒の混じる窪みをカマドとした。僅かに焼土面も残り、東に延びる小溝は煙道の痕跡かも知れない。なお、土師器・須恵器の甕片が比較的多く出土した南隅土坑群ＳＫ１とＳＫ２についても貯蔵穴を疑ったが、土層観察により竪穴住居より新しく、これには伴わないものであると判断した。住居中央の土坑については上部を一次調査坑により削平されており、竪穴住居との新旧に関する情報は得られなかった。（宮﨑）

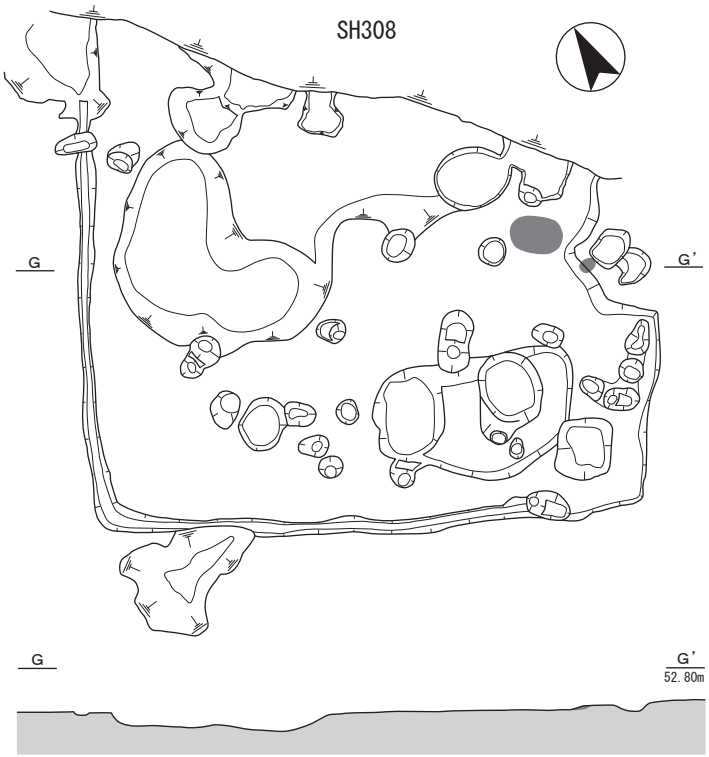
ＳＨ３０８（第42図）　調査区東部に位置する竪穴住居である。北面を近現代の溝によって撹乱されているため全形は明らかではないが、わずかに残った埋土から、東西幅は約6.1ｍであり、南北幅は約5.4

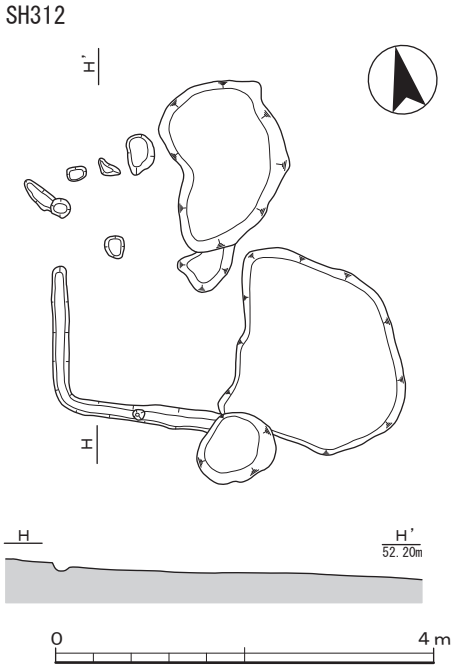


1　10YR2/2 黒色粘質土に５㎜～１㎝の焼土粒混じる（ピット）
2　10YR4/2 灰褐色粘質土
3　10YR5/2 灰褐色粘質土
4　10YR3/1 黒褐色粘質土に５㎜の焼土粒が少し混じる
5　10YR3/2 黒褐色粘質土に５㎜～１㎝の焼土粒が多く混じる
6　10YR3/1 黒褐色粘質土に黄褐色土塊が混じる
7　10YR4/2 灰褐色粘質土に黄褐色土塊が混じる
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に灰褐色土がまだらに混じる（周溝）
9　10YR2/1 黒色粘質土
10　10YR4/1 褐灰色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる
11　10YR2/2 黒褐色粘質土に５㎜の焼土粒がごく少量混じる
12　10YR5/6 明褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる
13　10YR3/1 黒褐色粘質土
14　10YR3/1 黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる

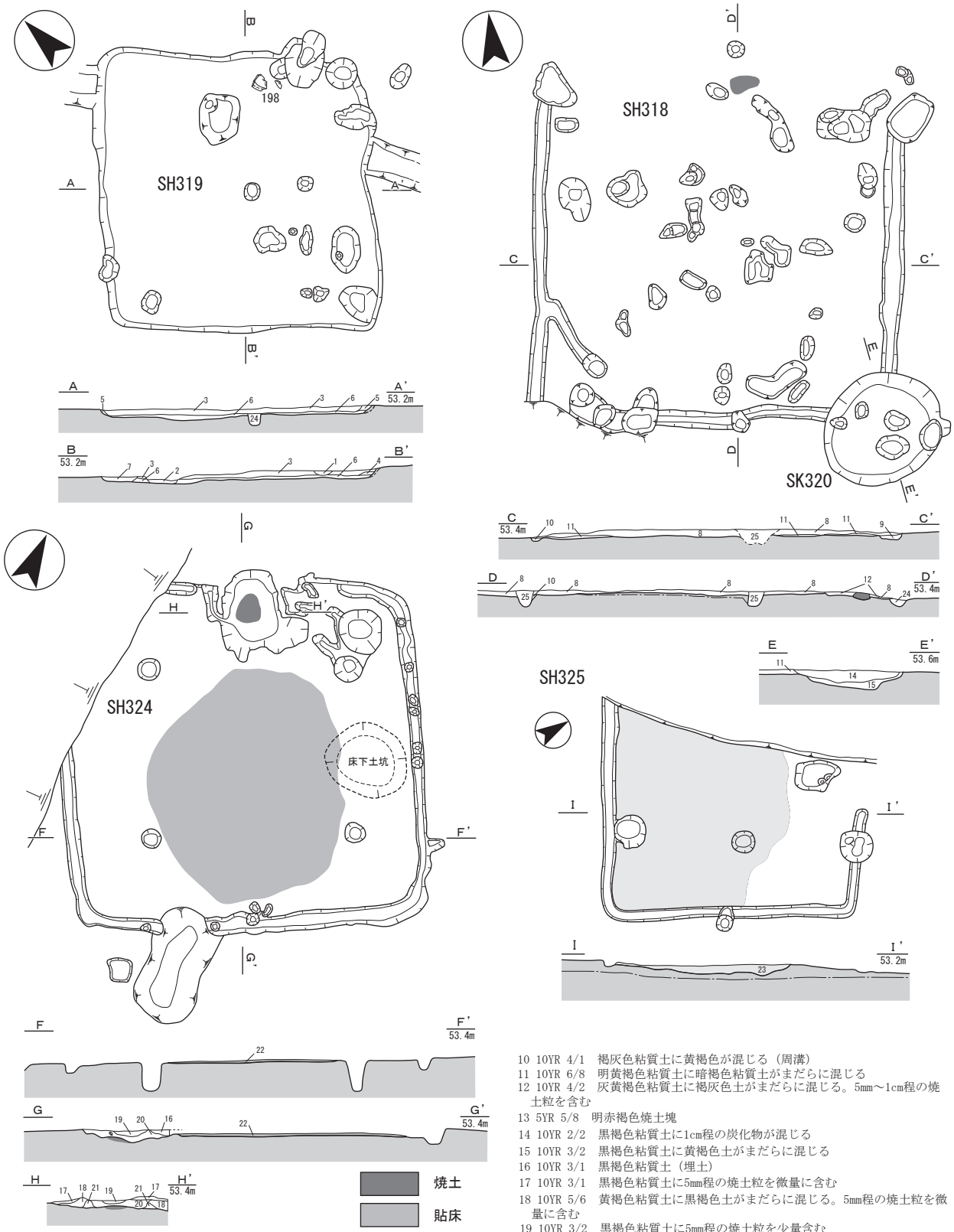
焼土







第 42 図　ＳＨ 303・307・308・312 実測図（1:80）、ＳＨ 307 遺物出土状況図（1:40）

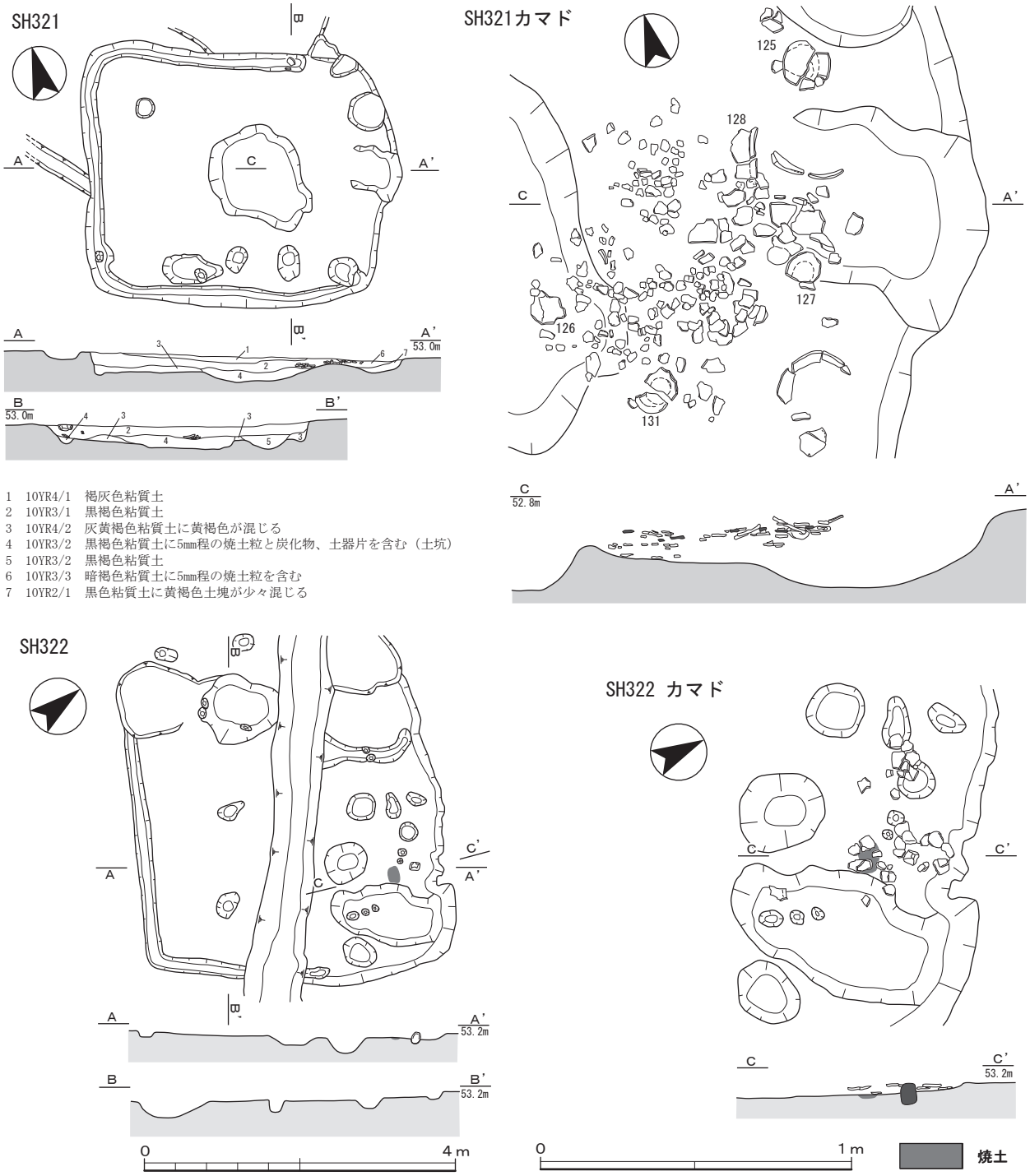


1 10YR 4/1　褐灰色粘質土
2 10YR 6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土が混じる（撹乱溝）
3 10YR 3/1　黒褐色粘質土（SH319埋土）
4 10YR 4/2　灰黄褐色土
5 10YR 4/2　灰黄褐色土に黄褐色土がまだらに混じる
6 10YR 5/6　黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる
7 10YR 4/3　にぶい黄褐色粘質土に焼土粒を多く含む（カマドに由来する埋土）
8 10YR 3/2　黒褐色粘質土に細粒砂が混じり、非常に硬くしまる（コンクリート塊やプラスチックが混入）
9 10YR 4/1　褐灰色粘質土に黄褐色が少量混じる（周溝）
10 10YR 4/1　褐灰色粘質土に黄褐色が混じる（周溝）
11 10YR 6/8　明黄褐色粘質土に暗褐色粘質土がまだらに混じる
12 10YR 4/2　灰黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じる。5mm～1cm程の焼土粒を含む
13 5YR 5/8　明赤褐色焼土塊
14 10YR 2/2　黒褐色粘質土に1cm程の炭化物が混じる
15 10YR 3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる
16 10YR 3/1　黒褐色粘質土（埋土）
17 10YR 3/1　黒褐色粘質土に5mm程の焼土粒を微量に含む
18 10YR 5/6　黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる。5mm程の焼土粒を微量に含む
19 10YR 3/2　黒褐色粘質土に5mm程の焼土粒を少量含む
20 10YR 4/2　灰黄褐色粘質土に2～3cm程の焼土塊を含む
21 10YR 5/8　黄褐色粘質土に褐灰色土が多く混じる（カマドのソデ）
22 10YR 6/6　明黄褐色粘質土に褐灰色土が混じり、非常に固くしまる（貼床）
23 10YR 4/1　褐灰色粘質土に黒褐色土塊と黄褐色土塊がまだらに混じる（竪穴住居床面の整地土）
24 Ｐit埋土
25 根

第43図　ＳＨ318・319・324・325、ＳＫ320実測図（1:80）

m以上であることが確認できた。壁周溝が南辺で4.5m、西辺で４m残存した。壁周溝の検出面からの残存深は一様ではなく、竪穴住居の床面から２～10cmである。また南東辺に焼土が確認されたので、カマドの痕跡とした。（宮﨑）

ＳＨ３１２（第42図） 調査区北東端ちかくに位置する竪穴住居である。埋土はほとんど残存しなかったが、かろうじて削平をまぬがれた住居の南西隅のみが検出された。壁周溝も南北方向に約1.5m、東西方向に約1.9m残存した。壁周溝の残存深はおしなべて約５cmであったが、南西隅は約７cmと深くなっている。残存が劣悪なこともあり、遺物の出土はなかった。（宮﨑）



第44図 ＳＨ321・322実測図（1:80）、ＳＨ321・322カマド遺物出土状況図（1:20）

ＳＨ３１６（第41図）　調査区北端の北壁土層の観察により発見した。断面観察から、土層７上面は竹根の影響を著しく受けており確定は難しいものの、土層２上面から切り込む土層４を埋土とする竪穴住居の床面と想定した。調査区を拡張すると、竪穴住居の西壁と考えられる約５㎝の段差を確認した。また、拡張区の東端ちかくで不整円形に広がる土師器甕片（304）と焼土粒の広がりを検出し、この付近にカマドの存在が想定できる。この直下から直径30～50㎝の長円形で深さ15㎝の土坑を検出した。その位置からカマドとの関連が想定されるが、土坑埋土に焼土粒や土器片が落ち込む様子はなく、土坑自体も焼けていない。したがって、竪穴住居のカマドに伴うものと積極的に判断する根拠はなく、場合によっては竪穴住居より古い遺構が偶然に重複した可能性も残る。事業地の関係から僅かの拡張しか行えず、竹根等による撹乱も多いことから確証が得られない部分も多いが、ここでは竪穴住居として報告しておく。（宮﨑）

ＳＨ３１８（第43図）　調査区東部の住居群の東端に位置する竪穴住居である。残存状況が悪く壁周溝により平面形が確認できた。床面は撹乱されており、コンクリート片とプラスチックが混入した土層８が竪穴住居上面にあり、竪穴住居の埋土である土層11はわずかしか残存しなかった。竪穴住居北面で焼土塊が残存し、その下部で焼成面が確認できたので、カマドの痕跡とした。北辺の壁周溝はないが、他の３辺の周溝と北面のカマド跡から、平面形は南北5.4ｍ程度、東西約5.2ｍでほぼ正方形にちかいと考えられる。壁周溝の残存深は西辺においては３㎝前後である。南辺は東に向かって徐々に深くなり南東隅では約６㎝になる。東辺は全体的にやや深く約６～８㎝で北に向かって深くなっている。他辺の壁周溝の残存状況も悪くないので、北辺は削平ではなく、元から存在しない可能性もある。壁周溝の埋土は褐灰色粘質土に黄褐色が混じる。竪穴住居の東南隅は土坑ＳＫ320と切り合っているが、検出時の状況と土層観察からＳＫ320の方が新しいと考えられる。（宮﨑）

ＳＨ３１９（第43図）　調査区東部住居群の北東側に位置する竪穴住居である。残存深は２～４㎝で中央部分がやや浅い。平面形は、南北約4.0ｍ、東西約3.8ｍのほぼ正方形である。壁周溝と主柱穴は確認できなかった。北東面に、焼成面は残存しないものの焼土混じりの埋土がまとまって残存する箇所があったことから、この埋土をカマドに伴うものとし、この位置にカマドが存在したと判断した。（宮﨑）

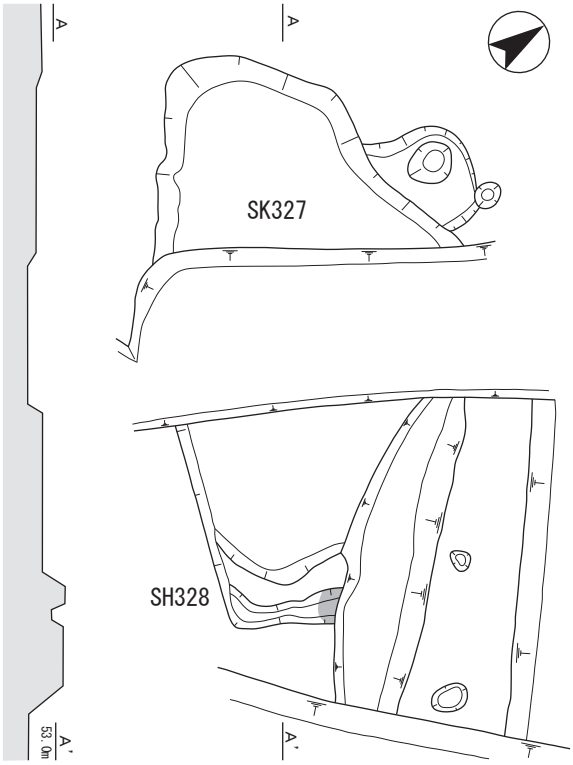
ＳＨ３２１（第44図）　調査区の東端に位置する竪穴住居である。平面形は東西約４ｍ、南北約3.2ｍの長方形である。検出面から床面までの深さは西側で約20㎝、東側では10㎝を測り、西側ほど良好な残存である。西側では埋土は３層に分かれ、最下層は西側にのみ存在する。この層は他の層とは異なり、黄褐色土粒が混じる。これを貼床的な整地層とすれば、この上面で東側とほぼ同じ深さになる。しかし、西側周溝がこの層の下から検出されており、前述した想定は成り立たず、西にやや傾斜した竪穴住居としておく。東壁付近で焼土粒と土器片が直径約１ｍの範囲に集中して出土した。掘削すると、焼成面を確認したのでこれをカマドの痕跡と判断した。焼成面は床をやや掘り窪めて形成されており、支柱石等は残存していない。土器片は焚口手前に分布していることになるが、床面から10㎝程度浮いているものも多く、カマドとの関連は不明である。当初、竪穴住居北東隅の突き出した部分も埋土に焼土が混じることから、カマドと想定し掘削したが、カマドの痕跡は発見できなかった。カマドの造り替えの可能性も考えられるが、確証はない。周溝は北辺、西辺、南辺には存在するが、カマドが位置する東辺にはない。また、壁周溝の残存深は一様ではなく、約1.5～６㎝であった。竪穴住居床面中央で一辺約1.2ｍの不定形の土坑を検出したが、竪穴住居との時期差や、性格を示す材料は得られなかった。（宮﨑）

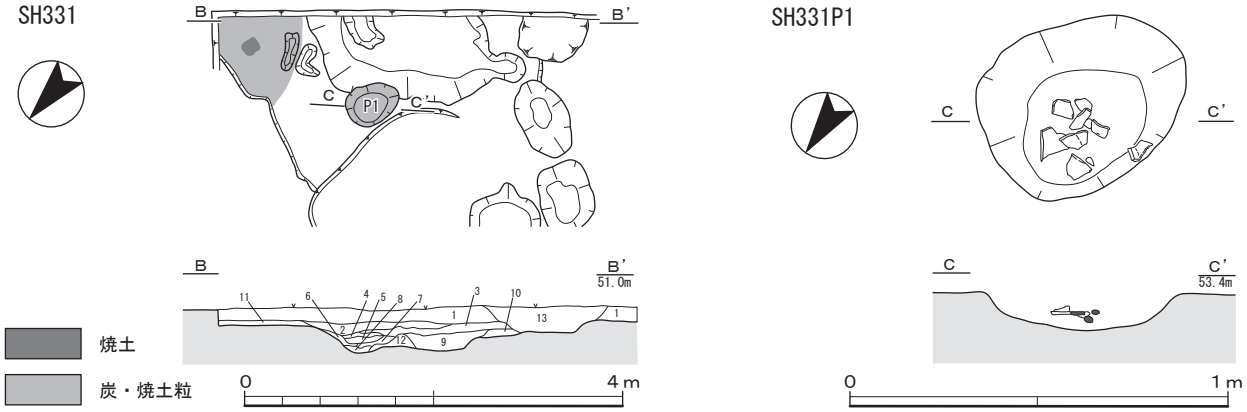
ＳＨ３２２（第44図）　調査区南東端ちかくに位置する竪穴住居である。竪穴住居を後世の溝が縦断している。残存深が平均して５cm程度しかなく、残存状況はよいとは言えないが、一辺約４ｍの方形を呈するものと想定される。南西辺から南隅にかけて壁周溝が確認できた。壁周溝の残存深は３cm前後である。北東辺東寄りの床面から焼成面と支柱石と考えられる石が確認できたことから、この位置にカマドが存在したと思われる。袖は残存しなかった。

また、カマドの東で長径1.6ｍ、短径0.8ｍほどの長円形の土坑を検出した。貯蔵穴としたいところであるが、深さが４㎝ほどしかなく疑問もある。直上や周辺から土師器甕の体部、口縁部や須恵器甕体部等が比較的まとまって出土したが、完形ちかくまで接合できたものはない。（宮﨑）

ＳＨ３２４（第43図） 調査区東部住居群の中央で検出した。北西隅を後世の溝で切られるものの、ほぼ全形が残存し、南北長4.8ｍ、東西長5.0ｍのほぼ正方形を呈することがわかった。壁周溝は深さ８～16㎝で巡るが、南辺中央から南西隅にかけて若干深くなっている。北辺でカマドを検出した。当初、黄褐色土をカマドの袖と考えて掘削したが、黄褐色土の下に褐色土がベルト状に入り込んでいたため、黄褐色土は袖ではなく塊状に混入した可能性を疑った。ところが､断ち割りにより確認したところ、黄褐色土、褐色土ともに固くしまり、自然な埋土ではなく人工的に築造したものと思われた。隣接する中野山遺跡でもカマドの袖が２層になっている類例が確認されており[①]、カマドが複数の土壌により構築されているものと判断した｡さらにカマドの東側、住居の北東隅で径60㎝の土坑を検出し、貯蔵穴とした。主柱穴も４基残存し、柱間は南北2.7ｍ、東西2.4ｍであった。また､中央に長径3.2ｍ､短径2.5ｍの楕円状に貼床を確認した。明黄褐色土に灰褐色土が混じる固く締まった層で、カマドの構築土壌と似る。貼床の厚さは約４㎝である。（宮﨑）

ＳＨ３２５（第43図） 調査区東部住居群の中央で検出した。西辺を後世の溝で切られている。残存状況が悪く本来の床面は現状より上にあったと思われるが、壁周溝により平面形を確認した。南北長約3.5ｍ、東西長3.1ｍ以上であった。壁周溝の残存深は概ね５㎝前後であるが、南東隅では10㎝前後





1　10YR4/1　褐灰色粘質土　5mm程の白砂粒を多く含み、しまりが悪い（表土）
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土に微量の焼土粒と炭化物を含む
4　10YR3/2　黒褐色粘質土
5　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土が微量混じる
6　10YR3/2　黒褐色粘質土に少量の焼土粒、炭化物を含む
7　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土が多量混じる
8　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土が少量混じる
9　10YR3/3　暗褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる。少量の焼土粒と炭化物を含む
10　10YR4/2　灰黄褐色粘質土に黄褐色土が少量混じる
11　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土が多量に混じる。微量の焼土粒を含む(SH331の床面直上の埋土)
12　10YR5/6　黄褐色粘質土に黒褐色土が少量混じる
13　撹乱土

第45図　ＳＨ331・328、ＳＫ327実測図（1:80）**、ＳＨ331P1遺物出土状況図**（1:20）

と深くなっている。住居の南半で床面の整地土と思われる黒褐色土を検出した。地山である明黄褐色土層の窪みを埋めるかたちで広がっている。整地土掘削後、直径約30㎝、深さ約30㎝の小穴を確認したが出土遺物もなく、詳細は不明である。カマドや貯蔵穴は検出できなかった。（宮﨑）

ＳＨ３２８・ＳＫ３２７（第45図）　調査区東部で検出した。後世の溝やＳＫ327により大半を削平されており、南東隅部分の検出に止まる。埋土は殆ど残存せず、南東辺で幅20㎝の周溝が僅かに残る。溝北端の埋土には焼土粒を含んでおり、住居南東辺にカマドを設置していたものと推測する。周溝は南端でやや西に曲がる様相をみせているため、住居の南東隅と想定した。

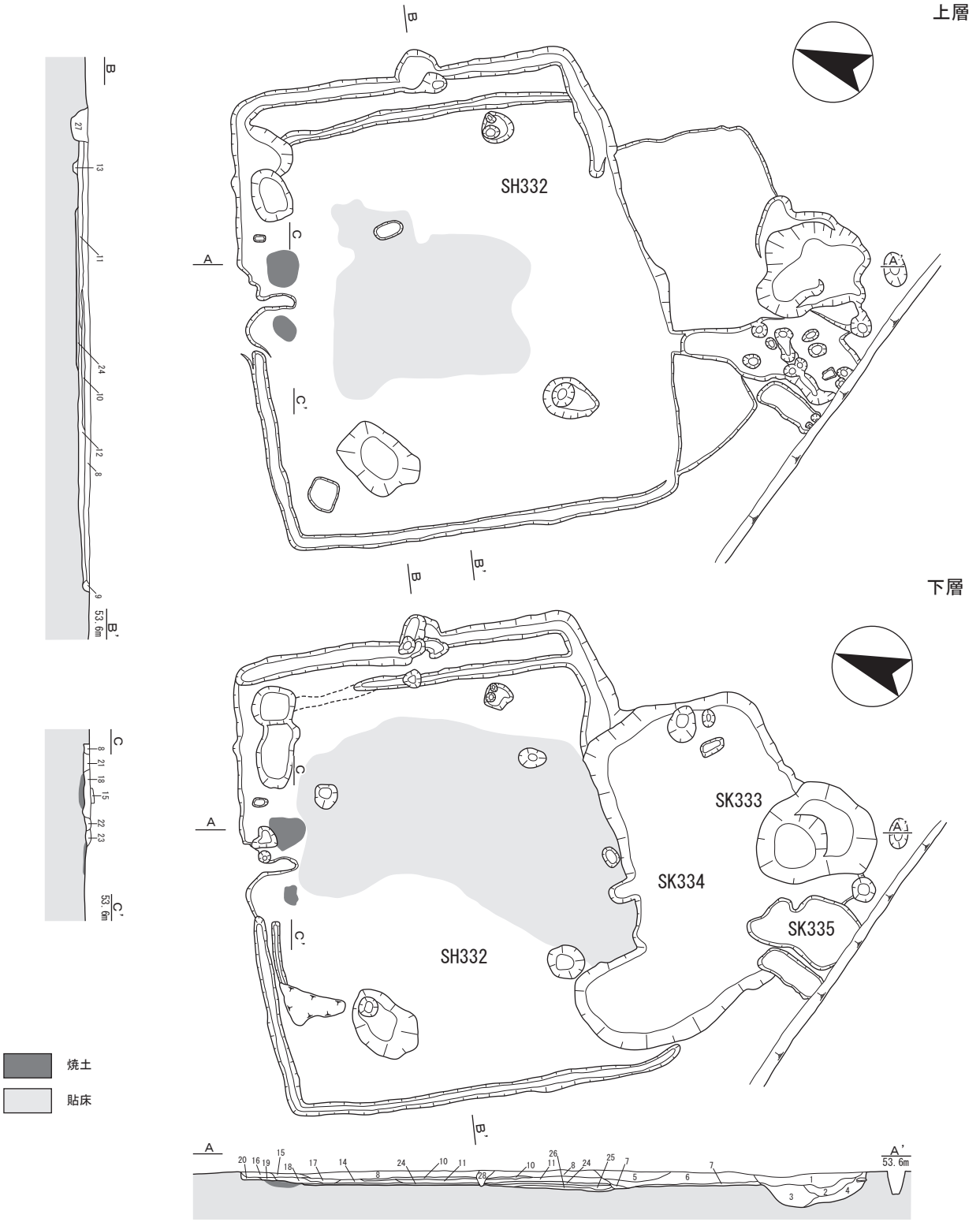
ＳＫ327は、ＳＨ328と重複し、それより後出のものである。埋土は黒褐色でＳＨ328と明らかに異なるものであるが、掘削の結果、深さはＳＨ328より深い。ただし、ＳＨ328と南辺の残存部は一致し、別遺構とするに疑問もある。ＳＫ327の埋土も西側では褐色が強くなり、ＳＨ328と区別が曖昧になる。これと前述した状況を考慮すればＳＫ327の平面形は正確に検出できておらず、ＳＫ327西辺はＳＨ328の西辺を表している可能性もある。ＳＫ327がＳＨ328の南辺から西辺を利用していたとするならば、ＳＨ328は一辺６ｍの竪穴住居とすることも可能である。（宮﨑）

ＳＨ３３１（第45図）　調査区南東隅で検出した。他の竪穴群とはやや離れた位置である。土坑や撹乱により多くの情報は失われていたが、北東壁と考えられる約４cmの段差と、南側にもそれに対応する同様の段差が確認できた。また北東辺にカマドと推測できる焼成面を確認し、その周囲には焼土粒や炭化物が分布している。これにより、土層11を埋土とする床面を想定し、竪穴住居とした。なおＳＨ331内のＰ１はＳＨ331に伴うものではなく後出のものであるが、埋土に焼土粒や炭化物を含む。土師器長胴甕片も比較的まとまって出土したが、接合できるものは僅少であった。これらは、ＳＨ331廃絶後の流入であると考える。（宮﨑）

ＳＨ３３２（第46図）　調査区南端で検出した。検出時点では、西辺が約4.6ｍ、東辺が約5.6ｍで両辺の長さが１ｍ違っていたため、２棟が切り合っている可能性を考慮して掘削を進めた。土層観察から貼床面の下に厚さ４㎝ほどの間層を挿んで貼床と考えられる土層24と壁周溝と考えられる土層13を確認したので、下層にも竪穴住居が存在すると判断し、建て替えがなされているとした。まず、上層住居は、下層住居上に厚さ４㎝ほどの整地により床面を上げ、東側にやや拡張して構築している。中央部の2.4ｍ×２ｍの範囲に貼床が認められ、明黄褐色土の粘質土で固く締まっている。周溝は確認できたが、主柱穴は確認できない。北辺中央にカマドの痕跡と考えられる焼土を検出し、その東側では周溝が明瞭でない。東辺では２条の壁周溝を確認したが、外側の周溝がより明瞭に見えたことと、土層断面の状況から勘案すると、内側の周溝は下層の住居に伴うもので、床面を誤認により下げすぎたため下層住居の壁周溝が検出できたと考える。南辺は東辺から屈曲し1.6ｍほど西進したところで消滅している。しかし本来は、残存深２～６cmで住居をめぐり北辺のカマドの位置で途切れると推測される。以上により、上層住居の規模は西辺約4.6ｍ、東辺約5.6ｍ、南辺・北辺が約6.0ｍとなり、若干台形を呈する。

下層住居については、前述のように東辺に残存深１～５cmの壁周溝を確認した。下層壁周溝東側は極めて浅いため下層埋土掘削後消失したが、本来は住居をめぐっていたものと思われる。住居北辺でも壁周溝の残存を検出したが、上層住居周溝よりやや内側である。南辺はＳＫ334に切られ、西辺は上層周溝が踏襲しているものと考えられる。下層住居東側で貼床を確認した。明黄褐色土に褐色土粒が混入する粘質土で、上層と同様に固く締まっている。この範囲も考慮に入れると、下層住居の規模は南北5.2ｍ、東西5.8ｍの若干長方形を呈するものであったと推測できる。

北辺付近に２つの焼成面が並ぶが、土層観察から袖の痕跡を伴う東側の焼成面を上層のカマドと推定した。西側の焼成面が下層のカマドである確証はないが、上層の竪穴住居は建て替えにより東側に拡張されているので、それに伴ってカマドも東側に建て替えられたと考え、西側の焼成面を下層カマドとした。また、北東隅に貯蔵穴が東西に連なって２基検出されたが、調査時に断面観察を実施していなかっ



1　10YR3/1 黒褐色粘質土　ややしまり弱い
2　10YR4/1 褐灰色粘質土に黄褐色土が微量に混じる
3　10YR2/1 黒色粘質土
4　10YR5/6 黄褐色粘質土に褐灰色土塊がまだらに混じる
5　10YR4/1 褐灰色粘質土
6　10YR2/2 黒褐色粘質土
7　10YR5/6 黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる
8　10YR3/2 黒褐色粘質土
9　10YR4/1 褐灰色粘質土に黄褐色土が混じる（上層周溝）
10　10YR6/8 明黄褐色粘質土　非常に固くしまる（上層貼床）
11　10YR3/1 黒褐色粘質土に2～3cm程の黄褐色土粒が少量混じる（上層整地土）
12　10YR6/8 明黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じる
13　10YR3/2 黒褐色粘質土に黄褐色がまだらに混じる（下層周溝）
14　10YR3/2 黒褐色粘質土に黄褐色土粒がまだらに混じる焼土粒を微量に含む
15　10YR3/3 暗褐色粘質土　焼土粒、炭化物を微量に含む（カマド）
16　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土　焼土粒を微量に含む
17　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土塊がまだらに混じる焼土粒を少量含む
18　10YR3/1　黒褐色粘質土に焼土粒、炭化物を多く含む
19　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に微量に焼土粒を含む
20　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
21　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に黄褐色土粒が混じる焼土粒を少量含む（カマドソデ）
22　10YR5/6　黄褐色粘質土に黒褐色土が混じる（カマド左ソデ）
23　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　焼土粒を微量に含む
24　10YR6/6　明黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じり、非常に固くしまる（下層貼床）
25　10YR5/6　黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じる
26　10YR2/1　黒色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる（下層整地土）
27　Pit埋土
28　根

第46図　ＳＨ332、ＳＫ333・334・335実測図（1:80）

たこともあり、これらが上層の住居に伴うものか下層に伴うものかについての確証は得られなかった。上層掘削時点では東側のものは見えておらず、西側を上層、東側を下層の住居に伴う貯蔵穴としたいところではあるが、住居を東側へ拡張したにもかかわらず、貯蔵穴は西側へ移動したことになり違和感がある。その他、主柱穴と考えられる柱穴を４基確認したがいずれも下層住居床面で検出したことから、これに伴うものと判断した。上層住居に伴うものはない。仮に主柱穴は住居建替に際しても変更はなく、本来上層住居掘削時に確認すべきものとした場合、主柱穴がカマドに近過ぎる懸念がある。また、住居の南側に重複してＳＫ 334 がある。上層住居に先行し、下層住居より後出である。ＳＨ 332 を建て替える間に掘削され、埋没したことになるが、住居との関係等は不明である。（宮﨑）

ＳＨ３３６（第 47 図）　調査区南部に位置する竪穴住居である。平面形は長方形を呈し、東西長約 4.4 m、南北長約 2.8 mである。周溝も存在し、残存深は 10cm 前後である。住居中央に直径約 2.0 ～ 2.4 m の不整円形状に厚さ 2.0cm ほどの貼床を検出した。明黄褐色に灰褐色土が混入する粘質土で非常に固く締まっている。また、北東辺東寄りに焼成面を確認したのでカマドとした。カマドの北側に須恵器甕片や土師器長胴甕片が散在するが、殆ど接合しなかった。住居北側に直径約 1.0 m、深さ約 1.3 mの円形の土坑を確認した。住居床面で検出したが貼床を切っており、ＳＨ 336 より後出のものである。埋土に焼土を含み、土師器長胴甕片（36）が比較的多く出土したが、いずれも上層埋土であり、これらの遺物がＳＨ 336 からの混入とするには疑問がある。（宮﨑）

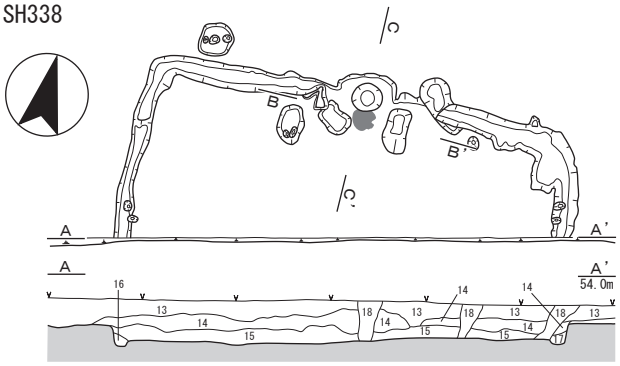
ＳＨ３３８（第 47 図）　調査区南端で検出された竪穴住居である。大半が事業地外にあり、得られた情報は北面周辺のみである。北辺中央にカマドを確認した。木根による撹乱を受けており残存状況はよくないが、焼成面及び西側袖の一部を確認した。カマドの埋土から土師器長胴甕片（320）が出土している。小片が十数個出土したが、接合は殆どできなかった。しかも焼成面から浮いており、カマドとの直接の関連は不明である。検出部分では壁周溝が巡るが、カマド付近で途切れる。残存深は東辺と西辺では 4cm 前後であるが、北辺では 8cm ～ 10cm と深くなっている。東西長が約 4.7 m、南北長は 1.9 m以上である。（宮﨑）

ＳＨ３３９（第 47 図）　調査区南端で検出した竪穴住居である。南隅が事業地外にあるが、概要は調査区内で知ることができた。平面形はほぼ正方形を呈し、東西長約 3.5 m、南北長約 3.7 mである。周溝が巡るが、南西辺の南側から南東辺にかけては途切れている。残存深は一様でないが平均すると５cm 程度である。南東辺の焼土粒を混入した窪みをカマドの痕跡としたが、土坑にこわされており、焼成面も確認できなかったので詳細は不明である。住居中央に直径約 1.3 mの円形状に厚さ 2.0 ～ 4.0cm ほどの貼床が残存した。黄褐色に灰褐色土が若干混入する粘質土で、固く締まっている。また、住居中央の床面から直径約 60㎝、深さ約 20㎝の小土坑を検出したが、貼床を切っており後出のものである。東隅で直径 70 ～ 60㎝の楕円形を検出した。貯蔵穴を想定したが、深さが 10㎝程度しかなく、断定できない。西隅や南東辺でも土坑を検出した。両者とも埋土に焼土や炭を含むが、南東辺のものは後出のものである。西隅のものは住居床面で検出したが、深さ 10㎝程度の浅いもので、住居に伴う窪みの可能性がある。（宮﨑）

ＳＨ３４１・３４７（第 48 図）　調査区南端で検出された竪穴住居である。竪穴住居の南側の大半が事業地外にある。当初、検出状況から２棟の竪穴住居が切り合っているものと考え、ＳＨ 347 がＳＨ 341 に先行するものと判断した。掘削後、両者とも周溝が伴うが、ＳＨ 347 西壁とＳＨ 341 東壁の周溝埋土は黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる同様のもので、周溝幅も両者 20㎝で同じであり、一連の可能性が生じた。さらに、ＳＨ 341 の西壁周溝の幅が 40 ～ 50cm と広いことから、壁周溝でない可能性も疑われた。そうすれば、一辺が約８mの竪穴住居１棟という結果になる。しかし、この規模の飛鳥・奈良時代の住居は北山Ａ遺跡や同じ台地上の中野山遺跡に類例がない[②]ことと、検出時の判断を重視して２棟の切り合いとした。

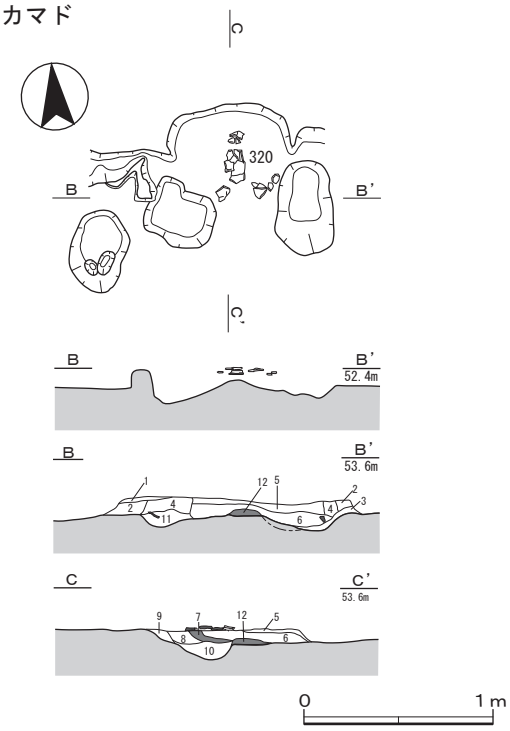
ＳＨ 341 の規模は残存した北辺から東西 6.0 m程度と推測される。かなりの範囲で後世の撹乱を受けていたものの、北辺に確認されたカマド跡には焼成

SH338

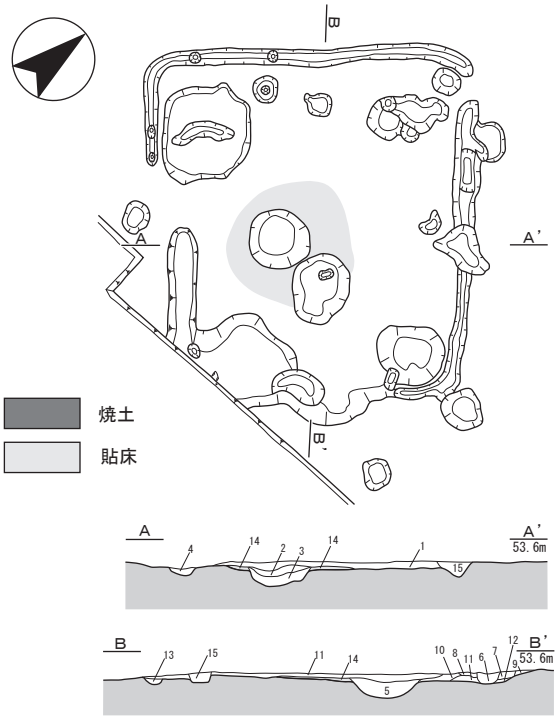


1 10YR4/1　褐灰色粘質土
2 10YR4/1　褐灰色粘質土に黄褐色土が少量混じる
3 10YR3/2　黒褐色粘質土(木根の入り込み)
4 10YR5/6　黄褐色粘質土に褐灰色土が少量混じる(カマドのソデの崩落土)
5 10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土に焼土粒を少量含む
6 10YR4/2　灰黄褐色粘質土に焼土粒、炭化物を多く含む
7 2.5YR5/8　明赤褐色焼土ブロック(崩落土か?)
8 10YR2/2　黒褐色粘質土に焼土粒、炭化物を微量に含む
9 10YR5/2　灰黄褐色粘質土に焼土粒、炭化物を微量に含む
10 10YR3/2　黒褐色粘質土に焼土粒、炭化物を微量に含む
11 10YR3/2　黒褐色粘質土(木根の入り込み)
12 2.5YR5/8　明赤褐色焼土(カマド焼成面)
13 10YR4/2　灰黄褐色粘質土に粗砂が混じり、固くしまる(表土)
14 10YR3/2　黒褐色粘質土
15 10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土粒が混じる、焼土粒を微量に含む
16 10YR2/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる(周溝)
17 10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる(周溝)
18 根

SH338 カマド

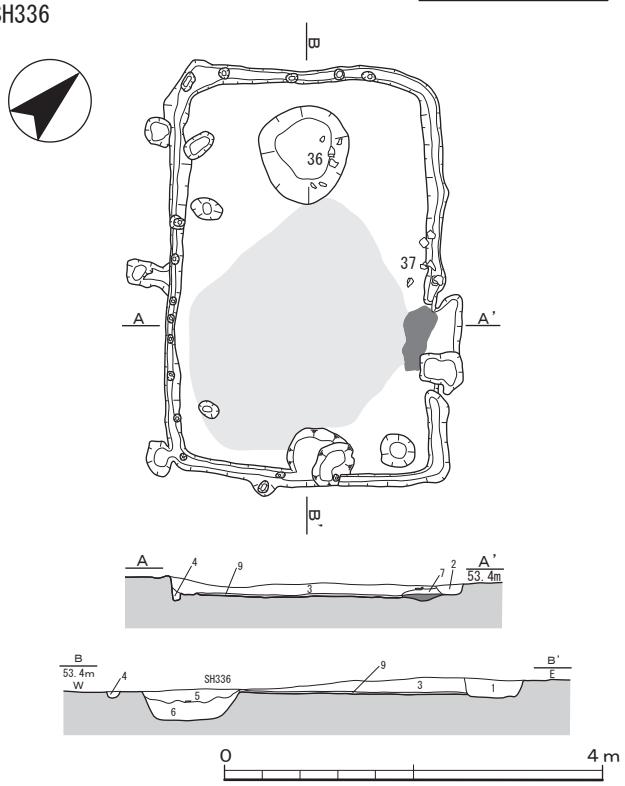


SH339



1 10YR4/1　褐灰色粘質土
2 10YR4/1　褐灰色粘質土に焼土粒・炭化物を少量含む
3 10YR4/1　褐灰色粘質土に焼土粒・炭化物を多量に含む
4 10YR6/6　明黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じる
5 10YR4/1　褐灰色粘質土に焼土粒・炭化物を多量に含む
6 10YR3/1　黒褐色粘質土　焼土粒・炭化物を微量含む
7 10YR4/1　褐灰色粘質土　焼土粒・炭化物を少量含む
8 10YR4/1　褐灰色粘質土　焼土ブロックを多量に含む
9 10YR5/2　灰黄褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる
10 10YR5/1　褐灰色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる
11 10YR3/2　黒褐色粘質土　焼土粒を微量含む
12 10YR5/6　黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じる
13 10YR4/1　褐灰色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる(周溝)
14 10YR6/6　明黄褐色粘質土に褐灰色土が微量混じり、非常に固くしまる(貼床)
15 Pit埋土

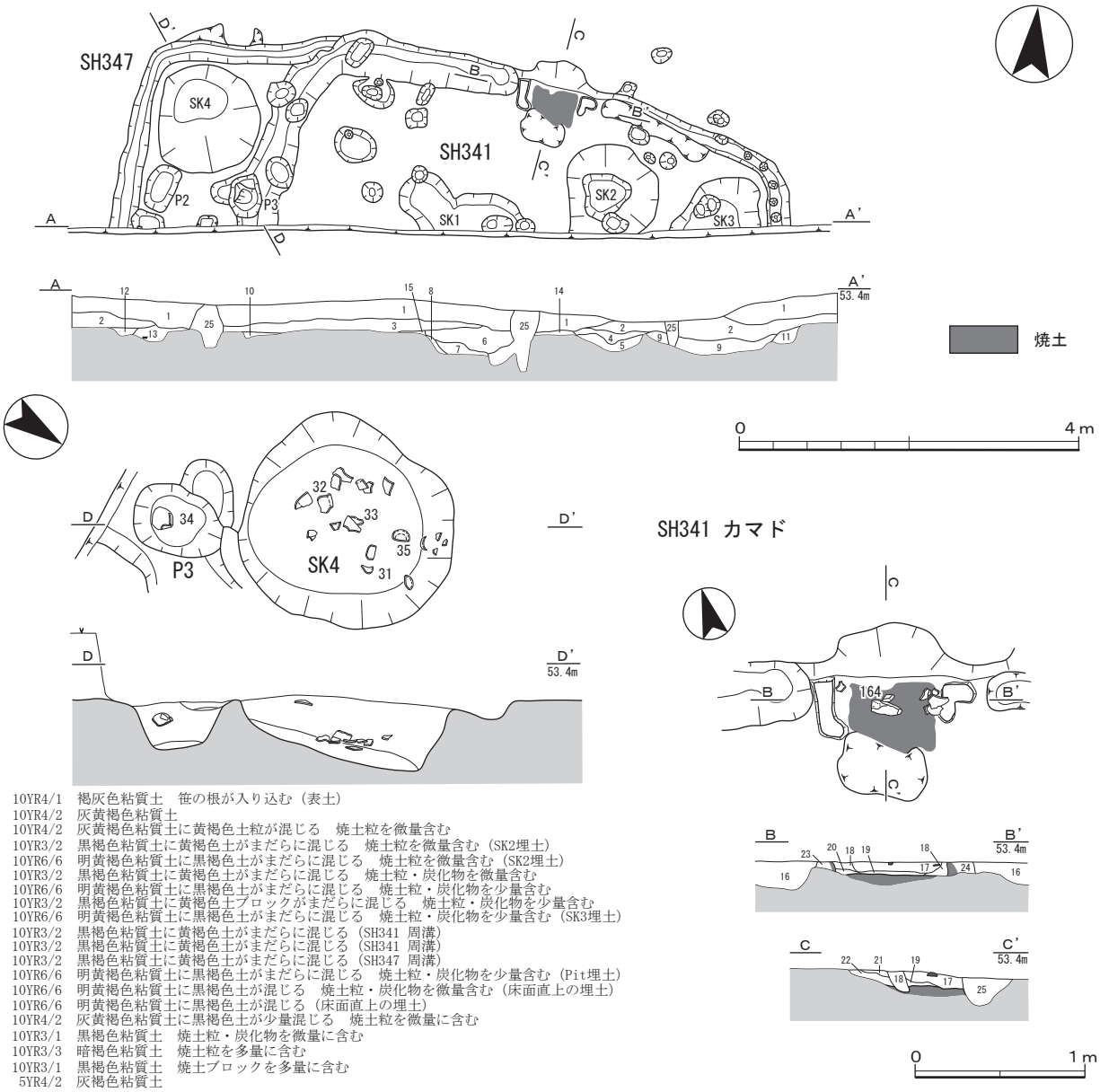
SH336



1 10YR3/1　黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック、2mm程の砂粒がまだらに混じる（撹乱）
2 10YR5/2　灰黄褐色粘質土に焼土粒、炭化物を含む
3 10YR4/1　褐灰色粘質土に黄褐色土と黒褐色土がまだらに混じる
4 10YR4/1　褐灰色粘質土に黄褐色土が少量混じる(周溝)
5 10YR4/2　灰黄褐色粘質土に黄褐色土が多く混じる、微量の焼土粒と炭化物を含む
6 10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土が少し混じる、多量の焼土粒と炭化物含む
7 7.5YR5/2　灰褐色粘質土(カマドの崩落土)
8 5YR5/8　明赤褐色粘質土(カマドの被熱層)
9 10YR6/6　明黄褐色粘質土に褐灰色土がまだらに混じり、非常に固くしまる(貼床)

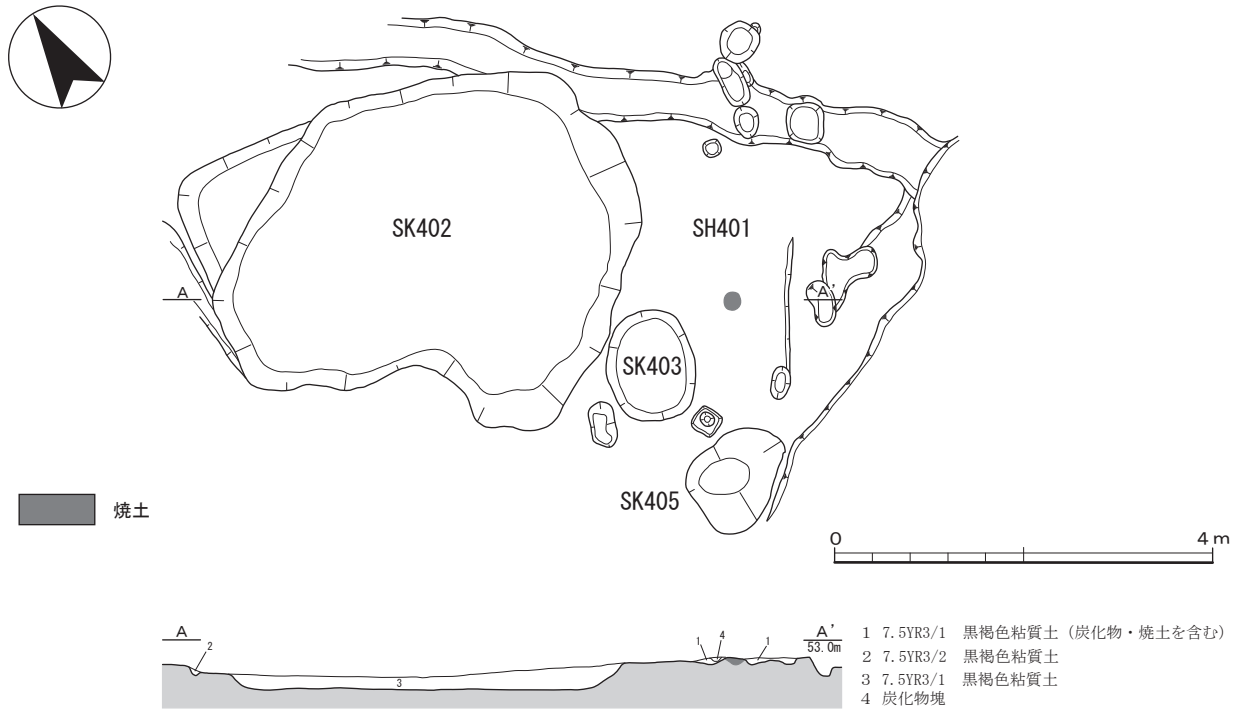
第 47 図　ＳＨ 336・338・339 実測図（1:80)、ＳＨ 338 カマド遺物出土状況図（1:40)

面と両袖の一部が残存した。焼成面及び東袖は最大６cmまで被熱により赤変しているが、西袖は弱く２cm程度である。また、支柱石に転用されたと思われる長さ20cmほどの砕片（164）が横倒しの状態で出土し、その東に長胴甕片が重なり合った状態で確認された。本来、支柱石上に据えられていた長胴甕と思われるが、両者とも焼土面から２～３cm浮いている状態であったので確証はない。壁周溝は、カマド付近で途切れる。深さは一様ではないが平均すると８cm程度である。既述したように幅は一様でなく、カマドから東壁にかけては20cm、カマドから西壁にかけては40～50cmである。住居内で１m～1.2m、深さ20cm前後の不定形な土坑を３基確認した。これらはＳＨ341の床面より確認されたが、ＳＫ２・３は住居に先行する可能性が大きい。特にＳＫ３は撹乱を疑うほどである。ＳＫ１は住居と同時または先行するものであるが、住居との関連性を示す材料は得られなかった。



1　10YR4/1　褐灰色粘質土　笹の根が入り込む（表土）
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土に黄褐色土粒が混じる　焼土粒を微量含む
4　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる　焼土粒を微量含む（SK2埋土）
5　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる　焼土粒を微量含む（SK2埋土）
6　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる　焼土粒・炭化物を微量含む
7　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる　焼土粒・炭化物を少量含む
8　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土ブロックがまだらに混じる　焼土粒・炭化物を少量含む
9　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる　焼土粒・炭化物を少量含む（SK3埋土）
10　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる（SH341 周溝）
11　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる（SH341 周溝）
12　10YR3/2　黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる（SH347 周溝）
13　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土がまだらに混じる　焼土粒・炭化物を少量含む（Pit埋土）
14　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土が混じる　焼土粒・炭化物を微量含む（床面直上の埋土）
15　10YR6/6　明黄褐色粘質土に黒褐色土が混じる（床面直上の埋土）
16　10YR4/2　灰黄褐色粘質土に黒褐色土が少量混じる　焼土粒を微量に含む
17　10YR3/1　黒褐色粘質土　焼土粒・炭化物を微量に含む
18　10YR3/3　暗褐色粘質土　焼土粒を多量に含む
19　10YR3/1　黒褐色粘質土　焼土ブロックを多量に含む
20　5YR4/2　灰褐色粘質土
21　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土　焼土粒・炭化物をごく微量に含む
22　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　焼土粒・炭化物を微量に含む
23　10YR5/6　黄褐色粘質土に暗褐色がまだらに混じる　焼土粒を微量に含む（カマド左ソデ）
24　10YR5/6　黄褐色粘質土に暗褐色がまだらに混じる　焼土粒を微量に含む（カマド右ソデ）
25　木根・木根による撹乱

第48図　ＳＨ341・347実測図（1:80）、ＳＨ341カマド・ＳＨ347遺物出土状況図（1:40）



第 49 図　ＳＨ 401、ＳＫ 402・403・404 実測図（1:80）

ＳＨ 347 については北西隅のみが確認された。ＳＨ 347 からの出土遺物はなかったが、褐色の埋土に焼土と黄褐色土が混じる直径 1.2 m深さ 30cm 程の円形土坑（ＳＫ４）と、埋土に焼土を多く含む長径 50cm の楕円形の小穴（Ｐ２）からは比較的残存が良好な土師器甕・椀、須恵器蓋などの遺物が出土した。検出時はＳＫ４をＳＨ 347 の貯蔵穴と考えたが、貯蔵穴とするには大きすぎるため、ここでは断定を避ける。ＳＨ 347 からの出土遺物がないため、重複するＳＨ 341 出土遺物とＳＫ４の遺物を比較したが、ＳＨ 341 より若干遡る傾向にあり、既述した遺構の状況から判断されるＳＨ 341 より先行するＳＨ 347 とは同時期とすることも可能な状況である。Ｐ３では、口縁部を欠損する土師器甕（34）が倒立状態で出土した。体部以下は完存であるが底からは相当浮いた状況である。Ｐ３はＳＨ 347 に伴うと考えられ、主柱穴の可能性もある。（宮﨑）

ＳＨ３４５　調査区東部の第５次調査区端で竪穴住居の南隅とそれに伴う貯蔵穴を検出した。しかし、第６次調査では削平が強いこともあって、その続きを明確に検出することができなかった。削平の影響を加味してもカマドや周溝等の痕跡を検出することができず、竪穴住居とするに疑問の残るものである。遺物は土師器甕・須恵器杯等が当初貯蔵穴と判断した小穴を中心に出土している。（森川）

ＳＨ４０１（第 49 図）　削平が著しく、ＳＫ 402 にも切られるため全形は確認できなかったが、南東壁の一部とカマドの焼成面および２基の主柱穴が確認できたので竪穴住居とした。ＳＫ 402 の北西にある深さ 10cm ほどの段差について、ＳＨ 401 の北隅であることを検討したが、東壁と向きが対応しなかった。南北長については、主柱穴の位置から 3.3 m以上であると推測できた。なお、時代を推定できる遺物は出土していない。（宮﨑）

３．掘立柱建物

18 棟を確認したが、いずれも小規模なものである。一部に方向を揃えるものもあるが、規則的な配列が広範囲に及ぶことはない。柱穴出土遺物が乏しく詳細な時期は不明であるが、当調査区出土遺物の大半を占める古墳時代末から奈良時代前半の間に求めることが無難である。（森川）

ＳＢ１１０（第 50 図）　調査区西端で検出した梁行３間、桁行４間の側柱建物で、北西隅は中野山遺跡第８次調査区となる。建物主軸はＮ 11°Ｗをとる南北棟である。柱穴は竪穴住居ＳＨ 95 に切られる。

柱穴から古代の土師器片が出土した。（櫻井）

ＳＢ１３９（第50図）　調査区南西部で検出した建物であるが、柱穴の残りが悪く、平面プランは不明瞭である。２間×３間の身舎に南庇が付く東西棟の建物であろうか。建物主軸は正方位に近いＥ３°Ｓである。（櫻井）

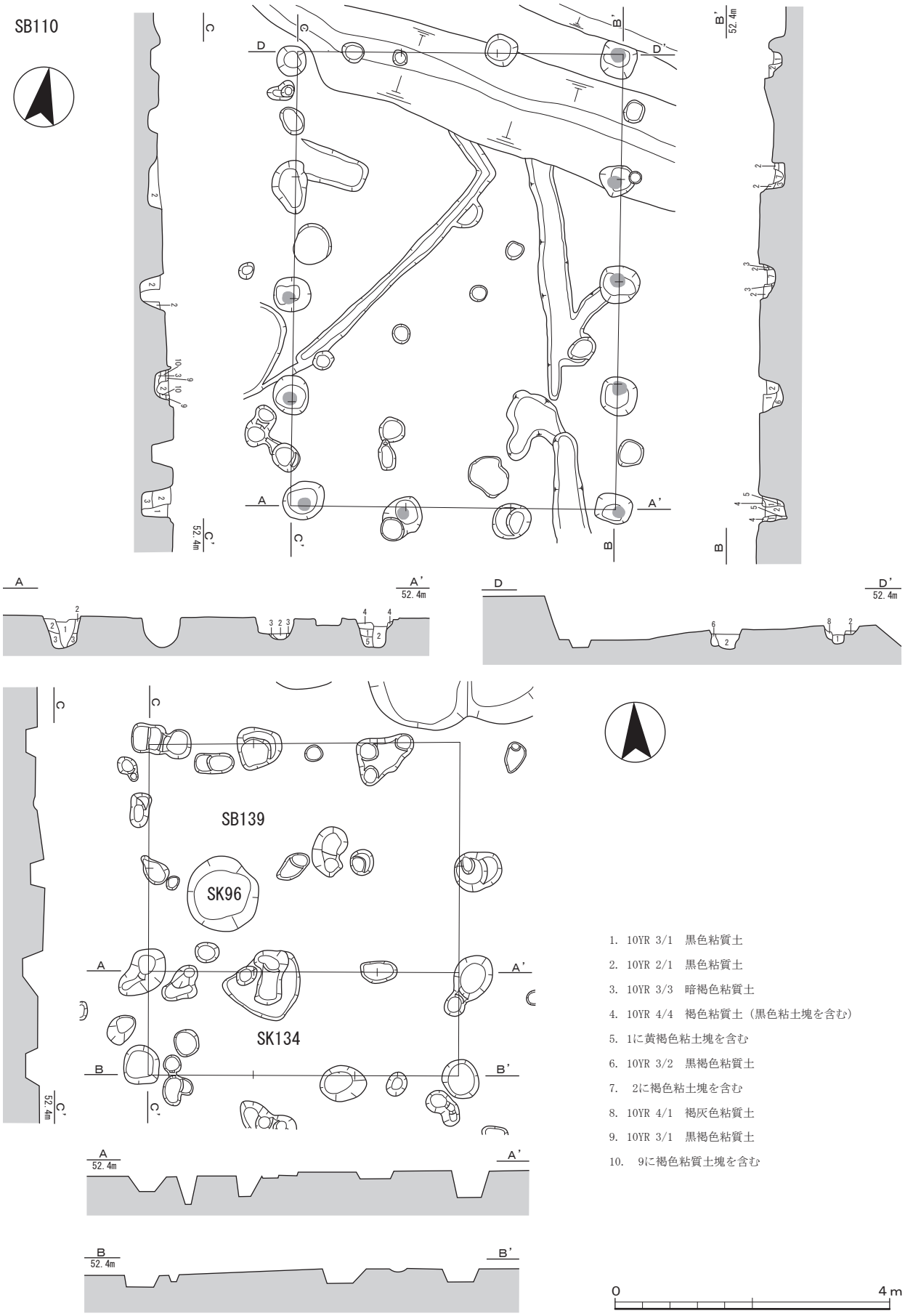
ＳＢ２１５（第51図）　調査区中央部で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟である。棟方向はＮ27°Ｗ、柱間は桁行・梁行とも1.8ｍの等間である。柱掘形は概ね一辺40cm程度の方形を呈するものを基本とするが、形の乱れたものも多い。ただし、柱掘形の検出が困難であったものもあり、正確に検出できなかった可能性も大きい。直径20cm程度の柱痕跡を確認できたものも多いが、その位置からみると柱通は悪く、前述したような等間ではない可能性も生まれる。北側から１間に束柱があり、間仕切があったようである。（森川）

ＳＢ２２２（第52図）　調査中央部で検出した桁行４間、梁行２間の東西棟である。棟方向はＥ35°Ｓ、柱間は桁行が不等間、梁行は2.1ｍの等間である。柱掘形は一辺40～50cm程度の方形を呈するが、形の乱れたものもある。直径20cm程度の柱痕跡を確認できたものも多い。柱掘方の深さは検出面から40cm程度であるが、妻柱は20cm未満と浅い。柱を据えてからの埋戻しを２段階に分けて行っているものがある。（森川）

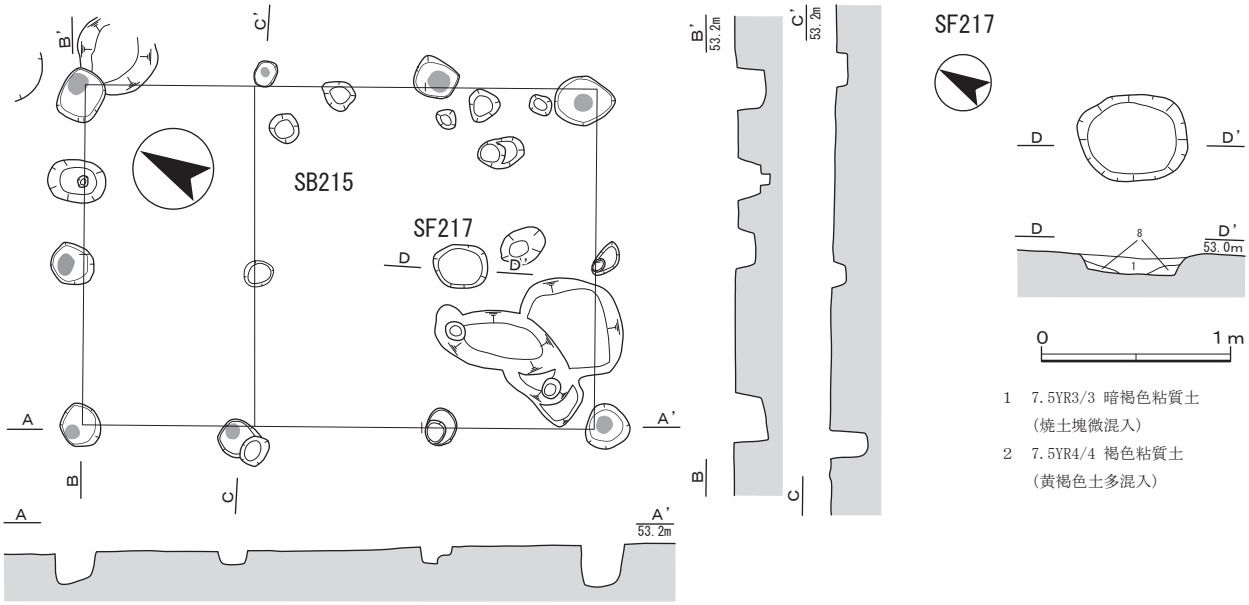
ＳＢ２２３（第53図）　調査区中央部で検出した桁行４間、梁行３間の南北棟である。棟方向はＮ21°Ｅ、柱間は桁行・梁行とも不等間で、相対する間も一致しないものが多い。柱掘形は概ね一辺50cm程度の方形を呈し、直径15～20cmの柱痕跡を確認できたものも多い。柱掘方の深さは検出面から40cm程度であるが、柱を据えてからの埋戻しを２段階に分けて行っているものがある。（森川）

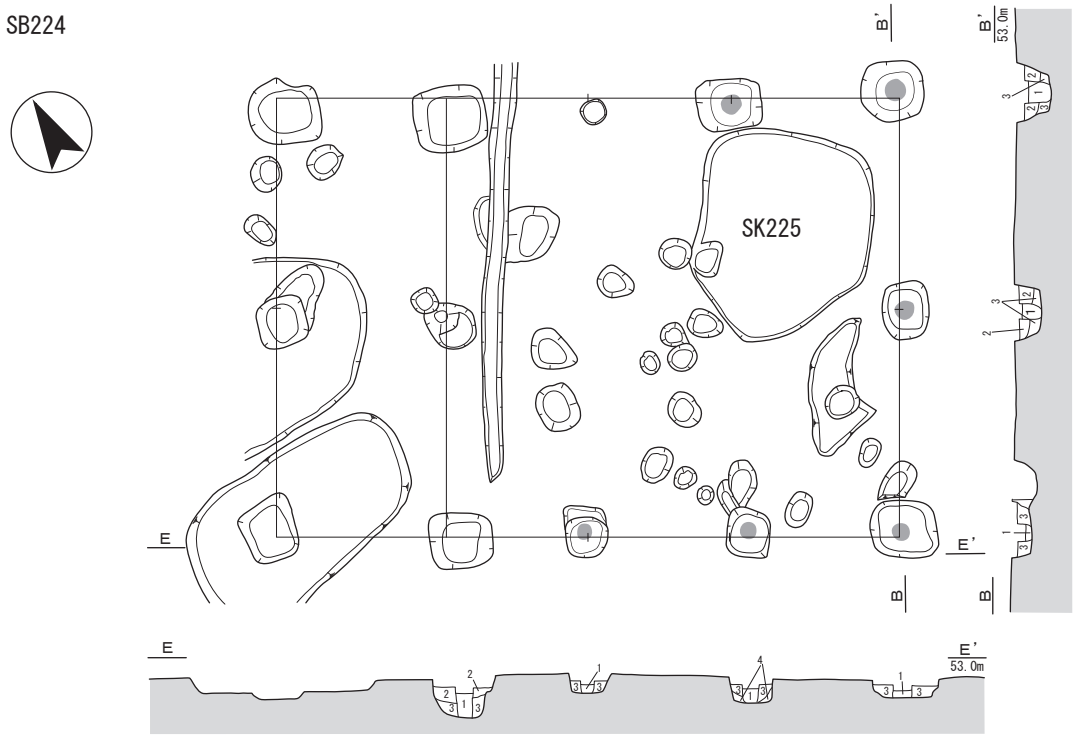
遺構名	規模			棟方向	柱間寸法		備　　考
	桁×梁	桁行(m)	梁行(m)		桁行(m)	梁行(m)	
SB110	4×3	6.6	4.65	N11°W	1.8+1.5+1.5+1.8 1.8+1.8+1.5+1.5	1.5+1.35+1.8 1.65+1.5+1.5	
SB139	3×2	4.5	3.3	E3°S	1.5+1.8+1.2	1.5+1.8	南側に庇
SB215	3×2	5.4	3.6	N27°W	1.8	1.8	北側1間を間仕切
SB222	4×2	6.9	4.2	E35°S	1.8+1.8+1.5+1.8	2.1	
SB223	4×3	6.6	4.5	N21°E	1.8+1.35+1.65+1.8 1.8+1.35+1.5+1.95	1.5+1.5+1.5 1.35+1.5+1.65	
SB224	4×2	6.6	4.65	E29°S	1.8+1.5+1.5+1.8 1.8+1.2+1.8+1.8	2.25+2.4	西側1間を間仕切
SB226	4×3	6	4.2	N16°W	1.5+1.5+1.65+1.35	1.2+1.5+1.5	
SB237	4×3	7.05	5.1	EW	1.8+1.8+1.35+2.1 1.8+2.1+1.35+1.8	1.8+1.8+1.5 1.8+1.5+1.8	
SB242	3×2	4.5	4.05	N35°E	1.5	2.4+1.65 2.25+1.8	
SB244	3×2	5.1	3.9	N15°E	1.5+2.1+1.5 1.2+2.4+1.5	1.8+2.1 1.95	
SB246	3×2	4.35	3.6	E35°S	1.5+1.35+1.5 1.35+1.5+1.5	1.65+1.95	
SB310	3×2	4.5	3.8	N3°E	1.2+1.8+1.2 1.2+2.1+1.2	1.8+2.0	総柱の可能性あり
SB323	3×2	5.1	3.45	N26°W	1.8+1.5+1.8	1.8+1.65	
SB340	3×2	5.4 5.7	4.05	N28°W	1.5+2.25+1.65 1.8+2.1+1.8	2.55+1.5 2.1+1.95	歪みが激しい
SB343	3×2	5.25	4.05	E34°S	1.8+1.65+1.8 1.65+1.8+1.8	2.1+1.95 2.25+1.8	
SB344	3×2	5.85	4.2	E34°S	1.95+1.5+2.4 1.95+1.8+2.1	2.25+1.95 2.1+2.1	
SB348	(2)×2	(3.0)	2.7	N18°W	α+1.5+1.5	1.2+1.5	
SB349	(1)×2	(2.7)	3.0	N6°W	α+2.7	1.65+1.35	

第２表　　掘立柱建物一覧表



第50図　ＳＢ110・139、ＳＫ96・134実測図（1:80）





第51図　ＳＢ215・224、ＳＫ225実測図（1:80）、ＳＦ217実測図（1:40）

ＳＢ２２４（第51図）　調査区中央部で検出した桁行４間、梁行２間の東西棟である。棟方向はＥ29°Ｓ、柱間は桁行・梁行ともに不等間である。西側妻柱の１間内側にもやや小規模な柱穴があり、間仕切りと思われる。柱掘方は一辺70cmから40cmの方形または長方形を呈し、一様でない。深さは検出面から40cmほどであるが、浅いものもある。また、ＳＢ223と同様、柱を据えてからの埋戻しを２段階に分けて行っているものがある。柱痕跡を検出できたものもあり、直径15cmほどである。

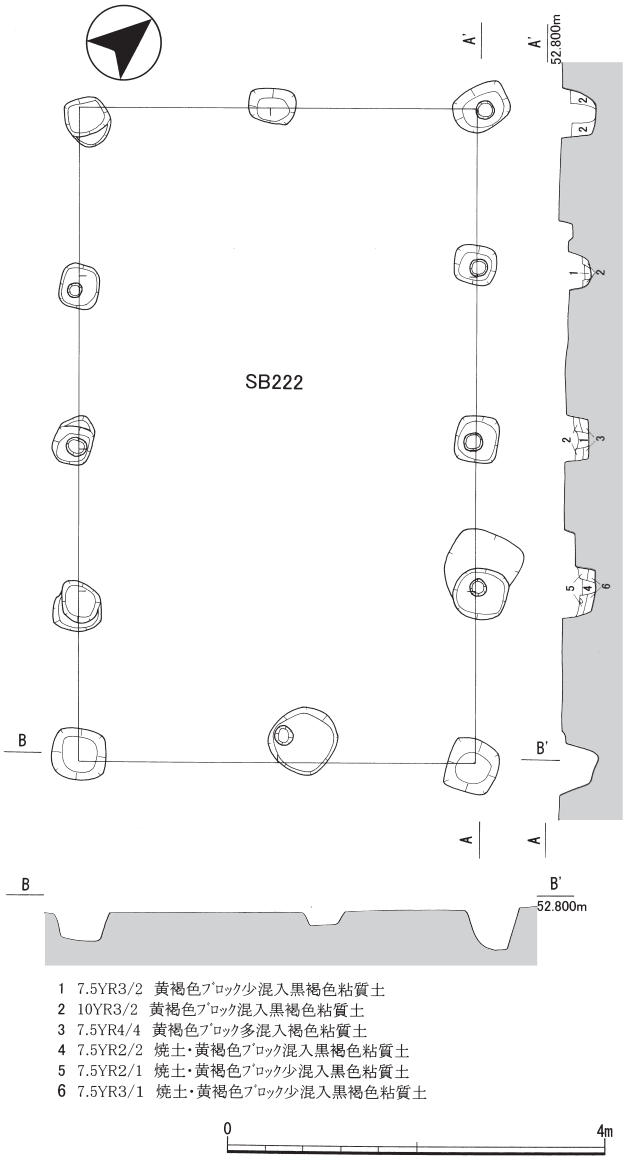
北側桁行中央の柱穴は極端に浅く、検出面から５cm程度、掘形も直径25cmほどの円形で、柱穴とするに疑問のあるものである。相対する南側の柱穴も20cmで他のものより浅い。これらの２基を柱穴と認めず、桁行３間とすれば、中央柱間が３ｍと極端に長くなり、不整合である。両者とも桁行柱通上に位置することもあり、深さに疑問が残るものの、桁行４間の建物とした。北側桁行中央の柱は、柱痕跡のみが検出されたものであろう。（森川）

ＳＢ２２６（第53図）　調査区中央部で検出した桁行４間、梁行３間の南北棟である。棟方向はＮ16°Ｗ、柱間は桁行・梁行とも不等間である。柱掘形は直径40cm～50cmの不整円形を呈し、直径15～20cmの柱痕跡を確認できたものも多い。柱掘方の深さは検出面から20cmから40cmで一様でない。（森川）

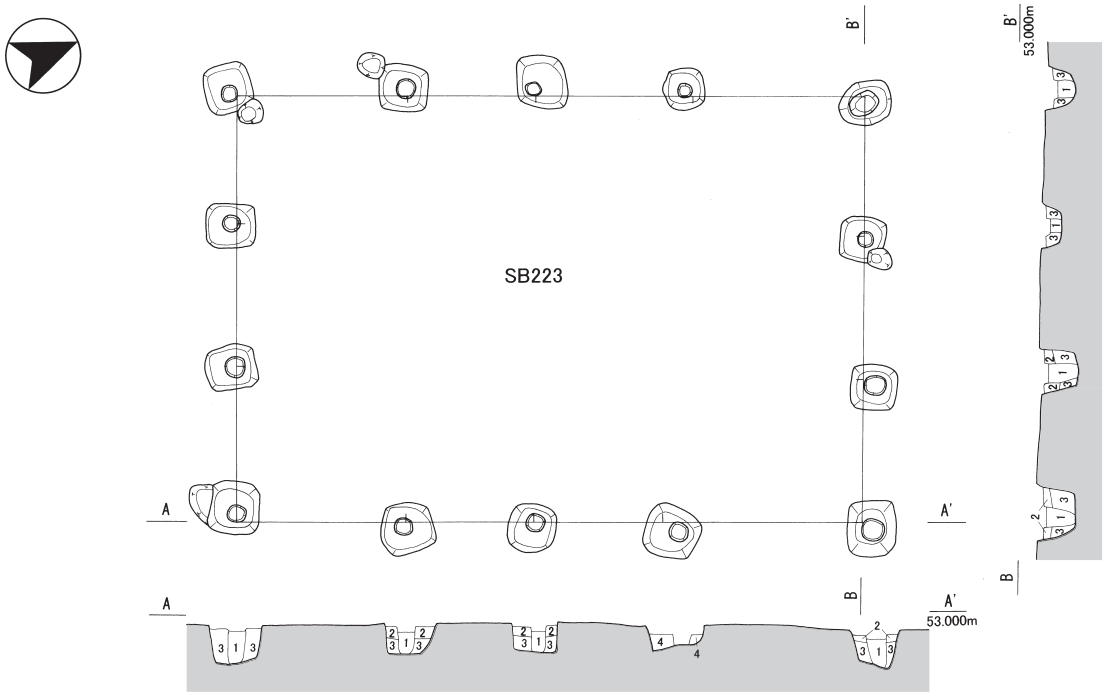
ＳＢ２３７（第54図）　調査中央部で検出した桁行４間、梁行３間の東西棟である。今回の調査で検出した掘立柱建物のなかでは大規模な部類で、棟方向は方位に乗る。しかし、柱間は桁行・梁行とも不等間で、相対する間も一致しないものが多い。柱掘形は一辺50～70cmの方形を呈するものを基本とするが、形の乱れたものもある。直径20～30cmの柱痕跡を確認できたものも多いが、柱通は悪い。（森川）

ＳＢ２４２（第54図）　調査区北部で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟である。総柱建物で棟方向はＮ35°Ｅである。柱間は桁行が1.5ｍの等間であるのに対し、梁行は等間で、しかも南北の相対する柱間も揃わない。特に北側梁行は著しい不等間である。柱掘形は一辺40cmほどの不整円形を呈し、直径20cmの柱痕跡を確認できたものもある。柱掘形の深さは検出面から25～40cmほどであるが、束柱は浅く、20cmと10cm未満である。（森川）

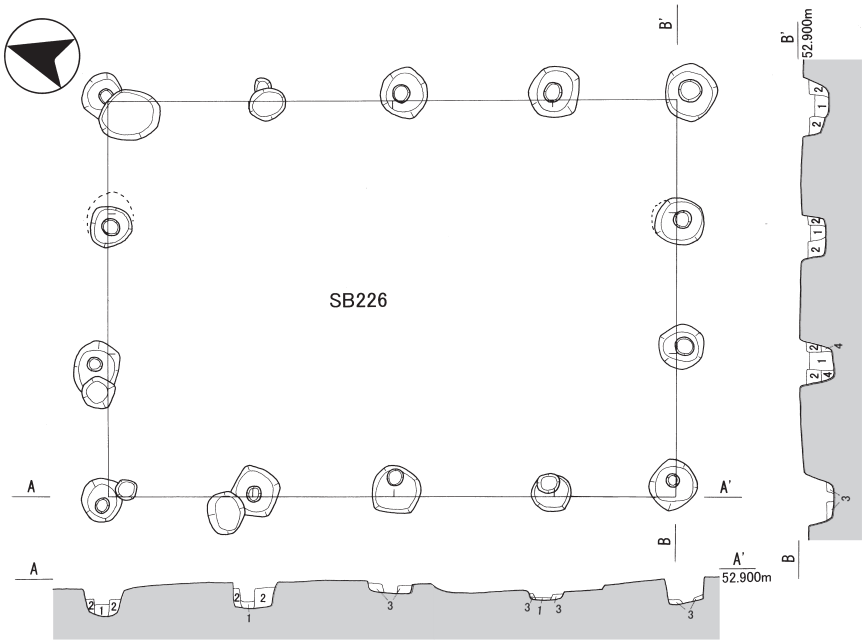
ＳＢ２４４（第56図）　調査区中央部で検出した。第３次調査から第５次調査区に及ぶ掘立柱建物である。南北棟で棟方向はＮ15°Ｅ、桁行３間、梁行２間の側柱建物である。柱間は桁行・梁行とも不等間で相対する柱間も不揃いであるが、南側梁行のみ1.95ｍの等間である。全体の規模は桁行5.1ｍ、梁行3.9ｍで、柱穴は、30～50cmの円形または楕円形を呈している。柱痕跡は北辺の３基のみ確認できたが、20cmほどの円形であった。西側桁行の北半の２基の柱穴は小型で他のものより極端に浅く、不等間のこともあって、建物とするに疑問も残る。（宮崎）



第52図　ＳＢ222実測図（1:80）

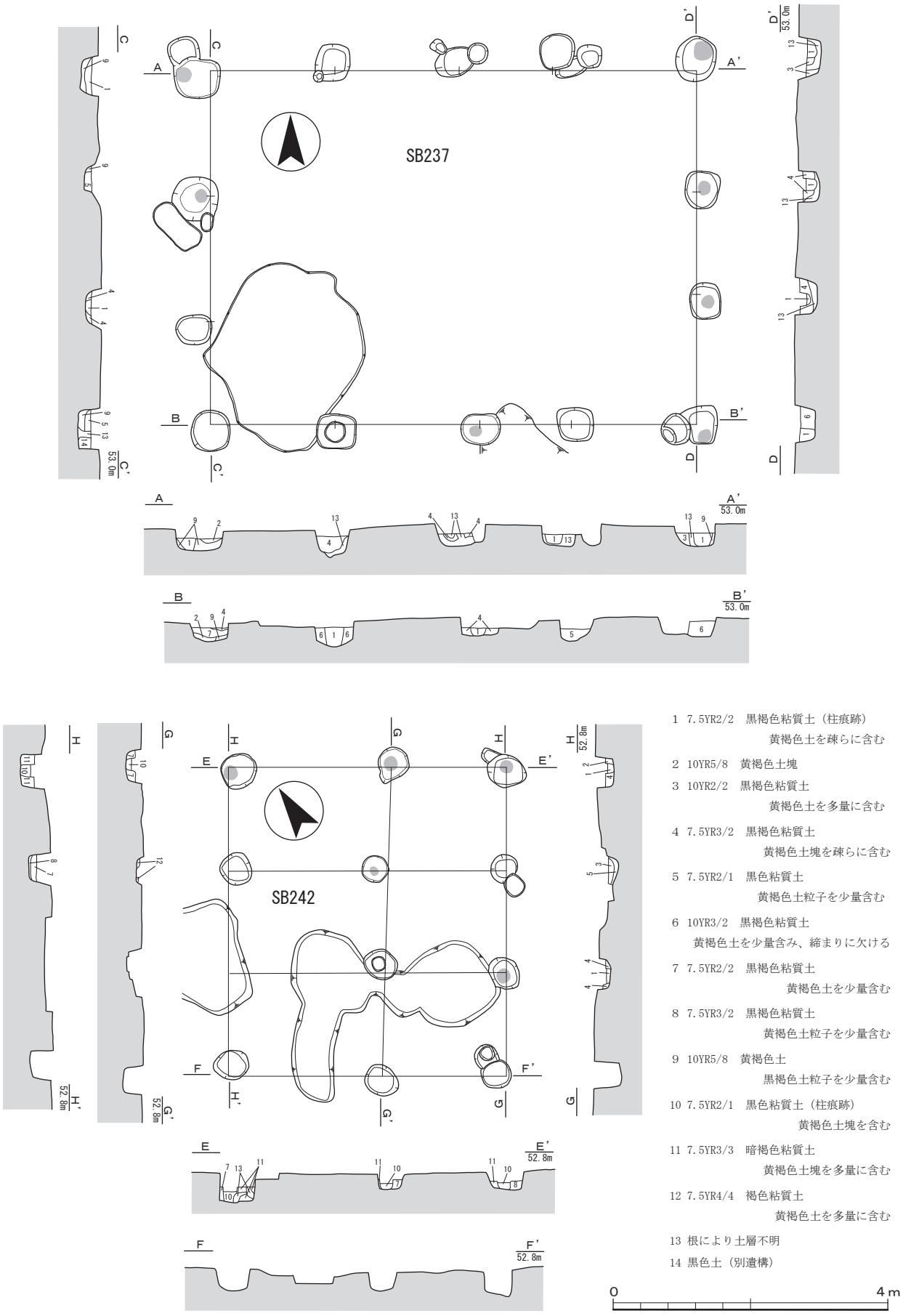


1 7.5YR2/2 黄褐色粒微混入黒褐色粘質土
2 10YR2/2 黄褐色粒少混入黒褐色粘質土
3 7.5YR3/2 黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ混入黒褐色粘質土
4 7.5YR3/3 黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ多混入暗褐色粘質土



1 7.5YR3/2 黄褐色粒少混入黒褐色粘質土
2 7.5YR3/1 黄褐色粒微混入黒褐色粘質土
3 10YR3/1 黄褐色ﾌﾞﾛｯｸ混入黒褐色粘質土
4 10YR3/1 黄褐色粒少混入黒褐色粘質土

第 53 図　ＳＢ 223・226 実測図（1:80）



1 7.5YR2/2 黒褐色粘質土（柱痕跡）
黄褐色土を疎らに含む

2 10YR5/8 黄褐色土塊

3 10YR2/2 黒褐色粘質土
黄褐色土を多量に含む

4 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
黄褐色土塊を疎らに含む

5 7.5YR2/1 黒色粘質土
黄褐色土粒子を少量含む

6 10YR3/2 黒褐色粘質土
黄褐色土を少量含み、締まりに欠ける

7 7.5YR2/2 黒褐色粘質土
黄褐色土を少量含む

8 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
黄褐色土粒子を少量含む

9 10YR5/8 黄褐色土
黒褐色土粒子を少量含む

10 7.5YR2/1 黒色粘質土（柱痕跡）
黄褐色土塊を含む

11 7.5YR3/3 暗褐色粘質土
黄褐色土塊を多量に含む

12 7.5YR4/4 褐色粘質土
黄褐色土を多量に含む

13 根により土層不明

14 黒色土（別遺構）

0 4m

第54図　ＳＢ237・242実測図　（1:80）

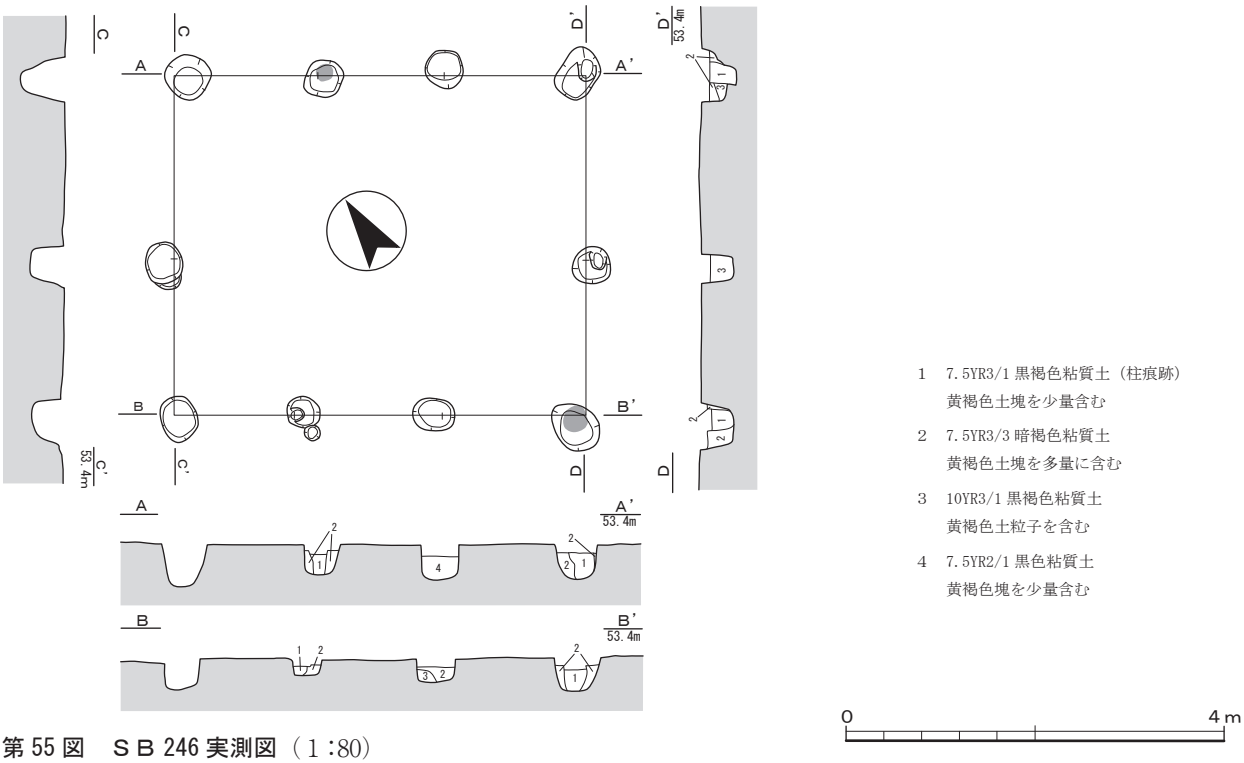
ＳＢ２４６（第 55 図）　調査区南端ちかくで検出した桁行３間、梁行２間の東西棟である。棟方向はＥ 35°Ｓで、ＳＢ 222 と方向を揃えるものの 20 m 離れており､両者の関係は不明である。柱間は桁行･梁行ともに不等間であるが、桁行は相対する間も揃わない。柱掘形は一辺 40cmの方形または隅丸方形であるが、規模や形体は不揃いである。直径 20cm 前後の柱痕跡を確認できたものもある。（森川）

ＳＢ３１０（第 56 図）　調査区中央北部で検出した掘立柱建物である。棟方向はＮ 3°Ｅの南北棟で、ほぼ方位にのる。桁行３間、梁行２間の建物で、柱間は不等間であるが、桁行は相対する柱間さえ不揃いである｡西側桁行では柱筋から外れるものもある。住居内にも２基の小穴があり、総柱建物の可能性も残るが、柱筋が整わず、ここでは側柱建物とした。全体の規模は桁行 4.5 m、梁行 3.8 mである。柱穴は、30 ～ 40cm の円形または楕円形を呈しており、ほとんどの柱穴で柱痕跡が確認できたが、15cmほどの円形であった。（宮﨑）

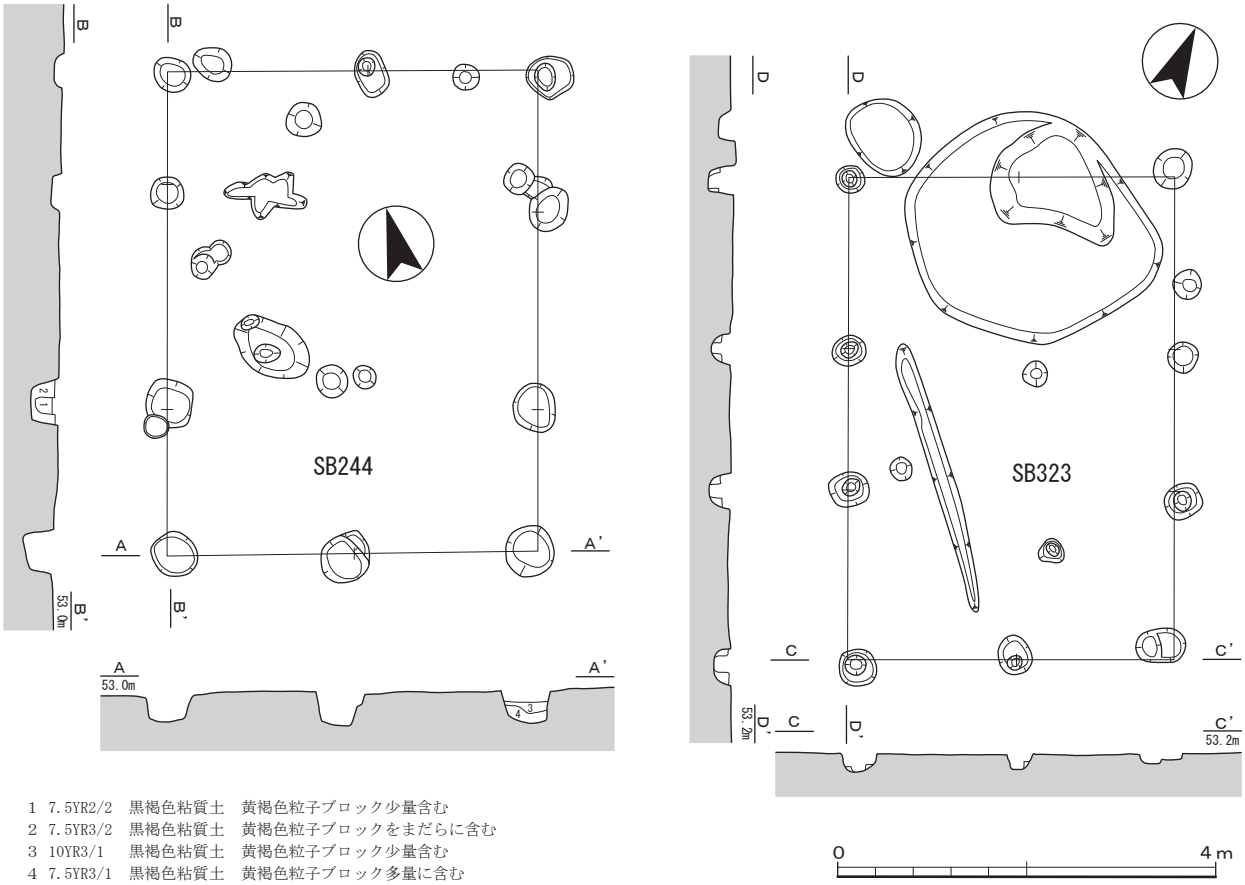
ＳＢ３２３（第 56 図）　調査区東部の住居群西端から検出された掘立柱建物である。南北棟で、棟方向はＮ 26°Ｗ、桁行３間、梁行２間の側柱建物である。桁行の柱間は両端が 1.8 m、中央が 1.5 mで、中央がやや狭い。また、梁行は北側妻柱が風倒木により消滅していたが、南側では 1.8 m + 1.65 mの不等間である。柱穴は、30 ～ 40cmの円形または楕円形を呈しており、柱痕跡が検出できたものがあり、20cm ほどの円形であった。（宮﨑）

ＳＢ３４０（第 56 図）　調査区南部で検出した掘立柱建物である。南北棟で、棟方向はＮ 28°Ｗ、桁行３間、梁行２間の側柱建物である。しかし桁行の長さは東西で異なり､東側が 30cm長い。したがって、北側梁行は南側と平行にはならず､歪な形態である。さらに、柱間は桁行・梁行ともに不当間で、相対する柱間も不揃いである。しかも、前述した北側梁行の妻柱は極端に東へ寄っており、一辺 40cmの方形または隅丸方形を基本とする他の柱掘形と比べ、著しく形態が異なる。この様に、建物とするに疑問の多いものであるが、全ての柱穴から直径 15cm程度の柱痕跡を検出している。（森川）

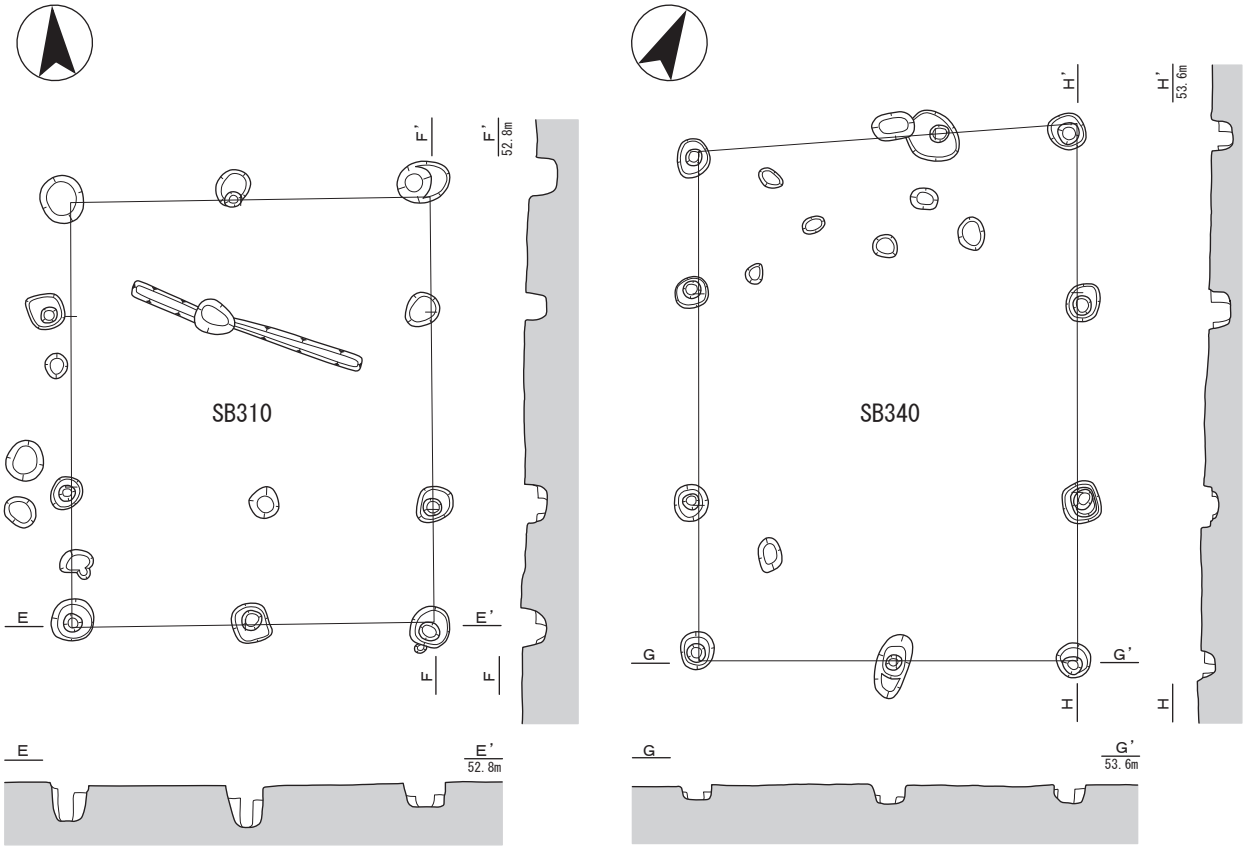
ＳＢ３４３（第 57 図）　調査区東側に広がる住居群の西端に位置する。棟方向は東西で、方向はＥ 34°Ｓ、桁行３間、梁行２間の側柱建物である。北東側に並立するＳＢ 344 と棟方向を揃え、しかも北西側の梁行も揃えている。しかし、ＳＨ 344 より桁行・梁行ともに若干小さい。柱間は不等間で、相対



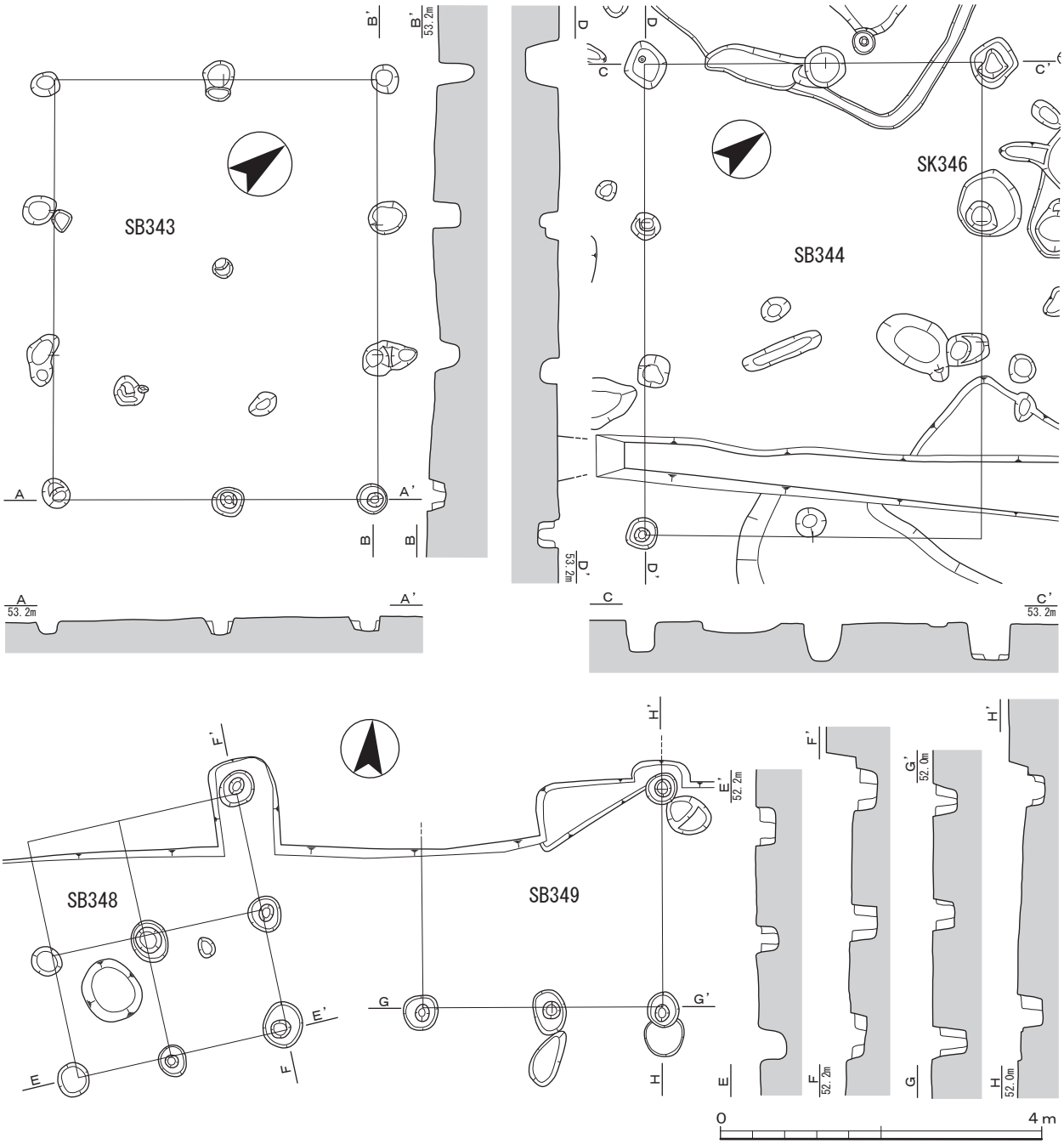
第 55 図　ＳＢ 246 実測図（1：80）



1 7.5YR2/2　黒褐色粘質土　黄褐色粒子ブロック少量含む
2 7.5YR3/2　黒褐色粘質土　黄褐色粒子ブロックをまだらに含む
3 10YR3/1　黒褐色粘質土　黄褐色粒子ブロック少量含む
4 7.5YR3/1　黒褐色粘質土　黄褐色粒子ブロック多量に含む



第 56 図　ＳＢ 244・310・323・340 実測図（1:80）



第57図　ＳＢ343・344・348・349、ＳＫ346実測図（1:80）

する柱間も不揃いである。柱穴は、径40cm前後の円形または楕円形を呈している。柱痕跡を確認できたものがあり、20cmほどであった。建物の中央で小穴を検出したが、棟の柱筋上にあることから、棟持柱であった可能性も考えられる。（宮﨑）

ＳＢ３４４（第57図）　ＳＢ343の北東側に棟方向を揃え、さらに北西側の梁行を揃える位置にある掘立柱建物である。棟方向は東西棟で主軸方向はＥ34°Ｓ、桁行３間、梁行２間の側柱建物である。ただし、東隅の柱穴は検出されず、柱間も不等間、柱掘形の形状も統一を欠き、建物とするに疑問の残るものである。全体の規模は桁行5.85ｍ、梁行4.2ｍで、並列するＳＢ343より一回り大きい。柱痕跡が確認できたものがあり、20cmほどの円形を呈するが、北隅のものは形が乱れており、抜き取り痕かもしれない。（宮﨑）

ＳＢ３４８・３４９（第57図）　調査区北端部で、ほぼ等間隔に並ぶ６基の柱穴を確認した。東側か

ら４基を南側桁行として、両梁行の延長上を拡張したところ、両者ともに想定位置から柱穴が検出できた。その結果、３間×２間の東西棟、ＳＢ 313 とした。ところが、後の図上検討で、梁行寸法が東西で異なるに止まらず柱通も悪く、西側に余る４基の柱穴を活用して２棟に分ける方が素直という結論に至った。

ＳＢ 348 は、２棟に分けた西側のものである。南北棟と仮定し、桁行２間以上、梁行２間の総柱建物となった。棟方向はＮ 19° Ｗ、柱間は桁行 1.5 ｍの等間、梁行は 1.2 ｍ＋ 1.5 ｍの不当間である。柱穴は、30cm ～ 50cm の円形または楕円形を呈し、柱痕跡は 20cm ほどの円形であった。西側梁行の柱穴については、柱痕跡を確認できなかった。

ＳＢ 349 は、２棟に分けた東側のものである。３基の柱穴を南側梁行として北側に展開する南北棟と仮定した。棟方向はＮ 6° Ｗ、梁行は 1.65 ｍ＋ 1.35 ｍの不等間であるが、桁行の柱間は 2.7 ｍとなり、建物とするに疑問の残るものである。柱掘形は直径 40cmの円形を呈し、柱痕跡はいずれも 10cm ほどの円形であった。（宮﨑）

４．土坑

大小多数の土坑を検出した。時期の不明確なものもあるが、ＳＫ 68 が平安時代、ＳＫ 85 が中世に降る他は古墳末から奈良時代前半に納まるものが大半である。なかでも長径２ｍ以上の楕円形ないし不整形の土坑が 41 基ほど検出されている。深さは 20cm 前後で、竪穴住居よりもやや深い。数基の土坑が複雑に重複しているものもある。見かけ上は粘土採掘坑にも似るが、いずれも出土遺物に乏しく、遺構の性格は決め難い。カマドが付属する例（ＳＫ 15）や、カマド袖状の施設をもつもの（ＳＫ 54）もある。

（森川・櫻井）

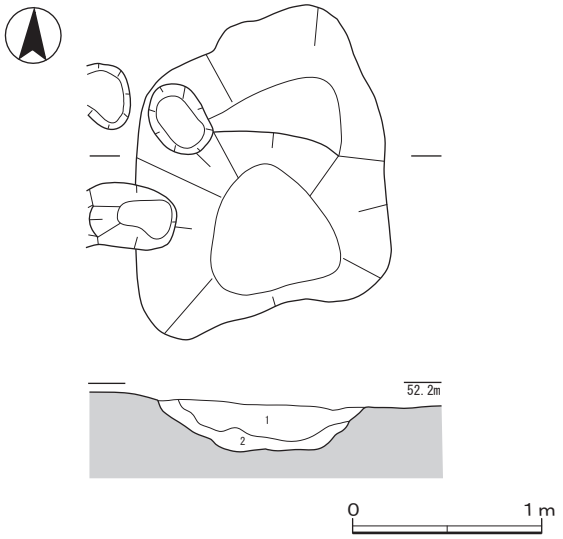
ＳＫ２（第 58 図）　調査区西北部で検出した一辺 1.4 ｍの方形を呈する土坑である。深さは検出面から 20cmを測るが、土坑北側は一段浅く４cm程度の深さである。検出時点ではＳＨ１と重複し、それより後出のものであることを示す。埋土は上下２層に分かれるが、下層には基盤層に類似する黄褐色粘質土塊を含む。土師器長胴甕片が出土したのみで遺構の性格は不明である。（森川）

ＳＫ３　調査区西部で検出した長径１ｍ、短径 65cmの長円形を呈するが、複数の小土坑が重複する様相をみせる。したがって、底部は一様でないが、最深部でも検出面から 20cm足らずである。焼けた粘土塊が出土したのみである。（森川）

ＳＫ４・１２・１４（第 27 図）　調査区西部で検出した重複する複数の土坑である。このうち、最も大きなＳＫ４は、長辺 4.0 ｍ、短辺 3.4 ｍ、検出面からの深さ 10cmの不整方形を呈する土坑である。底面は概ね平らであるが、竪穴住居のような硬化面はない。埋土は締まりのない黒ボク土である。土坑西側は一段下がったＳＫ 16 があるが、出土遺物からの時期差は不明である。（櫻井）

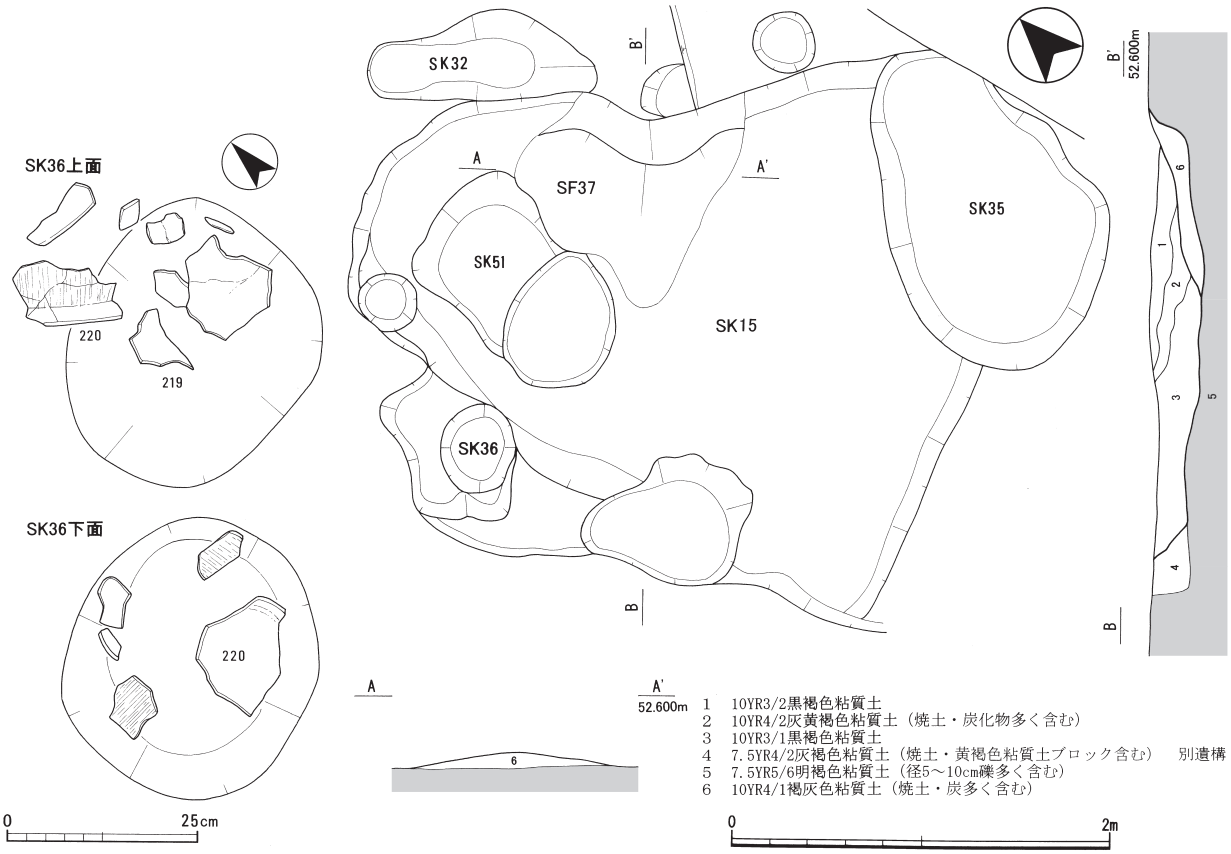
ＳＫ７・２３９（第 65 図）　調査区中央部で、第２次調査と第３次調査に跨って検出された。ＳＨ６と重複するが、それより後出のものである。長辺 3.5 ｍ、短辺 2.4 ｍの不整方形を呈する。深さは検出面から 10cm程度で、底部は平坦である。埋土は黒色粘質土で、締りがない。須恵器杯・壺の小片が出土しているが、遺構の性格は不明である。（櫻井・森川）

ＳＫ８　調査区西部でＳＨ６の北隣で検出した。直径 50cmの円形を呈するが、検出面からの深さは 10cm程度である。遺物の出土はなく、時期、性格ともに不明である。（森川）



1 10YR3/1　黒褐色粘質土
2 10YR4/1　褐灰色粘質土（黄褐色粘質土塊含）

第 58 図　ＳＫ２実測図（1:40）



第59図　ＳＫ15・32・35・36・51実測図（1:40）、**ＳＫ36遺物出土状況図**（1:10）

ＳＫ９　調査区西部でＳＨ６の南隣で検出した。径70cm、短径30cmの長円形の小土坑が２基重複した形態を呈する。検出面からの深さは30cm程度で、土師器長胴甕や須恵器甕の小片が出土したのみである。（森川）

ＳＫ１３　調査区西部でＳＫ５と一部重複して検出された。ＳＫ５は痕跡程度であるが、検出時点ではそれに先行することを確認している。一部形の乱れた部分もあるが、直径50cmの円形を呈し検出面からの深さは30cm程度である。土師器長胴甕の小片が出土したのみである。（森川）

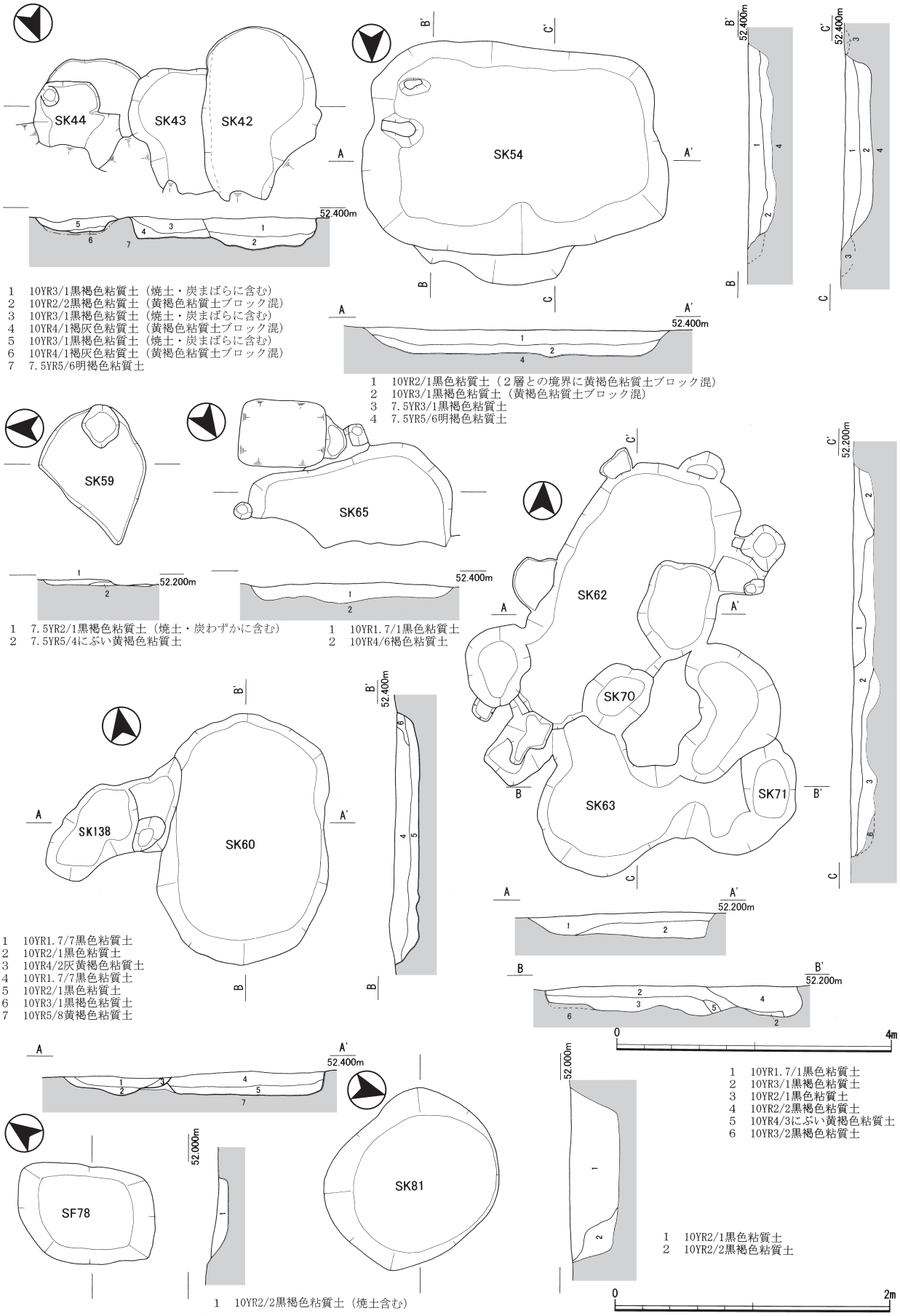
ＳＫ１５（第59図）　長さ3.3ｍ、幅2.6ｍ、検出面からの深さ25cmの不整形土坑である。東辺には崩壊したカマドと同様な状況の焼土･炭の溜まり（**ＳＦ37**）がみられ、付近には土師器甕の廃棄土坑（**ＳＫ36**）がある。竪穴住居とは別に設けられた簡易な炊事場であろうか。また、ＳＦ37の下へ一部潜り込むかたちで**ＳＫ51**、ＳＫ15に接して**ＳＫ32**がある。出土遺物からの時期差はないが、ＳＫ15等に関連するものかどうかは不明である。（櫻井・森川）

ＳＫ２０　調査区西部で検出した。長径75cm、短径35cmの長円形を呈し、検出面からの深さは20cm程度である。土師器長胴甕の小片が１片出土したのみである。（森川）

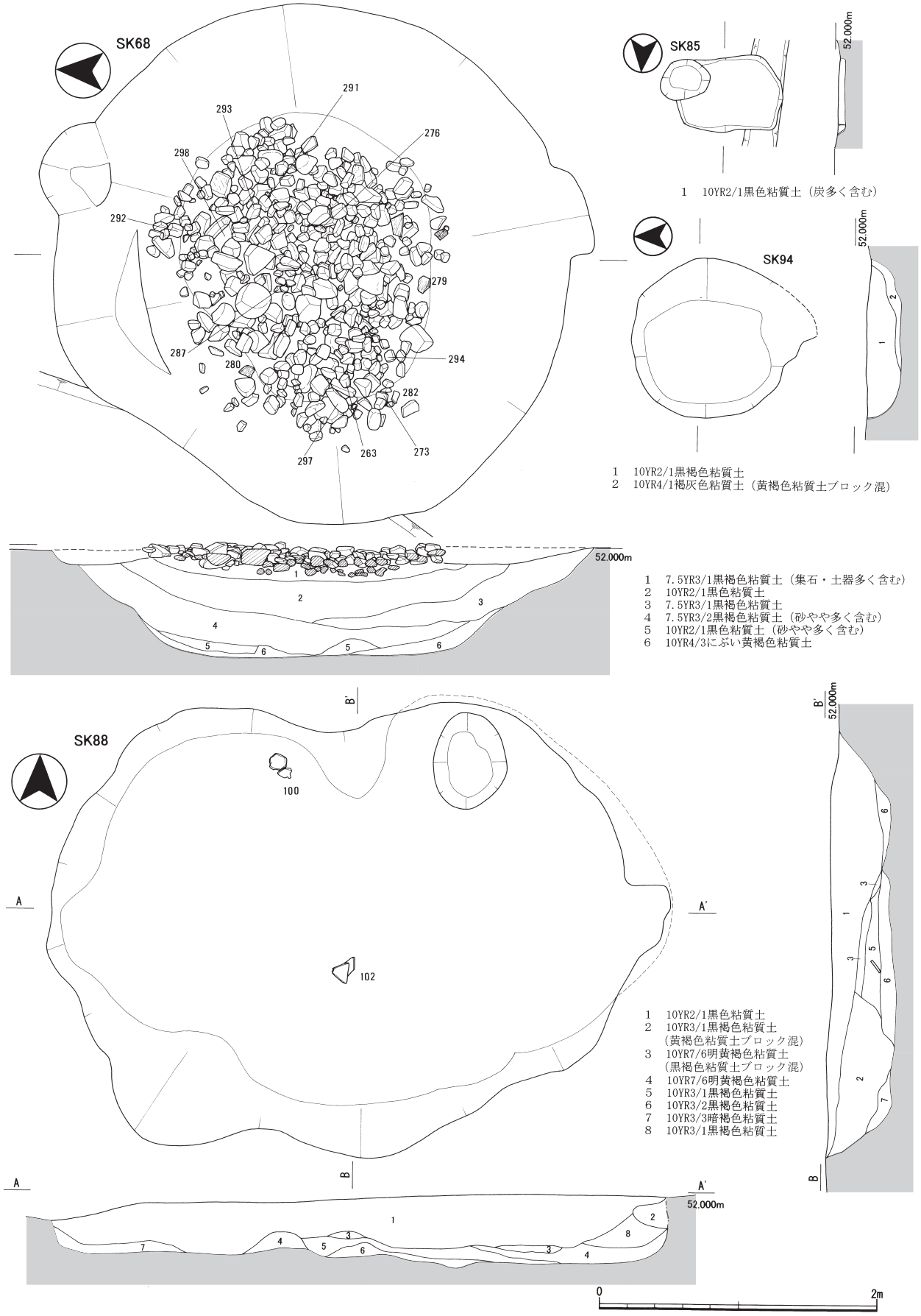
ＳＫ３０・３５（第40・59図）　両者とも竪穴住居ＳＨ19・25・238と重複し、ＳＫ35はＳＫ15とも重複して検出された長径２～1.5ｍ、短径１～80cmの楕円形の土坑である。ＳＫ30は住居とは出土遺物に時期差があり、ＳＫ35は住居北東隅ちかくで重複する。したがって住居との関連はないものと考えるが、その性格は不明である。（森川）

ＳＫ４１　調査区南西部で検出した。長径50cmほどの不整円形とするが、複数の小土坑が重複している様相である。したがって深さも均一ではないが、最深部でも検出面から10cm程度である。出土遺物はない。（森川）

ＳＫ４２・４３・４４（第60図）　調査区西部で検出した。不整形な土坑が３基切り合っている。いずれも上層の埋土には焼土や炭がまばらに含まれるが、下層には少ない。埋土の状況からＳＫ43がＳＫ



第60図　ＳＫ42～44・54・59・60・62・63・65・70・71（1:80）、ＳＫ81、ＳＦ78（1:40）実測図



第61図　ＳＫ68・85・88・94実測図（1:40）

42に先行し、出土遺物からＳＫ42・43は奈良時代に降るが、ＳＫ44は飛鳥時代までのものである。（櫻井）

ＳＫ５４（第60図）　調査区南西部で検出した。長さ4.0ｍ、幅2.8ｍ、検出面からの深さ20㎝の不整方形土坑である。東辺は地山をカマドの袖状に掘り残しているが、埋土に焼土や炭は含まれず、燃焼施設が存在した痕跡はなかった。須恵器蓋（221）、横瓶の小片（222）、砥石（223）等が出土している。（櫻井）

ＳＫ５９（第60図）　調査区南西部で検出した。一辺２ｍ足らずの不整平行四辺形を呈する。深さが検出面から８㎝未満の痕跡程度の残存であるため、前述した平面形は本来の形体を示さない可能性が大きい。埋土に焼土や炭化物を僅かに含み、土師器長胴甕片が出土している。（森川）

ＳＫ６０（第60図）　調査区南西部で検出した。長さ3.7ｍ、幅2.4ｍ、検出面からの深さ30㎝の楕円形土坑である。底面は概ね平らで、埋土は黒ボク土である。須恵器壺片（359）が出土している。（櫻井）

ＳＫ６２・６３・７０・７１（第60図）　長さ4.2ｍ、幅1.7ｍのＳＫ62を中心に、多数の土坑が重複している。土師器や須恵器が出土しているが、土坑の性格を直接示すものはない。（櫻井）

ＳＫ６５（第60図）　調査区西部で検出した一辺３ｍの不整方形を呈する土坑であるが、北側が後世の溝により消滅しているため正確な形態は不明である。土師器甕の小片が多数出土している他には特筆すべきことはない。（森川）

ＳＫ６６　調査区南西部のＳＨ64の北側で検出した。直径75㎝の円形を呈し、検出面からの深さは30㎝である。土師器甕の小片が出土している。（森川）

ＳＫ６８（第61図）　調査区南西部に位置する。直径約４ｍ、深さ80㎝の円形土坑である。最上層には拳大～人頭大の礫を集中させ、さらに円盤状ないし板状に破砕した灰釉陶器・須恵器壺（266）や甕（275～283）、陶製土管（286～288）、石製加工円盤（290）や砂岩製砥石（291～298）などを撒き散らしている。一方、下層は礫・遺物はほとんど含まれていなかった。

埋土は黒ボク土を起源とする黒褐色粘質土で、埋没過程に特異な点はない。また井戸枠等の痕跡もない。

上～下層から出土した灰釉陶器や底部糸切り技法の須恵器杯から、９世紀前半に位置付けられる。北山Ａ遺跡周辺では数少ない平安時代の遺構であり、古代集落の終焉を考える上で重要である。また、土器の破砕を伴う祭祀遺構の例として注目されよう。（櫻井）

ＳＦ７８（第60図）　調査区西部で検出した長辺１ｍ、短辺70㎝の長方形を呈する。検出面からの深さは10㎝程度しかないが、埋土には焼土が混入している。しかし壁や土坑底の焼土は認められない。土師器長胴甕の小片が出土している。（森川）

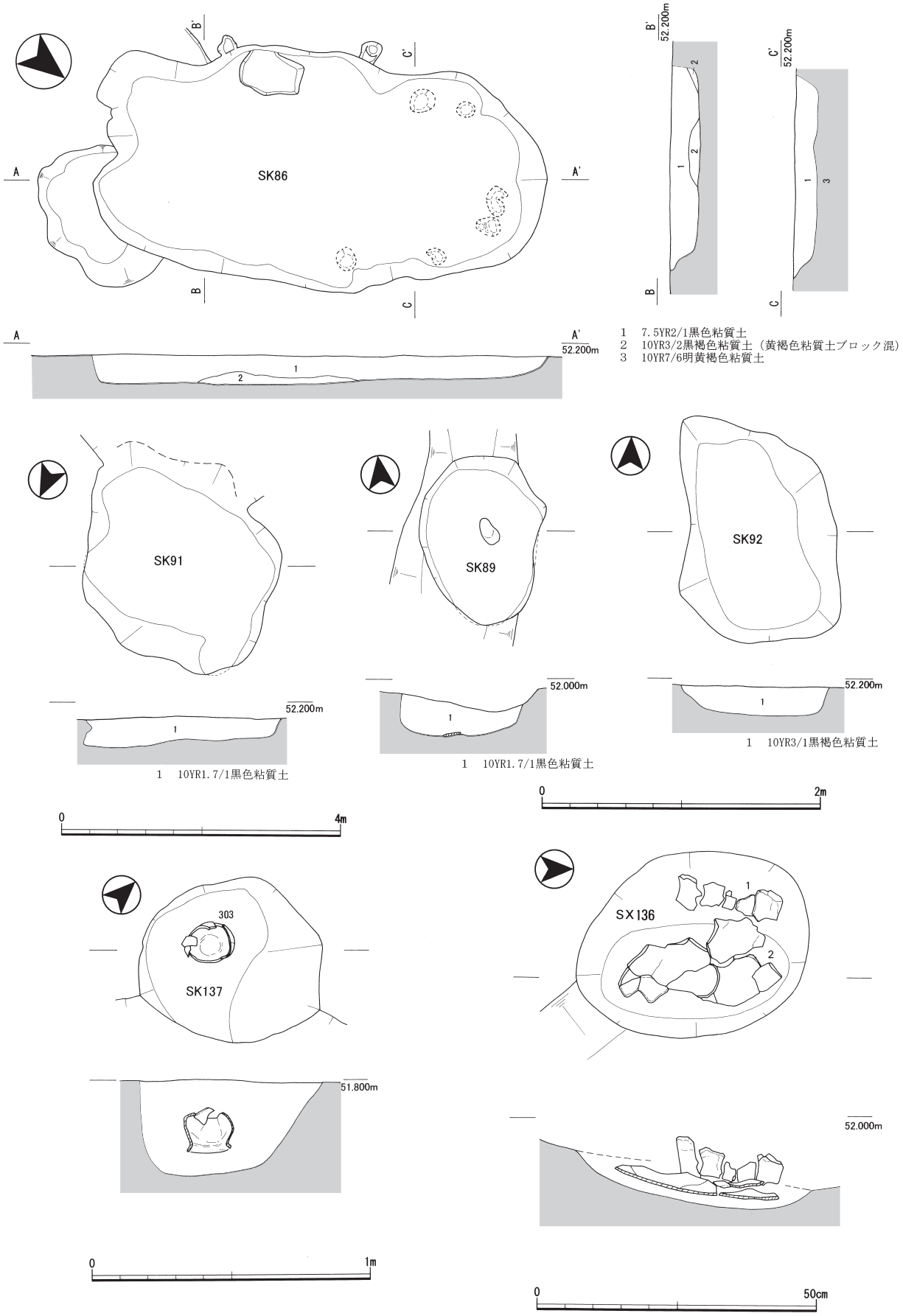
ＳＫ８１（第60図）　調査区西端ちかくで検出した。直径1.2ｍの不整円形を呈し、深さは検出面から35㎝を測る。東側壁が先行して埋没した様子がみられるが、基本的に黒色粘質土である。遺物は土師器や須恵器の甕の小片が出土するに止まる。（森川）

ＳＫ８５（第61図）　調査区西端で検出した。長さ76cm、幅50cm、検出面からの深さ５cmの方形土坑で、埋土は炭を多く含む黒色粘質土である。付近の菟上遺跡などで多く見つかっている[③]中世火葬墓であろう。遺物や焼骨は出土していない。（櫻井）

ＳＫ８６（第62図）　調査区南西部で検出した。長さ6.0ｍ、幅3.3ｍ、検出面からの深さ30㎝の楕円形土坑で、土層の観察によれば重複はなく、単一の土坑である。底面は概ね平らに整えられているが、踏み固められた様子はない。埋土から須恵器（226～228）や土管（230）、砥石（231）、製塩土器（225）、円盤状の須恵器甕片（229）が出土している。（櫻井）

ＳＫ８８（第61図）　調査区南西端で検出した。長さ4.4ｍ、幅3.1ｍ、検出面からの深さ50㎝の楕円形土坑である。土層の観察によれば３基ほどの大型土坑が重複していると考えられる。土坑の東側壁面は一部崩落して袋状を呈することから、ある程度の期間開口していた可能性が高い。土師器の甕（100）、須恵器の杯（101）が出土している。他に須恵器の甑と考えられる102が出土した。（櫻井）

ＳＫ８９（第62図）　調査区南西部で検出した。撹乱溝と完全に重複するため土坑上部は消滅している。残存部では長径1.2ｍ、短径80㎝の楕円形を呈



第62図　ＳＫ86・91（1:80）、ＳＫ89・92（1:40）実測図、ＳＫ137（1:20）、ＳＸ136（1:10）遺物出土状況図

し、底部は平坦である。土坑底部中央に長径20cmほどの川原石が位置する。故意に据えられた様子はなく、元来地層に混入していたもののようである。ただし、基盤の地層は礫を含むことが稀な黄褐色粘土であること、石がちょうど土坑中央部にあることが気になるところではある。土師器長胴甕小片が出土した他には遺物の出土はない。（森川）

ＳＫ９０　調査区南西端で検出した。長辺1.3ｍ、短辺75cmの不整方形を呈するが、風倒木痕等と重複し、不明な部分もある。検出面からの深さは25cmで須恵器蓋（339）等が出土している。（森川）

ＳＫ９１（第62図）　調査区南西部で検出した。ＳＨ76と重複するが、それに先行する土坑である。直径2.5ｍの不整円形を呈し、底部は平坦である。土坑壁は南北が比較的緩斜面、東西が急斜面を呈し、一部袋状を呈する。砥石（240）が出土した他は目立った遺物の出土はない。（森川）

ＳＫ９２（第62図）　調査区南西部で検出した。長辺1.6ｍ、短辺1.1ｍの不整方形を呈し、底部は平坦である。土師器長胴甕片や須恵器蓋（343）等が出土しているが、土坑性格に直結する出土状況ではない。（森川）

ＳＫ９４（第61図）　調査区西部で検出した。直径1.1ｍ、検出面からの深さ20cm程度の円形土坑である。南に隣接するＳＦ78と僅かに重複するが、検出の状況ではそれに先行する。東壁際が先行して埋没した土層を示す他には特筆すべき遺物の出土もない。（森川）

ＳＫ９６（第50図）　調査区西部のＳＢ139内で検出したが、ＳＢ139との関連は不明である。直径１ｍの円形を呈し、検出面からの深さ14cm程の浅いものである。土師器甕の小片が出土したに止まる。（森川）

ＳＫ９７　調査区西部でＳＨ58と一部重複して検出された。検出時の状況ではＳＨ58に先行する。長辺2.3ｍ、短辺80cmの不整方形を呈する。深さは一様でなく、多数の土坑が重複する様相である。最深部は検出面から35cm程度である。土師器小片や須恵器か陶器の底部片（362）が出土している。（森川）

ＳＫ１２９　調査区西部で検出した。直径75cm程度の不整円形を呈する。深さは検出面から35cm程度であるが北側が若干浅く、柱穴状の土坑である。土師器長胴甕片が多数出土した他に須恵器杯（350）も出土している。（森川）

ＳＫ１３２　調査区南西端で検出した。隣接する中野山遺跡第８次調査区へ続くため、その調査結果[④]を合わせると長径2.4ｍ、短辺1.2ｍの長円形を呈する。深さは検出面から５cm未満の浅いもので、遺物の出土もない。（森川）

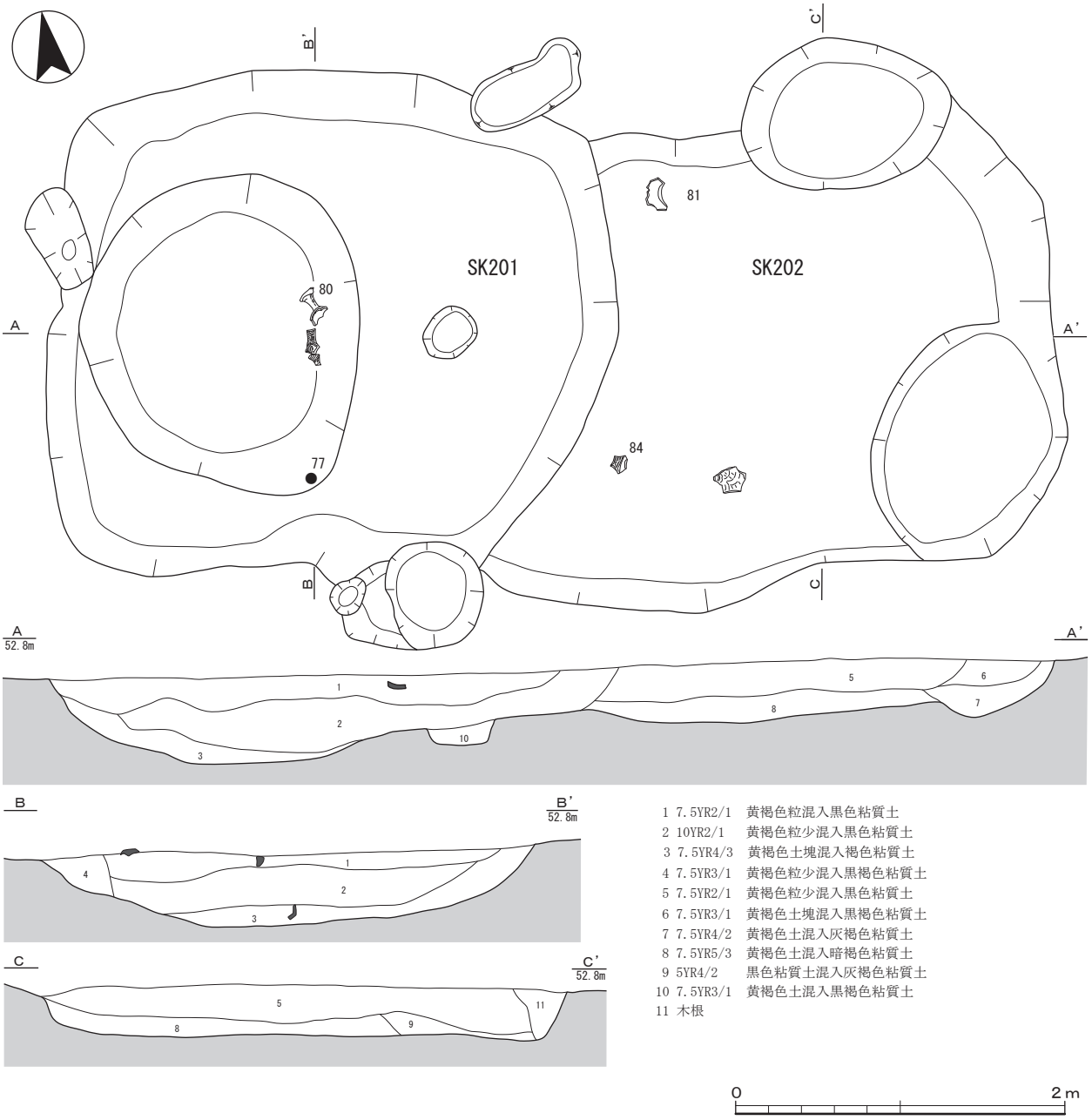
ＳＫ１３４（第50図）　調査区西部のＳＢ139内で検出したが、ＳＢ139との関連は不明である。一辺１ｍの不整三角形を呈し、検出面からの深さは10cm未満の浅いものである。埋土は焼土を含むため橙色を呈し、検出時にはカマドの痕跡を想定した。しかし、土坑壁に被熱はなく、土師器甕の小片が出土したのみである。（森川）

ＳＫ１３７（第62図）　直径60cm、検出面からの深さ35cmの土坑である。土坑底から10cmほど浮いた位置に完形の土師器甕（303）が逆位で置かれていた。（櫻井）

ＳＫ１３８（第60図）　調査区南西部で検出した。ＳＫ60と一部重複し、それより後出のものである。長径２ｍ、短径１ｍほどの長円形を呈する。深さは検出面から25cm程度であるが一様でなく、複数の土坑の重複を示す。出土遺物はない。（森川）

ＳＫ２０１（第63図）　調査区南部で検出した一辺３ｍの方形を呈する土坑である。ＳＫ202と重複するが、それより後出のものである。ＳＫ202を意識するかのように南北幅をほぼ揃え、ＳＫ202を西へ平行移動するかたちで掘削している。ただし、壁の角度はＳＫ202より緩やかで、滑らかに底部へ移行する。深さは検出面から20cm以上あるが、土坑西部は直径1.5～２ｍの楕円形に一段深くなり、最深部は深さ60cmを測る。ただしこの段も滑らかである。埋土は３層に分かれ、黒色土系の色調であるが、最下層は地山の黄褐色土の塊が混在する。中層はよく締まった層である。そこに接して比較的残存が良好な須恵器高杯（80）が出土している。（森川）

ＳＫ２０２（第63図）　ＳＫ201と重複して検出された。南北３ｍ、東西も３ｍを確認したが、ＳＫ201に切られるため、本来の東西幅は不明である。いずれにしても方形または長方形を呈するものと思

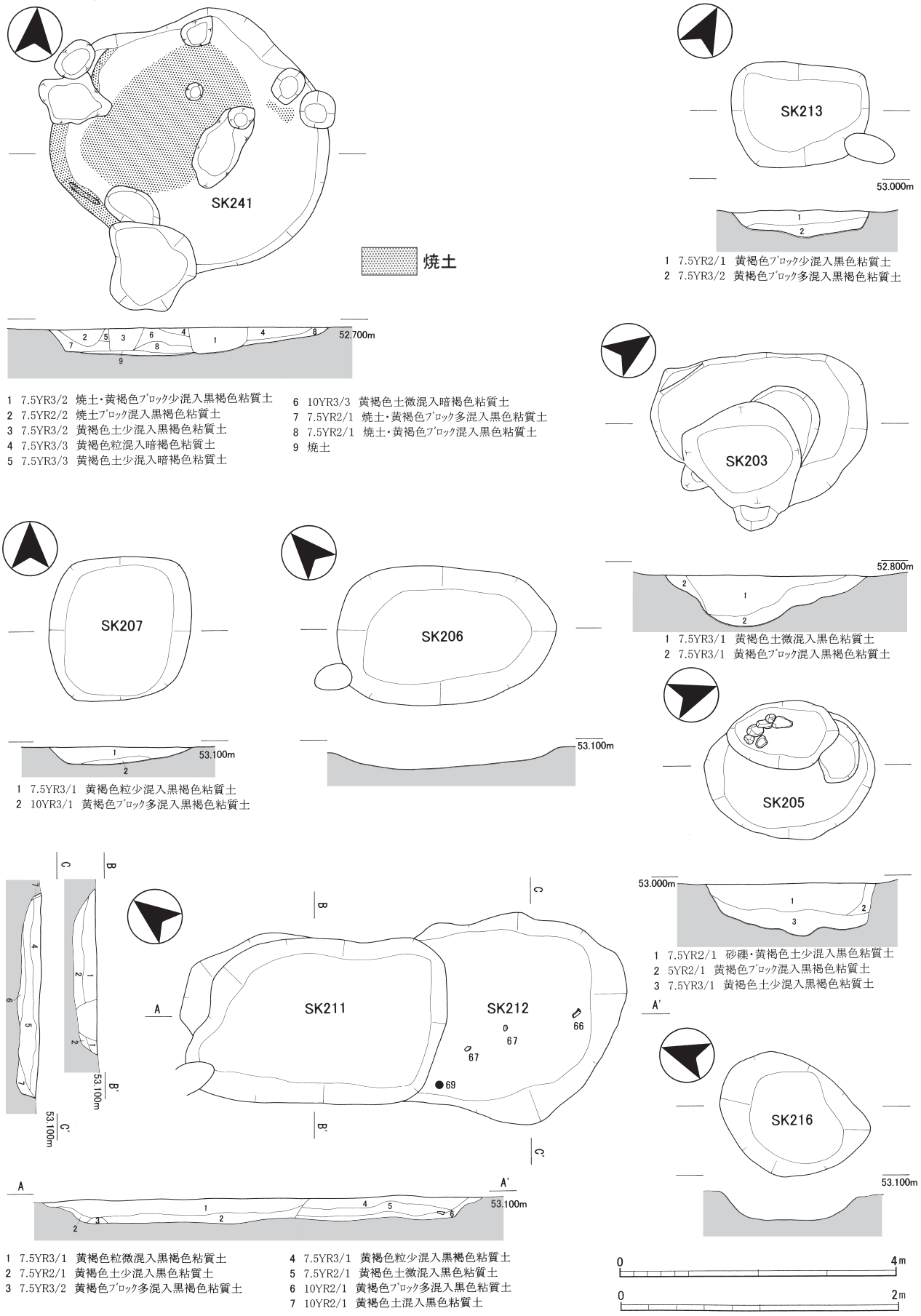


第 63 図　ＳＫ 201・202 実測図（1:40）

われる。埋土は上下２層に分かれるが、下層は地山の黄褐色土粒を含む。重複する円形土坑との埋土の相関から両者が一連の遺構の可能性もあるが、ＳＫ 202 は最終的に上層のみの深さであったようである。土師器甕、須恵器壺等が出土しているが小片であり、土坑の性格を示すものはない。ただし、土師器甕（81）は平底の特異なものである。（森川）

ＳＫ２０３（第 64 図）　調査区南部で検出した。一部、掘り過ぎてしまったため正確な形状は不明となったが、直径１～ 1.6 ｍの長円形を呈するものと思われる。壁は緩やかに傾斜し、検出面からの深さは 20㎝程度である。しかし、南東端から中央部が一段深くなり、深さ 40㎝に及ぶ。埋土は上下２層に分かれるが、この部分で両層とも自然に落ち込んでいるため、土坑掘削当初から中央部が一段深くなっていたものである。遺物は須恵器高杯の脚部（371）が出土した他には目立ったものが無く、土坑の性格は不明である。（森川）

ＳＫ２０５（第 64 図）　調査区南部で検出した。直径１ｍほどの円形を呈する。深さは検出面から



第 64 図　ＳＫ 203・205 ～ 207・213・216・241 実測図（1:40）、ＳＫ 211・212 実測図（1:80）

30cm程度であるが、西側は一段深くなり、80cmを測る。埋土は２層に分かれるが、基本的に黒褐色系の色調で、下層ほど粘性が弱い。最深部で拳大の石を６個検出した。底に着いた状態で、意図的に設置された可能性もある。遺物は出土しておらず、遺構の時期及び性格は不明であるが、周辺の遺構と同様な時期としておく。（森川）

ＳＫ２０６（第 64 図）　調査区中央部で検出した。長径 1.5 ｍ、短径１ｍほどの長円形を呈する。深さは検出面から 10cm程度の浅いもので壁は緩やかである。埋土は黒褐色系で、他の遺構と大差はない。遺物の出土は無く、時期は不明であるが、周囲の遺構と同様な時期としておく。（森川）

ＳＫ２０７（第 64 図）　調査区中央部で検出した一辺１ｍの隅丸方形を呈する土坑である。深さは検出面から 10cm程度の浅いものであるが、壁は緩急があり一定でない。埋土は上下２層に分かれる。両者とも黒褐色系の色調であるが、下層の方が地山の黄褐色土塊が多く混入する。遺物は下層上面から須恵器の壺か甕の小片が出土したに過ぎない。（森川）

ＳＫ２０９・２１０（第 37 図）　ＳＫ 210 は、長辺 4.5 ｍ、短編 3.5 ｍの楕円形にちかい方形を呈する。ＳＨ 204 と重複するが、それに先行するものである。したがって、土坑南東側はＳＨ 204 に切られ、不明である。土坑壁は緩やかで、深さは検出面から 30cm程度である。土坑北東側が径 2.5 ～ 2.2 ｍの楕円形にさらに一段深くなるが、埋土の色調等に大きな差は無い。遺物は土師器甕等の小片が出土したにすぎない。ＳＫ 209 は直径１ｍほどの円形土坑で、ＳＫ 210 の西側に重複する。ＳＫ 210 より先行するもので、東側半分はそれに切られ消滅する。しかし掘削の結果、底部はＳＫ 210 と段差なく一体となり、埋土の色調や埋土層の分層状況もＳＫ 210 と酷似する。したがって、ＳＫ 209 とＳＫ 210 は一体の遺構と考えるべきであろう。その場合、ＳＫ 210 の西側に半円状の突出部があることになる。（森川）

ＳＫ２１１・２１２（第 64 図）　調査区中央部で検出した。ＳＫ 211 は、長辺 3.8 ｍ、短辺 2.3 ｍの不整方形を呈する。深さは検出面から 40cmを測り、壁は緩やかに傾斜する。埋土は他の土坑に多く見られるように、上下２層に分かれ、下層には地山の黄褐色土塊を多く含む。須恵器蓋・杯、土師器甕等比較的多くの遺物が出土しているが、いずれも小片である。ＳＫ 212 を横へ２ｍ移動させたかのような位置に掘削しており、その位置関係は、ＳＫ 201 とＳＫ 202 の位置関係に似る。

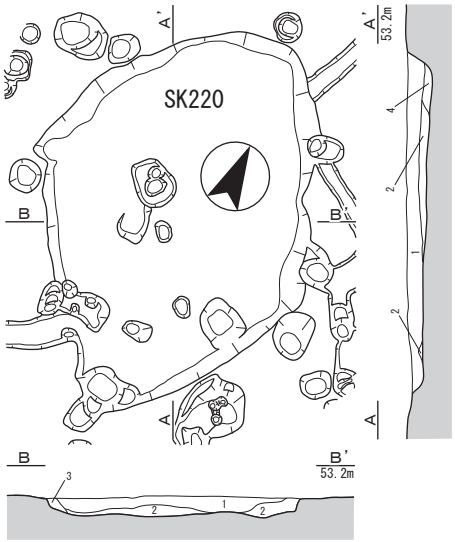
ＳＫ 212 は、ＳＫ 211 と重複して検出され、ＳＫ 211 に先行する。したがって、北半をＳＫ 211 に切られ、全体の形状は不明であるが、ＳＫ 211 と同様な平面形を呈するものと推測される。須恵器蓋･杯、土師器甕等比較的多くの遺物が出土しているが、須恵器蓋（67）は接合の結果､ほぼ完形に復元できた。

さて、この両者は掘削の結果、底部に段差は無く、土坑壁も一連の状態となった。埋土の分層位置もほぼ同じで、土層観察により前後関係を観察しているものの、相互に対応する層の色調は同じであり、両者は同一の遺構とすることに違和感はない。その場合、長辺６ｍを測る大型の土坑となる。（森川）

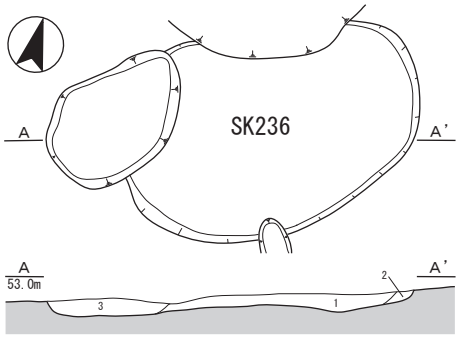
ＳＫ２１３（第 64 図）　調査区南部で検出した長辺１ｍ、短辺 70cmの不整長方形を呈する土坑である。深さは検出面から 20cmほどで、埋土は上下２層に分かれる。下層には地山と同じ黄褐色土塊を多く含む。出土遺物はなく､時期や性格は不明である。埋土の状況が周囲の遺構と目立った差が無いことから、これらと同様な時期と考えられる。（森川）

ＳＫ２１６（第 38・64 図）　ＳＨ 208 と重複して検出され、それより後出のものである。直径１～ 0.9 ｍの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは 30cm足らずで、土坑壁は緩やかである。埋土は上下２層に分かれるが、上層はＳＨ 208 の埋土に酷似するものの黒色味が強い。下層は茶褐色系の土に黒色土が混入するものであるが、上下の分層位置がＳＨ 208 の床面位置にちかい。遺物は長脚２段透孔の須恵器高杯片が出土しているに止まる。これらから、検出時点ではＳＨ 208 より後出としたが、逆に古墳時代に遡る可能性もある。なお、土坑の性格は不明である。（森川）

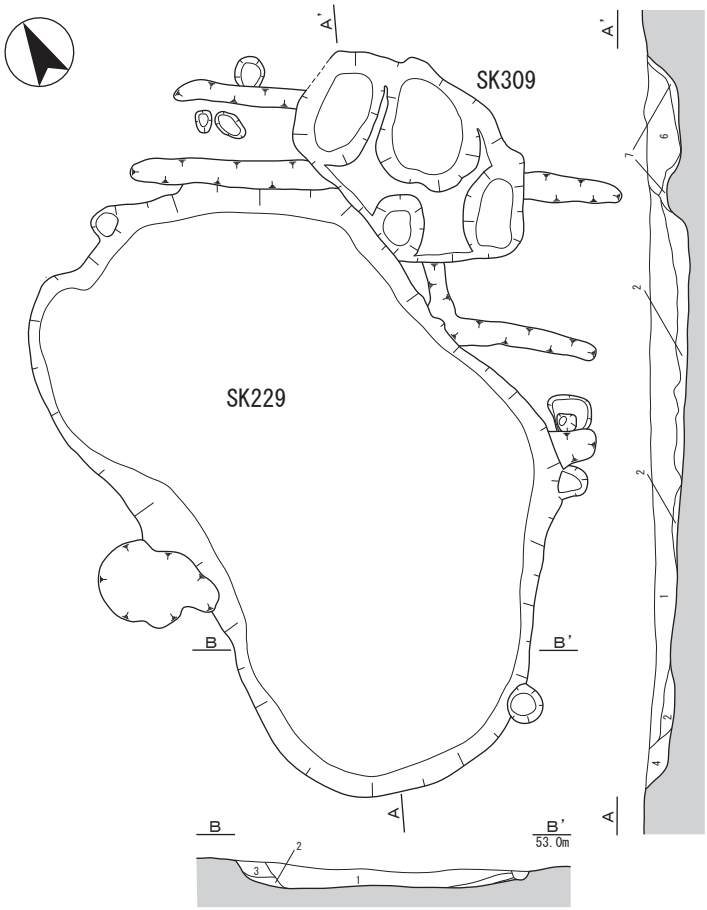
ＳＦ２１７（第 51 図）　調査区南部で検出した一辺 50 ～ 60cmの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは検出面から 10cm程度で底部は平坦である。埋土は暗褐色土であるが焼土塊を多く含む。しかし土坑の壁や底部への被熱は認められない。土師器長胴甕片が出土しているが、土坑の性格を示すもとは考



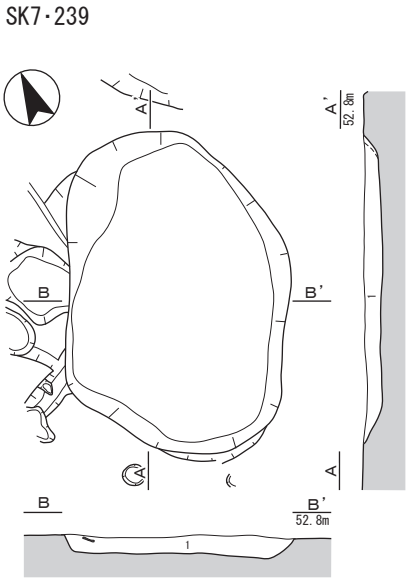
1 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐色土粒少量含）
2 7.5YR3/2　黒褐色粘質土（黄褐色土粒若干含）
3 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊多含）
4 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐色土多含・1より軟弱）



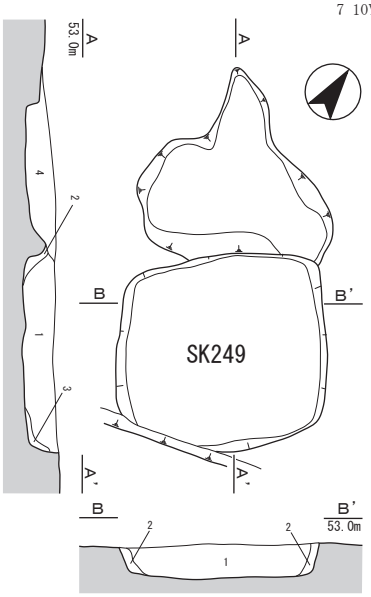
1 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（焼土・黄褐色土塊含）
2 7.5YR3/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊多含）
3 撹乱土



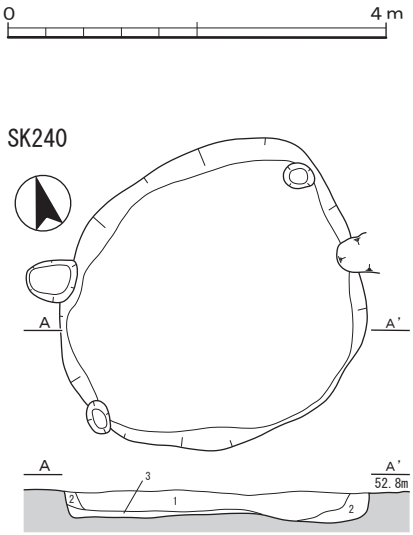
1 10YR3/2　黒褐色粘質土
2 7.5YR3/3　暗褐色粘質土（黄褐色土塊多含）
3 7.5YR3/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊含）
4 7.5YR2/1　黒色粘質土（黄褐色土塊少量含）
5 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（黄褐色土塊少量含）
6 10YR3/3　暗褐色粘質土
7 10YR3/3　暗褐色粘質土（黄褐色土塊多含）



1 10YR2/1　黒色粘質土

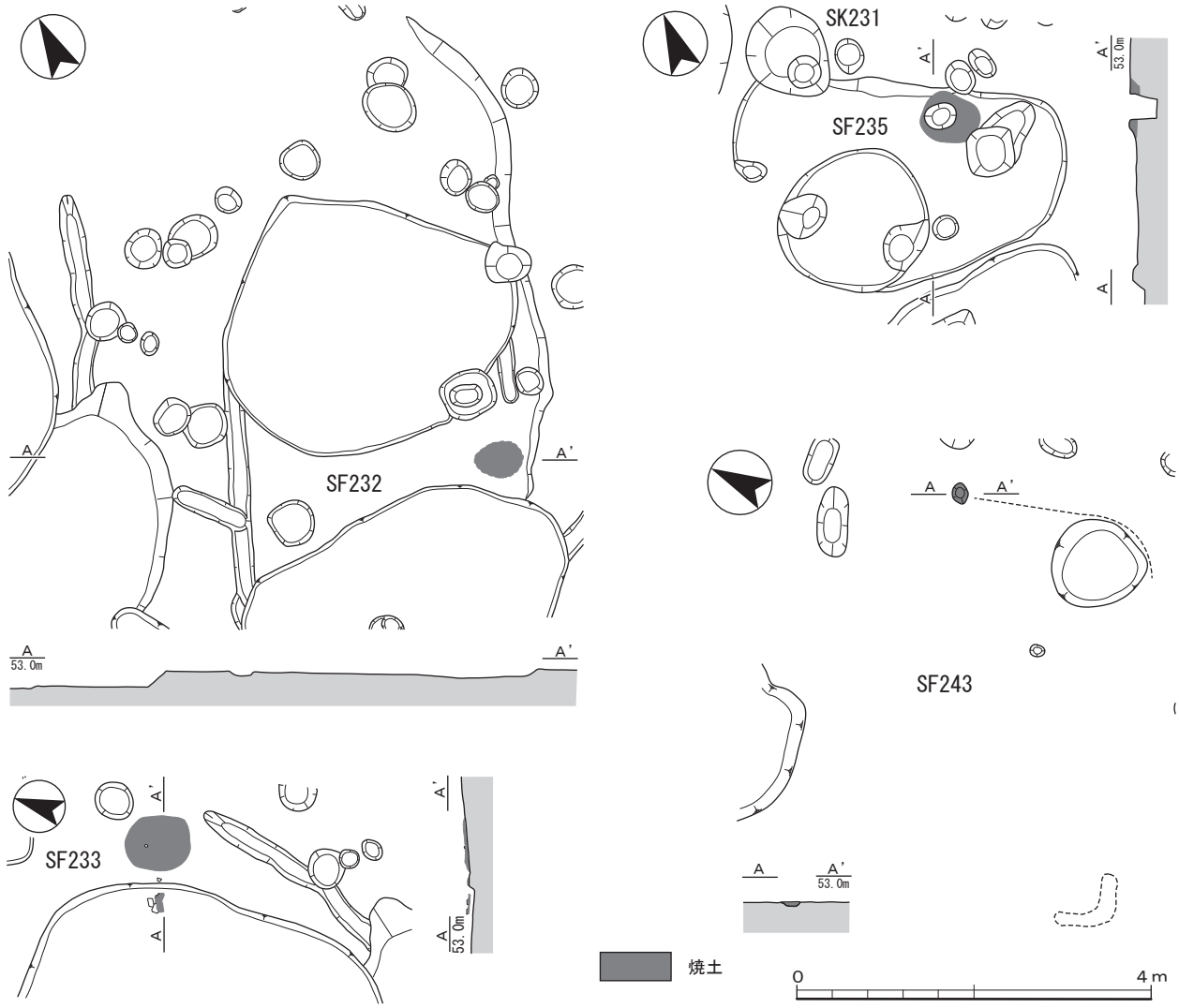


1 7.5YR1.7/1　黒色粘質土（黄褐色土粒微量含）
2 7.5YR2/1　黒色粘質土（黄褐色土粒少量含）
3 10YR2/1　黒色粘質土（黄褐色土多含・土坑壁崩落）
4 撹乱土



1 7.5YR2/1　黒色粘質土
2 7.5YR2/2　黒褐色粘質土（明褐色粘土粒含）

第65図　ＳＫ７・220・229・239・240・249・309 実測図（1:80）



第66図　ＳＦ232・233・235・243、ＳＫ231実測図（1:80）

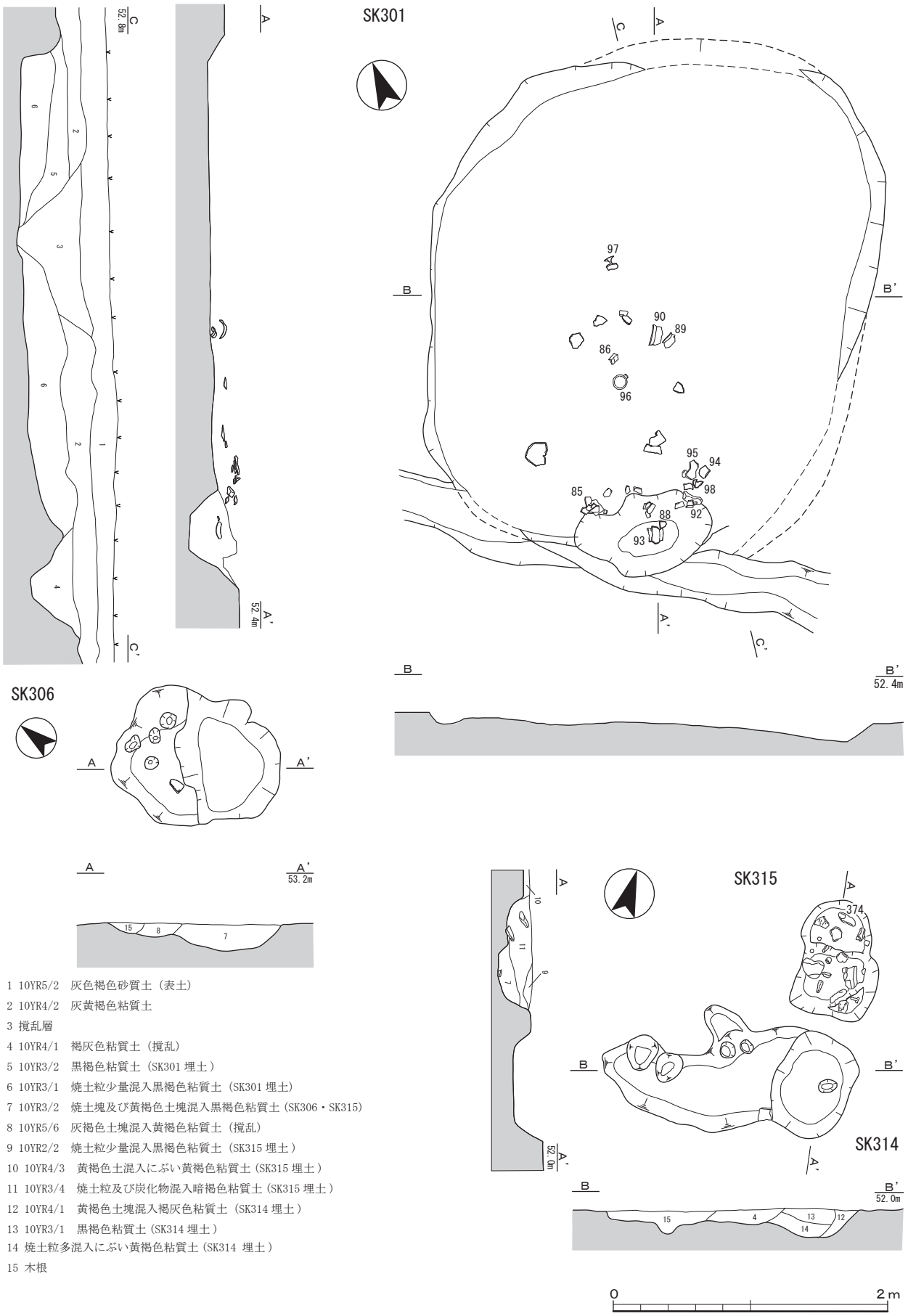
えられない。検出位置がＳＢ215内であるため、これの附属施設の可能性もある。（森川）

ＳＫ２２０（第65図）　調査区中央部で検出した３ｍ×2.4ｍの不整平行四辺形を呈する土坑である。埋土の状況から重複するＳＢ222に先行し、ＳＨ224より後出のものである。埋土は若干の異差はあるものの黒褐色を呈し､深さは検出面から20cm程度、底部は平らである。土師器・須恵器の小片が出土しているが、遺構の性格を示すものではない。（森川）

ＳＫ２２５（第51図）　直径２ｍ前後の不整円形を呈する土坑である。ＳＢ224内部に位置するが、柱通に規制される様子は無く、ＳＢ224との関連については積極的になれない。深さは検出面から10cm未満の浅いもので､埋土は黒色系の粘質土である。浅い土坑ではあるが、比較的多くの土師器長胴甕片が出土している。（森川）

ＳＫ２２８　ＳＨ227と重複して検出され、それより後出のものである。直径１ｍ前後の不整円形を呈し、埋土は黒褐色の粘質土である。深さは検出面から２～３cmと極めて浅く、土坑とするに疑問もある。壺と思われる土師器片が１片出土したのみである。（森川）

ＳＫ２２９（第65図）　第３次調査と第５次調査の２回に分けて調査することになった大型土坑である。長径約6.8ｍ、短径約4.0ｍの不整長円形を呈する。重複するＳＫ309より後出のものである。残存深は約40cmで底部は平坦である。埋土は上下２層に分かれ、黒褐色粘質土を主体とするが、底や壁



1 10YR5/2　灰色褐色砂質土（表土）
2 10YR4/2　灰黄褐色粘質土
3 撹乱層
4 10YR4/1　褐灰色粘質土（撹乱）
5 10YR3/2　黒褐色粘質土（SK301 埋土）
6 10YR3/1　焼土粒少量混入黒褐色粘質土（SK301 埋土）
7 10YR3/2　焼土塊及び黄褐色土塊混入黒褐色粘質土（SK306・SK315）
8 10YR5/6　灰褐色土塊混入黄褐色粘質土（撹乱）
9 10YR2/2　焼土粒少量混入黒褐色粘質土（SK315 埋土）
10 10YR4/3　黄褐色土混入にぶい黄褐色粘質土（SK315 埋土）
11 10YR3/4　焼土粒及び炭化物混入暗褐色粘質土（SK315 埋土）
12 10YR4/1　黄褐色土塊混入褐灰色粘質土（SK314 埋土）
13 10YR3/1　黒褐色粘質土（SK314 埋土）
14 焼土粒多混入にぶい黄褐色粘質土（SK314 埋土）
15 木根

第 67 図　ＳＫ 301・306・314・315 実測図（1:40）

付近では黄褐色土塊を含む。土師器甕・須恵器杯・土錘等比較的多くの遺物が、完形にちかいものはない。（宮﨑）

ＳＫ２３１（第66図）　調査区中央で検出した。直径１ｍの不整円形を呈する。埋土は黒色系の粘質土で、深さは検出面から10㎝程度である。小片ではあるが、多くの土師器杯・甕片が出土している。（森川）

ＳＫ２３６（第65図）　調査区中央で検出した。撹乱に切られ不明確な部分もあるが、長径3.2ｍ、短径2.4ｍの長円形を呈する。深さは検出面から10㎝程度で、底部は概ね平坦である。埋土は黒褐色粘質土であるが、東端では黄褐色土塊を多量に含む。多数の土師器片や須恵器杯の小片が出土したが、遺構の性格等は不明である。（森川）

ＳＫ２４０（第65図）　調査区北部で検出した。直径3.2ｍの不整円形を呈する。深さは検出面から20㎝程度で底部は平坦である。埋土は黒色粘質土単層であるが壁ちかくは褐色土塊が混じる。遺物の出土は皆無にちかく、土師器長胴甕体部の小片が１片出土したに止まる。（森川）

ＳＫ２４１（第64図）　２次調査北部で検出した直径約２ｍの不整円形を呈する。深さは検出面から20㎝程度である。土坑壁は、東側が緩やかに傾斜するのに対し、西側は急傾斜である。床面は概ね平坦であるが、西半は焼土となっている。焼土の厚さは最大4㎝を測る。西側壁も薄く焼土化しているが、床面の焼土とは連結していない。埋土は基本的に黒褐色土であるが、他遺構の撹乱が多く不明確な部分も多い。全体的に焼土塊の混入は少ないが、やはり埋土西側には焼土塊を含む。遺物の出土はほとんど無く、僅かに土師器甕片が出土したのみであるが、南西壁付近から棒状の炭化材が出土している。土坑の性格は不明とせざるを得ないが、土器焼成坑か鍛冶炉が疑われる。磁石により埋土を検索してみたが、鉄粉等は検出できなかった。なお、時期については、炭化材を分析した結果、飛鳥～奈良時代の時期が与えられている。（森川）

ＳＫ２４９（第65図）　調査区南端で検出した。一部調査区外ではあるが、一辺約２ｍの方形を呈する。深さは検出面から30㎝を測り、遺構の中では深い部類である。埋土は黒色粘質土の単層であるが、壁ちかくは黄褐色土塊を含み、壁の崩落と考えられる部分もある。西側の底ちかくで拳大の石を多数検出した。しかし、この部分の地山にも同様の石を含んでおり、これの影響と考え、遺構としての意味はないものと判断した。（森川）

ＳＫ３０１（第67図）　土坑中央部から西半が撹乱されており残存が劣悪な部分もあるが、長辺約４ｍ、短辺約３ｍの隅丸長方形であったと推測できる。検出面からの深は約５cm ～ 18cm であるが、土坑南端には短径60㎝、長径１ｍの長円形の小穴があり、さらに20㎝下がる。埋土は上下２層に分かれるが、下層は埋土の主体で焼土粒を含む。土坑中央から南端の小穴にかけて土師器甕片や須恵器蓋・杯片、鉄釘等が比較的まとまって出土した。出土位置は床面に沿うものから浮いたものまで多様であるが、須恵器高杯（97）が完形にちかい他は小片で、埋納とは考えられない。したがって、土坑の用途については不明であるが、土器や鉄製品の出土する大型の土坑は中野山遺跡に類例[5]があり、工房的な施設、穴倉など諸説考えられる。（宮﨑）

ＳＫ３０４・３０５（第68図）　調査区東側で検出された大型の土坑である。検出時は、この２つの土坑の新旧は不明確だったが、土層観察によりＳＫ 304 がＳＫ 305 に先行することが判明した。ＳＫ 304 は長径約 2.6 ｍ、短径約 2.2 ｍの楕円形を呈する。残存深は約 20cm ～ 35cm である。埋土は上下２層に分かれ、下層は検出面に類似した黄褐色粘質土を呈する。須恵器杯・蓋、土師器甕の小片が出土しているが、主に上層からである。

ＳＫ 305 は東西径約 2.1 ｍであるが、南側を撹乱溝によって切られているため、全体の規模は不明である。残存深は約 20cm ～ 30cm で、中央に向かって深くなる傾向にある。埋土は上下２層に分かれるが、両者とも黒色系の粘質土である。遺物は土師器甕片が出土したのみである。（宮﨑）

ＳＫ３０６（第67図）　調査区北部で検出された土坑である。埋土に焼土塊が混入していたため、竪穴住居のカマド跡のみが残存したものと想定したが、掘削の結果、壁面及び床面が熱を受けておらず、カマドの痕跡とするには無理がある。遺物は土師器

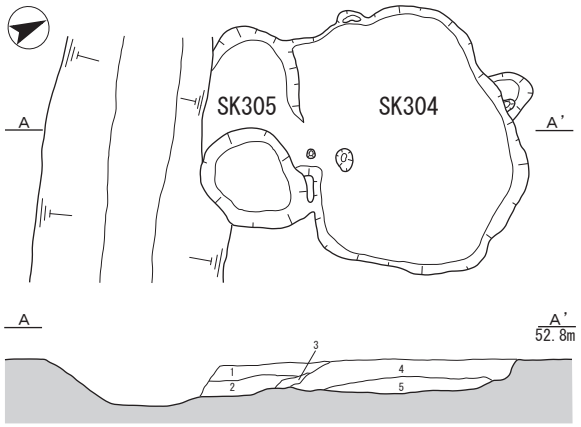
長胴甕片が少量出土している。西半分が木根による撹乱を受けていたため、全体規模ははっきりしないが直径１ｍの不整円形を呈し、残存深は約 10cm である。（宮﨑）

ＳＫ３０９（第 65 図）　ＳＫ 229 の北東隅に重複して検出され、これに先行する土坑であることが、検出時の状況と土層観察により確認できた。ＳＫ 229 に切られるため、形体の全容は不明であるが、長径 2.8 m、短径は 1.6 m以上で、楕円形を呈するものと考えられる。残存深は約 30cm 前後であるが、床面はいびつにへこんでおり、深いところはさらに 15cm ほど下がる。このため複数の土坑が重複している可能性もある。土師器甕・須恵器杯・蓋等が比較的多く出土しているが、遺構の性格は不明である。（宮﨑）

ＳＫ３１１（第 68 図）　調査区北東側で検出された土坑である。長径約 2.3 m、短径約 1.8 mの方形にちかい楕円形を呈す。残存深は約 20cm ～ 30cm で中央に向かって深くなっている。埋土の主体は黒褐色粘質土であるが、底部から５㎝ほどは黄褐色系の粘質土が土坑底から壁面に貼り付く様に分布する。しかし、これより早く土坑西側から流れ込む埋土がある。早期の土坑壁崩落等によるものとしても、土坑に貼り付く土層との前後関係に不自然さが残るが、その原因についての根拠は得られなかった。遺物も土師器甕小片が出したに止まる。（宮﨑）

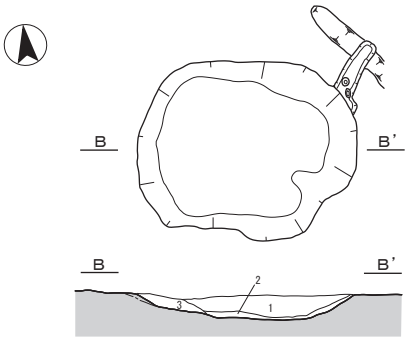
ＳＫ３１４・３１５（第 67 図）　調査区北壁ちかくから検出された隣接する２基の小土坑である。ＳＫ 314 は西側の大半を撹乱されているものの、長径約 0.8 m、短径約 0.6 mの楕円形状に残存した。埋土は基本的に上下２層に分かれるが、下層には焼土粒を含む。しかし、土坑底や壁は焼けていない。遺物は、土師器甕片が出土したに止まる。

ＳＫ 315 はＳＫ 314 の北側に隣接する。半径約 1.0 m、半径約 1.2 mの円形土坑が南北に結合したような形状を呈し、北側が浅く２段底になっていた。埋土の状況を確認したところ、南側の深い部分が先に埋没し、その後、土坑全体が埋没したようである。したがって、２基の土坑の重複とも考えられるが、両者の埋土とも焼土粒を含んでおり、しかもその頻度は上層の方が多く、確証がない。土器が比較的多く出土したが、全て小片である。



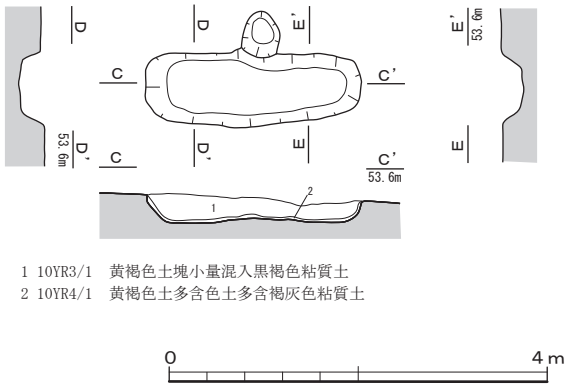
1 10YR2/2　黒褐色粘質土（SK305埋土）
2 10YR2/1　黒色粘質土（SK305埋土）
3 10YR2/1　黒褐色土混入黄褐色粘質土（SK305埋土）
4 10YR5/6　黒褐色粘質土（SK304埋土）
5 10YR5/8　褐灰色土混入黄褐色粘質土（SK304埋土）

SK311



1 10YR3/1　黒褐色粘質土
2 10YR5/4　黒褐色混入にぶい黄褐色粘質土
3 10YR4/1　黄褐色土少量含入褐灰色粘質土

SK317



1 10YR3/1　黄褐色土塊小量混入黒褐色粘質土
2 10YR4/1　黄褐色土多含色土多含褐灰色粘質土

第 68 図　ＳＫ 304・305・311・317 実測図（1:80）

ＳＫ 314・315 とも埋土に焼土粒を含み、ＳＫ 315 からは比較的多くの土器が出土しているため、両者とも竪穴住居に付随する遺構である可能性も考えられるが､その根拠となる材料は得られなかった。（宮﨑）

ＳＫ３１７（第 68 図） 調査区東側で検出された土坑である。長径約 2.2m、短径約 0.8m の長円形を呈す。残存深は約 20cm ～ 30cm で中央部がやや浅い。土坑内側に貼りつくように、褐灰色粘質土に地山の黄褐色土が多く混じる層が薄く存在するが、自然埋没結果とは考えにくい。この状況からこの土坑の内側に何らかの加工が為されていた可能性が考えられる。遺物は、須恵器杯の 1/4 片が一片出土している。当初、その平面形状から墓壙を想定したが、それを示す根拠は得られなかった。（宮﨑）

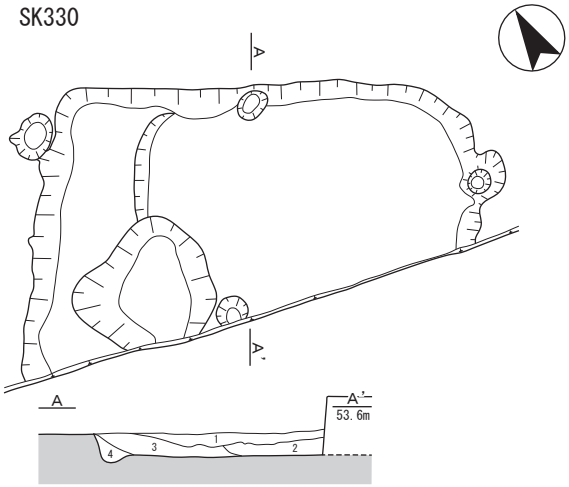
ＳＫ３２０（第 43 図） ＳＨ 318 の南東隅に重複して検出され、ＳＨ 318 より後出のものである。直径 1.5 ｍ前後のほぼ円形を呈し、深さは検出面から 20㎝程度である。土師器甕の小片が出土したに止まり、土坑の性格は不明である。（森川）

ＳＫ３２６ 最初の検出時点では、ＳＫ 327 と一部重複し、それより後出のものと判断した。しかし掘削の結果、両者は分離した。したがって、重複は検出面ちかくの僅かな部分であったため、前後関係についての根拠は弱いものとなった。長径５ｍ、短径３ｍの不整長円形を呈する大型の土坑で、深さは検出面から 20 ～ 30㎝で底部は平坦である。出土遺物は土師器甕片が出土したのみで、遺構の性格は不明である。（森川）

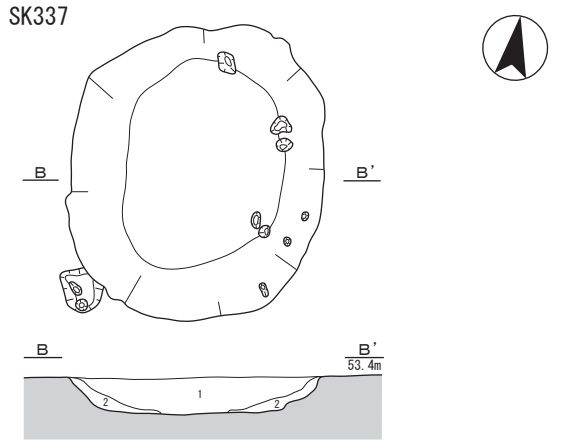
ＳＫ３２９ 調査区中央部で検出した。直辺４ｍ、短辺２ｍの隅丸長方形を呈する。深さは検出面から 10 ～ 20㎝程度で底部は平坦である。土師器甕の小片が出土したに止まり、土坑の性格は不明である。他の大型土坑が不整形な平面形を呈するのと比べ比較的整った長方形を呈しており、近代の撹乱の可能性も否定できない。（森川）

ＳＫ３３０（第 69 図） 調査区南端で検出された土坑である。南側は調査区外へ広がり全体の形状は不明であるが、東西約 4.7 ｍ、南北約 3.0 ｍ以上の方形を呈す。その平面形態と北東隅付近で埋土に焼土粒が認められたため竪穴住居を想定した。しかし、周辺で検出されている竪穴住居と比べ、壁の立ち上がりが緩やかなこと、周溝、主柱穴がないこと、検出面からの深さが 30㎝を測り、周辺の竪穴住居に比べて極端に深いこと、さらに焼土粒を含むものの明確な焼土が検出されなかったことから土坑と判断した。（宮﨑）

ＳＫ３３３（第 46 図） ＳＫ 334 と重複し、それより後出のものである。検出時点ではＳＫ 335 とも重複し、それに切られる状況であったが、掘削の結果、重複は認められない状況である。直径 1.2 ～ 1.6 ｍの不整楕円形を呈し、深さは検出面から 30㎝ほ



1 10YR3/1 黒褐色粘質土（SK330埋土）
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に黄褐色土がまだらにまじる（SK330埋土）
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4 10YR5/2 にぶい黄褐色粘質土



1 10YR3/1 黒褐色粘質土
2 10YR3/1 黒褐色粘質土に黄褐色土がまだらに混じる

第 69 図 ＳＫ 330・337 実測図（1:80）

どであるが、北半は直径１ｍの円形状に10cmほど深くなる。須恵器甕片が多数出土した他は、特筆すべき遺物の出土もなく土坑の性格は不明である。（森川）

ＳＫ３３４（第46図）　調査区南端のＳＨ332と重複して検出された。ＳＨ332でも記述したように、検出状況からＳＨ332下層住居廃絶後に掘削され、ＳＨ332上層住居時には埋没している。このことからＳＨ332の建替えと密接な関係にあることが想定されるが、詳細は不明である。検出当初は、これも竪穴住居を想定した。深さは20cm未満で底部は平坦である。しかし、４ｍ×２ｍの不整長方形を呈し、周溝や焼土も認められないため土坑とした。土師器甕片が若干出土したに止まる。（森川）

ＳＫ３３５（第46図）　ＳＫ334と重複し、それより後出のものである。直径80cm～1.2ｍの不整長円形を呈する。単一の土坑とするには疑問の残る形体であるが、底部は平坦で検出面から10cm程度の深さである。土師器甕の小片が出土したのみで、土坑の性格は不明である。（森川）

ＳＫ３３７（第69図）　調査区南端ちかくで検出された土坑である。長径約３ｍ、短径約2.7ｍの楕円形を呈する。残存深は約40cmと比較的深い。埋土は黒褐色粘質土であるが、壁に沿って黄褐色土が混じる。土師器甕、須恵器杯・蓋・高杯が出土しているがいずれも小片であり、遺構の性格は不明である。（宮﨑）

ＳＫ３４２　調査区南端で検出した。大半が調査区外のため、全体の形状は不明であるが、直径３ｍ以上の円形を呈する土坑と考えられる。深さは検出面から15cm未満の浅いもので底部は平坦である。遺物は土師器・須恵器の甕片が出土したのみで、土坑の性格は不明である。（森川）

ＳＫ３４６（第57図）　ＳＢ344柱穴と重複して検出された土坑で、ＳＢ344に先行するものである。直径75cmの円形を呈し、深さは検出面から20cm程度である。土師器甕、須恵器壺片が少量出土したが、遺構の性格は不明である。（森川）

ＳＫ４０２（第49図）　ＳＨ302とＳＨ401を切る大型土坑で、平面形は不整長方形である。残存深は20～40cmで、底面は舟底状を呈する。当初、竪穴住居の可能性を考えて掘削を進め、北西隅はＳＨ401の北西隅の可能性も考慮した。しかし、北西隅は浅くなだらかに中心に向かって落ち、20cmの段差をもって床面に至る。したがって、北西隅は自然地形による落ち込みであると判断した。埋土の上部から須恵器杯の蓋と身に加え土師器小片が多数出土したが、埋土の下部や床面からの遺物の出土はなかった。（宮﨑）

ＳＫ４０３（第49図）　ＳＨ401床面で検出した。長径1.5ｍ、短径約90cmの楕円形を呈する土坑で、深さは約20cmである。底面は舟底状で、土師器片や須恵器甕片が出土した。特に、器壁の厚い土師器片があり移動式カマドの小片の可能性もある。その場合、ＳＨ401と関連する遺構の可能性が生じるが、確証はない。（宮﨑）

ＳＫ４０５（第49図）　ＳＨ401カマドの南側に位置する土坑である。平面形は不整円形で底面は摺鉢状を呈する。残存深は30～40cmを測る深いものである。ＳＨ401貯蔵穴の可能性も考慮したが、ＳＨ401東壁想定位置より外へ張り出すことになる位置関係から、ＳＨ401に伴うものではないと考えられる。遺物は出土しなかった。（宮﨑）

ＳＫ４０７（第41図）　ＳＨ302の貯蔵穴ＳＫ406の南で検出された土坑である。位置的にはＳＨ302内となるが、ＳＨ302との関係や前後関係はＳＨ302の残存が劣悪なこともあり、不明である。平面形は長径約1.5ｍ、短径約１ｍの長方形にちかい楕円形で底面は船底状である。土師器甕や須恵器蓋が出土しているが、いずれも小片である。（宮﨑）

ＳＫ４０８　調査区東部で検出した直径１ｍほどの円形土坑で、深さは検出面から15cmを測る。埋土に焼土が混じり、須恵器蓋が出土したが、小片である。土坑の性格等は不明である。（宮﨑）

５．溝

ＳＤ１８　調査区西北部で検出した幅20cmの溝で、延長１ｍほどが検出できた短いものである。底部は検出面から30cm程度を測るが、溝の中間地点で浅くなり、２基の小土坑が縦列に重複した様相をみせる。土師器長胴甕小片が出土したのみである。（森川）

ＳＤ４９　調査区西部で検出した。ＳＨ48を切る後世の撹乱溝の底部に残存していた。上部は撹乱

溝により消滅しているが、６㎝程度の深さを確認している。幅は20㎝程度で延長５ｍちかくを確認した。西側はＳＨ48と重複するかたちになるが、両者の重複部分は撹乱溝により消滅しており、前後関係は不明である。土器の出土もないが、埋土上部で鉄片が出土している。（森川）

ＳＤ６１　調査区南西部、ＳＫ54の西側で検出した。最大幅は50㎝、延長は1.2ｍ、深さは検出面から20㎝であるが東側は一段浅く５㎝程度である。２基の小土坑の重複の結果、溝状を呈するものかも知れない。須恵器の甕片が出土したのみである。（森川）

ＳＤ７２・７４　調査区西端ちかくで検出した断続的に延びる溝である。幅40㎝前後、延長6.5ｍを断続的に確認した。深さは検出面から10㎝足らずの浅いものである。土師器甕の小片が出土したのみで、溝の性格は不明であるが、１ｍの間隔を空けて北側に同様な溝が並走する。さらに2.2ｍの間隔を空けて同様な２条の溝が並走する。付近には他にも並走する同様な溝があることから、耕作にともなうものかもしれない。（森川）

ＳＤ８７　調査区南西端ちかくで検出した。幅80㎝、延長２ｍの土坑状の溝である。深さは検出面から20㎝で須恵器の壺や甕片が出土している。（森川）

ＳＤ１３５　調査区西部で検出した。幅25㎝、延長２ｍの南北に延びる溝である。4.5ｍ東側にも同様な溝が並走する。出土遺物はなく、耕作に伴う溝の残存かもしれない。（森川）

［註］

① 中野山遺跡第13次調査で確認した。

②・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012
・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013
・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014
・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』2016

③ 三重県埋蔵文化財センター『莵上遺跡発掘調査報告』2005

④ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

⑤・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013
・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014

V．遺物

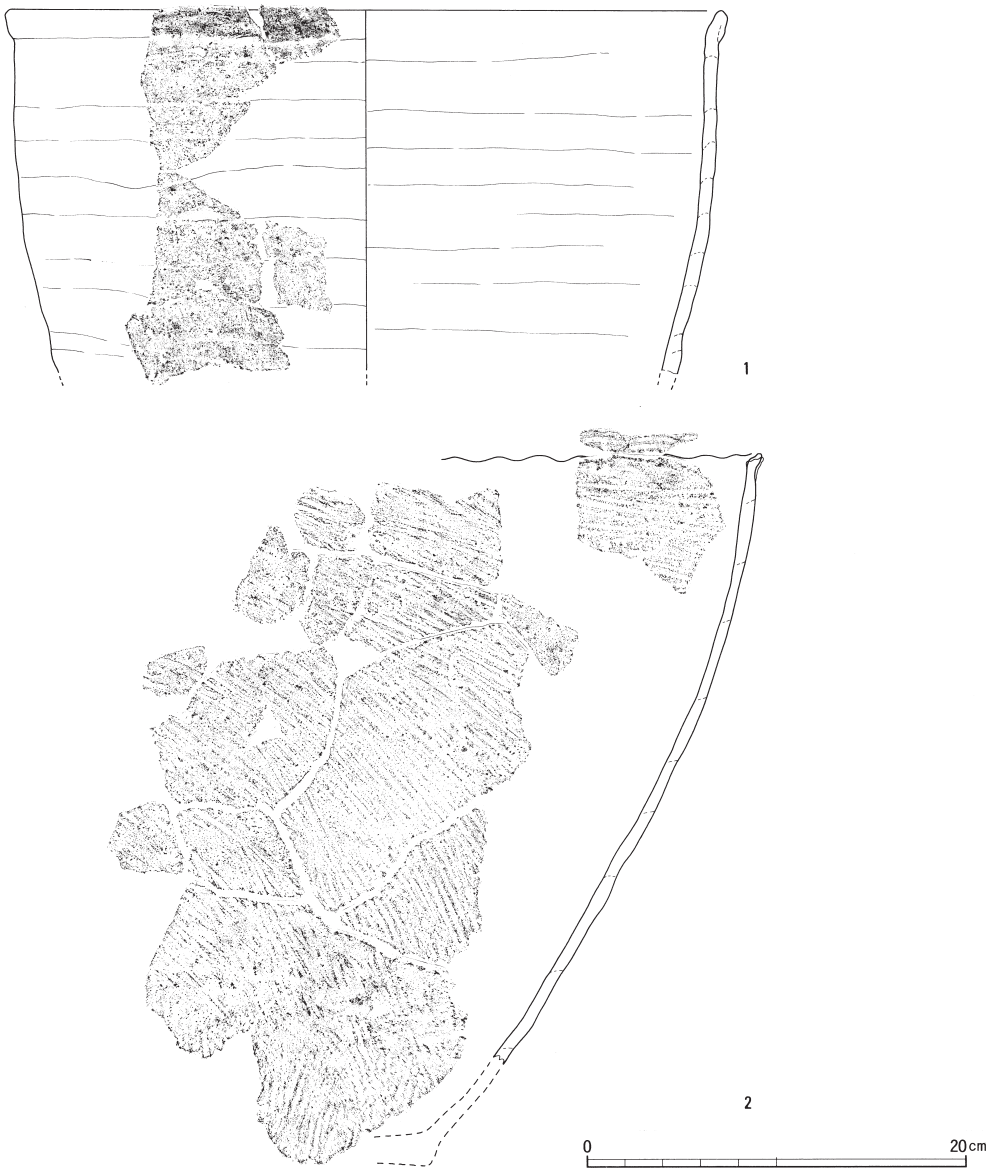
多数の竪穴住居等を検出しているものの、既述したように遺構の残存状況が劣悪なものが多く、良好な一括資料は得られていない。出土遺物の大半が古墳時代後半から奈良時代にかけての土師器と須恵器で、他に僅かに縄文土器、灰釉陶器、製塩土器等が出土している。

1．ＳＸ 136 出土遺物（第 70 図）

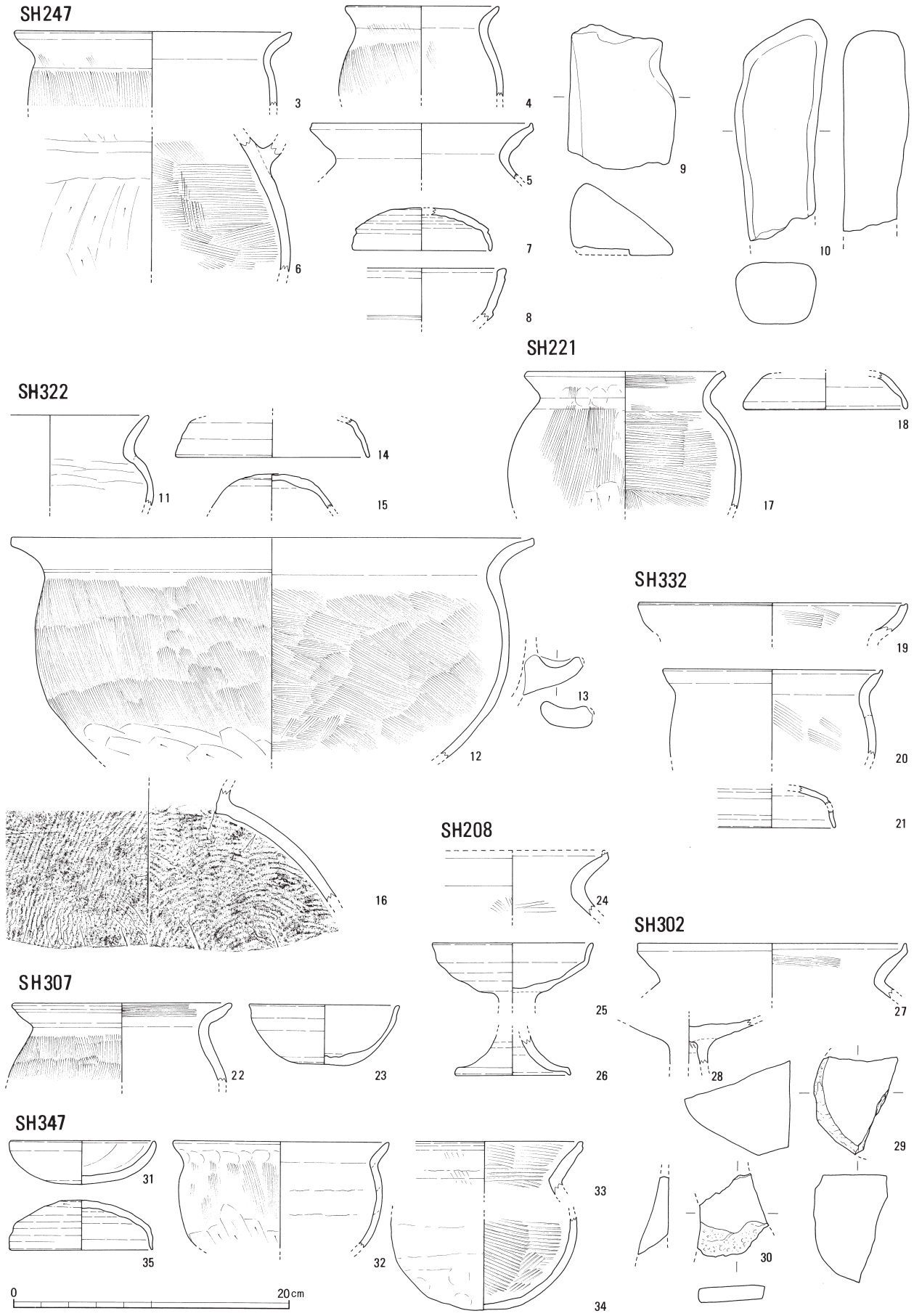
ＳＸ 136 に埋設された１・２があり、両者とも晩期に属するものであるが、突帯は認められない。

１は深鉢で口縁端部を外に折り返し肥厚させている。折り返した口縁端部には強いヨコナデを施すが、体部外面は未調整、内面のナデは弱いものである。外面に炭化物の付着がみられる。

２も深鉢であるが、１のような口縁端部の肥厚はなく、口唇部上面に押圧的な刻みを施し、結果的に波長の短い波状口縁状に仕上げている。体部外面には条痕を施し、前述した口唇部の刻みも同一工具と



第 70 図　ＳＸ 136 出土遺物実測図（1:4）



第 71 図　ＳＨ 208・221・247・302・307・322・332・347 出土遺物実測図（1:4）

推測される。

２．ＳＨ 247 出土遺物（第 71 図）

３～５は土師器甕である。３・５は口縁部外面に面をもつが、４には面はなく尖り気味におさめる。６も土師器であるが、体部の小片である。半球状を呈する体部に把手が付き、外面をヘラケズリ、内面にハケメで調整する形体・調整ともに特異なものである。移動式カマドの小片かも知れない。７は須恵器の蓋で口径は 10cmまで縮小しているが、天井部と口縁部の境には弱い稜が残る。８は施釉陶器鉢の小片で混入と考えられる。10 は砥石としたが使用痕跡が弱く、９は砥石とするには使用痕に疑問があり、砕片としておく。

３．ＳＨ 322 出土遺物（第 71 図）

竪穴住居カマド周辺を中心に比較的多くの遺物が出土したが、土師甕体部の小片が多い。

11 ～ 13 は土師器で、11 は壺、12 は鍋である。11 の内面調整は、ヘラにより押し引くようなナデである。13 は 12 の把手の可能性がある。把手は本体に差し込む手法で設置される。

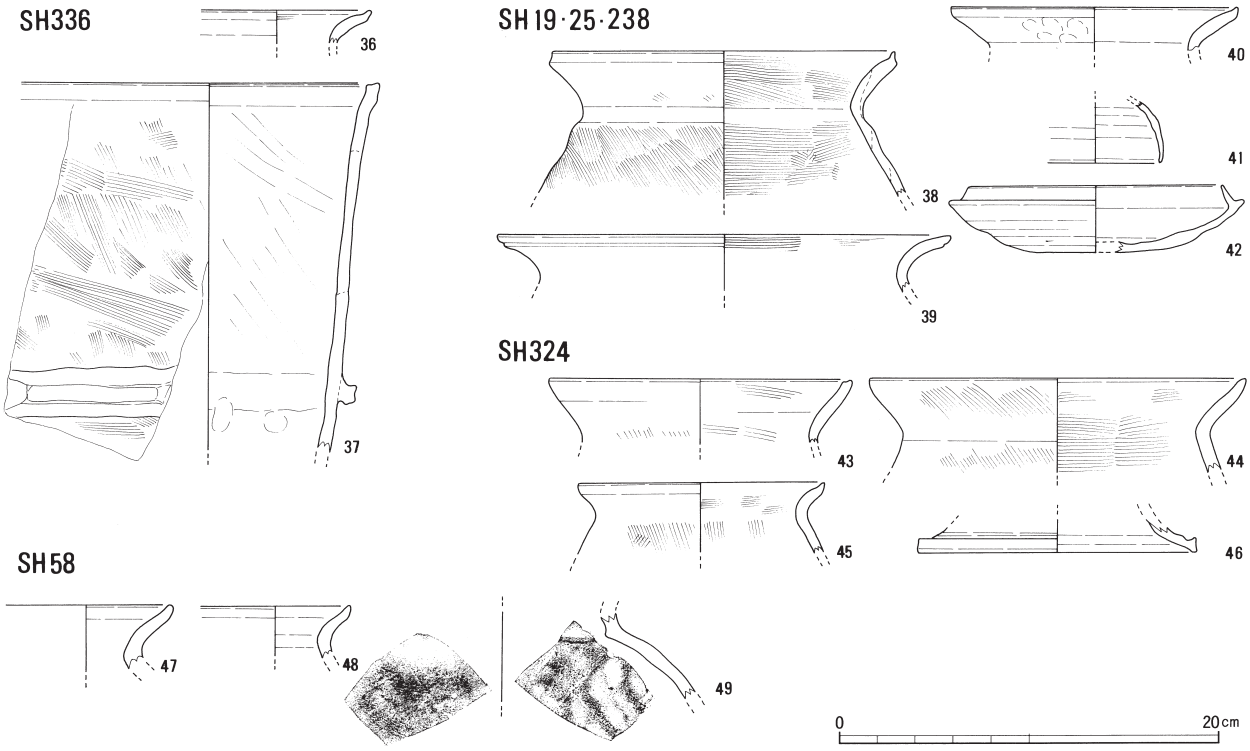
14 ～ 16 は須恵器で、14･15 は蓋、16 は甕である。14 の天井部が平坦であるのに対し、15 は半球状である。14 は口径 14cmを測るが、天井部と口縁部の境の稜は消失している。

４．ＳＨ 221 出土遺物（第 71 図）

土師器甕、須恵器蓋・壺・甕が出土しているが、図示できたものは土師器甕（17）と須恵器蓋（18）しかない。17 の体部外面下半にはヘラケズリが施されるようである。18 は口径が 12cm足らずまで縮小し、平坦な天井部をもつものの天井部と口縁部の境の稜は消失している。

５．ＳＨ 332 出土遺物（第 71 図）

19・20 は土師器甕、21 は須恵器蓋である。19 は受口状の口縁部を呈する長胴甕である。口縁端部は肥厚せずに内傾気味で、伊賀地域では、近江からこの形態を受け入れた初期のもの[①]とされる。21 は小片のため口径は不明であるが、天井部と口縁部の境に段状の稜を残す。他に須恵器高杯の小片も出土している。



第 72 図　ＳＨ 19・25・238・58・324・336 出土遺物実測図（1:4）

６．ＳＨ 307 出土遺物（第 71 図）

土師器甕、須恵器蓋・椀・甕が出土しているが、図示できたものは土師器甕（22）と須恵器椀（23）である。22 の口縁端部の面は不明瞭で、丸く収める。23 の底部外面は未調整であるが、体部との境を一周のみロクロケズリする。また、酸化焼成である。

７．ＳＨ 208 出土遺物（第 71 図）

出土した遺物の多くは土師器の小片で、図示できたものは土師器甕（24）、須恵器高杯（25･26）である。高杯は無蓋で透孔は施されない。

８．ＳＨ 302 出土遺物（第 71 図）

27 は土師器甕、28 は須恵器高杯、30 は砥石で、よく使い込まれている。29 は砕片とした。４ヵ所の分割面があり、被熱が認められる。カマドの支柱石とするには小さい。図示したものの他に、Ⅱ - ５～６段階[②]の須恵器蓋・杯の小片が出土している。また、外面カキメ、内面に同芯円文が施される甕の体部小片ではあるが、焼成は低温の酸化焼成で土師器のようである。

９．ＳＨ 347 出土遺物（第 71 図）

ＳＨ 347 からの出土遺物はないが、建物内で検出した土坑等から出土したものをここで扱う。31 は土師器椀、32 ～ 34 は土師器甕、35 は須恵器蓋である。31 の内面には放射状の工具痕があるが、暗文ではない。32・33 は口縁端部外面に弱い面をもつが、33 はさらに弱い沈線を巡らす。32 の体部外面下半はヘラケズリで調整され、34 も磨滅のため不明確ではあるが、その可能性が高い。35 は半球状の形体を呈し、口径が 10㎝程度にまで縮小している。天井部と口縁部の境が不明瞭であるが、若干凹線状となっている。

10．ＳＨ 336 出土遺物（第 72 図）

多数の土師器甕片や須恵器甕、Ⅱ - ６段階[③]の須恵器蓋小片等が出土しているが、図示できたものは、土師器甕（36）と埴輪（37）である。36 は口縁端部外面に面をもつものであるが、小片のため詳細は不明である。37 は円筒埴輪で、比較的高い突帯を貼り付ける。外面のハケメは残存部で見る限り不定方向である。

11．ＳＨ 19・25・238 出土遺物（第 72 図）

38 ～ 40 は土師器甕、41 は須恵器蓋、42 は須恵器杯である。38・40 は口縁端部に面をもつが、38 は鋭利な仕上げで端部をつまみ上げる。39 の口縁端部の面は緩慢で外傾するが、一条の沈線を巡らす。

41 は天井部から口縁部へ連続的に繋がる形体で、稜は消失している。42 は受部をもつもので口径 14 ㎝を測り、底部外面の狭い範囲ではあるがロクロケズリを施す。

他に土師器壺や須恵器甕の小片が出土している。

12．ＳＨ 324 出土遺物（第 72 図）

43 ～ 45 は土師器甕、46 は須恵器高杯である。43・44 の口縁部は若干内弯気味を呈し、43 はＳＨ 332 出土の 19 と同類、44 もその可能性がある。43 の口縁端部は上方に面をもち、やや凹線状を呈する。

図示したものの他に、土師器甕の体部片であるが、タタキで調整されたものがある。

13．ＳＨ 58 出土遺物（第 72 図）

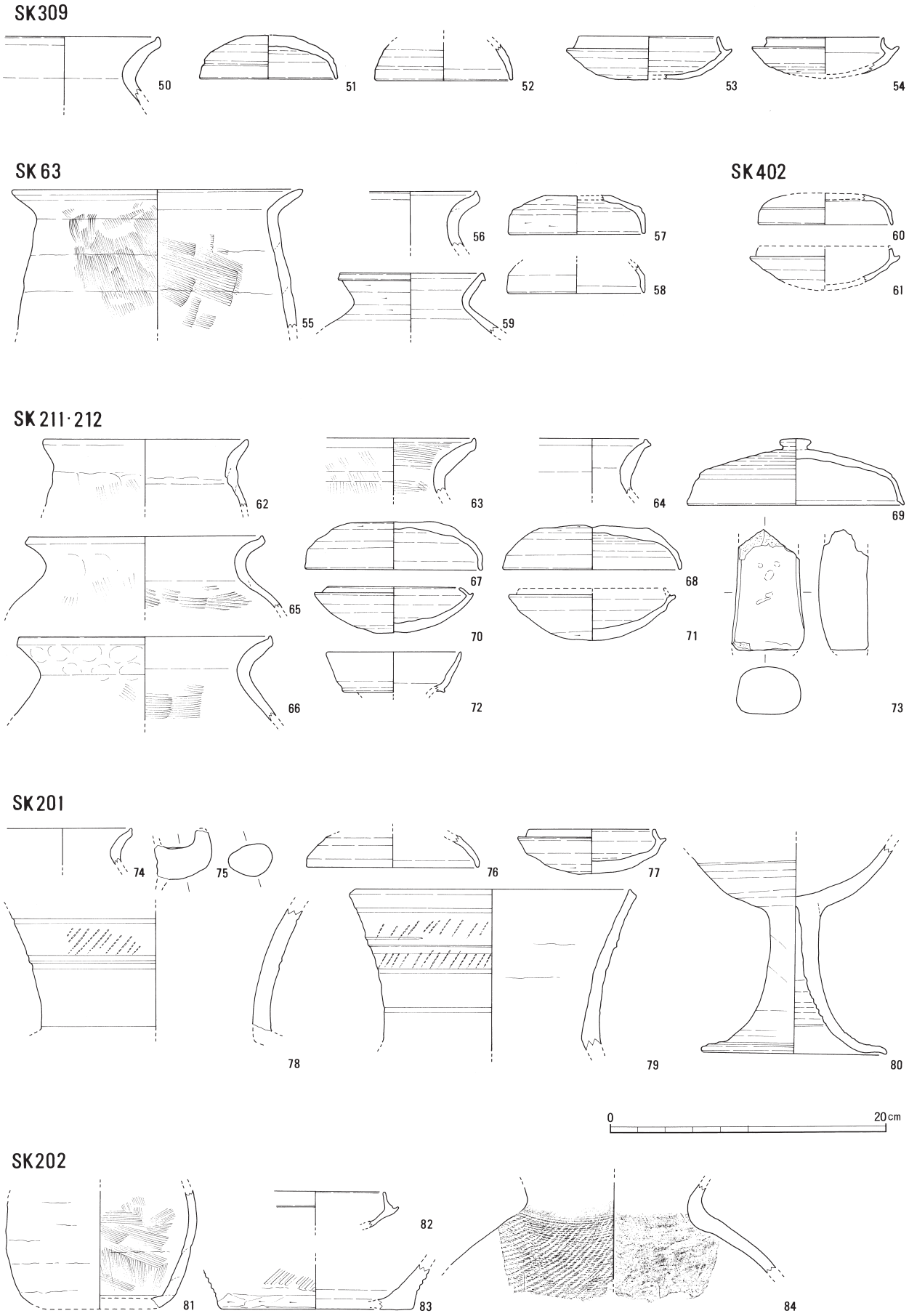
土師器甕、須恵器壺・甕が出土しているが、図示できたものは土師甕（47・48）と須恵器壺（49）である。土師器甕は両者とも口縁端部の面は不明瞭で、47 は丸く収めている。

14．ＳＫ 309 出土遺物（第 73 図）

土師器は甕の小片が多数出土しているが、図示できたものは 50 のみである。口縁部に面をもち、端部を摘み上げる。須恵器は、51・52 が蓋、53・54 が杯である。これらの口径は 10㎝以下に縮小しているが、天井や底部外面にはロクロケズリで調整している。さらに 51 は、天井部と口縁部の境に沈線が残る。他に須恵器甕の小片も出土している。

15．ＳＫ 63 出土遺物（第 73 図）

土師器は甕の小片が多数出土しているが、図示できたものは 55 と 56 である。55 は体部の膨らみが小さい長胴甕である。56 は口縁部に面をもつが、55 のそれは不明瞭である。



第73図　ＳＫ63・201・202・211・212・309・402出土遺物実測図（1:4）

須恵器は蓋（57・58）、壺（59）がある。蓋は口径10cm程度であるが、57は天井部と口縁部の境に弱い凹線状になった沈線を残し、天井部にもロクロケズリを施す。

16. ＳＫ402出土遺物（第73図）

土師器は甕の小片が多数出土している他に、須恵器蓋・杯・甕の小片がある。そのなかで図示できたものは須恵器蓋（60）と杯（61）である。60は口径が10cm以下に縮小しているが、天井部と口縁部の境に沈線を施す。

17. ＳＫ211・212出土遺物（第73図）

62～66は土師器の甕である。口縁部に面をもつものであるが、62は弱く、尖り気味の口縁部を呈する。いずれもハケメで調整するが、63のハケメは口縁端部ちかくまで残る。

67～69は須恵器の蓋、70・71は杯、72は口縁部片で無蓋高杯か鼎か迷う。73は敲石である。棒状の自然石を２面で分割する。敲痕は棒状を呈する石材の腹面にある。蓋のうち69は口径が大きく、特異な形態である。高杯の蓋のようであるが摘み中央部の窪みはない。天井部と口縁部の境に沈線を残すが、天井部のロクロケズリは明瞭ではなく、ロクロナデが及んだ結果であろうか。67・68は杯蓋で、両者とも口径13cm足らずを測り、今回の調査で出土した杯蓋としては大型のものである。しかし、68が天井部外面にロクロケズリを施すのに対し、67のそれは一周に止まる。

図示したもの以外には、須恵器壺・高杯、鉄滓の小片が出土している。

18. ＳＫ201出土遺物（第73図）

74･75は土師器の甕､76～80は須恵器で､76は蓋、77は杯、78・79は甕、80は高杯である。77の口径は9cmまで縮小しているが、天井部にはロクロケズリを施している。杯としたが、壺蓋として製作されたものかもしれない。甕の口縁部は沈線と刺突列点文で装飾されるが、列点文は78が１段に対し79は２段に施す。80は透孔をもたない高杯で、無蓋と思われる。SK202出土のものと接合した。

19. ＳＫ202出土遺物（第73図）

81は土師器の甕である。体部下半片で底部を欠損するが、平底を呈する特異な形態である。円盤状の底部に体部を接合させている様子が分かる。外面のハケメは省略されており、粗雑な仕上げのものである。

82～84は須恵器で、82は杯、83は壺、84は甕である。83は酸化焼成で、平底を呈する。僅かにタタキが観察され、底部との境をヘラケズリで粗く調整する。須恵器としたが、中世以降の陶器で後世の混入かも知れない。これらの他に鼎や甕の小片も出土している。

20. ＳＫ301出土遺物（第74図）

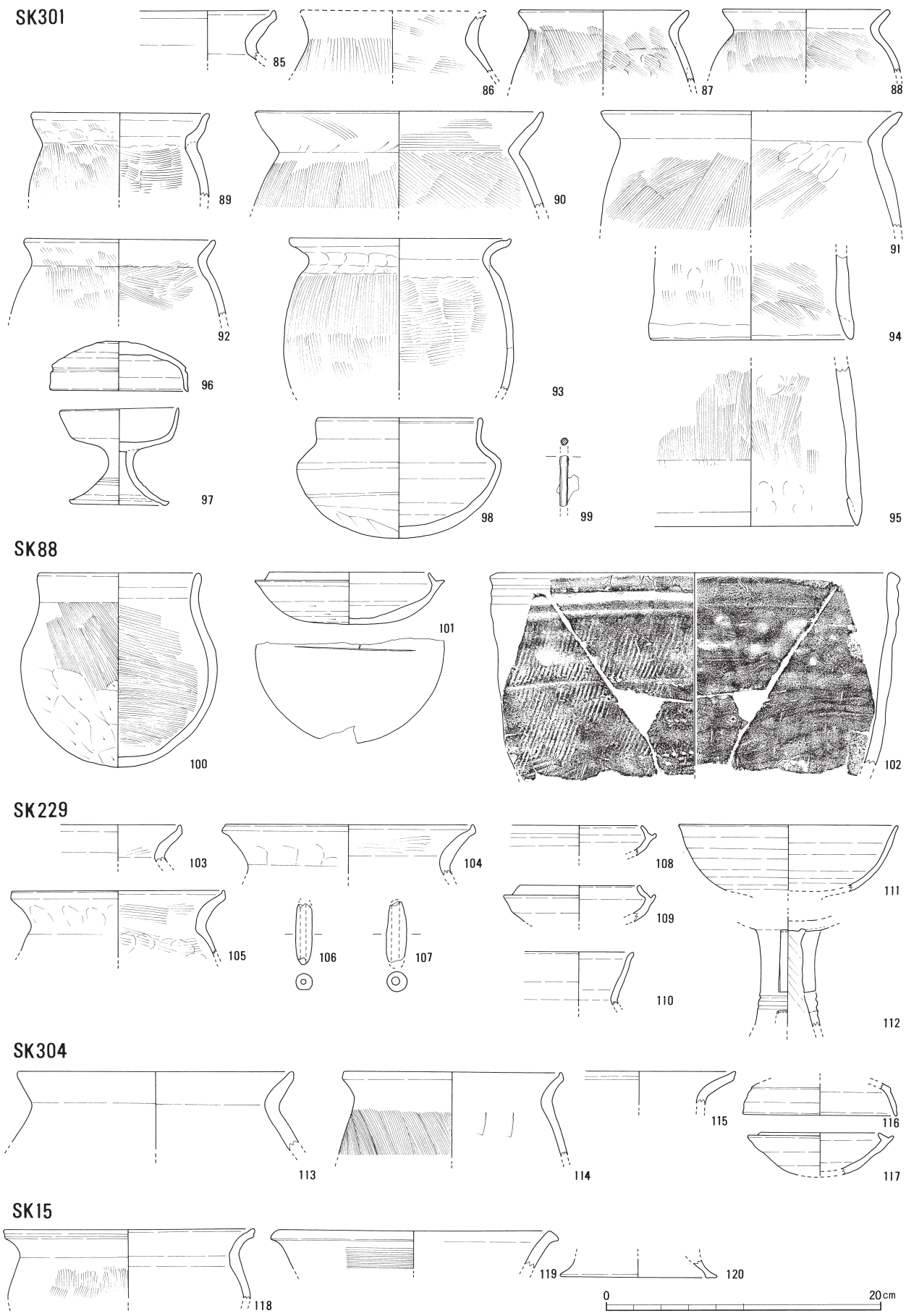
比較的まとまった出土があったが、97を除いて完形にちかいものはない。85～95は土師器、96～98は須恵器、99は鉄製品である。

土師器には甕（85～93）と甑（94・95）がある。甕は85を除き口縁部の面は不明瞭で、89は内弯傾向を示す。95は、甑としては内面の仕上げはやや粗雑である。

須恵器は蓋（96）、壺（98）、高杯（97）があり、図示できなかったものに杯､甕の小片がある。96は、口径10cm程度であるが、天井部外面をロクロケズリし､口縁部との境に沈線を残す。98の底部外面は、ロクロケズリの後ナデを施している。

21. ＳＫ88出土遺物（第74図）

土師器長胴甕片、須恵器壺・高杯等が出土している。図示した100は土師器甕で、口縁部が短く直立し、壺または鉢にちかい形態を呈する。101は須恵器杯で、口径13cm以上の大型のもので、底部にロクロケズリを施すが、口縁部は内傾し短い。底部外面には直線状の記号が焼成前に鋭利な工具で記される。102は一見土師器状の酸化焼成であるが、土師器としては高温で焼成されている。調整も須恵器に一般的なタタキによるため、酸化焼成の須恵器とした。器形は円筒状または鉢状で口縁部付近に弱い凹線を２条巡らす。円筒埴輪や土管の可能性も考えたが、一応甑としておくものの、陶邑ではⅠ－３段



第 74 図　ＳＫ 15・88・229・301・304 出土遺物実測図（1:4）

階で既に僅少となっている器種[4]である。

22. ＳＫ 229 出土遺物（第 74 図）

103 ～ 105 は土師器の甕、106・107 は土錘、108・109 は須恵器の杯、110 は壺である。111 は受部に装飾が無く無蓋高杯の可能性もあるが、器台としておく。112 は長脚高杯の脚片で、透孔は２段、２方である。その他、図示できなかったものに蓋、甕がある。

23. ＳＫ 304 出土遺物（第 74 図）

113 ～ 115 は土師器の甕、116 は須恵器の蓋、117 は杯である。114 の体部内面の調整は工具によるナデで、ハケメを呈しない。他に須恵器の甕も出土している。

24. ＳＫ 15 出土遺物（第 74 図）

118 は土師器の甕であるが、内面のハケメは認められない。119 は須恵器で、壺の口縁部としたが、甕の可能性もある。120 は須恵器の壺脚と考えられる。他には須恵器蓋・杯、焼けた粘土塊等が出土している。

25. ＳＨ 48 出土遺物（第 75 図）

121・122 は土師器の甕、123 は須恵器の蓋、124 は杯である。123 は比較的粘土塊側で切り離され、しかも未調整のため器壁が厚く、粗雑な仕上げとなっている。124 はしっかりした高台をもつ杯である。

26. ＳＨ 321 出土遺物（第 75 図）

125 ～ 128 は土師器、129 ～ 132 は須恵器である。土師器には杯（125）、甕（126 ～ 128）があり、須恵器には杯（129 ～ 131）、壺（132）がある。他に須恵器甕小片も出土している。125 は磨滅のため不明瞭ではあるが、口縁部外面にはヘラミガキが施される。器高が高く椀にちかい形態である。土師器甕は頸部が屈曲するもの（126･128）と緩慢なもの（127）がある。127 の底部片は体部と接合できなかった。あるいは別個体かもしれない。128 は口縁端部外面に浅い沈線を巡らす。須恵器杯には高台をもつもの（131）ともたないもの（130）があるが、130 は底部にロクロケズリを施し、丁寧に調整している。

27. ＳＨ 245 出土遺物（第 75 図）

133・134 は土師器の甕である。133 は頸部の屈曲が弱いもので口縁端部外面は凹線状になる。134 は上半を欠損しているが、平底を呈する特異な形態の甕である。外面のヘラケズリは少なくとも胴部下半以上に及んでいることが分かる。

135 ～ 137 は須恵器の蓋、138 は須恵器の杯、139 は製塩土器、140 はユーズドフレイクである。須恵器の蓋及び杯は欠損のため器形は不明だが、蓋はいずれも宝珠摘みが付き、杯は高台をもつものと思われる。140 は混入であろう。

28. ＳＨ 73 出土遺物（第 75 図）

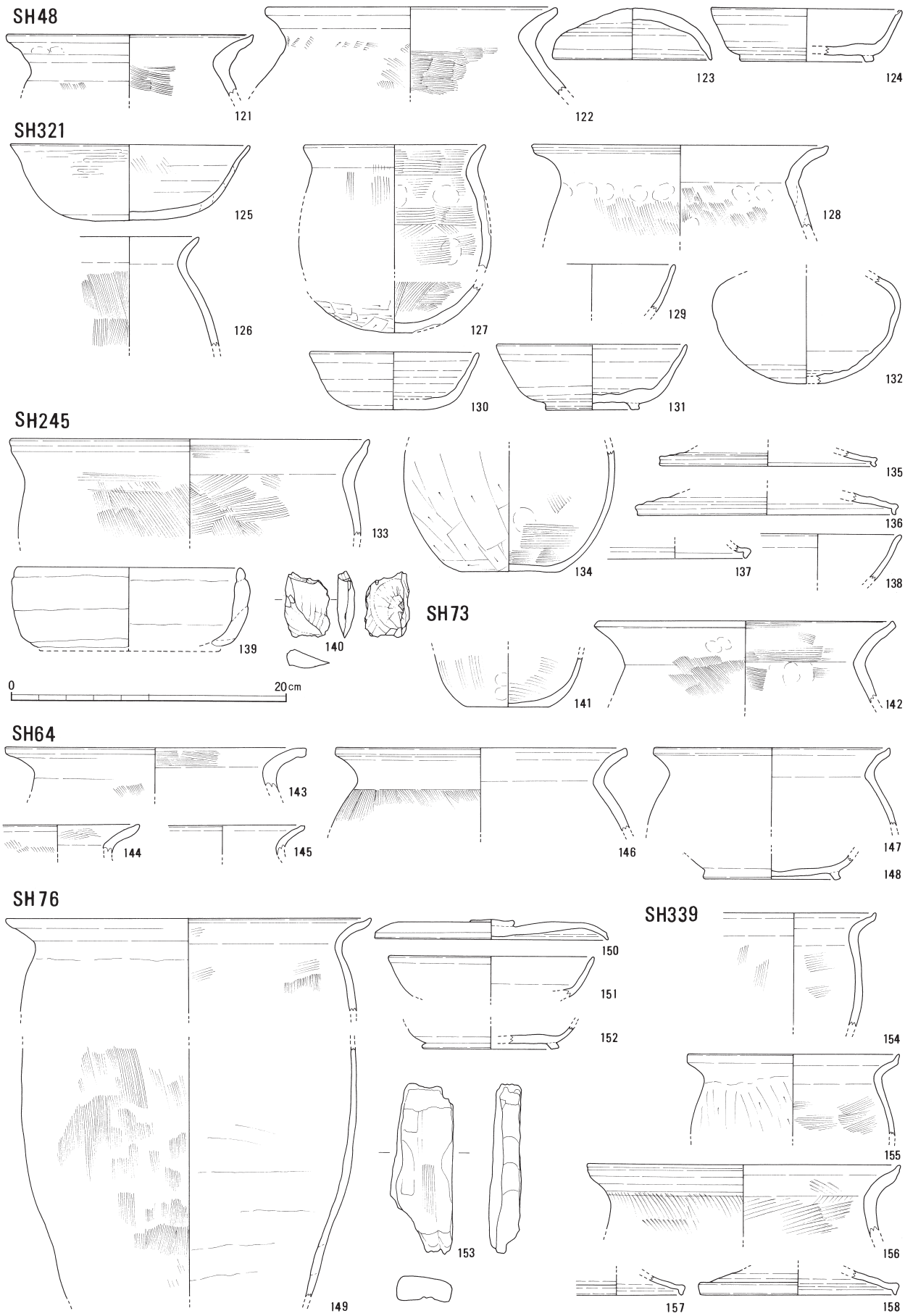
ヘラケズリの施された土師器の杯、須恵器の壺も出土しているが、図示できたものは土師器甕（141・142）である。141 は平底を呈する特異な形態である。調整が異なるものの、全体から受ける印象はＳＨ 245 出土の 134 に似る。

29. ＳＨ 64 出土遺物（第 75 図）

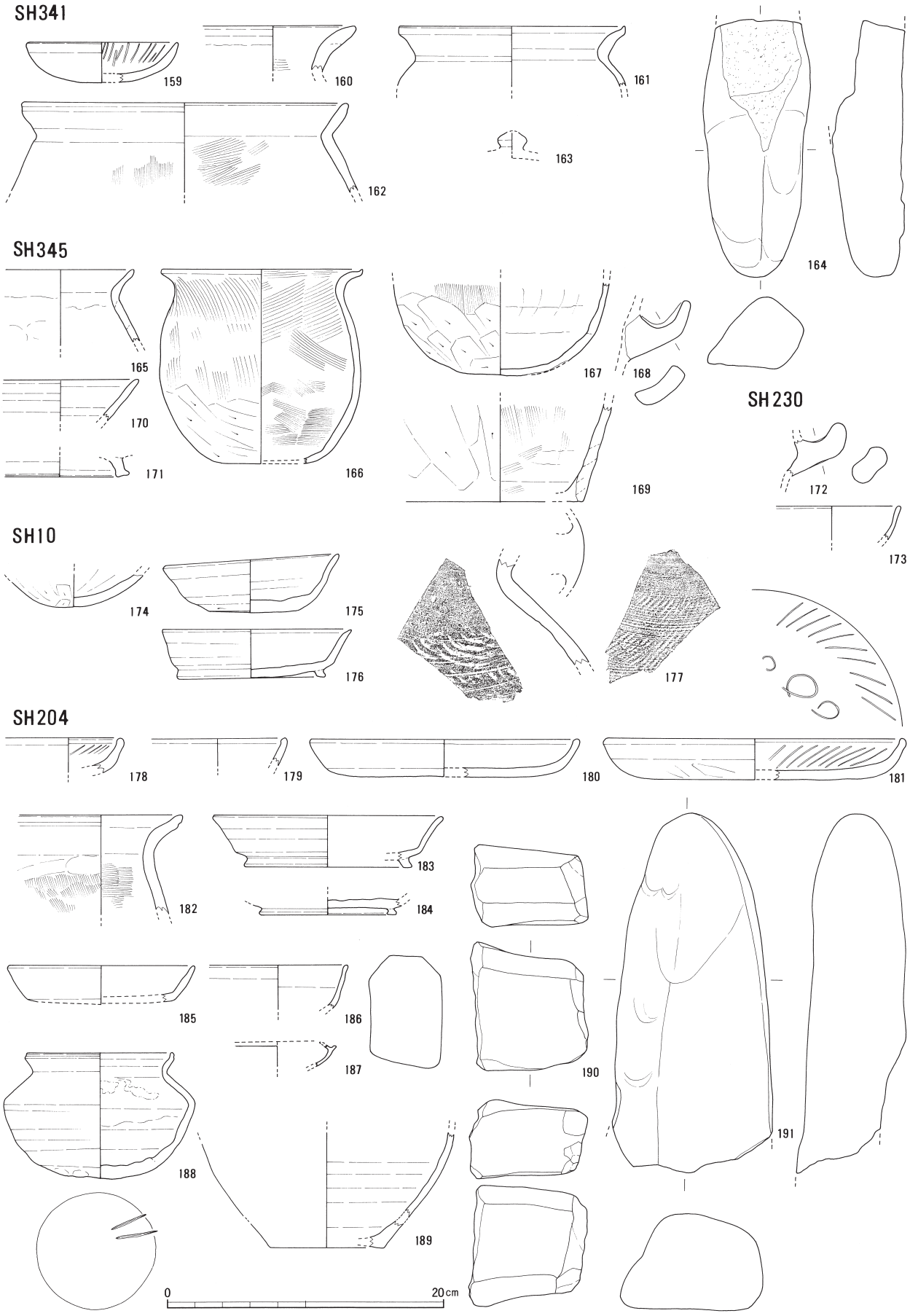
143 ～ 147 は土師器の甕､148 は須恵器の杯である。土師器甕は 144 を除き、口縁部に面をもつが、緩慢なものが多い。148 は底部をロクロケズリで調整する丁寧な仕上げで、壺の可能性もある。これらの他に、土師器椀、須恵器壺･甕の小片が出土している。

30. ＳＨ 76 出土遺物（第 75 図）

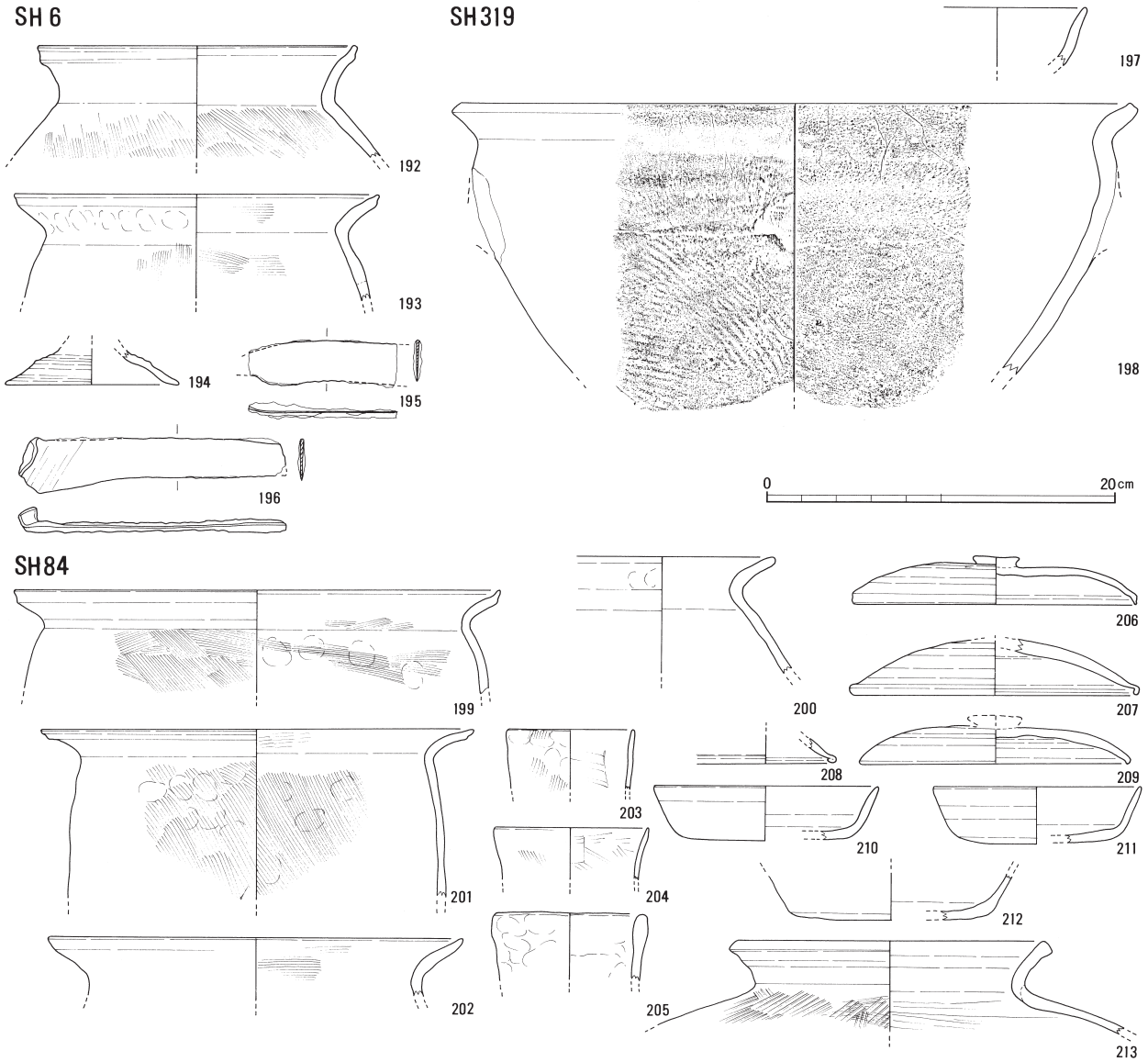
149 は土師器の長胴甕、150 は須恵器の蓋、151・152 は須恵器の杯、153 は砥石である。149 は器壁が比較的薄く、内面をナデで調整する特異なものである。体部下半は尖り気味の形態をとり、口縁部は大きく開く。欠損する底部が平底であるならば、８世紀に出現する「濃尾型」と称されるもの[5]と酷似する。これに類似する長胴甕は信濃や遠江方面にも分布しており、149 は、これら東国の影響を受けているものかもしれない。150 は比較的大型で、摘みを含めて扁平な形態であるが、口縁端部にＺ字状の屈曲は認められない。151 は底部を欠損しているが、高台が付くものと思われる。



第75図　ＳＨ48・64・73・76・245・321・339出土遺物実測図（1:4）



第76図　ＳＨ10・204・230・341・345出土遺物実測図（1:4）



第 77 図　ＳＨ６・84・319 出土遺物実測図（1:4）

31.　ＳＨ 339 出土遺物（第 75 図）

154 ～ 156 は土師器の甕で、156 は他のものより器壁が厚く特異である。155 は口縁部に面をもち、端部を摘み上げる一般的な形態であるが、外面全面をヘラケズリで調整する。一般的な形体を呈することを考慮に入れ、このヘラケズリについては、製作者の意識的にはハケメであり、工具の摩耗が進んでいないためにヘラケズリ状になったものと推測する。

157・158 は須恵器の蓋で、両者とも天井部を欠損するが、宝珠状の摘みが付くものである。

32.　ＳＨ 341 出土遺物（第 76 図）

159・163 は住居内の土坑から出土したものである。住居に伴う確証はないが、ここで扱う。なお、159 は住居内の土坑 4 から出土した記録となっているが、記録誤りの可能性がある。159 ～ 162 は土師器で、159 は杯、他は甕である。159 の内面のヘラミガキは粗雑で、放射暗文を意識している。163 は須恵器の蓋、164 は砕片とした。棒状の自然石を分割している。被熱が確認でき、カマドの支柱石として使用されたものである。須恵器は小片で、他に須恵器壺の頸部片も出土している。

33.　ＳＨ 345 出土遺物（第 76 図）

165 ～ 167 は土師器の甕、169 は土師器の甑、168 は 169 の把手と思われるが、接合できなかった。166 は平底で図示しているが、底部の丸味が不足しているものの基本的に丸底の甕である。170 は須恵器の杯、

171 は須恵器の壺で、170 の高台の有無は不明である。これらの他に、須恵器杯の小片も出土している。

34. ＳＨ 230 出土遺物（第 76 図）

出土したものは土師器甕の小片が中心であるが、図示できたものは土師器の把手（172）と須恵器の杯（173）である。

35. ＳＨ 10 出土遺物（第 76 図）

174 は土師器の甕、175・176 は須恵器の杯、177 は須恵器の甕である。176 は底部外面をロクロケズリで調整するのに対し、175 は高台をもたず、底部との境を一周ロクロケズリするに止める。ＳＨ 10 の床面で検出された土坑からの出土で、他のものと共伴する確証は得られていないが、一応ここで扱う。177 の外面の調整は格子状タタキを行った後にカキメを施している。他に横瓶の小片も出土している。

36. ＳＨ 204 出土遺物（第 76 図）

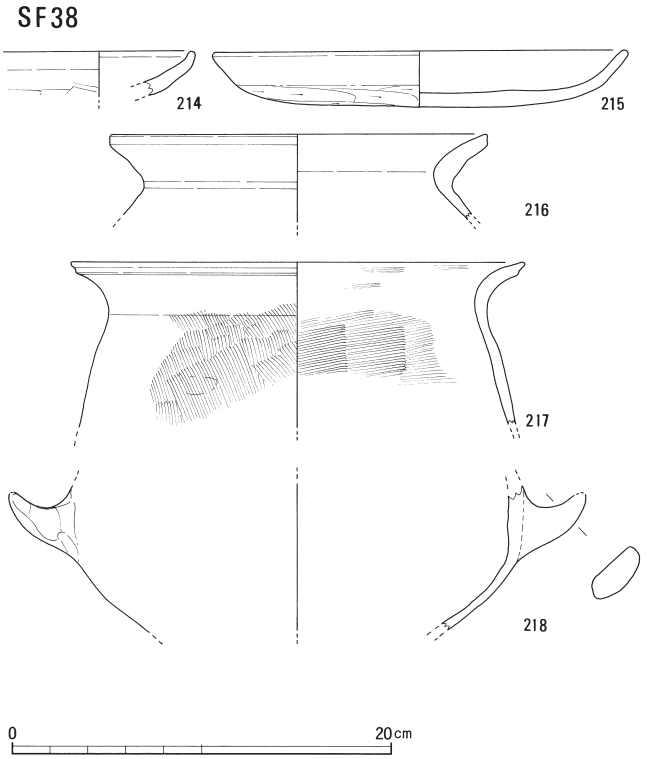
比較的まとまった出土があった。178 ～ 182 は土師器、183 ～ 188 は須恵器、190 は砥石である。191 は砕片としておく。棒状の自然石を折るように故意に割っており若干の被熱痕が観察できる。カマドの支柱石に使用されていたものかもしれない。189 は陶器で相当な高温で焼成されている。中世以降のもので明らかに混入である。

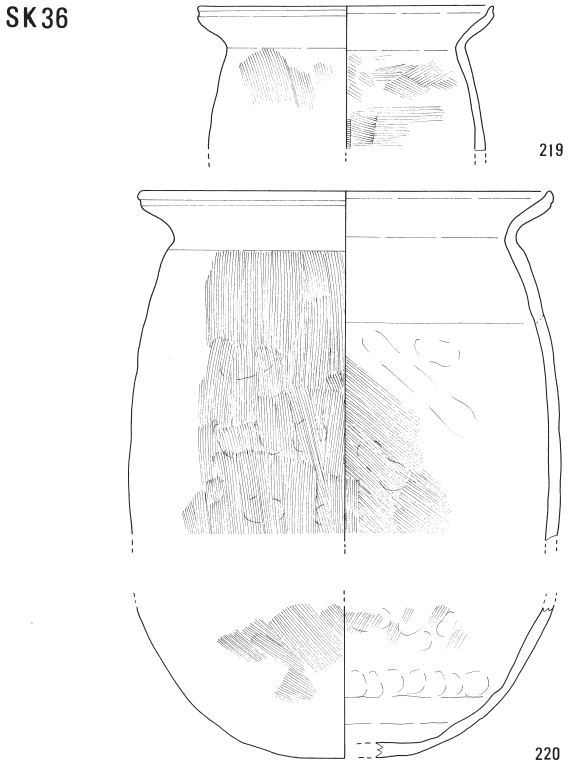
土師器には皿（178 ～ 181）、甕（182）がある。皿はいずれも口縁端部が内に肥厚するもので、178・181 には暗文が確認できる。ただし 181 の暗文は放射・螺旋ともに粗雑なものである。

須恵器には杯（183 ～ 187）、壺（188）があり、図示できなかったが甕の小片も出土している。杯は高台をもつもの（183・184・186）ともたないもの（185）、受部をもつもの（187）がある。185 は外傾する口縁部で浅く皿にちかい形態であるが、底部外面にロクロケズリを施す。また、183 は酸化焼成である。187 は非常に小型で器壁も薄いもので、特異である。形式的に混入と考えられる。188 は後述する自然科学分析の結果、漆容器として使用されていたことが分かった。

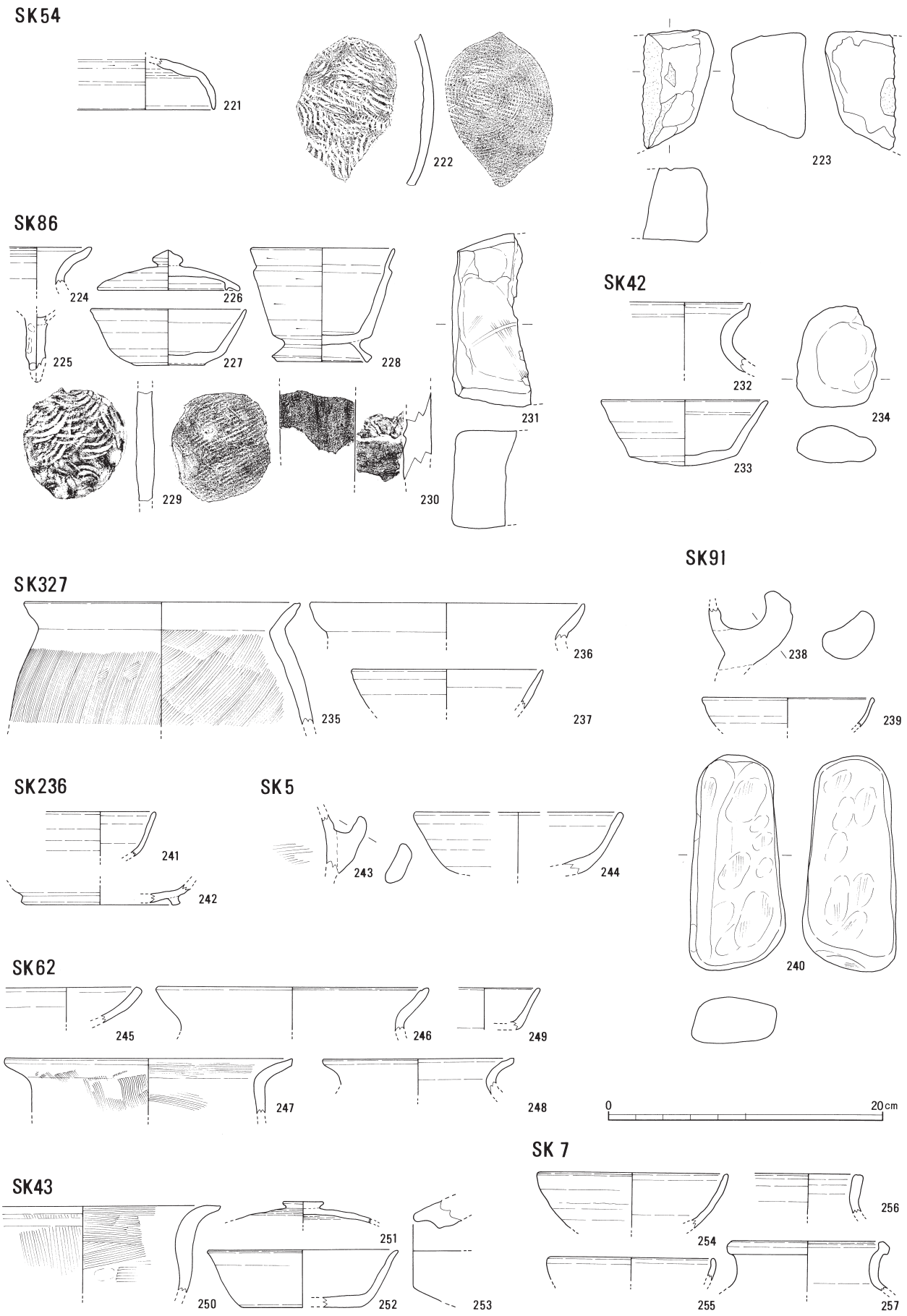
37. ＳＨ６出土遺物（第 77 図）

埋土からは土師器の甕片が出土しているが、図示できるものは無い。他に灰釉陶器か山茶椀の小片も





第 78 図　ＳＫ 36・ＳＦ 38 出土遺物実測図（1:4）



第 79 図　ＳＫ５・７・42・43・54・62・86・91・236・237 出土遺物実測図（1:4）

出土しているが、他の遺物との時期差が大きく、混入と考える。

194 はＳＨ６周溝からの出土、192・193・195・196 はＳＨ６と完全に重複する土坑から出土したもので、194 との共伴関係は不明確であるが、ここで扱う。192・193 は土師器の甕で、両者とも口縁部に面をもつ。面は強いヨコナデのためか、若干凹線状を呈する。194 は須恵器で、高杯の脚としておく。195・196 は鉄製品の鎌と思われるが、錆による劣化のため詳細は不明である。

38. ＳＨ 319 出土遺物（第 77 図）

土師器甕の小片も出土しているが、図示できたものは須恵器の２個体のみである。197 は杯、198 は鍋としておく。198 には把手の剥離痕が認められるため、土師器甕と同様な把手が一対付くように思われ、須恵器としては特異な形態を呈する。把手が付くため甑の可能性もあるが、全体の形状から鍋としておく。外面はタタキ、内面は同心円であるが、同心円の後に一部をハケメで調整しており、調整も特異である。

39. ＳＨ 84 出土遺物（第 77 図）

ＳＨ 84 及びそれに伴う焼土や土坑から出土したものである。199 ～ 202 は土師器、203 ～ 205 は製塩土器、206 ～ 213 は須恵器である。

土師器は全て甕であるが、200 は磨滅が激しくハケメが確認できない。製塩土器は粗雑な成形であるが、比較的薄手に仕上げている。後述するＳＫ 86 出土の脚部 225 に対応するものと考えられる。須恵器には、蓋（206 ～ 209）、杯（210 ～ 212）、甕（213）がある。蓋は、208 を除き宝珠摘みが付くものと考えられる。208 は土師器としてもよいほどの酸化焼成であるが、ロクロの使用が想定されるので須恵器とした。他のものと比べ口縁端部の形体が異なり、しかも小片のため蓋とする確証はない。杯は全て高台をもたないものである。210・212 の底部外面は未調整と思われるが磨滅のため不明確である。211 は口縁部との境を一周ロクロケズリするが、底部外面はヘラ切り痕が明瞭である。ただし表面は比較的平滑なため、ナデを施しているかもしれない。213 は内面の同芯円をナデ消している。

なお、200 と 205 はＳＨ 84 と完全に重複する土坑から出土したものであるが、ＳＨ 84 との関連は不明である。したがって他のものと共伴する確証はないが、一応ここで扱う。

40. ＳＦ 38 出土遺物（第 78 図）

図示したものは全て土師器で、214・215 は皿、216・217 は甕、218 は鍋である。皿は両者とも底部外面をヘラケズリで調整するが、磨滅のため暗文の有無は不明である。216・218 は風化のため調整は不明である。

41. ＳＫ 36 出土遺物（第 78 図）

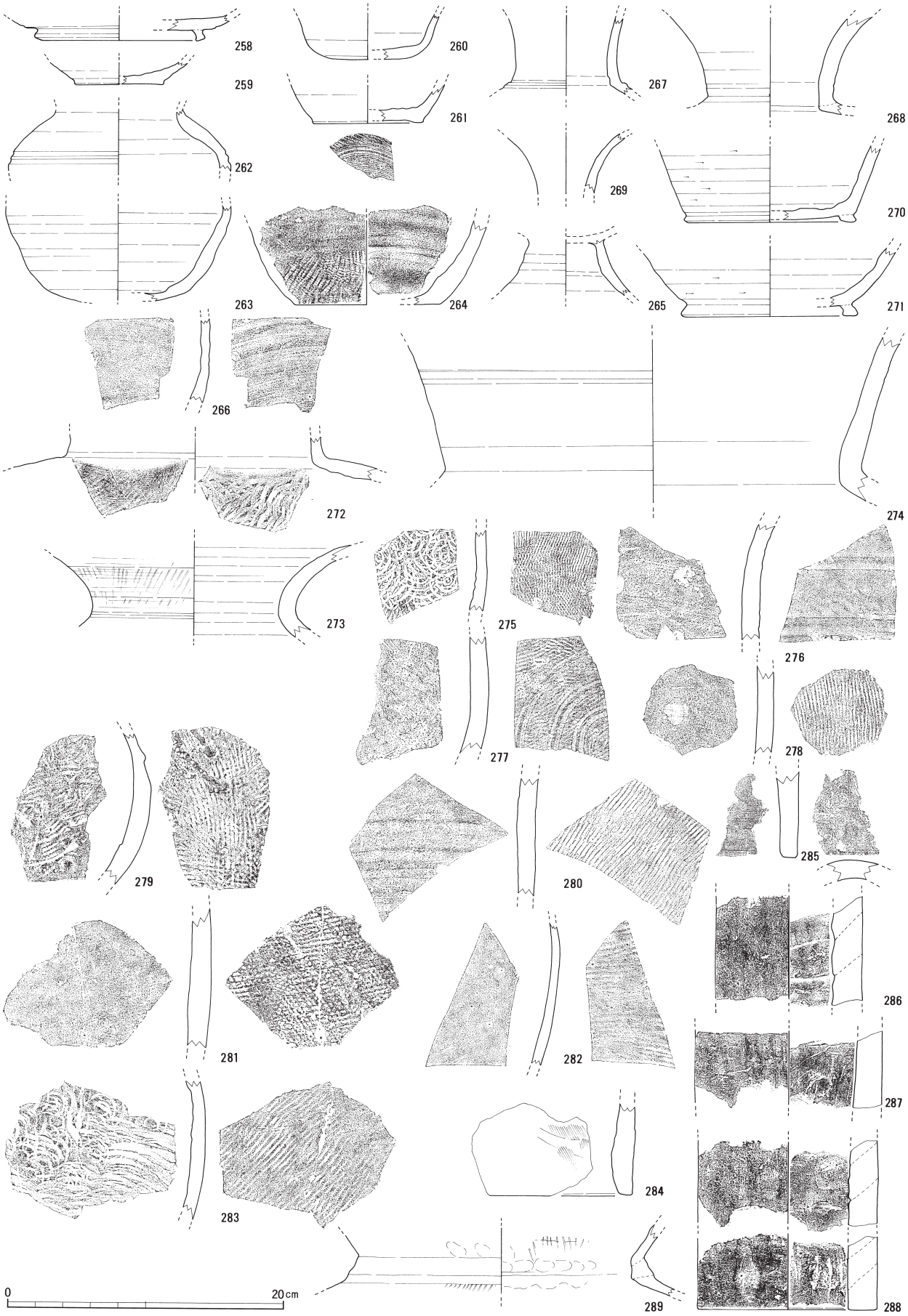
図示したものは土師器の甕である。219 の口縁部の面は強いヨコナデのため凹線状となっている。220 は完全に接合できなかったが、長胴甕で内外面ともハケメで調整し、口縁部の面は 219 と比べ緩慢である。

42. ＳＫ 54 出土遺物（第 79 図）

221 は須恵器の蓋である。天井部外面は未調整である。他に宝珠摘みが付くと思われる蓋の小片も出土している。222 は須恵器の横塀と思われる体部片である。不整円形の破片であるが、破断面は故意に打ち欠いたようにも見える。加工円盤の可能性もある。223 は一応砥石としておくが、各面の使用痕は非常に弱い。

43. ＳＫ 86 出土遺物（第 79 図）

224 は土師器の甕、225 は製塩土器、226 ～ 229 は須恵器、230 は土管、231 は砥石である。225 は脚部片で、小型ではあるものの比較的指頭圧痕が明瞭である。知多式製塩土器の３様式から４様式[⑥]に並行するものであろうか。230 は土管としたが、焼成は陶質である。須恵器には蓋（226）、杯（227）、壺（228）、甕（229）がある。226 は口径に対し比較的大きな宝珠摘みをもち、227 の底部は粘土塊からやや下方で切り離され、高台状を呈する。228 は平城京の分類による壺Ｅ[⑦]に酷似するが、口縁部が外方に開くやや長いもので、高台も高い。229 は円盤状の破片であるが、円盤状に打ち欠いた痕跡は不明瞭である。偽口縁状を呈する破断面もあり、粘土



第 80 図　ＳＫ 68 出土遺物実測図①（1:4）

紐接合痕より剥離した可能性が高い。

44. ＳＫ 42 出土遺物（第 79 図）

土師器杯、須恵器壺･甕の小片も出土しているが、図示できたものは土師器甕（232）、須恵器杯（233）、軽石（234）である。233 は口径に対して器高の深い形態であるが、底部外面は未調整である。

45. ＳＫ 327 出土遺物（第 79 図）

235･236 は土師器の甕、237 は須恵器の杯である。236 は若干受口状の口縁部を呈するが、既述したＳＨ 332 出土の 19 とは口縁端部の形状は異なる。他に須恵器の壺片も出土している。

46. ＳＫ 91 出土遺物（第 79 図）

238 は土師器の甑か鍋の把手と思われる。本体に差し込んで成形する。239 は須恵器の杯、240 は砥石である。他に土師器や須恵器の甕片が出土している。

47. ＳＫ 236 出土遺物（第 79 図）

土師器片が多数出土しているが、図示できたものは須恵器の杯のみである。242 は高台をもつものであるが、底部外面をロクロケズリで調整する。241 も同様に高台が付くと思われるが、酸化焼成である。

48. ＳＫ５出土遺物（第 79 図）

土師器甕や須恵器甕が出土しているが、図示できたものは土師器の把手（243）と須恵器の杯（244）である。243 は体部に差し込むのではなく、貼り付けている。

49. ＳＫ 62 出土遺物（第 79 図）

245 は土師器の皿、246 ～ 248 は土師器の甕、249 は須恵器の杯である。土師器甕は形態がそれぞれ異なり、246 は内弯する口縁部、247 は頸部の屈曲が弱く体部の膨らみが少ない器形と考えられる。246 は既述したＳＨ 332 出土の 19 と同類であろう。他に図示できなかったが、ハケメで調整する甕の小片がある。土師器甕の調整だが、焼成は須恵器と同様なものである。

50. ＳＫ 43 出土遺物（第 79 図）

250 は土師器の甕としたが、小片のため形態は不明で、鍋や鉢とした方がよいかもしれない。251 は須恵器の蓋、252 は須恵器の杯、253 はフイゴの羽口である。他に須恵器の壺や甕の小片が出土している。

51. ＳＫ７出土遺物（第 79 図）

土師器甕の小片も出土しているが、図示できたものは全て須恵器である。254 は杯であるが、内弯する口縁部で、高台の付く以前のものかもしれない。255 は小片のため詳細は不明である。一応、杯としたが 256・257 と同様に壺の口縁部の可能性もある。

52. ＳＫ 68 出土遺物（第 80・81 図）

土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石等比較的まとまった出土があったが、石器以外では完形またはそれにちかいものはなく、全体の形状が明確なものはない。

須恵器（258 ～ 266・272 ～ 283） 258 は杯としたが、盤にちかい形態で、底部外面は未調整である。259 ～ 261 は椀とした。259・261 は糸切により粘土塊から切り離される。260 は杯とすべきかもしれないが、口径に対し器高が高くなるものと思われたため椀とした。底部外面は未調整である。なお、261 の底部外面には乾燥時に生じたものか、棒状の圧痕がある。262 ～ 266 は壺としたが、263 は横瓶、264 は甕、265 は高杯の脚の可能性もある。なお、265 は酸化焼成である。272 ～ 283 は甕である。小片が多く、器種や部位の不明確なものもある。278 は故意に円形に打ち欠いた様子が観察され、別用途に転用されたものであろう。調整は外面をタタキ、内面に当て道具痕の同心円を残すが、277・278・281・282 は同心円をナデ消す。ただし、281 は僅かに同心円を残している。また、280 も同心円を消しているが、ロクロケズリである。外面は平行タタキであるが、281 は格子タタキである。277 の外面には同心円状のロクロナデ痕があり、横瓶の可能性もある。しかし、そうした場合、非常に大型のものとなり一応甕とした。279 はタタキ方向が不定方向で、底部にちかい部位と思われる。275 のタタキも交差しているが、胴部片である。272 はタタキのちロクロナ

デを施す。276 は頸部片であるが、極浅い沈線を施し、その間にかすかに波状文２段が認められる。

灰釉陶器（267 ～ 271）　小片のため不明な部分も多いが、全て壺または瓶と称すべきものである。ただし、268・271 は須恵器の可能性もある。270・271 により、体部下半にロクロケズリを施すことが分かる。

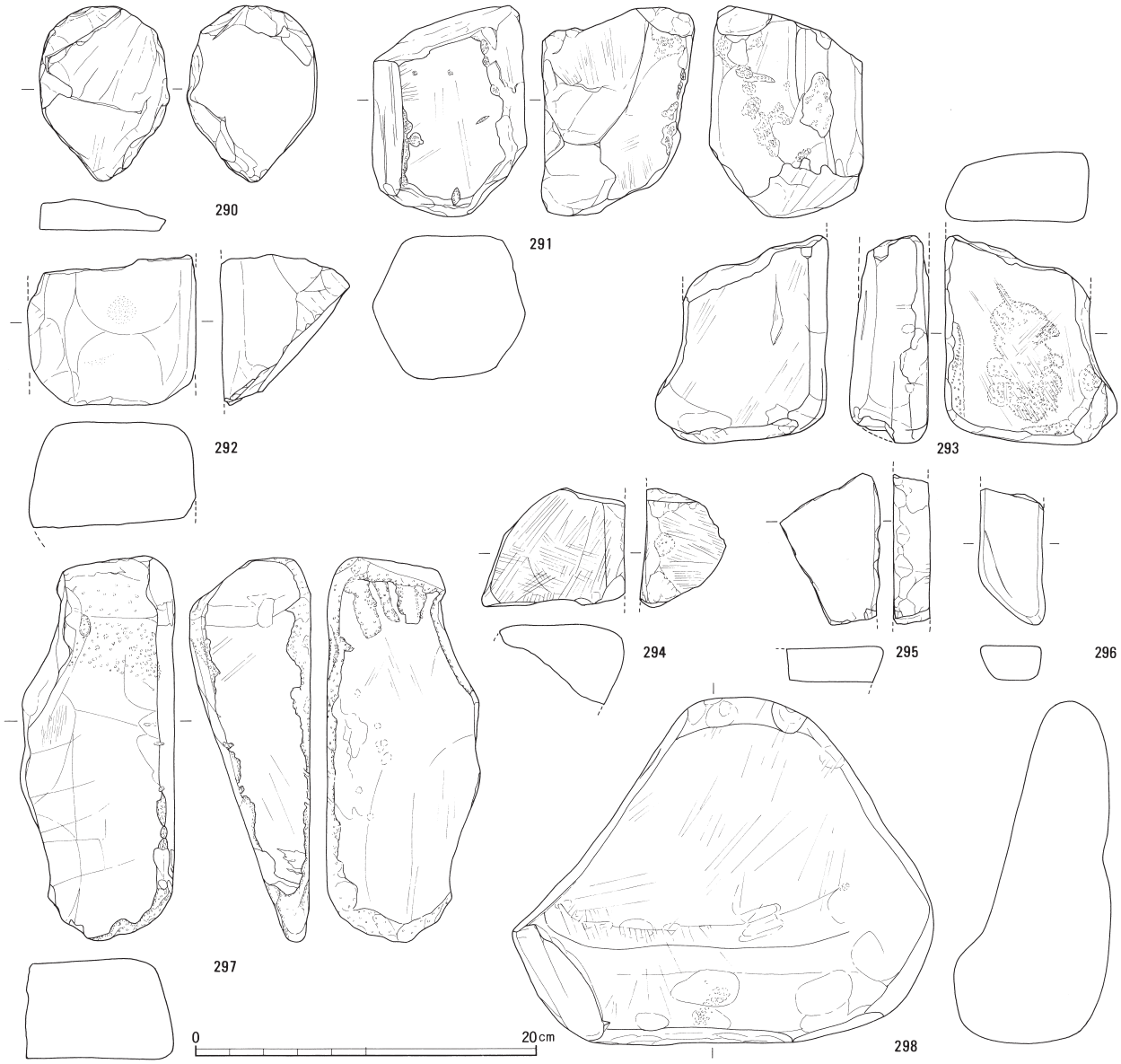
陶器（289）　甕か壺の頸部片である。混入遺物と考えられる。

瓦（285）　丸瓦の小片である。先端にヘラによる面取りを施す。内面もヘラケズリを施すものと推測されるが、ケズリ痕は不明瞭で丁寧なナデによる。

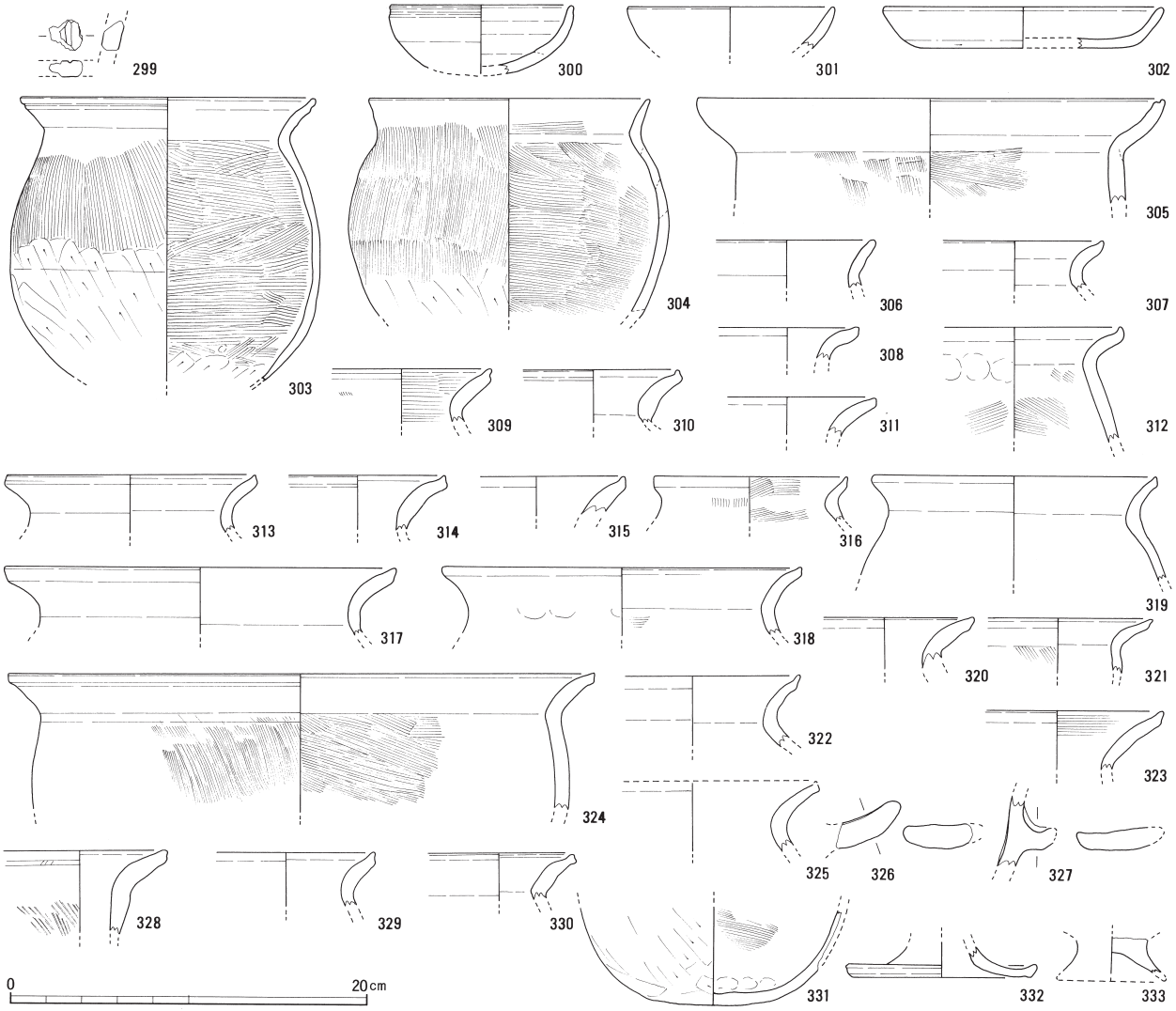
土製品（284・286 ～ 288）　284 は、下端部の小片である。粗雑な仕上げで、破片が弧を描く様子は無く、土器の可能性は低い。一応、移動式カマドの下端部と推定しておく。

286 ～ 288 は陶質の土管で、粘土紐積み上げによって成形され、内面にはその痕跡が明瞭に残る。外面には釉が掛る。面取り風にヘラケズリされるが、釉によりケズリ痕は不明瞭である。

石製品（290 ～ 298）　290 は加工円盤としておく。節理で剥離した石材を利用しており、礫器の可能性もある。楔として利用されたかもしれないが、使用痕は明確でない。291 ～ 298 は砥石である。部分的



第 81 図　ＳＫ 68 出土遺物実測図②（1:4）



第 82 図　その他遺構出土遺物実測図①（1:4）

に赤変しているものがある。岩石の組成等、砥石として利用される以前の作用か、その後の被熱によるものか判然としない。297 は光沢が出るほど磨滅しており、砥石としての機能を失うほどである。

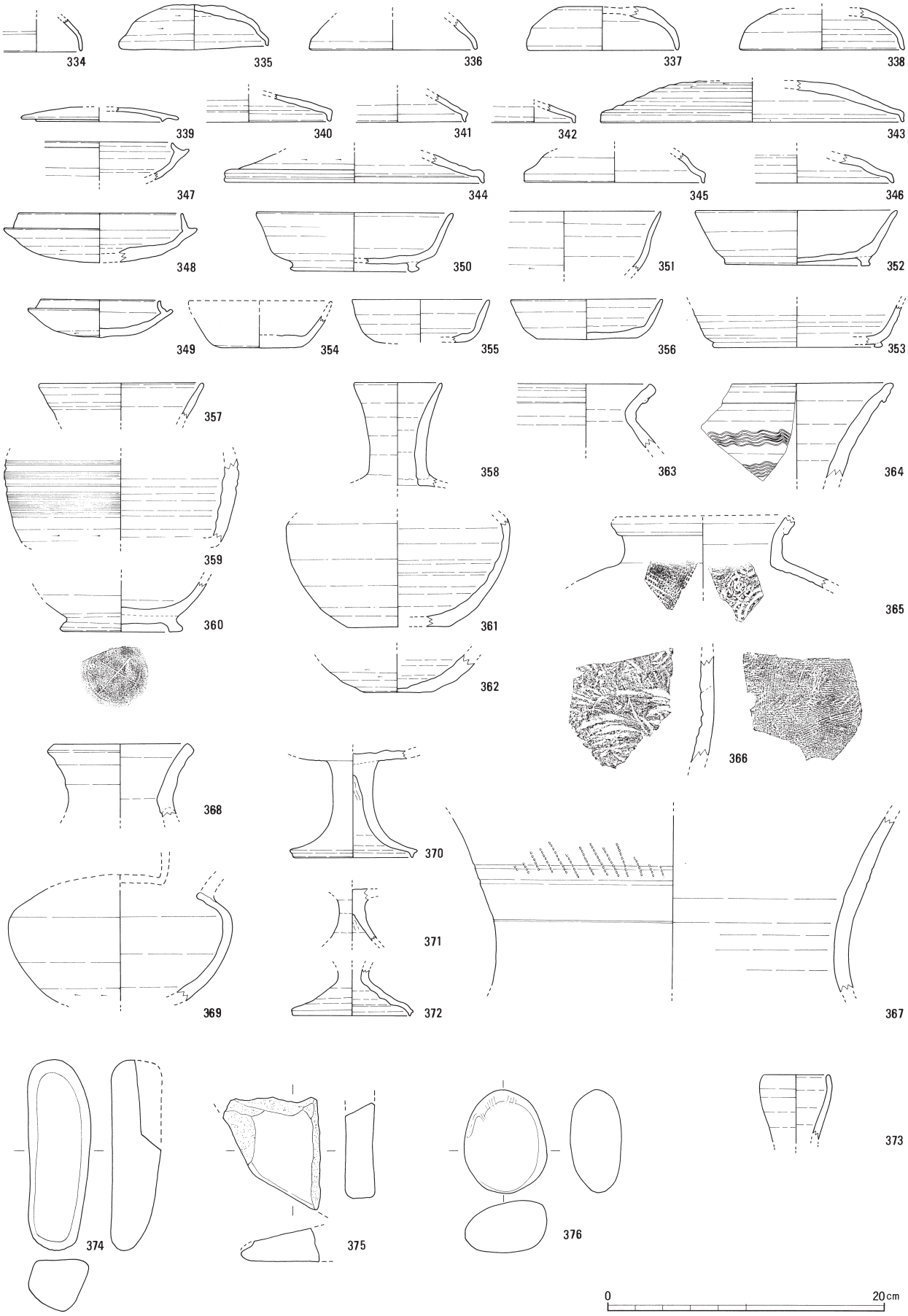
53. その他遺構出土遺物（第 82・83 図）

縄文土器（299）　体部の小片で、沈線は確認できるが、縄文はない。

土師器（300 ～ 333）　300・301 は椀、302 は皿である。302 の底部外面はヘラケズリで調整される。

303 ～ 331 は甕である。305 はＳＨ 332 出土のものと同様、受口を呈するものである。ただし、口縁端部に１条の沈線を巡らす。303・304・306 は頸部の屈曲が弱く、口縁端部を丸く収めるものである。しかし、303 は端部外面に浅い沈線を巡らす。308 ～ 325・328 ～ 330 は外方へ開く口縁部で端部外面に面をもつものである。309・310 は口唇部の上方への摘み上げが顕著である。調整はハケメによるが、309・316 は口縁部のヨコナデが弱く、内側にはハケメを残している。体部の状況が分かるものは少ないが、図示した３個体ともに、体部外面下半はヘラケズリである。ただし、331 のそれは浅くナデ状である。

332 は高杯の脚と考えられる。小片でしかも磨滅が激しいため不明な部分も多いが、須恵器の形体を呈し、ロクロ成形の可能性も大きい。須恵器の酸化焼成としたいところではあるが、風化状況から勘案して焼成温度はさほど高いとは思えないため土師器とした。333 も土師器の脚片であ



第 83 図　その他出土遺物実測図②（1:4）

る。器種は不明であるが、壺の脚としておく。

須恵器・灰釉陶器（334 ～ 372）　蓋（334 ～ 346）、杯（347 ～ 356）、壺（357 ～ 362）、甕（363 ～ 367）、平瓶（368･369）、高杯（370 ～ 372）がある。

334 ～ 338 は摘みの付かない須恵器蓋で、半球状の形体を呈するため口縁部と天井部の境が曖昧である。ただし、334 は沈線を巡らす。339 ～ 346 では天井部の大半を欠損しているものが多いが、宝珠摘みが付くものと考えられる。339 は口縁部の内側にかえりが残る。非常に扁平な形態を呈し、壺の蓋と思われる。いずれも天井部外面をロクロケズリで調整するが、339 は厚い自然釉のため不明確である。また、343 の内側には仕上げの一方向ナデがある。

347 ～ 349 は受部をもつ須恵器杯である。口縁部は短く内傾するが、348 は直立気味である。348 の底部外面がロクロケズリで調整されるのに対し 349 は一周のロクロケズリに止める。また、349 は酸化焼成である。350 ～ 353 は高台の付くものである。350 は比較的高く外に踏ん張る高台が底部のやや内側に付く古相を帯びるものである。底部外面をロクロケズリで調整し、直線状の線刻が焼成後に刻まれている。一方、352 の底部外面は未調整を志向しているが、高台を付ける際のナデが底部の大半を覆い、結果的にナデとなる。残る部分も凹凸は残すものの滑らかで、ナデが施されているようである。354 ～ 356 は高台の付かないものである。ただし、354 は壺の底部の可能性もある。いずれも底部外面は未調整である。

357 ～ 362 は壺としたが、いずれも小片のため全体の形態は不明である。357 は瑳、359 は横瓶、361 は鉢の可能性もある。362 は一応須恵器としておくが、後世の陶器かもしれない。358 は灰釉陶器であるが、釉は自然釉である。360 も濃緑灰色の釉が自然釉としては不自然なほど厚く掛り、灰釉陶器の可能性もあるが、素地が灰色を呈するため須恵器としておく。

363 ～ 367 は須恵器甕であるが、いずれも小片である。363 は短い口縁部で壺の可能性もある。口縁端部からやや下がった位置に凸線一条を巡らす。364 も口縁部に波状文を２条、367 は凹線を巡らした後、刺突列点文を施す。366 は体部片であるが、内面に当て道具痕の同心円を残すものの外面はハケメの特異なものである。

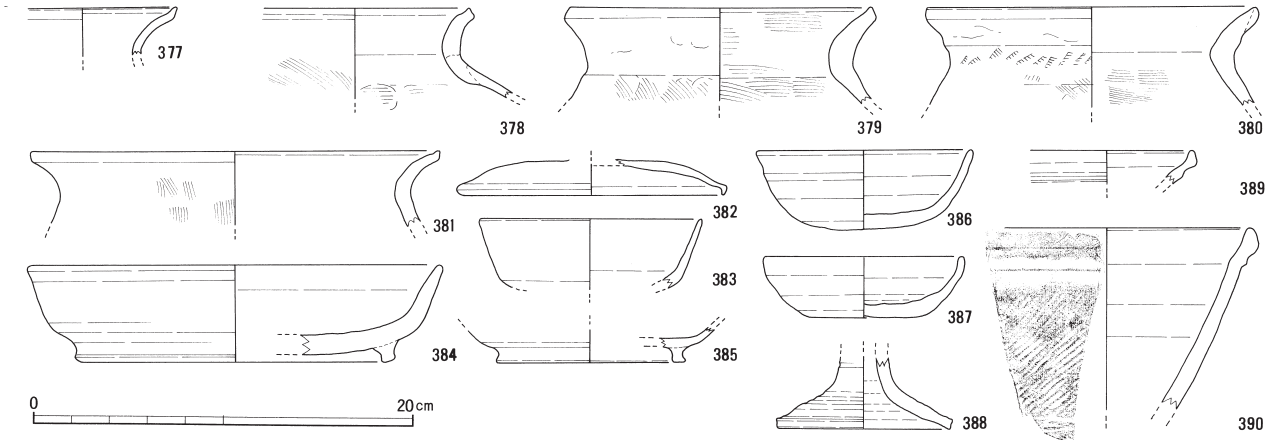
368 は平瓶の口縁部、369 は体部としたが両者とも白色が強く灰釉陶器の可能性もある。ただし、369 の頸部剥離痕は体部径の中心には位置せず、灰釉陶器壺の肩部片とするには無理がある。370 ～ 372 は須恵器高杯の脚である。全てに透孔が認められない。370 は濃緑灰色の釉が自然釉としては不自然なほど厚く掛るが、素地は須恵器である。

陶器（373）　施釉陶器で、一応壺としておく。室町時代以降のものと思われ、常滑産かもしれない。

石製品（374 ～ 376）　374 は敲石とした。先端に使用痕かと思われる痕跡がある。375 は砕片とした。２面で分割しているが、用途は不明である。376 は磨石である。

54. 包含層他出土遺物（第 84 図）

377 ～ 381 は土師器甕の口縁部である。いずれも頸部から外方に開く口縁で、端部に面をもつ。



第 84 図　包含層出土遺物実測図（1:4）

382は須恵器の蓋で、宝珠摘みが付くものである。天井部のロクロケズリは範囲が狭く、摘み設置付近に限定している。

383～385は須恵器の杯で高台の付くものであるが、383は微妙である。384は大型で器壁も厚く盤とすべきかもしれない。底部外面をロクロケズリで調整する。

386・387は須恵器の椀としたが、387は杯とすべきかもしれない。両者とも底部外面はヘラ切り後未調整である。386の内面のロクロ目は深く、鋭利な沈線状となっており、工具を使用しているようである。

388は須恵器の高杯、389・390は須恵器の甕である。390は口縁端部ちかくの弱い凸線までタタキで調整し、外面のロクロナデは限定されている。(森川)

［註］

① 笠井賢治「北伊賀地域における古代前半の土師器甕」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999.11.27

② 中村　浩 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房　1981

③ 前掲②に同じ

④ 前掲②に同じ

⑤ 城ヶ谷和弘 「東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996.9.10

⑥ 東海市教育委員会『松崎貝塚』昭和52年3月

⑦ 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』1976

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
1	04201	E-b19 SK136 土器①	縄文土器 深鉢	口径37.5	にぶい黄橙 10YR7/4	ナデ	口・体部小片	
2	04301	E-b19 SK136 土器②	縄文土器 深鉢	—	にぶい黄褐 10YR5/4	条痕	口・体部小片	口・体部接合せず
3	41605	F-d・e16 SH247 カマド №2	土師器 甕	口径20.0	にぶい黄橙 10YR7/3	外面ハケメ、内面ナデ	口縁4/12	
4	41603	F-d16 SH247 カマド	土師器 甕	口径11.0	にぶい黄橙 10YR6/3	ハケメ	口縁1/12	
5	41801	F-d15 SH247 北西	土師器 甕	口径16.0	にぶい黄橙 10YR6/3	ヨコナデ	口縁1/12	風化強
6	41606	F-d・e16 SH247 カマド №3	土師器 カマド	—	浅黄 2.5Y7/3	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	小片	
7	41604	F-e15 SH247 南西	須恵器 蓋	口径10.0、器高3.1	にぶい黄 2.5Y6/3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、肩部に浅い沈線	口縁4/12	
8	41602	F-e15 SH247 南西	施釉陶器 鉢	—	浅黄 2.5Y7/3	ロクロナデ、外面カキメ	口縁小片	外面鉄釉、内面自然釉か
9	41702	F-e15 SH247	砕片	(10.6)×7.7×(4.5) 498.5g	浅黄 2.5Y7/4	3面で分割	一部欠損	砂岩
10	41701	F-e15 SH247 P5	砥石	(16.0)×5.8×4.55 767.8g	灰黄褐 10YR6/2	4面に弱い使用痕	一部欠損	砂岩　#40
11	51204	C-x4 SH322 貯蔵穴周辺	土師器 壺	—	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ、体部内面にヘラの押し引き	口縁小片	
12	51301	C-x4 SH322 貯蔵穴周辺	土師器 鍋	口径38.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁3/12	13と同一個体か
13	51302	C-x4 SH322 貯蔵穴周辺	土師器 把手	—	にぶい黄橙 10YR7/4	差込技法	把手のみ	12と同一個体か
14	51202	C-x4 SH322 貯蔵穴周辺	須恵器 蓋	口径14.0	灰 N5/	ロクロナデ	3/12	
15	51203	C-x4 SH322	須恵器 蓋	—	浅黄橙 10YR8/3	ロクロナデ	口縁小片	
16	51201	C-x4 SH322 貯蔵穴周辺	須恵器 甕	—	灰 7.5Y6/1	外面タタキ、内面同心円	体部小片	

第３表　遺物観察表①

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
17	41001	F-a11 SH221 P1	土師器 甕	口径14.3	明褐 7.5YR5/6	ハケメ	口縁2/12	
18	41502	B-y11 SH221	須恵器 蓋	口径11.7	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ	口縁2/12	
19	51408	G-b4 SH332	土師器 甕	口径19.4	にぶい黄橙 10YR7/2	ヨコナデ、内面にハケメが残る	口縁1/12	受口口縁
20	51407	G-b4 SH332 カマド	土師器 甕	口径15.9	橙 7.5YR6/6	底部外面にヘラケズリ、内面にハケメ	口縁1/12	
21	51406	G-b4 SH332 貯蔵穴	須恵器 杯蓋	—	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	口縁小片	
22	50202	B-r16 SH307 カマド	土師器 甕	口径15.8	橙 7.5YR7/6	ハケメ	口縁4/12	
23	50106	B-s15 SH307 T8 ①	須恵器 椀	口径10.8、器高4.3	橙 7.5YR7/6	ロクロナデ、ロクロケズリ一周	8/12	酸化焼成
24	41501	F-a15 SH208 カマド	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁小片	
25	40401	F-a15 SH208 No.1	須恵器 高杯	口径11.6	灰白 5Y7/2	ロクロナデ	口縁8/12	
26	41409	F-a15 SH208 南西	須恵器 高杯	底径8.3	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	底部4/12	透孔無か
27	60102	B-v23 SH302 No.2	土師器 甕	口径19.4	橙 5YR6/8	ヨコナデ	口縁小片	
28	51101	B-u23 SH302	須恵器 高杯	—	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ、脚内面に工具痕	脚基部残	
29	60106	B-v23 SH302 No.3	砕片	(7)×(6)×8 287g	にぶい橙 2.5YR6/4	3面で分割	一部欠損	砂岩 被熱
30	60105	B-u23 SH302 No.1	砥石	(6)×(5)×2 41g	橙 5YR7/6	4面に使用痕	一部欠損	凝灰岩 ＃100
31	50503	F-f18 SH347 土坑4 No.2	土師器 椀	口径10.4、器高3.2	明赤褐 5YR5/6	ヨコナデ、内面に斜放射のヘラのアタリ	2/3	
32	51703	F-f18 SH347 土坑4 No.4	土師器 甕	口径15.8	にぶい橙 7.5YR7/4	外面にハケメ、内面ナデ、底部外面ヘラケズリ	口縁2/12	
33	51704	F-f18 SH347 土坑4 No.4	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁小片	
34	51706	F-f18 SH347 P3 No.6	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR6/3	外面ヘラケズリ、内面にハケメ	底部完存	
35	50502	F-f18 SH347 土坑4 No.1	須恵器 蓋	口径10.3、器高3.6	灰 5Y6/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	9/10	
36	51501	F-c24 SH336 土坑No.3	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	口縁小片	
37	50404	F-c24・25 SH336 No.2+土坑	円筒埴輪	—	橙 7.5YR6/6	外面斜ハケメ、内面ユビナデ	口縁小片	
38	40502	B-x4・5・6 SH238 No.2	土師器 甕	口径18.0	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケメ	口縁3/12	
39	00401	B-x4 SH19・25	土師器 甕	口径23.9	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ、内面にハケメが残る。口唇は沈線状	口縁小片	
40	00405	B-x4 SH25	土師器 甕	口径15.2	浅黄橙 10YR8/4	—	口縁2/12	風化強
41	00402	B-x4 SH19	須恵器 蓋	—	オリーブ灰 2.5GY6/1	ロクロナデ	口縁小片	
42	00404	B-x4 SH25	須恵器 杯	口径13.8、器高3.5	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	3/12	
43	51403	G-a1 SH324 床下土坑	土師器 甕	口径15.9	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ、内外にハケメが残る	口縁2/12	
44	51401	G-a1 SH324 カマド	土師器 甕	口径19.8	橙 5YR6/6	ハケメ	口縁2/12	
45	51402	G-a1 SH324	土師器 甕	口径15.9	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁1/12	
46	51404	G-a1 SH324 貯蔵穴	須恵器 高杯	脚径14.6	灰 N5/	ロクロナデ	脚裾1/12	
47	01301	F-c1 SH58	土師器 甕	—	橙 5YR7/6	ヨコナデ	口縁小片	
48	01303	E-c25・F-c1 SH58	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR6/3	ヨコナデ	口縁小片	
49	01302	F-c1 SH58	須恵器 壺	—	灰黄 2.5Y7/2	外面カキメ、内面指圧痕	体上部小片	
50	50901	B-t14 SK309	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	

第４表　遺物観察表②

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
51	50806	B-t14 SK309	須恵器 蓋	口径9.8、器高3.1	灰白 2.5Y7/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、肩部に沈線	1/3	
52	50807	B-t14 SK309	須恵器 蓋	口径9.8	灰 5Y6/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁2/12	
53	50808	B-t14 SK309	須恵器 杯	口径10.0、器高3.1	にぶい橙 5YR6/4	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	1/6	酸化焼成
54	50809	B-t14 SK309	須恵器 杯	口径8.6、器高2.9	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	1/4	
55	01201	E-d23 SK63	土師器 甕	口径21.2	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁1/12	
56	01106	E-d23 SK63	土師器 甕	—	にぶい黄 2.5Y6/3	ヨコナデ	口縁小片	
57	01105	E-d22・23 SK63	須恵器 蓋	口径10.0	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、肩部に浅い沈線	口縁2/12	
58	01104	E-d23 SK63	須恵器 蓋	口径10.0	灰 5Y5/1	ロクロナデ	口縁2/12	
59	01202	E-d22・23 SK63	須恵器 壺	口径10.7	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ	口縁1/12	
60	60103	B-u23 SK402 上層	須恵器 蓋	口径9.8、器高2.3	灰白 5Y7/2	ロクロナデ	口縁1/4	
61	60104	B-u24 SK402 上層	須恵器 杯	口径9.6、器高3.1	灰 5Y6/1	ロクロナデ	受部1/8	内面に自然釉が厚く掛る
62	41908	F-a13 SK211	土師器 甕	口径14.8	明赤褐 2.5YR5/6	外面にハケメ、内面ナデ	口縁1/12	風化強
63	41904	F-a13 SK211	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ、口縁部にハケメが残る	口縁小片	
64	42003	F-b14 SK212 検出中	土師器 甕	—	にぶい橙 7.5YR6/4		口縁小片	
65	40803	F-a13 SK211	土師器 甕	口径17.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁3/12	
66	41002	F-b14 SK212 №4	土師器 甕	口径18.2	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁3/12	
67	41003	F-a13 SK212 №2+3	須恵器 蓋	口径12.7、器高3.5	灰 7.5Y5/1	ロクロナデ、天井部外面一部ロクロケズリ	ほぼ完形	
68	41906	F-a13 SK211	須恵器 蓋	口径12.8、器高3.2	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁3/12	
69	40301	F-a13 SK212 №1	須恵器 蓋	口径15.6、器高4.85	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	4/12	
70	41905	F-a13 SK211	須恵器 杯	口径9.6、器高3.2	灰 N5/	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁1/12	
71	42001	F-a14 SK212 南	須恵器 杯	口径10.5、器高3.8	灰白 5Y7/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	底部ほぼ完存	
72	41907	F-a13 SK211	須恵器 高杯か鐙	口径9.8	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ	口縁1/12	
73	41004	F-a13・14 SK212	敲石	8.74×5.15×3.62 244.6g	にぶい黄 2.5Y6/3	2面で分割	一部欠損	砂岩
74	41802	F-d8 SK201 南東	土師器 甕	—	橙 5YR7/6	ヨコナデ	口縁小片	
75	41803	F-d8 SK201 北西	土師器 把手	—	橙 7.5YR7/6	差込技法	把手	
76	41805	F-d8 SK201 埋土中	須恵器 蓋	口径12.4	灰 5Y6/1	ロクロナデ	口縁1/12	
77	40602	F-d8 SK201 土器1	須恵器 杯	口径9.0、器高3.2	灰 10Y5/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	底部8/12	壺蓋として利用か
78	41804	F-d8 SK201 南西	須恵器 甕	—	灰白 5Y7/1	ロクロナデ、頸部に刺突列点文	頸部1/12	
79	40101	F-d8 SK201 北東	須恵器 甕	口径20.0	灰 5Y6/1	ロクロナデ、頸部に刺突列点文2段	口縁3/12	
80	40601	F-d8 SK201 土器3	須恵器 高杯	脚径13.2	灰 N5/	ロクロナデ、透孔無	脚柱完存	SK202と接合
81	40804	F-d9 SK202 №1	土師器 甕	底径8.5	にぶい橙 7.5YR7/4	内面にハケメ、底部外面一部ヘラケズリ	体下部 6/12	平底　外面剥離激しく調整不明
82	41807	F-d9 SK202 埋土中	須恵器 杯	—	灰 5Y6/1	ロクロナデ	小片	
83	41901	F-d9 SK202 埋土中	須恵器 壺	底径13.8	にぶい黄橙 10YR7/4	外面タタキ、内面ナデ	底部3/12	酸化焼成
84	41806	F-d9 SK202 №2	須恵器 甕	—	褐灰 5YR5/1	外面タタキ＋カキメ、内面ナデ	頸部1/12	

第５表　遺物観察表③

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
85	50706	B-p20 SK301 №9	土師器 甕	—	黄褐 10YR5/6	ヨコナデ	口縁小片	
86	51003	B-p20 SK301 №3	土師器 甕	口径13.1	橙 5YR7/6	ハケメ	頸部1/5	風化強
87	50702	B-p20 SK301	土師器 甕	口径12.2	橙 5YR6/6	ハケメ	口縁5/12	
88	50604	B-p20 SK301 №19	土師器 甕	口径12.2	にぶい橙 7.5YR6/4	ハケメ	口縁小片	
89	50705	B-p20 SK301 №31	土師器 甕	口径12.8	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁3/12	受口口縁
90	50104	B-p20 SK301 №30	土師器 甕	口径20.8	にぶい黄橙 10YR6/4	ハケメ	口縁3/12	
91	50102	B-p20 SK301	土師器 甕	口径21.8	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁2/12	
92	50703	B-p20 SK301 №21	土師器 甕	口径13.6	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケメ	口縁1/12	
93	50701	B-p20 SK301 №18	土師器 甕	口径16.0	橙 7.5YR6/6	ハケメ	口縁1/12	
94	50704	B-p20 SK301 №27	土師器 甑	底径14.6	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	底部2/12	風化強
95	50606	B-p20 SK301 №25	土師器 甑	—	にぶい黄褐 10YR5/3	ハケメ	口縁小片	
96	50605	B-p20 SK301 №2	須恵器 蓋	口径10.0、器高3.6	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ。肩部に沈線	天井部完存	
97	50103	B-p20 SK301 №32	須恵器 高杯	口径8.6、器高7.1 脚径6.8	灰 5Y5/1	ロクロナデ、透孔無	10/12	
98	50105	B-p20 SK301 №24 B-w23 SH245 P1	須恵器 壺	口径11.9、器高8.8	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	6/12	
99	52001	B-p20 SK301	鉄製品 釘	直径0.55	—	—	残存長3.7㎝	有機物残存なし
100	02504	E-f17 SK88 土器2	土師器 甕	口径11.5、器高14.1	にぶい黄橙 10YR6/4	ハケメ、体部外面下半ヘラケズリ	口縁2/12 底部完存	
101	02406	E-f17・18 SK88	須恵器 杯	口径13.8、器高3.7	灰 5Y6/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁6/12	底部外面にヘラ記号「－」
102	02601	E-f17・18 SK88 南側 土器1	須恵器 甑	口径30.0	橙 5YR7/6	外面タタキ、内面ナデ	口縁5/12	酸化焼成で焼成不良
103	42103	B-u14 SK229	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/3	ヨコナデ	口縁小片	
104	42102	B-u14 SK229	土師器 甕	口径18.2	橙 7.5YR6/6	ヨコナデ	口縁1/12	風化強
105	50601	B-t14 SK229	土師器 甕	口径15.2	明赤褐 5YR5/8	内面ハケメ	口縁2/12	風化強
106	50101	B-t14 SK229	土師器 土錘	(4.4)×1.1、5.8g	灰黄 2.5Y7/2	ナデ	ほぼ完存	焼成前穿孔
107	40501	B-u14 SK229	土師器 土錘	(4.45)×1.5 9.7g	浅黄 2.5Y7/4	ナデ	両端若干欠損	焼成前穿孔
108	42101	B-u14 SK229	須恵器 杯	—	灰 N5/	ロクロナデ	口縁小片	
109	50603	B-t14 SK229	須恵器 杯	口径8.8	灰黄褐 10YR5/2	ロクロナデ	口縁1/12	
110	50602	B-t14 SK229	須恵器 壺	—	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ	口縁小片	
111	42201	B-u14 SK229	須恵器 器台	口径15.8	灰 5Y5/1	ロクロナデ	口縁1/12	
112	42006	B-u14 SK229	須恵器 高杯	—	灰 N4/	ロクロナデ、透孔2方向2段、沈線2条	脚柱残	
113	50801	B-q18 SK304	土師器 甕	口径19.9	浅黄橙 10YR8/4	—	頸部1/12	風化強
114	50803	B-q18 SK304	土師器 甕	口径15.8	浅黄橙 7.5YR8/6	ハケメ	口縁1/12	
115	50802	B-q18 SK304	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	
116	50804	B-q18 SK304	須恵器 蓋	口径11.2	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ	口縁2/12	
117	50805	B-q18 SK304	須恵器 杯	口径8.8、器高3.1	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁2/12	
118	00205	B-w4 SK15	土師器 甕	口径18.4	明黄褐 2.5YR7/6	外面ハケメ	口縁1/12	内面風化強

第６表　遺物観察表④

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色 調	製 作 技 法	残存度	備 考
119	00204	B-w4 SK15	須恵器 壺	口径21.0	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、外面カキメ	口縁1/12	
120	00206	B-w3・4 SK15	須恵器 壺	脚径11.4	にぶい赤褐 5YR5/3	ロクロナデ	底部2/12	自然釉 酸化焼成
121	00903	A-w21 SH48	土師器 甕	口径18.0	浅黄橙 7.5YR8/4	ハケメ	口縁2/12	
122	00904	A-w21 SH48	土師器 甕	口径21.0	黄橙 10YR8/6	ハケメ	口縁2/12	風化強
123	00905	A-w21 SH48	須恵器 蓋	口径11.5、器高3.8	灰 5Y6/1	ロクロナデ、天井部未調整	口縁ほぼ完存	厚手
124	00901	A-w21 SH48	須恵器 杯	口径14.0、器高3.8 高台径9.6	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、底部未調整	底部4/12	自然釉
125	50402	C-u5 SH321 №1	土師器 杯	口径17.3、器高5.6	橙 5YR7/6	外面ヘラミガキ	8/12	風化強
126	51105	C-u5 SH321 №4	土師器 甕	—	にぶい橙 7.5YR7/4	外面ハケメ、内面ナデ	口縁小片	
127	50302	C-u5 SH321 P1	土師器 甕	口径13.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ、底部外面ヘラケズリ	口縁3/12	
128	50504	C-u5 SH321 №6	土師器 甕	口径21.4	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケメ	口縁2/12	風化強
129	51106	C-u5 SH321 南東	須恵器 杯	—	灰 7.5Y4/1	ロクロナデ	口縁小片	
130	50505	C-u5 SH321 №6	須恵器 杯	口径12.2、器高4.2	灰 5Y4/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁1/12	
131	50401	C-u5 SH321 №2	須恵器 杯	口径13.8、器高4.8 高台径6.6	灰 5Y6/1	ロクロナデ、底部外面未調整	8/10	
132	51104	C-u5 SH321 北西	須恵器 壺	—	灰白 2.5Y7/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	体部5/12	
133	40902	F-c18 SH245 南東	土師器 甕	口径26.1	浅黄橙 10YR8/4	ハケメ	口縁1/12	
134	40901	F-c18 SH245 №1+3	土師器 甕	底径7.2	にぶい黄橙 10YR7/4	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	底部完存	平底
135	41507	F-c18 SH245 南西	須恵器 蓋	口径15.7	灰白 2.5Y8/2	ロクロナデ	口縁2/12	
136	41508	F-c18 SH245 北東	須恵器 蓋	口径18.8	灰 7.5Y4/1	ロクロナデ	口縁1/12	
137	41509	F-c18 SH245 カマド	須恵器 蓋	—	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	口縁小片	
138	41601	F-c18 SH245 南西	須恵器 杯	—	灰白 2.5Y8/2	ロクロナデ	口縁小片	酸化焼成
139	41510	F-c18 SH245 №6	製塩土器	口径16.2	橙 2.5YR6/6	粘土紐4段積上げ	口縁8/12	
140	40903	F-c18 SH245 南東	UF	4.74×3.24×1.34 20.3g	灰オリーブ 7.5Y6/2	—	完形	チャート
141	02205	A-x・y19・20 E-a20 SH73	土師器 甕	底径6.0	にぶい橙 7.5YR7/3	ハケメ	底部7/12	風化強 平底
142	02204	A-y19・20 SH73 貼床	土師器 甕	口径22.0	にぶい黄橙 10YR6/3	ハケメ	口縁1/12	
143	01404	E-c24 SF67	土師器 甕	口径22.0	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケメ	口縁1/12	
144	02905	E-c24 SK112	土師器 甕	—	橙 7.5YR7/6	ハケメ	口縁小片	
145	02904	E-c24 SK112	土師器 甕	—	淡赤橙 2.5YR7/4	ヨコナデ	口縁小片	
146	02903	E-c24 SK109 №1	土師器 甕	口径21.3	浅黄橙 10YR8/4	外面ハケメ、内面ナデ	口縁3/12	
147	01402	E-c・d24 SH64	土師器 甕	口径17.2	褐灰 10YR4/1	—	口縁2/12	風化強
148	01401	E-c、d24 SH64	須恵器 杯	高台径10.0	灰白 5Y7/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	底部4/12	
149	02801	E-b18 SF95 №1	土師器 甕	口径26.7	浅黄橙 10YR8/4	外面ハケメ、内面ナデ	口縁2/12	
150	02301	E-a・b18 SH76	須恵器 蓋	口径17.2、器高1.4	灰 5Y6/1	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	口縁3/12	
151	02302	E-a・b18 SH76	須恵器 杯	口径15.0	灰 5Y6/1	ロクロナデ	口縁3/12	
152	02303	E-a・b17・18 SH76	須恵器 杯	高台径10.0	灰 5Y6/1	ロクロナデ、底部外面未調整	底部3/12	

第７表　遺物観察表⑤

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
153	02305	E-a・b18 SH76	砥石	12.4×4.5×18 210g	明緑灰 7.5GY7/1	2面に使用痕	一部欠損	緑泥片岩 ＃600
154	51504	F-e23 SH339 貯蔵穴	土師器 甕	—	にぶい黄褐 10YR5/4	ハケメ	口縁小片	
155	51503	F-e22 SH339 P2	土師器 甕	口径15.4	にぶい橙 7.5YR6/4	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	口縁4/12	
156	51506	F-e23 SH339 カマド	土師器 甕	口径22.6	黄橙 10YR8/6	ハケメ	口縁3/12	
157	51505	F-e23 SH339	須恵器 蓋	—	暗灰黄 2.5Y5/2	ロクロナデ	口縁小片	
158	50501	F-e23 SH339 カマド	須恵器 蓋	口径14.2	灰 5Y5/1	ヨコナデ	口縁4/12	
159	51002	F-f18 SH341 土坑4	土師器 杯	口径11.0、器高2.9	橙 2.5YR6/6	外面ナデ、内面ヘラミガキ	1/4	暗文風のヘラミガキ
160	51604	F-e19 SH341	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ、内面ハケメが残る	口縁小片	
161	51601	F-e19 SH341	土師器 甕	口径16.2	明赤褐 5YR5/6	—	口縁1/12	風化強
162	51603	F-f19 SH341	土師器 甕	口径23.5	橙 5YR6/6	ハケメ	口縁1/12	
163	51602	F-f20 SH341 土坑2	須恵器 蓋	—	にぶい赤褐 5YR5/4	ロクロナデ	つまみ残	頂部摩耗
164	51605	F-f19 SH341 カマド一括 №2	砕片	(18.8)×5.2×6.9 936.8g	赤 10YR5/6	1面で分割	一部欠損	砂岩 被熱
165	51803	B-w23 SH345 貯蔵穴	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	—	口縁小片	風化強
166	50403	B-w23 SH345 貯蔵穴	土師器 甕	口径14.6	にぶい黄橙 10YR6/3	ハケメ、底部外面ヘラケズリ	口縁6/12	平底
167	51707	B-w23 SH345 P2	土師器 甕	—	橙 5YR6/6	外面ハケメ、内面ナデ、底部外面ヘラケズリ	底部ほぼ完存	
168	51801	B-w23 SH345 貯蔵穴	土師器 把手	—	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	把手のみ	差込技法 170と同一個体か
169	51802	B-w23 SH345 貯蔵穴	土師器 甑	—	浅黄橙 10YR8/3	外面ヘラケズリ、内面ナデ	底部片のみ	底中央に方形板を貼付 169と同一個体か
170	51701	B-w23 SH345	須恵器 杯	—	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	口縁小片	
171	51702	B-w23 SH345	須恵器 壺	—	灰 5Y6/1	ロクロナデ	台部小片	
172	41505	B-t12 SH230 P6	土師器 把手	—	浅黄橙 10YR8/4	貼付技法	把手のみ	
173	41504	B-t12 SH230 P1	須恵器 杯	—	暗灰黄 2.5Y5/2	ロクロナデ	口縁小片	
174	00202	B-v2 SH10	土師器 甕	—	にぶい黄褐 10YR5/3	外面ヘラケズリ、内面工具ナデ	底部完存	
175	00403	B-v2 SK24 下層	須恵器 杯	口径12.8、器高3.7	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	ロクロナデ、底部外面未調整	ほぼ完形	歪み有
176	00201	B-v2 SH10 №6	須恵器 杯	口径13.7、器高3.5 高台径10.4	灰 5Y5/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	7/12	
177	00203	B-v2 SH10	須恵器 甕	—	灰 5Y5/1	外面カキメ、内面同心円文	体上部小片	
178	41402	F-c12 SH204 南東	土師器 皿	—	橙 5YR6/6	外面ナデ、内面斜放射暗文	口縁小片	
179	41404	F-c12 SH204 北東	土師器 皿	—	橙 7.5YR7/6	ヨコナデ	口縁小片	
180	41408	F-c12 SH204 北東	土師器 皿	口径19.3、器高2.7	にぶい橙 7.5YR7/4	内面ナデ、底部外面ヘラケズリ	口縁2/12	暗文不明
181	40201	F-d13 SH204 カマド 土№3	土師器 皿	口径21.4、器高3.0	橙 5YR6/6	内面放射・ラセン暗文、底部外面ヘラケズリ	口縁3/12	
182	40702	F-d13 SH204 カマド 土№6	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/3	ハケメ	口縁小片	
183	40202	F-d13 SH204 P1 土№1	須恵器 杯	口径16.4、器高3.7 高台径12.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ロクロナデ	底部3/12	酸化焼成
184	41405	F-c12 SH204 北西	須恵器 杯	高台径9.8	灰 7.5Y5/1	ロクロナデ、底部外面未調整	底部3/12	
185	41407	F-c12 SH204 北東	須恵器 杯	口径13.4	灰 10Y6/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁1/12	
186	41406	F-c12 SH204 北東	須恵器 杯	—	灰 10Y4/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁小片	

第８表　遺物観察表⑥

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
187	41401	F-c12 SH204 北西	須恵器 杯	—	灰 5Y5/1	ロクロナデ	小片	
188	40701	F-c12 SH204 1層 土№1	須恵器 壺	口径10.3、器高9.2	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ、底部外面未調整	4/5	内面に漆付着
189	41403	F-d13 SH204 P1 土№2	陶器 瓶	底径8.2	にぶい黄橙 10YR6/3	ロクロナデ、底部外面糸切痕	底部3/12	
190	40203	F-c12 SH204 1層 石№2	砥石	(8.4)×9.4×5.1 690g	赤褐 10R5/3	6側面に使用痕	一部欠損	砂岩 ＃40
191	41101	F-C12 SH204 1層 石№1	砕片	26.1×11.3×7.7 3,020g	灰黄 2.5Y7/2	1面で分割面	一部欠損	砂岩 若干被熱
192	00502	B-u3 SK34 2層 土器2	土師器 甕	口径18.4	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケメ	口縁1/12	風化強
193	00501	B-u2 SK34 2層 土器1	土師器 甕	口径21.0	浅黄橙 10YR8/3	ハケメ	口縁2/12	風化強
194	00407	B-u3 SD29 カマド付近	須恵器 高杯	脚径10.0	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ	脚部4/12	
195	04402	B-u2 SK34 2層 鉄2上	鉄鎌	8.5×0.23 残存重15.9g	—	—	刃部半欠	
196	04401	B-u2 SK34 2層 鉄2下	鉄鎌	15.4×0.27 残存重29.1g	—	—	ほぼ完存	
197	51103	C-w5 SH319 北東	須恵器 杯	—	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	口縁小片	
198	50301	C-w5 SH319 カマド №1	須恵器 鍋	口径39.0	浅黄 2.5Y7/4	外面タタキ、内面ハケメ・同心円	口縁1/12	把手の剥離痕
199	03302	E-b19 SK122 №13	土師器 甕	口径28.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁小片	風化強
200	03006	E-b19 SK117	土師器 甕	—	明黄褐 10YR7/6	ヨコナデ	口縁小片	風化強
201	02202	E-b20 SH84	土師器 甕	口径25.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁1/12	
202	03301	E-b19 SK122 №12	土師器 甕	口径24.0	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ、内面にハケメが残る	口縁2/12	
203	03305	E-b19 SK122	製塩土器	口径7.3	にぶい黄橙 10YR6/4	外面未調整、内面ナデ	口縁3/12	
204	03306	E-b19 SK122	製塩土器	口径9.0	橙 7.5YR7/6	ナデ	口縁2/12	
205	03101	E-b19 SK118	製塩土器	口径8.9	にぶい橙 7.5YR7/4	外面未調整、内面ナデ	口縁1/12	歪みがあれば口径不正確
206	03203	E-b19 SK122 №5・11	須恵器 蓋	口径16.4、器高2.8	灰 5Y5/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁11/12	
207	03303	E-b19 SK122 №6	須恵器 蓋	口径16.8	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁6/12	SK117が接合
208	03205	E-b19 SK122	須恵器 蓋	—	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ	口縁小片	酸化焼成
209	03202	E-b19 SK122 №4	須恵器 蓋	口径15.7	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁完存	焼成不良
210	03204	E-b19 SK122 №15	須恵器 杯	口径13.0、器高3.1	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	口縁2/12	焼成不良
211	03304	E-b19 SK122 №14	須恵器 杯	口径12.0、器高3.3	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、底部外面未調整	口縁8/12	
212	03102	E-b19 SF120	須恵器 杯	底径11.5	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	底部2/12	
213	03201	E-b19 SK122 №2・3・8・9・10・11	須恵器 甕	口径18.7	灰 7.5Y5/1	外面タタキ、内面ナデ	口縁4/12	
214	00703	B-x4 SF38	土師器 皿	—	にぶい黄橙 10YR7/4	底部外面ヘラケズリ	口縁小片	暗文有無不明
215	00603	B-x4 SF38	土師器 皿	口径22.0、器高3.0	にぶい黄橙 10YR7/4	外面ヘラケズリ、内面ナデ	口縁2/12	
216	00602	B-x4 SF38	土師器 甕	口径20.0	にぶい黄橙 10YR7/4	—	口縁2/12	風化大
217	00701	B-x4 SF38	土師器 甕	口径24.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁2/12	
218	00702	B-x4 SF38	土師器 鍋	—	浅黄橙 10YR8/3	—	体部小片	外面剥離多い
219	00601	B-w3 SK36	土師器 甕	口径15.7	にぶい橙 7.5YR7/4	ハケメ	口縁5/12	
220	00604	B-w3 SK36	土師器 甕	口径22.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁2/12	

第９表　遺物観察表⑦

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
221	01002	F-c3・4 SK54	須恵器 蓋	—	灰 5Y6/1	ロクロナデ、天井部外面未調整	口縁小片	
222	01001	F-c3・4 SK54	須恵器 横瓶	—	暗灰黄 2.5Y5/2	外面カキメ、内面同心円	体部小片	加工円盤？
223	10102	T5④ SK54	砥石	8.6×(5.2)×5.4 335g	灰オリーブ 5Y5/2	各面に弱い使用痕	一部欠損	ホルンフェルス ＃600
224	02404	E-f・g19・20 SK86	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	口縁小片	
225	02405	E-f・g19・20 SK86	製塩土器	—	橙 5YR7/6	未調整	脚部片	
226	02401	E-f、g18、19 SK86	須恵器 蓋	口径10.4、器高2.95	褐灰 10YR4/1	ロクロナデ	口縁3/12	
227	02403	E-f・g19・20 SK86	須恵器 杯	口径11.4、器高4.1	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、底部外面未調整	底部完存	
228	02402	E-f・g19・20 SK86	須恵器 壺	口径10.5、器高8.3 高台径7.2	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	底部9/12	
229	02501	E-f・g19・20 SK86	須恵器 甕	106g	黄灰 2.5Y6/1	外面タタキ、内面同心円	小片	円盤状破片
230	02502	E-f・g19・20 SK86	土管	体部径11.0	黒 N2/	外面ヘラケズリ、内面ナデ。粘土紐積上成形	小片	陶質
231	02503	E-f・g18・19 SK86	砥石	12.6×7.3 750g	灰白 10Y7/1	2面に使用痕	小片	ホルンフェルス ＃120
232	00801	B-y2 SK42	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	—	口縁小片	風化強
233	00803	B-y2 SK42	須恵器 杯	口径12.2、器高4.8	にぶい黄橙 10YR7/2	ロクロナデ、底部外面未調整	口縁3/12	口縁部に自然釉
234	00802	B-y2 SK42	軽石	23.72g	にぶい黄橙 10YR7/4	—	完存	非加工
235	51001	B-y24 SK327 西	土師器 甕	口径20.0	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁2/12	
236	50906	B-y24 SK327 西	土師器 甕	口径20.0	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ	口縁1/12	受口口縁
237	50905	B-y24 SK327 西	須恵器 杯	口径13.8	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	口縁1/12	
238	02703	E-a17 SK91	土師器 把手	—	浅黄橙 10YR8/4	差込技法	把手完存	
239	02702	E-a17 SK91	須恵器 杯	口径12.6	灰 5Y5/1	ロクロナデ	口縁2/12	
240	02704	E-a17 SK91	砥石	15.8×6.9×3.4 590g	灰白 10YR7/1	各面に使用痕	完形	砂岩 ＃80
241	42203	B-x10 SK236	須恵器 杯	—	灰黄褐 10YR5/2	ロクロナデ	口縁小片	酸化焼成
242	42202	B-x10 SK236	須恵器 杯	高台径11.0	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	底部2/12	
243	00102	B-u2・3 SK5	土師器 把手	—	にぶい橙 5YR9/4	貼付技法	把手完存	
244	00101	B-u2・3 SK5	須恵器 杯	底径13.8	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、底部外面未調整	2/12	
245	01004	E-d23 SK62	土師器 皿	—	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	口縁小片	
246	01101	E-c23 SK62	土師器 甕	口径20.0	浅黄橙 10YR8/4	—	口縁1/12	風化強
247	01102	E-d23 SK62	土師器 甕	口径21.2	にぶい橙 7.5YR7/4	ハケメ	口縁3/12	
248	01005	E-c・d23 SK62	土師器 甕	口径14.0	にぶい橙 7.5YR7/3	ヨコナデ	口縁小片	
249	01103	E-d23 SK62	須恵器 杯	—	にぶい黄橙 10YR6/3	ロクロナデ	口縁小片	
250	00805	B-y2 SK43	土師器 甕	—	灰黄褐 10YR5/2	ハケメ	口縁小片	
251	00806	B-y2 SK43	須恵器 蓋	—	灰 10Y6/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁部欠損	
252	00804	B-y2 SK43	須恵器 杯	口径14.0、器高4.2	灰 7.5Y5/1	ロクロナデ、底部外面未調整	口縁1/12	
253	00906	B-y2 SK43	フイゴ 羽口	孔先端径5.0	浅黄橙 10YR8/3	ナデ	口縁1/12	風化強
254	00107	B-u・v3・4 SK7	須恵器 杯	口径14.0	灰 5Y6/1	ロクロナデ	口縁1/12	

第 10 表　遺物観察表⑧

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色 調	製 作 技 法	残存度	備 考
255	00105	B-u・v3・4 SK7	須恵器 杯	口径12.2	灰 5Y6/1	ロクロナデ	口縁2/12	自然釉
256	00106	B-u3 SK7	須恵器 壺	—	灰オリーブ 5Y5/2	ロクロナデ	口縁小片	自然釉
257	00104	B-u3 SK7	須恵器 壺	口径11.2	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ	口縁2/12	自然釉
258	01803	E-e22 SK68 1層	須恵器 杯	高台径12.4	灰 5Y6/1	ロクロナデ、底部外面未調整	底部2/12	外底面に自然釉
259	01802	E-d・e22 SK68	須恵器 椀	底径6.5	灰 N4/	ロクロナデ、底部外面糸切痕	底部4/12	
260	01804	E-e22 SK68 上層	須恵器 椀	底径6.8	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、底部外面未調整	底部3/12	
261	01801	E-e22 SK68 上層	須恵器 椀	底径8.0	にぶい赤褐 2.5YR5/3	ロクロナデ、底部外面糸切痕	底部2/12	自然釉 底部外面に圧痕
262	01505	E-e22 SK68	須恵器 壺	肩径16.2	灰 N6/	ロクロナデ、肩部に2条の沈線	体部1/12	風化強
263	01602	E-e22 SK68 №3	須恵器 壺	—	灰白 N7/	ロクロナデ	体部3/12	
264	01504	E-e22 SK68 下層	須恵器 壺	底径10.4	褐灰 10YR6/1	ロクロナデ、体部外面下端タタキ	底部2/12	
265	01405	E-e22 SK68 上層	須恵器 壺	脚基部径5.5	灰褐 5YR5/2	ロクロナデ	脚部3/12	酸化焼成
266	01903	E-e22 SK68 上層	須恵器 壺	—	暗灰 N3/	ロクロナデ	小片	
267	01704	E-e22 SK68 下層	灰釉陶器 壺	頸基部径8.0	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	頸部3/12	
268	01604	E-e22 SK68 下層	灰釉陶器 壺	頸基部径9.0	灰白 2.5Y7/1	ロクロナデ	頸部3/12	
269	01601	E-e22 SK68 上層	灰釉陶器 壺	—	灰白 5Y7/2	ロクロナデ	頸部4/12	
270	01603	E-e22 SK68 下層	灰釉陶器 壺	高台径12.4	灰白 10YR7/1	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	底部3/12	
271	01605	E-e22 SK68 下層	灰釉陶器 壺	高台径12.8	黄灰 2.5Y6/1	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	底部2/12	
272	01703	E-e22 SK68	須恵器 甕	頸基部径19	灰 10Y6/1	外面ロクロナデ、内面同心円	頸部2/12	タタキが残る
273	01701	E-e22 SK68 №4	須恵器 甕	頸部径14.7	灰 N6/	ロクロナデ	頸部3/12	
274	01403	E-e22 SK68 1層	須恵器 甕	頸基部径30.4	灰 7.5Y5/1	ロクロナデ	頸部1/12	
275	01902	E-e22 SK68 1層	須恵器 甕	—	灰 N5/	外面タタキ、内面同心円	小片	
276	02001	E-e22 SK68 №24	須恵器 甕	—	褐灰 10YR6/1	外面沈線＋波状文、内面ロクロナデ	小片	
277	02002	E-e22 SK68 1層	須恵器 甕	—	灰 N5/	外面タタキ＋ロクロナデ、内面ナデ	小片	横瓶の可能性あり
278	01901	E-e22 SK68 1層	須恵器 甕	—	灰黄 2.5Y7/2	外面タタキ、内面ナデ	小片	円盤状破片
279	02003	E-e22 SK68 №9	須恵器 甕	—	暗灰 N3/	外面タタキ、内面同心円	小片	
280	02103	E-e22 SK68 №1	須恵器 甕	—	黄灰 2.5Y5/1	外面タタキ、内面ロクロケズリ	小片	
281	02102	E-e22 SK68 上層	須恵器 甕	—	灰黄 2.5Y7/2	外面タタキ、内面ナデ	小片	タタキは格子
282	01904	E-e22 SK68 №5	須恵器 甕	—	にぶい赤褐 2.5YR4/4	外面タタキ、内面ナデ	小片	
283	02101	E-e22 SK68 1層	須恵器 甕	—	灰 N4/	外面タタキ、内面同心円	小片	
284	01806	E-e22 SK68 上層	土師器 カマド	—	にぶい黄橙 10YR7/4	外面ハケメ、内面ナデ	小片	
285	01805	E-e22 SK68 1層	丸瓦	—	灰 5Y6/1	ナデ	小片	
286	01503	E-e22 SK68 下層	土管	体部径10.6	黒褐 10YR3/1	外面ヘラケズリ、内面ナデ。粘土紐積上成形	体部3/12	陶質
287	01501	E-22 SK68 №16	土管	体部径13.6	褐灰 10YR4/1	外面ヘラケズリ、内面ナデ。粘土紐積上成形	体部3/12	288と同一個体か 陶質
288	01502	E-e22 SK68 上層	土管	底径13.0	黄灰 2.5Y6/1	外面ヘラケズリ、内面ナデ。粘土紐積上成形	底部3/12	287と同一個体か 陶質

第 11 表　遺物観察表⑨

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
289	01702	E-e22 SK68 上層	陶器 甕	頸部径20.8	灰黄褐 10YR6/2	外面タタキ、内面ナデ	頸部2/12	
290	03805	E-e22 SK68 上層	加工円盤	10.3×7.6×1.9 175.5g	灰黄 2.5Y7/2	—	完形	泥岩
291	04101	E-e22 SK68 №28	砥石	12.4×9.2×9.0 1,320g	灰オリーブ 7.5Y6/2	6面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃40 被熱
292	03902	E-e22 SK68 №29	砥石	8.9×9.9×7.6 780g	灰黄 2.5Y6/2	各面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃80 被熱
293	03803	E-e22 SK68 №27	砥石	12.2×10.2×4.6 750g	浅黄 2.5Y7/3	各面に使用痕	欠損あり	砂岩(軟質) ＃180
294	03804	E-e22 SK68 №17	砥石	6.5×8.5×4.8 258g	褐灰 7.5YR6/1	2面に使用痕	欠損あり	被熱 砂岩(軟質) ＃120
295	03802	E-e22 SK68 下層	砥石	8.9×5.9×2.2 162g	灰白 10YR7/1	2面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃80 被熱
296	03801	E-d・e22 SK68	砥石	7.95×3.3×2.4 125g	灰白 5Y7/1	両面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃80
297	03901	E-e22 SK68 №2	砥石	22.6×9.0×7.1 1,720g	灰黄 2.5Y6/2	3面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃40 被熱
298	04001	E-e22 SK68 №30	砥石	24.8×20.5×9.7 5,250g	灰白 5Y7/1	2面に使用痕	欠損あり	砂岩 ＃80
299	42302	B-s8 P1	縄文土器	—	にぶい黄褐 10YR5/4	ヘラ描沈線	体部小片	
300	03401	A-q25 P1	土師器 椀	口径10.4、器高4.0	浅黄橙 7.5YR8/4	ナデ	口縁6/12	
301	41204	B-y5 P1	土師器 椀	口径11.6	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁2/12	
302	41210	F-c13、P1	土師器 皿	口径15.6、器高2.3	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ	1/12	
303	03701	A-w20 SK137	土師器 甕	口径16.6	浅黄橙 10YR8/3	ハケメ、体下外面半部ヘラケズリ	口縁11/12	
304	51102	B-l4 SH316 カマド №5	土師器 甕	口径15.6	橙 7.5YR7/6	ハケメ、底部外面ヘラケズリ	口縁2/12	
305	51705	B-v17 P1	土師器 甕	口径26.2	浅黄橙 10YR8/3	ハケメ	口縁1/12	受口口縁
306	41503	B-w16 SH227 カマド	土師器 甕	—	浅黄橙 7.5YR8/6	ヨコナデ	口縁小片	
307	42207	B-y11 SB226 P12	土師器 甕	—	明赤褐 5YR5/6	ヨコナデ	口縁小片	
308	03602	F-b2 P1	土師器 甕	—	橙 7.5YR7/6	ナデ	口縁小片	風化強
309	50908	F-d23 SK337	土師器 甕	—	にぶい橙 7.5YR6/4	ヨコナデ、内面にハケメが残る	口縁小片	
310	42206	F-a11 SB222	土師器 甕	—	明黄褐 10YR7/6	ヨコナデ	口縁小片	
311	41208	F-a8 P1	土師器 甕	—	にぶい橙 7.5YR7/4	ヨコナデ	口縁小片	
312	51405	G-d12 SH331	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁小片	
313	03504	E-d23 P4	土師器 甕	口径14.0	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	口縁1/12	
314	03405	B-x4 P1	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	
315	41209	B-q5 P2	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	
316	50907	G-c5 SK334 東	土師器 甕	口径10.8	にぶい黄橙 10YR6/4	ヨコナデ、内面にハケメが残る	頸部2/12	
317	42204	B-t7・8 SK241	土師器 甕	口径21.8	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	口縁2/12	
318	03105	F-a1 SK134	土師器 甕	口径20.2	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	口縁1/12	
319	42004	F-a15 SK216	土師器 甕	口径15.8	にぶい黄橙 10YR7/4	—	口縁2/12	風化強
320	51502	F-e24 SH338 カマド	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	
321	03408	E-b18 P1	土師器 甕	—	明黄褐 10YR7/6	ハケメ	口縁小片	
322	50902	B-k14 SK315	土師器 甕	—	浅黄橙 7.5YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	

第 12 表　遺物観察表⑩

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色 調	製 作 技 法	残存度	備 考
323	50904	B-x24 SK326	土師器 甕	—	黄橙 10YR8/6	ヨコナデ、内面にハケメが残る	口縁小片	
324	03503	E-d23 P3	土師器 甕	口径33.0	橙 7.5YR6/6	ハケメ	口縁2/12	
325	41202	B-v13 P1	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR7/4	ヨコナデ	口縁小片	
326	41205	B-s12 P1	土師器 把手	—	浅黄橙 10YR8/3	貼付技法	把手	
327	41211	B-s11 P2	土師器 把手	—	橙 7.5YR7/6	貼付技法	把手	
328	03402	A-u21 P1	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/3	ハケメ	口縁小片	
329	50909	F-e21 SK342	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/3	ヨコナデ	口縁小片	
330	41903	F-c12 SK210 南側	土師器 甕	—	にぶい黄橙 10YR6/4	ヨコナデ	口縁小片	
331	03407	E-b18 P1	土師器 甕	—	黄褐 2.5Y5/3	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	底部9/12	
332	00503	B-w4 SK35	土師器 高杯	脚径10.8	にぶい黄橙 10YR7/3	—	脚部3/12	須恵器の成形 風化強
333	41206	B-t5 P1	土師器 壺	脚径6.1	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	9/12	
334	00902	B-y2 SK44	須恵器 蓋	—	灰 5Y6/1	ロクロナデ、肩部に沈線	口縁小片	
335	03505	E-d24 P1 №1	須恵器 蓋	口径11.0、器高3.3	灰 N5/	ロクロナデ、天井部外面未調整	ほぼ完形	
336	41302	B-t11 P3	須恵器 蓋	口径12.0	灰白 5Y7/1	ロクロナデ	口縁1/12	
337	60107	B-S21 SK408 上層	須恵器 蓋	口径10.8、器高3.2	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ、天井部外面未調整	口縁1/8	
338	03403	A-v17 P1	須恵器 蓋	口径12.0	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	口縁1/12	
339	02701	E-f18 SK90	須恵器 蓋	口径9.2	灰白 2.5Y7/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁3/12	釉が厚く調整不明確
340	02203	A-y21 SH79	須恵器 蓋	—	灰オリーブ 5Y5/2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁小片	
341	41303	B-u11 P3	須恵器 蓋	—	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	口縁小片	
342	03404	A-y23、E-a23 P1	須恵器 蓋	—	灰 7.5Y5/1	ロクロナデ	口縁小片	
343	02705	A-x・y19・20 SK92	須恵器 蓋	口径22.0	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ、天井不外面ロクロケズリ	口縁4/12	
344	51902	B-x24 P1 柱痕	須恵器 蓋	口径18.6	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁1/12	
345	41506	B-v12 SF233	須恵器 蓋	口径12.9	灰白 5Y7/1	ロクロナデ	口縁1/12	
346	41201	B-u4 P1	須恵器 蓋	—	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	口縁小片	
347	51805	B-r16 P4	須恵器 杯	—	灰 5Y5/1	ロクロナデ	口縁小片	
348	50903	G-a7 SK317	須恵器 杯	口径11.8、器高3.6	灰 N6/	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	1/4	
349	02902	A-y22 SK106	須恵器 杯	口径8.7、器高2.7	灰赤 2.5YR5/2	ロクロナデ、底部外面未調整	ほぼ完存	自然釉 酸化焼成
350	03103	E-b24 SK129	須恵器 杯	口径14.2、器高4.2 高台径9.3	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	2/12	底部に直線状線刻
351	41203	B-w15 P1	須恵器 杯	—	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	口縁小片	
352	40503	B-s8 P1	須恵器 杯	口径14.6、器高4.1 高台径10.4	灰白 5Y7/2	ロクロナデ、底部外面ナデ	ほぼ完存	
353	03601	F-a2 P2	須恵器 杯	高台径12.2	灰 N6/	ロクロナデ	底部2/12	
354	42005	F-a10 SK220 北東	須恵器 杯	底径5.6	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、底部外面未調整	底部4/12	
355	03502	E-b25 P2	須恵器 杯	口径10.0	灰 N5/	ロクロナデ、底部外面未調整	口縁2/12	
356	41207	E-h22 P1	須恵器 杯	口径11.0、器高2.9	灰白 7.5Y8/1	ロクロナデ、底部外面未調整	2/5	

第 13 表　遺物観察表⑪

報告番号	実測番号	出土地区・遺構名等	器種・器形	法量(cm)	色調	製作技法	残存度	備考
357	03603	F-e3 P1	須恵器 壺	口径12.0	灰白 7.5Y7/1	ロクロナデ	口縁2/12	
358	41301	E-h22 P2	灰釉陶器 壺	口径6.4	灰白 5Y7/1	ロクロナデ	口縁3/12	自然釉
359	01003	F-d1・2、e1・2 SK60	須恵器 壺	—	灰白 7.5Y7/1	外面カキメ・ロクロケズリ、内面ロクロナデ	体部片	
360	03604	F-b4 P1	須恵器 壺	高台径8.9	褐灰 7.5YR4/1	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	底部7/12	底部外面にヘラ記号「×」
361	02304	E-d23 SK70	須恵器 壺	底径7.5	灰黄 2.5Y6/2	ロクロナデ、体部外面下端ロクロケズリ	底部2/12	焼成不良
362	02901	E-b25 SK97	須恵器 壺	底径5.0	暗灰黄 2.5Y5/2	外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	底部5/12	自然釉 陶器か
363	42301	B-y11 SB215 P5	須恵器 甕	—	灰白 5Y8/1	ヨコナデ	口縁小片	焼成不良
364	51904	C-y6 SH318 P1	須恵器 甕	—	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、外面に波状文2帯	口縁小片	
365	01203	F-c3 SD61	須恵器 甕	口径13.3	灰 N5/	外面タタキ、内面同心円	頸部小片	
366	00103	B-w2 SH11	須恵器 甕	—	灰 5Y6/1	外面ハケメ、内面同心円	体部小片	
367	00301	A-v24 SK12	須恵器 甕	—	灰 N6/1	ロクロナデ、外面に沈線＋刺突列点文	頸部2/12	
368	02201	F-c1 SD83	須恵器 平瓶	口径10.6	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	口縁3/12	
369	03501	E-b25 P2	須恵器 平瓶	—	灰白 5Y7/1	ロクロナデ	体部小片	
370	40801	B-w11 P4	須恵器 高杯	底径8.8	黄灰 2.5Y6/1	ロクロナデ、透孔無	脚部8/12	自然釉
371	41902	F-d13 SK203	須恵器 高杯	—	灰白 5Y7/1	ロクロナデ、透孔無	脚柱のみ	
372	51804	B-n18 P1	須恵器 高杯	底径8.4	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ、透孔無	脚部ほぼ完存	焼成不良
373	03406	E-a23 P1	陶器 壺	口径5.2	にぶい赤褐 2.5YR4/3	ロクロナデ、部分施釉	口縁1/12	常滑か
374	50201	B-k14 SK315 石№1	敲石	13.8×4.5×3.4 289.5g	灰白 2.5Y7/1	一端に敲打痕	8/12	砂岩
375	42205	F-g・h7 SK249	砕片	8.1×7.0×2.4 161.4g	浅黄 5Y7/3	2面で分割	一部欠損	ホルンフェルス
376	41308	F-d8 P1	磨石	6.0×7.5×3.6 199.4g	黄褐 2.5Y5/3	1面に使用痕	完形	砂岩
377	41305	B-u15、B-v15・16 包含層	土師器 甕	—	浅黄橙 10YR8/4	ヨコナデ	口縁小片	
378	03005	A-v24 包含層	土師器 甕	—	にぶい橙 7.5YR7/4	ハケメ	口縁小片	
379	03004	A-p25 包含層	土師器 甕	口径16.3	にぶい黄橙 10YR7/4	ハケメ	口縁2/12	
380	03003	A-22 表土	土師器 甕	口径17.5	橙 7.5YR7/6	ハケメ	口縁2/12	
381	60101	B-U23 落ち込み	土師器 甕	口径21.6	橙 2.5YR6/8	外面ハケメ、内面ナデ	口縁部小片	
382	03002	表土	須恵器 蓋	口径14.3	黄灰 2.5Y5/1	ロクロナデ、天井部外面一部ロクロケズリ	口縁1/12	
383	41304	B-x11、検出中	須恵器 杯	口径11.6	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	口縁1/12	
384	03104	F 表土	須恵器 杯	口径22.0、器高5.1 高台径17.0	褐灰 10YR6/1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	4/12	
385	41307	B-y6 風倒木痕	須恵器 杯	高台径11.8	灰 5Y6/1	ロクロナデ	底部1/12	
386	03001	T2 ①	須恵器 椀	口径11.5、器高4.2	にぶい黄橙 10YR6/4	ロクロナデ、底部外面未調整	口縁4/12	還元不良
387	51901	B 排土	須恵器 椀	口径10.4、器高3.2	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ、底部外面未調整	1/6	
388	10101	T11②	須恵器 高杯	脚径9.1	灰 7.5Y6/1	ロクロナデ	脚部5/12	
389	51903	B-n12 撹乱	須恵器 甕	—	灰黄 2.5Y7/2	ロクロナデ	口縁小片	
390	41306	B-x11、風倒木	須恵器 甕	—	灰 N6/	ロクロナデ、外面タタキ	口縁小片	

第 14 表　遺物観察表⑫

Ⅵ．自然科学分析

１．須恵器内面付着物の赤外分光分析

(1) はじめに

北山Ａ遺跡から出土した須恵器の内面に黒褐色の付着物が見られた。ここでは、須恵器内面付着物の赤外分光分析を行い、材質について検討した。

(2) 試料と方法

試料は、北山Ａ遺跡から出土した須恵器短頸壺（188）の内面黒褐色付着物である（第16表）。

赤外分光分析では、手術用メスを用いて各付着物の表面部分を薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ１mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

(3) 結果および考察

以下に、各須恵器内面付着物の特徴と赤外分光分析について述べる。なお、各須恵器内面付着物の赤外吸収スペクトル図（第85図）では、縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber (cm^{-1})；カイザー）を示す。各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置（第15表）を示す。

この付着物は、やや光沢のない黒褐色を呈する（写真図版45・1a）。付着物は内面の一部にのみ見られ、底部から口縁部付近まで付着している。なお、外面には付着物は見られない。

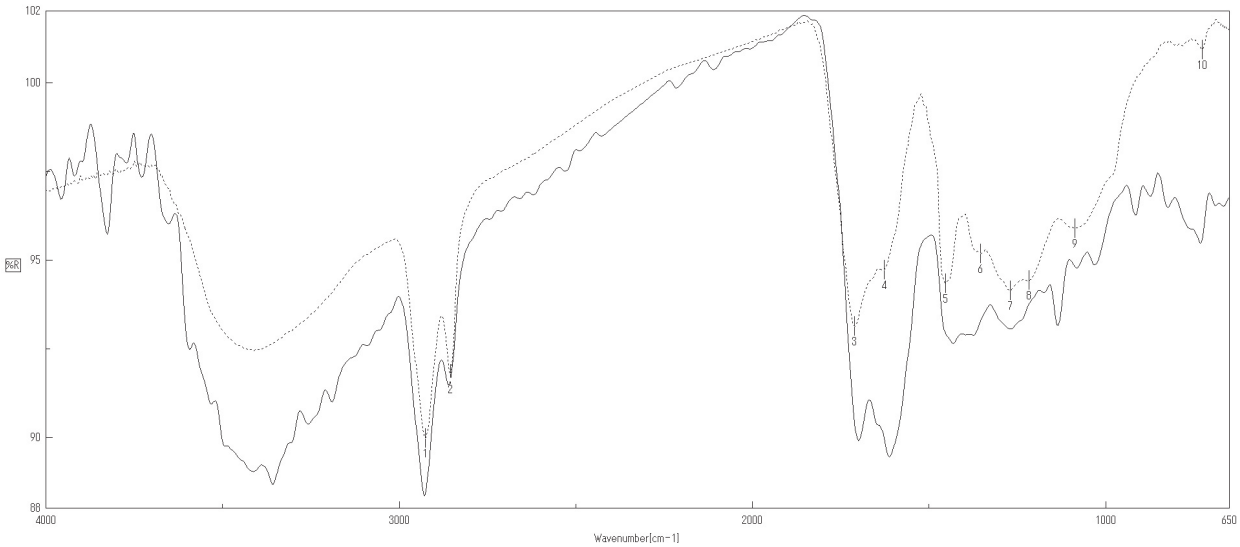
比較的光沢のある部分の赤外分光分析では、ウルシオールの吸収（No. 7）が明瞭に検出され、また生漆の他の吸収とも一致した（第85図）。なお、1033 (cm^{-1}) 付近に強い吸収が見られるが、付着物の

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

第15表　生漆の赤外吸収位置とその強度

分析No.	器種	部位	遺跡	遺構	時期	色調
1	須恵器短頸壺	内面	北山Ａ遺跡（第3次）	SH204	飛鳥～奈良時代	黒褐色、光沢やや無し

第16表　赤外分光分析を行った付着物とその詳細



第85図　赤外吸収スペクトル図

変質による吸収と思われる。

赤外分光分析の結果から、付着物は漆と同定される。また、採取した試料において縮み皺は見られなかった。

漆付着物は、須恵器内面の一部にのみ残存し、縮み皺は確認されないが、本来は器の内面全面に付着していたと推定される。これら須恵器は、漆容器であった可能性が考えられる。

(4) おわりに

北山Ａ遺跡から出土した須恵器短頸壺の内面付着物について、赤外分光分析を行った。その結果、付着物は漆と同定された。なお、須恵器の使用当時は付着物が内面の全体に付着していたと推定され、漆容器であった可能性が考えられた。

藤根　久（パレオ・ラボ）

２．放射性炭素年代測定

(1) はじめに

三重県四日市市に位置する、北山Ａ遺跡第３次発掘調査で出土した炭化材について、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

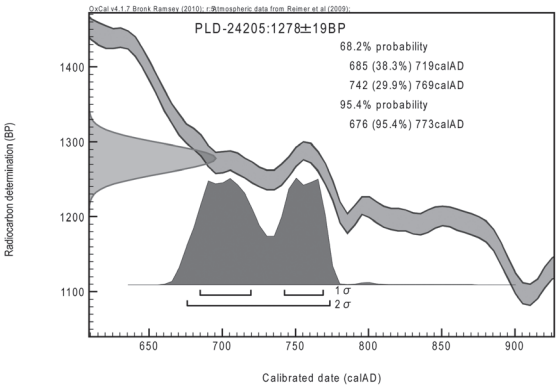
試料は、北山Ａ遺跡第３次発掘調査の焼成遺構であるＳＫ 241 から１点の出土炭化材である。（写真図版 45）発掘調査の所見では、北山Ａ遺跡第３次発掘調査のＳＫ 241 の時期は不明と考えられる。

測定試料の情報、調製データは第 17 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第 18 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 86 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。



第 86 図　年代測定結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24205	遺跡名：北山A遺跡 調査区：第3次発掘調査 グリッド：B-T7 遺構：SK241 試料No. 4 遺物No. サンプル2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 採取部位：外側2年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1. 2N, 水酸化ナトリウム：1. 0N, 塩酸：1. 2N）

第 17 表　測定試料および処理

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-24205 北山A遺跡第3次発掘調査 試料No. 4 遺物No. サンプル2	-24. 81±0. 31	1278±19	1280±20	685AD (38. 3%) 719AD 742AD (29. 9%) 769AD	676AD (95. 4%) 773AD

第 18 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

北山Ａ遺跡第３次発掘調査の焼成遺構であるＳＫ 241 で出土した炭化材（PLD-24205：試料 No.4）は、2 σの暦年代範囲で 676-773calAD（95.4%）を示し、7 世紀後半～８世紀後半であった。発掘調査の所見ではＳＫ 241 の時期は不明であったが、測定によって７世紀後半～８世紀後半頃であることがわかった。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史
・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze
・Ineza Jorjoliani・小林克也）

［参考文献］

・Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

・Reimer,P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E.,Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell,P.G.,Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M.,Grootes,P. M.,Guilderson, T.P.,Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G.,Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer,B.,McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A.,Southon, J.R.,Talamo,S.,Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

３．鉄滓の分析調査

(1) いきさつ

北山遺跡は三重県四日市市北山町に所在する。第３次調査地区内では奈良～飛鳥時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡等が検出されている。鍛冶関連遺構は未確認ながら、鉄滓が出土した。遺跡周辺での作業内容を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

・供試材

第 19 表に示す。出土鉄滓 1 点の調査を行った。

・調査項目

Ａ．肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

Ｂ．マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

Ｃ．顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3 μｍと 1 μｍで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

Ｄ．ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に 136 ゜の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf で測定した。

E．EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

F．化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

KTY－1：椀形鍛冶滓

肉眼観察　やや小形で偏平な椀形鍛冶滓（27.9g）である。上面は広い範囲が黒色ガラス質滓で覆われる。羽口先端の溶融物の可能性が高い。滓部は暗灰色で着磁性はほとんどない。側面２面は破面で強い光沢がある。気孔はごく僅かで緻密である。また下面には微細な気孔が密に見られ、部分的に灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。

マクロ組織　写真図版46の①に示す。上面側は石英・長石類などの砂粒を含むガラス質滓で、炉材粘土の溶融物と推定される。また下側では発達した淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。

顕微鏡組織　写真図版46の②・③に示す。ともに下半部の鍛冶滓部分の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）またはマグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）、灰褐色多角形結晶はマグネタイトとヘルシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）を主な端成分とする固溶体[①]と推測される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

ビッカース断面硬度　写真図版46の①の暗色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は1045Hv、1168Hvと非常に硬質であった。この硬度値から測定した両結晶はヘルシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）に近い組成と考えられる。ただしより明るい色調の多角形結晶はアルミナ（Al_2O_3）の割合はそれより低いと考えられる。また淡灰色柱状結晶の硬度値は677Hvであった。ファヤライトの文献硬度値[①]（600～

符号	地区名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
						大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	ｶﾛﾘｰ	
KTY-1	北山A（第3次）	FA-13 SK212	12	椀形鍛冶滓	飛鳥～奈良	50×39×15	27.9	なし	○	○	○		○	○			

第19表　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	＊二酸化珪素 (SiO_2)	＊酸化アルミニウム (Al_2O_3)	＊酸化カルシウム (CaO)	＊酸化マグネシウム (MgO)	＊酸化カリウム (K_2O)	＊酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ (V)	銅 (Cu)	Σ＊二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
KTY-1	北山A（第3次）	FA-13 SK212	椀形鍛冶滓	飛鳥～奈良	43.30	0.04	41.96	15.22	30.52	7.33	0.70	0.51	0.93	0.16	0.06	0.35	0.03	0.064	0.24	0.27	0.01	0.02	0.01	40.15	0.927	0.008	

第20表　供試材の化学組成

700Hv）の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

ＥＰＭＡ調査　写真図版46の④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。暗色多角形結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、アルミニウム（Al）に強い反応がある。定量分析値は58.3%FeO－36.3%Al_2O_3（分析点37）であった。マグネタイト（Magnetite：FeO･Fe_2O_3）とヘルシナイト（Hercynite：FeO･Al_2O_3）を主な端成分とする固溶体②である。また白色粒状結晶は特性Ｘ線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は85.6%FeO－4.7%Al_2O_3（分析点38）であった。アルミナ（Al_2O_3）を固溶することから、マグネタイト（Magnetite：FeO･Fe_2O_3）の可能性が高いと考えられる。淡灰色盤状結晶は特性Ｘ線像をみると鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は62.3%FeO－30.2%SiO_2（分析点39）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）に同定される。また素地部分の定量分析値は41.3%SiO_2－14.4%Al_2O_3－2.6%CaO－3.3%K_2O－29.6%FeO（分析点40）であった。非晶質珪酸塩中に非常に微細なファヤライトが晶出するため、その両者を反映した値と考えられる。

化学組成分析　第20表に示す。全鉄分（Total Fe）43.30%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第１鉄（FeO）41.96%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）15.22%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）の割合は40.15%と高値であるが、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）1.21%と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.35%、バナジウム（V）0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.06%と低値で、銅（Cu）は0.02%とやや低めである。

（4）まとめ

北山Ａ遺跡第３次調査地区から出土した、椀形鍛冶滓（KTY－1）は鍛錬鍛冶滓に分類される。炉材粘土（または鍛接剤の粘土汁・藁灰など）の溶融物（SiO_2主成分）溶融物の割合が高く、製鉄原料起源の脈石成分（鉄鉱石：CaO、MgO、MnO、砂鉄：TiO2、Ｖなど）の低減傾向が顕著であった。

遺跡周辺で鉄素材の熱間で鍛打加工時して、鍛造鉄器を製作していたものと推定される。

（日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所
ＴＡＣセンター　大澤正己・鈴木瑞穂）

［註］

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。〔またマグネタイトにアルミナ（Al_2O_3）が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体となると硬度値は上昇する。ヘルシナイトでは1000Hvを越える値を示す。〕

② 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物［第２版］』共立出版株式会社 1983

第５章　鉱物各論　Ｄ．尖晶石類･スピネル類（Spinel Group）の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式はXY_2O_4と表記できる。Ｘは２価の金属イオン、Ｙは３価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。（略）

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
KTY-1	北山A（第3次）	FA-13 SK212	椀形鍛冶滓	飛鳥～奈良	上側:ｶﾞﾗｽ質滓（石英･長石類混在）、滓部:MとHの固溶体+F	43.30	15.22	1.21	0.35	0.01	0.06	40.15	0.02	鍛錬鍛冶滓

M:Magnetite（FeO･Fe_2O_3）、H:Hercynite（FeO･Al_2O_3）、F:Fayalite（2FeO･SiO_2）

第21表　出土遺物の調査結果のまとめ

Ⅶ．結語

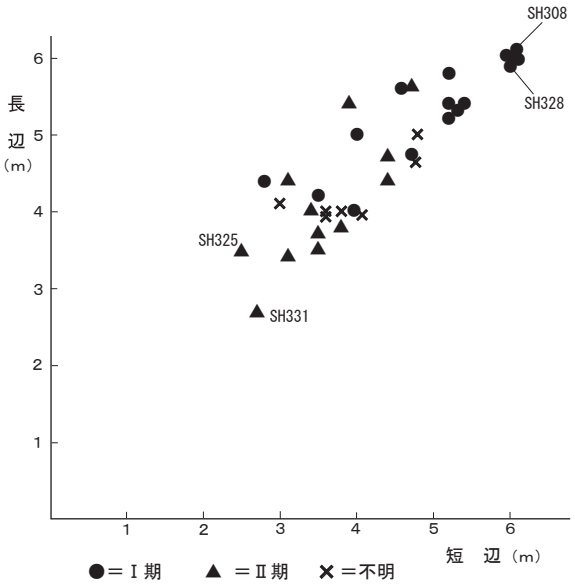
１．遺構の時期

今回の調査では、可能性も含めた竪穴住居49棟、掘立柱建物18棟をはじめ、多数の土坑等を検出している。そのなかで、縄文土器を合口で埋納したＳＸ126が縄文時代晩期、灰釉陶器が出土しているＳＫ68が９世紀に降り、ＳＫ85は既述したように中世の火葬穴の可能性が強い。これら以外の遺構は、残存が劣悪なものが多いため出土遺物も限られ、遺物からの時期決定は困難なものも多い。概略は、当遺跡出土遺物の大部分を占める７世紀中頃から８世紀前半にかけての土師器、須恵器の所属する時期と考えられる。以下、形式変化が比較的明瞭な須恵器を中心にその時期を細分する。まずその前提として、土師器、須恵器の分類記号は、平城京の分類①に従い、須恵器の型式・段階名は陶邑のもの②を使用する。

遺構出土の須恵器を概観すると、須恵器杯Ｂの有無によって、大きく大別できそうである。ＳＨ48の124、ＳＨ321の131、ＳＨ76の152、ＳＨ10の176、ＳＨ204の183、ＳＫ236の242の高台は底部のやや内側にハの字開く高台をもち、176・242は底部外面をロクロケズリで調整する等、杯Ｂとして古相を示すもので、Ⅳ－１～Ⅳ－２段階までに収まるものと考える。これに対応する須恵器蓋にも口縁端部をＺ字状に屈曲させるものはなく、矛盾しない。したがって、これらの時期は、８世紀でも初頭から前半に位置付けられる。

次に、ＳＫ63の57は杯Ｈに伴う蓋であるが、口径が10cmにまで縮小しているためⅡ－６段階に並行する。しかし、Ⅱ－４段階には消滅している天井部と口縁部の境の沈線を残している。この特徴は、猿投窯の第Ⅲ期第２小期（岩崎17号様式）でも古段階にまで認められる③もので、７世紀中頃以降まで降り得るものである。７、60、96等にも同様な特徴がみられ、北山Ａ遺跡には猿投窯と同様に口径が縮小しても古い要素を残すものが多い。したがって、まず口径の縮小が明白な杯Ｈやそれに伴う蓋を伴出するＳＨ247、ＳＨ347、ＳＫ201、ＳＫ229、ＳＫ301、ＳＫ304、ＳＫ309、ＳＫ402をⅡ－６段階並行とする。また、ＳＨ19・25・238の42やＳＫ211・212の67等の杯Ｈの蓋は口径がやや大きく、Ⅱ－５段階に相当する。しかし、猿投窯の岩崎101号では口径10cm程度の杯Ｈと口径12cmを越える杯Ｈが、数量の多寡を差し置けば共存している。同一窯であっても個体差や工人差があり、それを時期差へ直結することへの警鐘から、これらの一群をⅣ期古段階とし、７世紀後半の時期が与えられている④。型式前後間の重複を短くすることへの再考を促す見解⑤もあり、全ての杯Ｈを伴出する遺構は、前述のⅡ－６段階と同時期としたい。実年代としては前述した猿投窯の見解を加味し、７世紀の中頃から後半を与えることとする。この他に遺構の重複関係や土師器の様相を考慮に加え、北山Ａ遺跡の主要遺構の時期を、７世紀中頃から後半のⅠ期と８世紀前半のⅡ期に大別することにした。

次に、第87図は竪穴住居の規模を図表化したものである。ただし、一辺のみ規模の分かるものは、平面形を正方形と仮定している。Ⅰ期はⅡ期と比べ、比較的規模が大きく、一辺４ｍを切るものは存在しない。古墳時代から奈良時代にかけて県内の竪穴住居の規模縮小傾向と歩調を合わせ、Ⅰ期からⅡ



第87図　竪穴住居規模比較図

期へ向けて竪穴住居の規模が縮小していく様子が伺える。これにより、遺物等から時期大別が困難なＳＨ 308・328 の２棟はⅠ期として、ＳＨ 325・331 の２棟はⅡ期としてよいであろう。

なお、18 棟を確認した掘立柱建物については、大別が困難である。灰釉陶器の出土は、ＳＫ 68 以外ではＳＨ６にそれと疑われる小片が１片あるに過ぎず、９世紀の集落が広がることの想定は困難である。したがって、これらの掘立柱建物は竪穴住居集落の後に展開するのではなく、竪穴住居と混在していたものと考えられる。ＳＢ 215 の柱穴から杯Ｈの蓋が出土していることからⅠ期、ＳＢ 222 が竪穴住居との重複関係からⅡ期の可能性を示すに止める。

以下、大別できた遺構は下記のとおりである。

Ⅰ期（７世紀中頃～後半）　竪穴住居では、ＳＨ 19・25・238、ＳＨ 208、ＳＨ 221、ＳＨ 227、ＳＨ 247、ＳＨ 302、ＳＨ 307、ＳＨ 308、ＳＨ 318、ＳＨ 322、ＳＨ 332 の上下２棟、ＳＨ 328、ＳＨ 336、ＳＨ 341、ＳＨ 347、ＳＨ 401、の計 17 棟、土坑は、ＳＫ 15、ＳＫ 32、ＳＫ 44、ＳＫ 54、ＳＫ 63、ＳＫ 86、ＳＫ 88、ＳＫ 91、ＳＫ 94、ＳＫ 106、ＳＫ 137、ＳＫ 201、ＳＫ 202、ＳＫ 211、ＳＫ 212、ＳＫ 229、ＳＫ 301、ＳＫ 304、ＳＫ 309、ＳＫ 317、ＳＫ 330、ＳＫ 334、ＳＫ 337、ＳＫ 402、ＳＫ 407、ＳＫ 408 の計 26 基である。

Ⅱ期（８世紀前半）　竪穴住居はＳＫ５、ＳＨ 10、ＳＦ 38、ＳＨ 48、ＳＨ 64、ＳＨ 73、ＳＨ 76、ＳＨ 79、ＳＨ 84、ＳＨ 204、ＳＨ 230、ＳＦ 233、ＳＨ 245、ＳＨ 321、ＳＨ 325、ＳＨ 331、ＳＨ 339 の計 17 棟、土坑は、ＳＫ７・239、ＳＫ 30、ＳＫ 42、ＳＫ 43、ＳＫ 62、ＳＫ 92、ＳＫ 129、ＳＫ 220、ＳＫ 236 の計 10 基である。

２．集落変遷

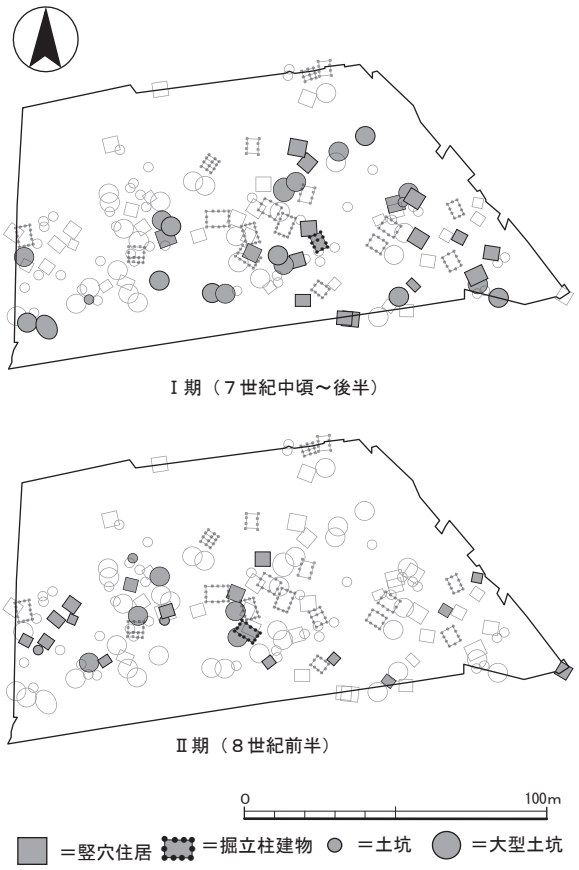
第 88 図はⅠ期からⅡ期への集落の変遷を模式図としたものである。なお、土坑は長径が２ｍ以上のものを大型土坑として区別した。

竪穴住居は、棟数としては両期に差は無く、両期間での盛衰は認められない。Ⅰ期からⅡ期に向けて集落の集中部分がやや西へ移動しているようである。Ⅰ期では２～３棟をひとまとめとして４～５組に分割できる可能性をみせるが、Ⅱ期ではその組は崩れる。集落の集中が西へ移動した後もなお、東部において散在的に竪穴住居が分布する。

掘立柱建物の大半は既述したように両期の区別は不可能であるが、Ⅰ期の竪穴住居の分布と重複するように調査区中央から東側に分布する。分布範囲でみれば、掘立柱建物の多くはⅠ期に属する可能性が高くなる。一方、Ⅰ期の竪穴住居が時代の進行と伴に掘立柱建物へ進化していったものとすれば、Ⅱ期に属することとなる。この場合はⅠ期からⅡ期へ向けて竪穴住居を含めた棟数は倍増し、集落は盛行するという結果を導く。結局、分布のうえからも掘立柱建物の時期細別は決定力を欠く。

両期にわたって、土坑の存在が目立つ。特に大型土坑はⅠ期に多く、Ⅱ期にはその数を減じる。竪穴住居や掘立柱建物との関連は不明であるが、竪穴住居の集中が西へ移動したⅡ期には大型土坑も東部には分布しない。竪穴住居との連動は想定してもよさそうである。

以上の様に、集落の西への移動とそれに伴う大型土坑の衰退の他は、明確な変遷は伺えなかった。Ⅰ



第 88 図　集落変遷模式図（1:2,500）

期・Ⅱ期の両時期に分けて検討したものの、岩崎17号窯で杯Ｈと杯Ｂが共存すること[6]に象徴されるように、両期の間には断絶はなく、連続的に続いていたものである。掘立柱建物の変遷が不明である限り、集落全体の変遷・盛衰の詳細は不明とせざるを得ない。

３．大型土坑

前述したように長径２ｍ以上の土坑を大型土坑とした。これらは当遺跡の発掘調査結果を特徴付ける遺構で、Ⅰ期で17基、Ⅱ期５基を確認し、他に所属時期不明のものが18基、平安時代に降るものが１基（ＳＫ68）である。ＳＫ68は土坑埋土上面の中央部を礫群で覆った特異な形状を示す。唯一平安時代に降るもので、周囲に平安時代の遺跡はなく、人里離れた場所に孤立して所在することになる。祭祀遺構の可能性も考えられるが、ここでは他のものと時期も性格も大きく異なるため以下の検討から除外する。

数量からすれば、Ⅰ期では竪穴住居１棟に対し１基の大型土坑となる。所属時期不明のものを勘案しても、この比率に大きな影響はない。ただし、Ⅱ期には衰退する傾向にあり、その中心はⅠ期にあるようである。

平面形は円形または不整円形を呈するものが多い。特徴的な遺物出土状況を示すものはなく、遺物の出土は概して少ない。ただし、ＳＫ241は土坑壁が焼土化し、Ⅰ期のＳＫ15はカマド屋的な施設に想定され、この両者は他のものと性格を異にする。

ＳＫ201・202やＳＫ211・212のように２基の土坑が縦列状に重複しているものがある。両者ともに、重複状況が共通し、重複間で深さに差は無く、２基の土坑の重複とするよりは長径６ｍを測る長円形のひとつの土坑とすることも可能である。形状からみれば、長径６ｍに達するＳＫ86、ＳＫ229も同類と思われ、深さも20～40cm程度、底部は平坦と共通点が多い。これらは全てⅠ期に属する。この様な状況から、これらの長大な土坑は徐々に掘削されて広がり、結果的にこの形態に達したものと推測することも可能である。このことから粘土や壁土等の採掘坑の可能性が浮上する。

県内で粘土採掘坑の調査事例としては、700基以上を確認した相川西方遺跡がある。この内古代に属するものは５基しかなく、弥生時代後期から古墳時代のものが大半を占める。しかし、採掘坑の特徴は時代を越えて共通であり[7]、北山Ａ遺跡と比較しても問題はない。検出時には重複土坑にみえても結果的に１基になるものがあることや、土坑の形状が不整形、一般的なものの規模や大小多様なものがあることも共通している。異なる項としては、相川西方遺跡では人為的に埋めているようであるが、北山Ａ遺跡ではそれはみられない。密集して分布する相川西方遺跡に対し当遺跡は散在的である。相川西方遺跡では１土坑から１固体の遺物出土を基本とするが、当遺跡では異なる。ただ、小型土坑ではあるがＳＫ137の出土状況はこれにちかい。深さは相川西方遺跡に比べやや浅いが、黄褐色粘土層の下には礫を多く含む層が迫っており、この深さで目的とする層の採掘は完了しているものと考えてもよい。多くの粘土採掘坑の断面が袋状を呈するのに対し、北山Ａ遺跡では小型の土坑ＳＫ91の１基のみである。粘土採掘坑では土坑底部に円礫を置く例があり[8]、相川西方遺跡でも複数の土坑で確認されている。対して当遺跡では、小型の土坑ＳＫ89にあるのみである。

この様に、粘土採掘坑とするには決定打に欠けるが、多数ある土坑の内、この目的のために掘削されたものが混在する可能性は残しておく。

次に、北山Ａ遺跡と同時期の大型土坑の検出例として平生遺跡と西山遺跡をみる。平生遺跡は雲出川流域の遺跡である。土坑の規模や深さは当遺跡と似るが、まとまった遺物の出土があり、当遺跡とは性格が異なるようである。集落の縁辺部に所在し、住居に隣接しないこと[9]も異なる。一方、西山遺跡は当遺跡から近い員弁川流域に所在し、竪穴住居、掘立柱建物、大型土坑が混在し、小型の掘立柱建物が不規則に散在する状況も北山Ａ遺跡と共通である。集落の存続期間が長くて１世紀という点も共通する。鉄滓やフイゴ羽口の出土が目立ち、鍛冶専業村落の可能性を報告している[10]。対して北山Ａ遺跡では、フイゴ羽口や鉄滓の出土は僅少である。しかし、土坑埋土に焼土塊を含むものが散見される他、小型の土坑で焼土が充満するものが複数ある。大型土坑のＳＫ241は壁面が焼けてお

り、焼成坑や鍛冶炉の可能性があること、竪穴住居の可能性として扱ったＳＫ５やＳＦ233等、焼土のみを検出したものにも留意したいところである。西山遺跡でも単独の焼土坑が７基ほど検出されており、なかには僅かに窪むだけのものもある。

時期が異なり中世ではあるが、鍛冶関連遺跡とされるものに長法寺西垣内遺跡がある。多数の土坑が比較的集中し、掘立柱建物が重複するものも多い。土坑の規模は北山Ａ遺跡と類似するが、形態は比較的整った方形である。多量の鉄滓を含むものもみられる[11]。

この様に、鍛冶関連遺構とする両遺跡からは鉄滓の出土が目立つことが共通する。一方の北山Ａ遺跡ではＳＫ211から鉄滓の出土があるものの、全体的に僅少なことは否めない。比較的出土が目立つ砥石にしても、その多くは平安時代の土坑ＳＫ68を覆う集石に混在したものである。ＳＫ68を構築した人々が、砥石としてではなく石としての認識しかなかった結果だとすれば、砥石は廃絶した前代の集落に伴うことも想定できるが、これを鍛冶関連遺跡の主要要因とするには積極的になれない。

４．集落の性格

このように、北山Ａ遺跡は７世紀中頃から８世紀前半までの長くみて100年程度継続する集落である。竪穴住居や掘立柱建物の規模は県内の当該時期のものとしては一般的なもので、掘立柱建物に限れば、どちらかといえば小規模、配置に企画性はなく、当時の上級集落とするにはほど遠い様相である。多数伴う大型土坑の性格も決め手に欠け、集落の性格へ導けない。出土遺物からは近江や伊賀の影響を受けたもの、尾張以東の東国の影響を受けたものが混在する。このことは、県内では近江や尾張に近く、古代東海道[12]や官衙関連施設とされる久留倍遺跡[13]が近隣に所在する歴史地理的環境からいえば当然である。歴史地理的環境といえば、北山Ａ遺跡が所在する北山町に隣接する大鐘町は伊勢国鍛工金作部が居住した大金郷とされる[14]。鍛冶関連遺構としては位置付けられなかったが、近隣に所在するであろう鍛冶集団とは何らかのかかわりをもつことは必然である。

北山Ａ遺跡は、交通の要衝や鍛冶集団のちかくに位置する大型土坑を伴う集落とするに止める。大型土坑の用途は不明とせざるを得ず、類例の増加を待ちたい。そしてその集落は、近隣の西山遺跡と歩調を合わせるように、律令制の萌芽期に出現し、律令制の矛盾が顕在化する奈良時代中頃には廃絶するのである。（森川）

［註］

① 奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』1976
② 中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981.11.25
③ 齊藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊考古学第42号』雄山閣　1993.2
④ 尾野喜裕「尾張･西三河（窯跡）　猿投･尾北･その他」『古代の土器5-1 ７世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会　1997.11.22
⑤ 贄　元洋「須恵器の分類と編年」『須恵器生産の出現から消滅』　東海土器研究会　2000
⑥ 前掲④に同じ
⑦ 三重県埋蔵文化財センター『相川西方遺跡発掘調査報告』2014.11
⑧ 及川良彦・山本孝司「土器作りのムラと粘土採掘現場－多摩ニュータウン№245遺跡と№248遺跡の関係」『日本考古学第11号』日本考古学協会2001
⑨ 平生遺跡発掘調査団『平生遺跡発掘調査報告』昭和51年７月１日
⑩ 東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』1976.8.30
⑪ 三重県埋蔵文化財センター『鈴鹿市中ノ川流域の考古学』2006.3.28
⑫ 三重県埋蔵文化財センター『重地遺跡発掘調査報告』2004.2
⑬ 四日市市教育委員会『久留倍遺跡５』2013.3
⑭ 安岡親毅『勢陽伍鈴遺響』三重県郷土資料刊行会1975

調査前風景（西から）

第２次調査区全景

第３次調査区全景（東から）

写真図版２

第５次調査区全景（西から）

第６次調査区全景（南から）

第３次調査区南西部（東から）

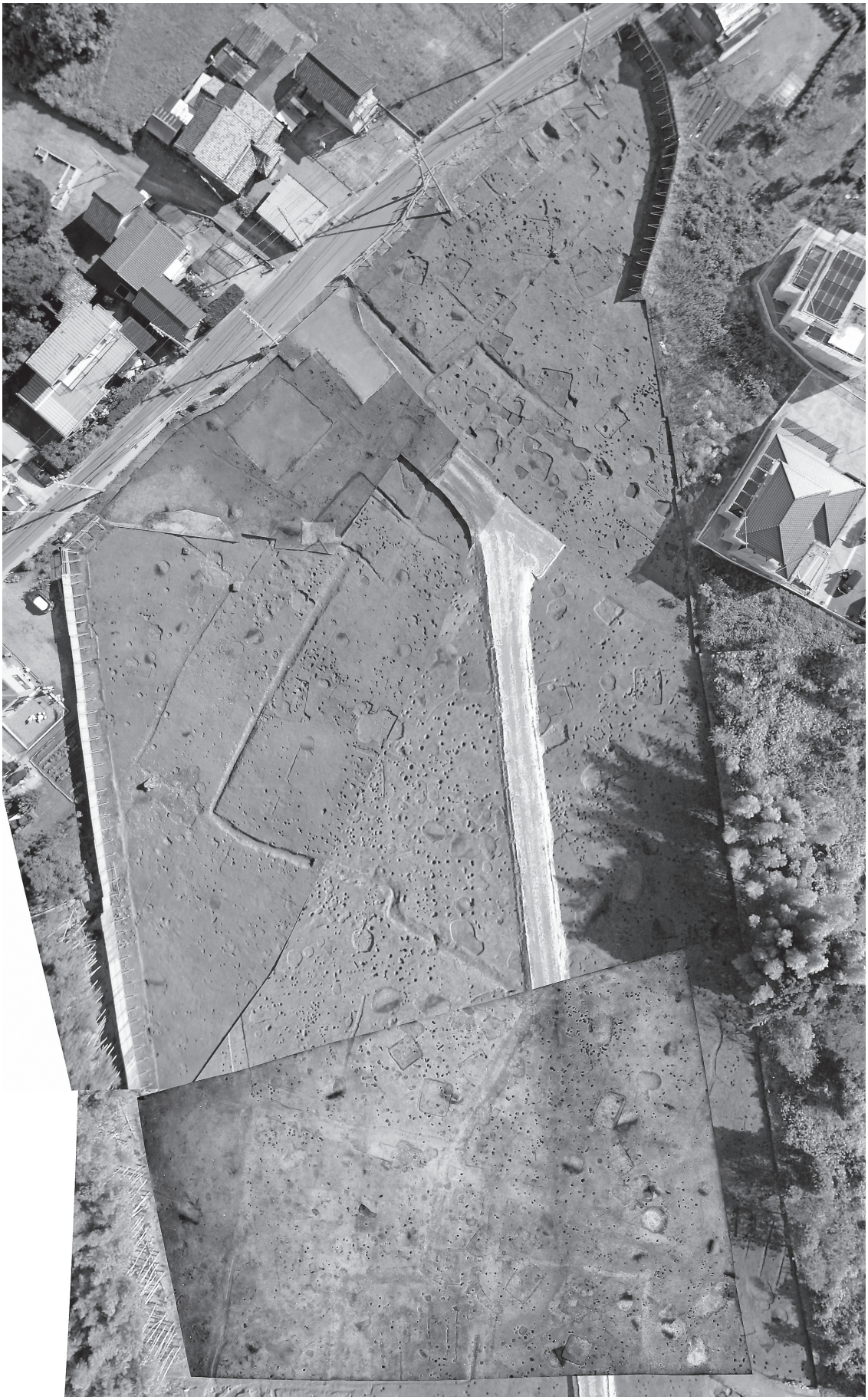
第３次調査区北西部（東から）

第３次調査区南東部（西から）

写真図版４

第５次調査区北西部（西から）

第５次調査区東南部（西から）



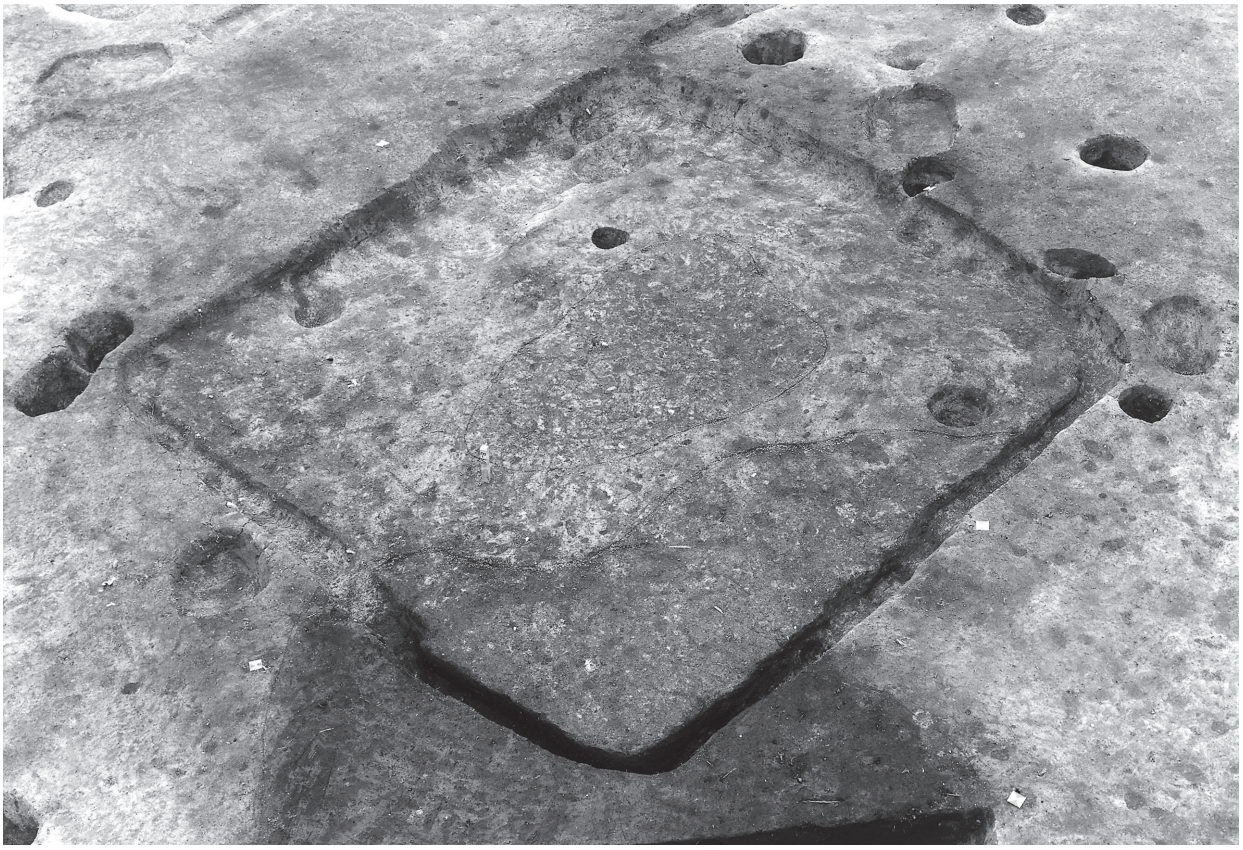
第２次・３次・５次・６次合成全景

写真図版６

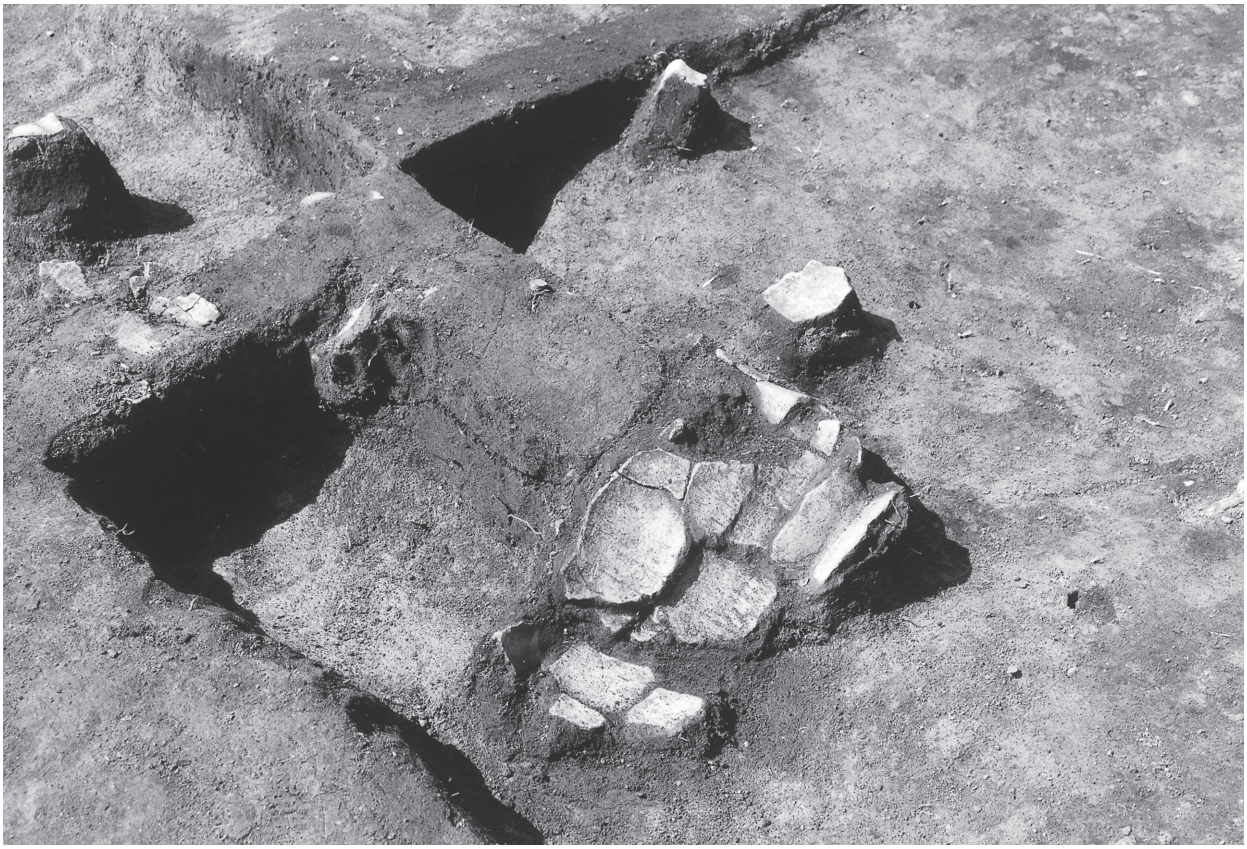
ＳＸ 136（東から）

ＳＨ 58・69（北西から）

ＳＨ 79（南から）



ＳＨ 76（北から）



ＳＨ 76 カマド遺物出土状況（南東から）